

---

# 不明瞭な世界

回覧板

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不明瞭な世界

### 【コード】

N0833I

### 【作者名】

回覧板

### 【あらすじ】

『才気』。それは突然人々に宿った特殊な力。

**序章：始まりは突然やってくる（前書き）**

初めまして!!

今回初めて投稿しました！

正直なところ自信はありませんが；

ですが読者の皆さんと日々精進していきたいと思います！

よろしくおねがいます！

## 序章：始まりは突然やってくる

何のことはないただいつも通りの繰り返しだった。

変化は突如として私たちの前に現れた。

人が生まれながらに秘めた能力『才気』。

それは人々に勇気と希望を与え、そしてその勇気や希望が必ずしも良い方向に傾くとは限らない。

あるものはそれをもって支配を試み、またあるものは殺戮を繰り返している。

そんな中世界組織として『悪魔の正義』が建設された。

『悪魔の正義』は膨大な人や物を使い、力をもって悪を制する組織だ。

そして、それに対抗したのが『紡ぎの糸』。

同じく人や物を使うが、関わりでもって悪を制する組織だ。

そして、『悪魔の正義』の思想『毒をもって毒を制す』を真つ向から否定した。

『悪魔の正義』は憤慨し、『紡ぎの糸』に対して宣戦布告した。

初めは『悪魔の正義』が圧倒していたが、支配した土地から次々と反乱が起こり、『紡ぎの糸』もまったく引かない。

戦争は停滞し、二強は一次停戦期に入った。

しかし、『紡ぎの糸』は『悪魔の正義』が違法能力強化実験をしているとして、世界組織『理想郷』に調査を依頼。

『理想郷』は調査団を派遣、しかし確実な根拠が見あたらず撤退した。

『悪魔の正義』はこれを理由にある土地の譲渡を提案、『紡ぎの糸』はこれに渋々同意。

場所は旧日本地域、始まりの地である。

序章：始まりは突然やってくる（後書き）

頑張りました・・・

やっぱり初めなので緊張します（汗

## 第一章：地獄の使者1（前書き）

またまた投稿しました！！

初めて見てくださった人、初めまして！

続けて見てくれた人、ありがとう！

これからも頑張っていきたいですw

## 第一章：地獄の使者 1

「だりいゝゝゝ・・・」

学ラン姿にひととき目立つ猫背の背中、彼をこの辺りで知らない者はいない。

彼こそこの辺りを護っている霧崎 一閃、類い希な『才気』を宿したレッドラインの能力者。

『才気』 『劫火』 は万物を燃やし尽くす悪魔の炎、ランクはMAX。

『才気』を宿した人を分けるときはまず、『ホワイトライン』 『ブルーライン』 『レッドライン』がある。

『ホワイトライン』 弱い能力者に与えられる、組織では一番下の位であり、下っ端、雑用なのがある。

世界人口の半分はこれになる。

『ブルーライン』 普通くらい力の力、組織の一部署を担える程度、『ホワイトライン』を指揮する監督でもある。

世界人口残りの半分がこれになる。

『レッドライン』 強大な力である、その力は組織を束ねるほどである。

有名な人物は『悪魔の正義』 提督大神 愛、そして『紡ぎの糸』 総



指揮大涯 大介である。

例外も存在する、誰一人として見たことがないライン。

『ブラックライン』 未知の力を秘めた力、一人で国を落とせると言われている力。

ラインの中にはランクと言うものがある1〜9そしてMAXを使う。

一閃はこの辺りを護り続けることで『紡ぎの糸』 『悪魔の正義』 から勧誘を受けたがこれを蹴り、今でもこの土地を護っている。

両方の誘いを付けたことから、愛や大介に興味を与え、二人から半永久的なこの土地の支配権を貰い受けた。

同時に『不動明王』の異名を世界組織『蟻の巣』から授かった。

いつもは普通の高校生と変わらずに生活し、攻められればこれを撃退する、そんな男だ。

「朝からノビてるね、センちゃん」

不意に後ろから声をかけられた。

後ろを向くとそこにいつも通りの幼なじみの顔があった。

「また『悪魔の正義』の下っ端が来て譲渡を要求してきたから昨日は寝てないんだ」

彼女は顔をしかる。

「大丈夫、引き上げて貰ったさ、だからそんな顔するなよ、レイ」  
彼女は一角 麗香、一閃の幼なじみで唯一一閃のことを、センちゃんと呼ぶ。

ブルーラインの9であり、『才気』『大氷』は熱を奪い去る。

一閃は昔から麗香を、レイと呼ぶ。

「大丈夫だよ、センちゃんを信じてるから」

しかめっ面が元の笑顔に戻り目の前をスキップしながら進んでいる。

一閃は内心ホツとしたのだが・・・。

「そういえばセンちゃん？」

「何？」

「明日映画見に行く約束覚えてる？」

「.....」

あっ

先週くらいの話だが、一閃は麗香と映画を見に行く約束をしていた。

しかし何度も訪れる『悪魔の正義』からの使者を追い返すことで頭がいっぱいだったため、今の今まで忘れてしまっていた。

気が付くと案の定麗香があきれた顔をこちらに向けていた。

「・・・忘れてたの？」

「スマン、最近忙しくてな・・・」

「センちゃん最近私にかまってくれないもん、寂しいよ?」

「ゴメン、映画には行くから」

麗香は苦い顔をして再び歩き始めた。

一閃も彼女に続く。

旧立帝國高校、旧日本でもっとも大きかった高校である。

その作戦会議室、その中に一閃と麗香、ほかに10人くらいの男女が座っていた。

「一閃、『悪魔の正義』がまた立ち退きの催促に来た」

「軽くあしらせ、所詮は下っ端、何も出来ん」

「ボス、『紡ぎの糸』に支援を求めますか？」

「『紡ぎの糸』に内通する者が出来たらやっかいだ、止めとけ・・・  
一度のミスが致命傷になるぞ」

「『覇光』が祭りの指揮を執ることに決まりました」

「『改水』は常に『地獄の使者』と行くと言言しています」

「『改水』は現在『悪魔の正義』の偵察部隊と混戦中、支援を求めています」

「センちゃんどうする?」

20くらいの目が一斉に一閃のほうに向けられた。

「まず『覇光』に戦いの許可を与える。祭りの邪魔になるであろう敵を『改水』とともに蹴散らしてこい!」

一閃が言うと、一人が立ち上がり、

「ハッ!この水鏡、全力を持って『悪魔の正義』を蹴散らして来ます!」

水鏡は勢いよく飛び出した。

「しかしいくら偵察部隊といえども『覇光』一つで足りませんか?  
この翔汰、いささかの不安がございますが・・・」

「そうだな、レイも行け、半分は出してもいい」

麗香は一度礼をするとゆつくりと部屋を出た。

翔汰は感心したように驚き、

「『近衛』を出しますか、いかような心境でございますかな？」

翔汰が言つと横から最年少に見える女子が割り込んできた。

「翔ちゃん！口が過ぎてますよ！」

「昴嬢は何もお思いにならないかな？心酔ほど恐ろしいことはないね……」

二人が険悪な雰囲気ではじめ合つところ、一閃の横にいた一番怖い顔の男が、

「昴！翔汰！ヤメロ、これ以上するようなら俺が相手になるぞ？」

「……分かりましたよ、しかし何か納得のいく理由が聞きたいです、どうなんですか？一閃様」

「昴は悪くないもん！翔汰が悪いんだもん！そうだよ？ね？」

「一人だけ逃げようという考えですか……良いですよ？早く逃げて飴でもなめてなさい」

二人がまた険悪なムードになると隣の男はため息をつき、どうする？とも言いたげな顔で一閃を見た。

一閃もため息をつき、

「剛毅の言うとおりだ、二人ともヤメロ、それから翔汰」

「ハイ、なんでございますか？」

「俺が『近衛』を出すのがそんなに不思議か？」

一閃は翔汰を見据えた。

翔汰はそれに動ずることなく、首を横に振った。

「いえ、何か焦っているように感じたものでしてね、杞憂ならばいいのですが・・・焦ってはいかなる場合でもし損じる場合がありますから確認しておきたくて」

翔汰はここ『地獄の使者』で内部組織のボスをつとめる男だ、それなりに心が読めるらしい。

「・・・焦ってるんだよ」

一閃はある程度正直に答えた。

翔汰は一度も目を逸らさずに問いかけの目を一閃に向けた。

「明日・・・麗香と映画を見に行くんだよ、だから今日中にこの戦いを終わらせておきたいんだ」

「麗香様・・・とね、相変わらず優しいですね、まあ一応そういうことしておきます、では私はこれで」

「ああ、働き過ぎは良くないぞ？それだけは気を付ける」

「なんのなんの！これくらい働いた内にも入りませんよ！」

翔汰は高らかに笑い部屋を後にした。

「昴には何して貰おうかな？」

一閃は思案を練り、適当に思いついたことを言った。

「『闇の影』で、今から言う二人にこれを直接渡して貰いたい、いいね？」

「昴にまかせるです！こんなの朝飯前です！誰にでしょうか？」

「ありがと、『悪魔の正義』提督大神 愛と『紡ぎの糸』総指揮大涯 大介にこの手紙を」

一閃は懐から一枚の封筒を出し、昴に渡した。

昴は隠そうと努力しているみたいだが、その手は震えていた。

「もしも、もしもだよ、もしも捕まるなら、敵地の中心で捕まるといい、じゃあ愛が大介に会えるし、逃がしてくれるから」

「はい、最善を尽くすです」

昴は音もなく部屋を後にした。

「剛毅、瞬夜はいるか？」

「家で寝てるのではないかと……呼びましようか？」

剛毅はポケットから携帯を取り出した。

「いやいい、また違う組織に入っていないかなと思ってな？無駄な労力を使うのはごめんだから、いるならいいんだ」

一閃は席に着き大きくのびた。

それを見た剛毅は、

「お疲れですか？最近『悪魔の正義』が活発ですからね……」

「それもあるんだけど、まあ限りなく少ないけど……明日のデー・トどうしよーかなー、って思って、むしろこっちが本題かな？」

一閃はしきりに財布の中身を確かめている。少しデートするには足りないような気がする。

剛毅は、

「映画館くらい一閃なら無料でできるので？それにあその経営は彼女ですから、割引は簡単だと思いますよ？」

「いや……そういうズルみたいなことは出来ない、相手が受け取らないって言っても値切ろうとしても俺は全額受け取らせる」

一閃は何度も暗い顔をしながら財布をポケットにしまった。



そして立ち上がり、出口に向かった。

「瞬夜だけは目を離すな、裏切りは無いが迷惑は多いからなあいつ、まかせたぞ」

そう言い残して一閃は部屋を後にした。

少し考えてから剛毅は携帯である場所に電話した。

《もしもし、剛毅だ、瞬夜はいるか？》

電話の向こうでは誰かが叫んでいる。

《もしもし俺だ、どうかしたのか？任務か？仕事か？一閃様の勅命か？》

《一番近いのは一閃の勅命かな？瞬夜を明日夜まで拘束、と言われた、一閃直々にな》

《どうして！！攻められている時期なら俺様の出番だろう！？》

剛毅は電話を離れたが声はよく聞こえた。

《お前はほつとくと余計な事がある、だとよ、もう少しわきまえてくれよ、言われるのは俺なんだから》

《………分かった自粛する、明日までだよな？》

《ああ、それ以上は拘束すると言われた、信頼は高いからなあお前は………ただ面倒ごとに関係が多いだけだ》

《信頼があるのか！！一閃様から……》

ホワ〜ンとした間の後電話は向こうから一方的に切れた。

切れる瞬間、一閃様〜！！！！と叫んで居たようなきがするが、あえて無視する。

剛毅は携帯をポケットにしまい立ち上がった。

「この喋り方が無かったらいい女なのにな……」

そう呟き部屋を後にした。

## 第一章：地獄の使者1（後書き）

こんなものでしょうか？

上手くできているのかなあ〜？？

少し不安です（汗

というか無計画なので先が・・・w

だから何か要望があれば取り入れると思います

## ：地獄の使者2

『霸光』、主に『地獄の使者』内の監視・管理、武力で以て名を轟かせることを目的とした内部組織。

そのボスは大空 水鏡、ブルーラインの9であり、『才気』 『雷人』 は自らの体に電気を纏わせる。

その水鏡は今、『霸光』の運営する集会所に来ていた。

目の前には可愛い女……少女が座ってジュースを飲んでいる。

「おかわり貰っていい？あんまり好きなジュースじゃないけど喉渴いちゃって」

「好きなだけどうぞ……はあ、あなたは何しに来たんですか？まだ部隊のみんなが戦っているでしょう？」

可愛い少女、『改水』のボス、一ノ宮 京。

可愛い顔とは裏腹にレッドラインの3という、実力者だ。

『才気』 『樹海』 は大地に緑を与える。

「何って……話し合いに来ただけど？だって『霸光』と『近衛』が動くんでしょ？ある程度動きを決めなくちゃ。どうせバラバラに行動するけどある程度決めとけば援護とかが楽になるでしょう？」

「今すぐって訳にはいかないのか？それによつて俺は部下に命令を下すんだが……」

京はジュースをおいしそうに、本当の子供みたいだと思つた事は秘密、飲んだ後、

「いいけど、二回同じ話はしたくないなあ、だから猛一人が来るまで待つて？もう少しのはずだから」

その時集会所のドアを開け、麗香が入つてきた。

京は麗香に手を振つた、それに気付いて麗香は小走りのこちらに来了た。

「少し遅れちゃつたかな？平気？」

「大丈夫だよ、待つてたからね、誰かさんと違って心にユトリがあるから 今から始めるね」

「っ！まあ餓鬼は置いといて……何かあつたのか？お前が時間に遅れるなん珍しい」

麗香は席に着き、遠慮なくジュースを頼み、

「近衛を分けるのに戸惑つちやつて……話を初めて」

麗香が促すと、京は軽く頷き前の大きい机に地図を広げた。

ところどころ、赤い×シールが貼られていた、見た感じその位置はほとんど重要拠点の近くにある。

「『正義の悪魔』で被害が出た場所です、大きいものだけですからまだまだあるかもしれませんが、そこら一帯の住民の避難は出来ます」

「えらく中まで入ってるな・・・・・・守護兵はなにしてるんだか」

「そうですね、でも問題はソコではありません、ここです・・・・・・此処だけはどうしても守り抜かなくちゃいけません」

京はある一点を指指した、そこは・・・、

「！！ここは祭りの場所じゃねえか！？奴らまさかそんなことも知らないのか！？」

「ほんとだ、狙ってるとは思わないけど、どうせ下っ端の部隊なんでしょうね・・・ここは攻撃させるわけにはいかないね」

「そうですね、だからここ辺りを『霸光』さんに任せるです、次に『近衛』ですが・・・・・・こっちをお願いします」

京は今度は×があまりついてない箇所を指指した。

「ここは・・・・・・みたところ何も無いようだけど？」

「『悪魔の正義』偵察部隊の本拠地にしてるところです。正直な感想を言えば、あの大部隊で偵察するつてのが少々腹立たしくあり呆れもしますけどね」

「『改水』は？」

京は今度は×が付いている箇所、『地獄の使者』の領域すれすれの場所を指した。

「私たちは境界付近にて増員と報告係を倒します、いいですね？」

水鏡と麗香は頷くと、席を立ち、麗香は出口に、水鏡は仲間と作戦を考える為奥に向かった。

騒がしかったその場所はシンと静まり、二人の足音だけが響き、それも聞こえなくなる。

「また、戦場で・・・」

残ったのは京は見送って、自らも戦場に向かっていった。

『地獄の使者』の中で軍事を担当する内部組織『法度』。

そのボス里島 翔汰は、ブルーラインのMAXで、『才気』『暴風』は風を操り、切れ味が付与する。

翔汰は『法度』の組織のアジトで必死に計算をしていた、決して話せるような雰囲気ではなくそれを許されるような雰囲気でもない。

もしものために何人を割いても支障はでないか、何人くらいでどの

くらいのことが対処出来るか、などを。

「暗い部屋だね翔汰兄ちゃん、そんなところで勉強してるとまた目が悪くなるよ?」

不意にかけられた後ろからの声で翔汰は一瞬硬直したが、聞き慣れた声と理解し、すぐに作業を再開した。

「戒か、いきなり声をかけるなって言ってるでしょう……ただでさえ結構真剣な考え中なんですからね、邪魔はいけません、殺しますよ?」

「ごめんごめん、その反応が面白いからついついやっちゃうんだよ」

後ろにいたのは、ここ『法度』のナンバー1（ボスはナンバー0）、里島 戒。

翔汰の弟、ブルーラインの8、『才気』『風圧』は風の圧力で敵を押しつぶす。

「兄貴をからかうなんていけませんね、今ホントに忙しいんですよ、用事があるなら後にしなさい」

「そうそう、用件ですが……『闇の影』の一条寺 昴さんが来てますよ、どうする? 兄貴」

昴と言えばあまり気にはしていないが、今日のことがあるな……  
やはり思った事をそのまま口に出すのはダメだな……。

などと考えて、戒に昴を応接間に通して、それなりのおもてなしを



するように命じた。

「後で行くって伝えてくれ、すぐ行きます」

戒が出ていったのを確認すると、翔汰は素早く片づけを始めた、少々心が舞い上がっているのは内緒である。

昴は戒に連れられて応接間まで来た、そこで戒に、

「兄貴の彼女ですか？・・・言っちゃ何ですが幼いというか・・・」

っ、聞かれたときは焦り、少し怒りも混じったが、顔一つ変えずに、違いますよ、と受け流した。

戒は疑いはしたものの、いや怖かったのかな？深い詮索はせず、翔汰が部屋に来たのと同時に部屋を出ていった。

「戒の馬鹿がなんか言ったか？幼いとか幼いとか、幼いとか？」

翔汰は昴の向かいにある椅子ではなく、同じ椅子に腰をかけた、もちろん本音は隠さない。

「ちょっと冷やっつてすることを言われたわ、誤魔化したけどね、フフ・・・」

昴が翔汰に寄り添う、翔汰はソレを受け入れた。

「私今からちょっと危険な任務があるから・・・翔ちゃんの顔を見

ときたくて……」

「そうか……『闇の影』も大変ですね」

『闇の影』、敵軍の偵察や、暗殺、影武者などを生業にしている、『地獄の使者』の一番危険な内部組織だ。

その組織員も全員特殊な訓練をたたき込まれたエリートばかりだった。

しかし昴は素質が高かったのと『才気』がこの部署にピッタリだったため、この訓練を受けていない。

訓練の内容はサバイバル演習、10日間時給自足で敵を殲滅するものだ。

実のところ、翔汰と昴の関係はこれ以前より続いていたため、翔汰が一閃に直に申し入れたのだ。

翔汰が肩に手を置くと、昴はその方向に倒れ込み、翔汰を押し倒した、

「だから……今日はアナタと一緒に……」

二人は唇を重ね……唐突に翔汰は昴を突き放した。

「ハアハア……危ないところだった、俺ともあろう者が……」

昴は起きあがり翔汰を見た、

「・・・翔ちゃん、アナタまだ・・・良いじゃない！もう終わったのよ！気にしちゃダメ！！」

「そういう訳にもいかないんだよ・・・俺は、約束したからな、約束は絶対だ」

昂は目に涙を溜めて、翔汰を睨んだ。

「翔ちゃん・・・私はそういうところが大好きよ！でもね、でも・・・！今日くらいいいじゃない・・・今回はとても危険なのだから一度くらい・・・！！」

「ゴメン昂・・・俺は、破りたくないんだ・・・例えお前の頼みでもね」

「翔ちゃんのバカ！！」

スパアアアア・・・ン！！

よく響いた音は、昂が翔汰をビンタしてでたものだ。

その後昂は涙を流しながら、部屋を出ていった。

翔汰はビンタされた頬をさすりながら、

「俺だって・・・俺だって思いつきり抱きしめたいよ・・・でも、でも！！！」

あの日一閃と交わした約束、言った言葉、

翔汰がもし、俺が認めるまで昴のことを思い続ける、

思い続けるだけだ、それ以上は認めない・・・約束だ、いや、代償だ、

だがもし思い続けることが出来たのならば、その時は好きにするがいい

「思い続けるだけなんだ・・・それ以上は・・・ダメ、なんだ」

翔汰は床を力いっぱい叩いた、地が揺れる。

「・・・でも、早くあいつを抱きしめたい、力いっぱい・・・痛がるくらいに・・・」

翔汰は立ち上がり、その部屋を後にした。

### ：地獄の使者3

『悪魔の正義』 偵察部隊仮キャンプの会議場に二人の女と一人の男が座っていた。

男の名は西城 三津、内部組織『悪の種』のボスに急遽派遣された仮初めの男だ。

レッドラインの1で、『才気』『氷手』は遠距離に氷柱を放つ。

「こんな小組織に我々三人が派遣されるとは……提督は何を考えているのやら」

三津はつまらなそうに椅子の上でふんぞり返った。

三角形の台座の違う一辺に座るナンバー2、幸崎 未亜はソレを見て、

「提督のことだ、どうせ気まぐれですよ。それよりそろそろ偵察の任を浸食に移行するのはいかがか？」

未亜はブルーラインのMAX、『才気』『蒼炎』は蒼い炎の物質だ。

彼女には良くない噂が何個か立っており、その内の一つはいまだに残っている、三狂、『悪魔の正義』の中でも気が狂っていると言われていた三人の内の一人だ。今でもたまに気が狂って敵味方関係なく襲いかかる事がある。

台座のもう一辺に座った女が、

「そういう言い方は良くないな未亜、提督は提督なりの考えがあるからこそ、この任に我々三人に来させたのだ……それにこの計画を提督が推したなんて今でも考えられない」

「そんな考えが出来るのは君くらいだよ、木須」

木須、角祭 木須、レッドラインの1でナンバー1、『才気』『光明』はあらゆるものを解き明かす。

「それより進んでるのか？そろそろ攻め込みたいんだが？」

三津は木須の前にある紙をのぞき込んだ、それはまだ白紙のままだった。

「まだ全然じゃないか……それほどの組織なのか？」

「……そうね、何通りも考えたけど……何故かしら、何か予測不能な何かがある……」

木須はまた熟考を始めた、こうなるとしばらくは何話しても耳を貸さない。

それを見ていた未亜は、

「ふん、完璧に近い予測をたてる『光明』がここまで……フッフ、私達三人が行かされたのが分かる気がするわ」

そう言って席を立つ、その顔はどこか喜んだように、気が狂ったように笑っていた。

三津はそれを見て、

「独断行動をするということは負けは許されない、行くなら覚悟しとけよ」

「私を誰だと思ってるの？私が世界組織『蟻の巣』に貰った異名を忘れたのかしら？」

不敵に笑い未亜は会議場を出ていった。

三津は心配などしない、なぜなら知っているから、なぜなら経験したから、なぜなら……、

「『悪魔の正義』の三狂の一人、『蒼炎の破壊神』未亜……だよな」

三津は木須を見た、『悪の種』の三柱神、仮初めではあるが、一人が出た、つまり未亜が敗北すればその処理は残りの三津と木須に回ってくる。

戦略専門の木須は論外だ、つまりその処理は全て三津に回ってくる、

「まあ……未亜を倒せるようなヤツがこんな小組織にいるとは思わないけどね、でも用心に越した事はないか……」

三津は目を閉じた、考えるためではなく休みを取るために。

『覇光』は千人程度の小さな組織だ、ただそれなりに強い者を集めている、その隊は今目の前に迫る敵を見ていた。

その数は五千強、ゆうに五倍はある。

何処を見ても穴がなく、偵察部隊とは思えない気迫だった。しかしどことなく周りの空気にながされている奴らがいるように見える、

「人数が多いが故か……その分人数が少ないこっちは纏めやすいから良いんだが……」

水鏡は目を後ろに戻した、ソコには五百ばかりの味方の奴らがいた。

残りの五百は祭りの準備と、それを護っている。

後ろから聞き慣れた声が聞こえる、

「困ったなあ〜これじゃあ一人頭十人も倒さないとだめだぜ！ともめんどくさい！」

笑いを含む声に肩の力がほぐれる、戦場でこれだけ気が抜けた発言が出来るこいつには少々すごいと思っている。

「あまり困ったように聞こえないぞ彰、むしろ楽しんでるような感じだ」

柿崎 彰、『覇光』のナンバー1にしてブルーラインのMAX、『才気』『海原』は辺り一面に水を創製する。隊員から好かれていて、いざというときの率先力は水鏡よりも上だ、それでも本人は水鏡に付いていくと言っているので実質はやはり水鏡なのだ。



そして水鏡が最も信頼を置く隊員の一人で、幼なじみでもある。

「楽しまなきゃだ！水鏡も楽しめよ！」

制止の命を解けば今にも飛び出していきそうな感じである。だがまだ解かない。

水鏡と彰には秘策がある、だがまだだ、まだ出来ない。だからこそ飛び出さないし、いつでも飛び出せるようにしている。

そしてその時が来て二人は一気に駆け抜けた。

『霸光』の勝利の秘訣はなんといっても圧倒的な力を覆す先手の特攻だ。

彰が先陣を切り『海原』により前方超広範囲に薄い水の膜を張り巡らせ、水鏡がその中を『雷人』を発動したまま突き抜ける。水に電気が走り、その水に触れているもの全てを焦がしていく。

一閃がこの混合技につけた名は、

「『電龍』  
すまないな、五千程度では少しばかり少ないだろ？」

水鏡は立ち止まりあたりを見渡した、五千はすでに半分以上削られているようだった。

水鏡に近づく者は悉く『電龍』にあたり焼けこげていった。

不意に後ろから声が響く、

「何をやっているの？水を避けて前進しなさい、ここは私が引き受けますから」

「行かせはしない、全員をここでくい止める」

「出来るかしら？あなたごときの『才気』で………？」

「そのごとき………試してみるか？」

水鏡は振り向くと同時に前進に雷を纏った。

そして炎の常識を覆した蒼い炎をみた。

「名乗りをしましょうか………未練は残したくないでしょう？それに、変な敗因なんてつけられたくないし」

名乗り、それはこの世界において誇り高く戦うことを指す。

一方が名乗ればもう一方も名乗る義務を負う。

そしてその戦いはどちらかが死ぬ、もしくは第三者が止めるまで続けられる。

「………先に名乗ったらどうだ？それとも怖いのか？」

水鏡は相手と対峙する、それはまるで見たこともない怪物を前にしたような感覚だった。だから出来るだけ虚勢を張った。

圧倒的な戦闘経験、一騎打ちの数々、そしてその者の狂気が目に見えるようだ。

「いいのかしら？では言おうかな……」

女は一拍置き、水鏡をにらみつけた、その瞬間水鏡の体を寒気が襲いかかった。

「私の名は幸崎 未亜、『蒼炎』を宿す炎の子！！『蒼炎の破壊神』と呼ばれる者である！！」

「！？『蒼炎の破壊神』だと！偵察程度にお前を！？」

「さあ、私が名乗ったんだ……君も名乗らないといけないよ  
水鏡は歯ぎしりをして、

「大空 水鏡、『雷人』を宿す雷の子……名乗ったからには、  
全力でいかせていただく！！」

水鏡の体から超高電圧の雷が漏れ出る、未亜はその手に蒼炎の剣を握っていた。

「綺麗な技だね、神様みたいだ、それに相性が良い、炎と雷……  
・実に相性が良い」

未亜は不敵に笑い剣を振るつ、水鏡はその瞬間、包み込んでいる雷に超電流を付加した。

「その雷に触れれば死ぬぜ！良い相性だなあ！おい！」

剣が雷に当たる、その部分から雷が消えた。

「触れれば・・・ね」

未亜は笑う、水鏡を見下すように、

「知ってたかい？炎は雷を通すんだよ、言ったでしょ、相性が良いつて」

水鏡は後方に飛び下がり、未亜との間合いを取った。

恐怖から息切れしている、

「君程度の人で光の子の完全予知が防がれるとは思わない、いるんでしょう？強いヤツが・・・早く連れてきなさいよ、その後殺してあげるから」

未亜が一步前に出る、それに合わせて水鏡は一步後ろに下がる、

「もしかして君がこの隊のボスかい？よほど人員に困っているに見える、何故『悪魔の正義』に降らない？」

「決まってるだろ・・・！俺達のボスが降らないからだよ！俺達は全員ボスの意見を尊重するんだ！！」

「……………仕方ないね、じゃあ君の命……………」

未亜の手から蒼い炎が噴き出てくる、その炎はしだいに形をとまな  
い、その形は斧だった。

「取らせて貰うよ!!」

未亜は一瞬で間合いを詰めた。

そしてため息をつき、

「失望だよ、もうちょっと強い人を期待したんだけど……………  
でもまあ私が相手だから仕方のないことだけどね……………」

斧が振り下ろされた。

ドゴオオオオオオオオ……………ン!!!!

振り下ろされた斧は、地を砕き、捲り上げた。だがそこに水鏡の死  
体は無い。

「仲介です、名乗り合ったのなら、それで止まるでしょうか?本当は

雑魚同士の戦いなんて見るだけにしようと思っていたのだけれど・・・」

声は未亜の後ろから聞こえる。

「誰だ!？」

未亜は振り返った。

ソコには白銀の髪に白銀の肌、淡いブルーの目を持った女が立っていた。

その手には気絶した水鏡が抱えられている。

「名乗りません、あなた程度では相手にならないから・・・無駄な殺しはもう止めたの」

「・・・『蒼炎の破壊神』のあたしが相手にならない? 試してみるかしら・・・その威勢吹き飛ばしてあげるわ!」

未亜は一気に間合いを詰める、しかしその女はすでに未亜の後ろに回り込んでいた。

「あなたはブルーラインのMAXでしょう? あなたが私に勝てる確立は一に満たないわ」

「くっ!・・・あなたのラインは? それくらいいいでしょう?」

女は少し考えたあと、

「そうね、じゃあ教えてあげる、私のラインは……」

「ブラックライン、未知の力と勝手に言われていますが実際は違う、その実体は最強最古の絶対的な力の人々、そして未来永劫に消えることのない人々、世界組織は把握はしていない、ただ文献に記されているだけの引用、私達の強さはレッドラインと呼ばれる者どもの比ではない、もう一度言いますが、

その脆弱な力で本当に私に牙を向ける気ですか？」

女は未亜を睨み付けた、たぶん普通に立っただけなのだろうが、その体から出る殺気は未亜の首に刃物を突きつけているようだった。

未亜はあまりの恐怖にへたり込む、が最後の力を振り絞り、

「あ、あなたは……『地獄の使者』の人ですか？」

「いいえ、たまたま通りかかった者ですよ、人が目の前で死ぬのは嫌になっているのし、ここで借りを一つ作っておこうと思いましたがね、フッフ」

女はそう言った後、水鏡を置き、歩き去っていった。

未亜はその背中に薄れゆく視界の中はつきりとみた。

『八皇』、昔、最も大きな組織でありとあらゆる組織を壊滅させ、世界を唯一統率した組織の名だ。

そして最も驚くべきはその構成員の数、彼等はたった八人でそれを成し遂げたのだ。

その強さが滅んだ理由は未だに解明出来てはいない。

あの時何があったのか、何がどうしたのか知るものは少ないだろう。



・地獄の使者3（後書き）

ちよつとだけ感想が欲しかったりします；

そしてどんどん作っていきたいとおもいます!!  
お楽しみに〜〜^^・・・・・?

## 第二章：瞬夜1（前書き）

すこし遅れてしまいました；

どうも^^godaccce1です！

最近PC禁止させられたりされて大変ですが頑張りたいですWWW

## 第二章：瞬夜1

「あ~~~~~。暇だなあ~~~~。誰か弄り甲斐があるやつこないかなあ~~~~。」

下着の下とシャツ一枚という際どい格好の瞬夜は自宅でゴロゴロと暇を持て余していた。

何故かといえば、ボスである一閃がそう命じたからである。瞬夜が一閃の命令を聞かないことは何かしらの理由がなければありえない、何かと理由をつけて聞かない事も多いが。

ちなみに瞬夜と聞くと男と思うかもしれないが、れっきとした女だ。

コンコンとドアがノックされる。こんな変人？であるところに来る人間は少ない。誰かの命令により仕方なくきた場合、その場合はドアを叩かずに外から叫ぶだけだが。

こういうふうにはノックをする奴なんて知る限りでは一人しか居ない。

「開いてるぜ、てかお前鍵持ってるだろが！」

そう怒鳴ると、ドアは開き一人の男が悪びれた様子もなく入ってきた。

男の名は鬼垣 剛毅、『地獄の使者』の重鎮であり、内部組織『秩序』のボスであり、瞬夜の世話役を担っている。本人は嫌がっていないが。。。。。

レッドラインの5で、『才気』『砂塵』は砂を意のままにあやつる。剛毅の手には缶詰がいくつも入っている袋が握られていた、それを見てかなり事態が大変だと分かる。

「……もうちょっと女らしくしたらどうだ？ そうしたらもつと人気が出るとおもうんだが……」

「いいじゃんか、一閃様の前では女らしいだろ？ 結構自信あるんだぜ、忍法猫かぶりは」

笑いながら剛毅から袋を奪い、その中からひとつ缶詰を取った。特に食べ物に嫌いものはないので腹が満たされればいいというのが瞬夜の考えだ。

「はあく……それさえ無ければいい女なのにな……」

「悪かったな！これが素なんだよ！」

瞬夜は缶詰を空けると中にあるものを一気に口に放り込んだ。口の端から少しだけ中のものがあふれる。……ふむ、ツナだったか。

「おいおい、まったく、俺は食べないからゆっくり食べるよ」

剛毅はタオルで瞬夜の口をぬぐってやり、用意していた箸を瞬夜に渡した。

「はあくこいつの相手か……疲れるなあ」

「うつさい！俺だって一閃様のために戦いたいんだよ！！だいたい何で俺が謹慎なんだよ！よりによってこんなタイミングで！」

「静かにしてくれ、後これは予想だが、今回の相手は偵察隊と云えど『悪魔の正義』になるんだ」

「それがどうしたんだよ？」

「いくら強いといっても『地獄の使者』は民間の組織だ、だから追いつまれるかもしれない」

剛毅は、『霸光』が持ち場を護りきつたが水鏡が落ち、彰が指揮をとっていることを知っている。

内部組織としては三番目くらいの『霸光』といえども水鏡なしでは二回目の攻撃は防ぎきれないだろう。

『法度』の翔汰が何か案を考えているだろうが・・・間に合わないかもしれない。

「だから、もしかしたら瞬夜を前線に出すかもしれない、いいな？」

「一閃様から止められてるだろ、無理だ」

その時は俺の意見が最優先だ、安心しろ俺が無理矢理させたことにすれば一閃は何も言わんと思う」

剛毅は立ち上がり部屋に一つしかないドアに向かった。それを見た瞬夜は、

「がんばりすぎだろ？もうちょっと部屋にいていいぞ？」

瞬夜は剛毅が自分のことを好いていると知っているから、敢えてそう言った。剛毅は一瞬ためらったが、苦笑いして、

「いやいい、俺には外せない用事があるからな、お前はここで一閃の指示があるか、俺が来るまで待機してるよ、最後の切り札ってことを忘れるな」

そう言っつて剛毅は部屋を出た。

「素直じゃねえな……まあ、どうでもいいけどよ」

瞬夜はまた転がり、これからの退屈の打破案を考え始めた。

外に出た剛毅は火照った顔を外の空気で冷やしていた。しばらくその熱は収まらないと思えた。

「あいつ、気付いてやがるな……」

ため息をつく、自分のふがいなさを、瞬夜の意地悪を。

そして前を向く、

「さてと、後ろにはあいつがいる、俺は俺の仕事をしようか」

剛毅は走り出した、目的地は『霸光』の総本部。

内部組織『闇の影』総本部。

一切の物音さえしない無音で暗闇の空間に六人の黒装束に身を包んだ奴らがいた。

男か女かすらも分からない、ただピリピリとした空気がそこにはあった。

一人の隊長格とおぼしき黒装束が幼さの混じったこの場に不釣り合いな程の明るい声で不釣り合いな言葉をだす。

「今回の任務には特Aクラスの難易度があるため、隊列を乱し私の独断で隊を組ませて貰った、意義はあるか？」

返事は無い誰もしゃべらない、ということは反対もない。

「では今回の任務を言う、今回は『悪魔の正義』提督大神 愛、『紡ぎの糸』総指揮大涯 大介に手紙を届けることである」

一人が挙手する、

「手紙の内容は？」

「分らん、それを私達が知る権利もないし知る必要性もない、話をすすめるぞ」

また静寂が戻る。

「敵地潜入の任務であるから、隊は三人一組とする、ボス一閃様からの助言は、捕まるなら敵地中心で捕まれ、だ」

沈黙が流れる反応はない、

「怖じ気づいたものは逃げ出してもかまわん、ではゆくぞ……任務成功は！」

「……」  
「……」  
「……」  
「……」

そこにもう誰一人としていない。残るのは静かな空間だけだった。

「……まさかお前がやられるとはな、未亜」

三津は目の前のベッドで横たわる未亜をみた。

外傷らしい外傷は見あたらないが微かに体温が低い、おそらくショック状態であろう。

「しかし未亜がショックするほどの者か……やっかいだな」

未亜の体に手をなぞらせる、体中くまなく、小さく膨らんだ乳房もなぞり外傷が本当にないかを丹念に調べていく。



しかしその行為は未亜がショック状態であることを確信づけるだけだった。

「考えもしなかったな、お前が負けるところなんて……」

三津の顔が不吉な笑顔をもった、見るものを恐怖にさせる、そんな笑顔を。

「三津、まだ無理ですわよ、予測不能な事態があるようですから、行くというならそれ相応の覚悟をしてもらいます、それにキチンと提督にも報告しますからね？」

後ろから木須が入ってきた。その手には大きな弓が握られていた。

「まあ言っても無駄でしょうから出来ればこの弓をおもちください、まったくいつものあなたなら考えられない行為ですが仕方ありませんね」

三津はそれを受け取り、

「これは？」

「『才気』を極限まで高めることが出来るように私の『才気』を織り交ぜたものです、それを使えばここからでも攻撃可能ですよ」

三津は弦を引く、確かに遠くまで届きそうな気持ちになれる。

「サンキュー木須、ちよつと殺ってくるよ」

三津が向かうはこの即席の陣地で最も高いやぐら。

「さてどんなヤツが未亜をこんなにしたのかな？」

着くと当然のごとく辺りは開けて、『氷手』の力を存分に発揮できるような場所になっていた。

三津は手に持った弓に精製した氷の矢を番える。

その瞬間三津の視力は跳ね上がり、その目が捕らえたのは移動中の強そうな男だった。

「……………こいつか？」

矢を放つ、また三津の視力は正常値まで下がる。

「いきなりの強襲で細く見えにくい矢を瞬間で捕らえて防ぐことは不可能だ、さて確認するか……………」

三津はもう一度矢を番えるために氷の矢を作ろうとする。

コン

！

やぐらの高い部分に何か刺さった、細くて見えにくい矢、帰ってくるはずの無い矢だった。

三津はそれをしばらくじっと見つめて、

「やるじゃねえか……………これを防いだのは三人目だ！」

番えてもう一度さっきのやつを探す、しかし何処にもいない、

「どこだ！何処に行った！」

「お前か？さっきの攻撃は？」

「!?!」

三津はとっさに後ろに飛び下がった。

やぐらの端にはさっきに狙った男が立っていた。

三津はとっさに矢を十は一気に番えて放つ、しかし相手には届くこととはなかった。

相手に当たる前に何かに当たり、矢はすべて落ちてしまうからだ。

「・・・良い能力だな、なんの能力だ？」

「教えると思うか？」

相手は特攻する・・・動作の途中で砂になり消えてしまった。

三津の首に刃物が添えられる、

「『砂分身』・・・気をつけろ、一対一で後ろをとられたら負けだ」

「ああ、そつだなこれからは気をつけるぜ、ククク・・・」

男は縄で三津を柱に縛り付けた後、砂になって消えてしまった。

「アレが『秩序』の剛毅か、表向きのリーダー……………」

「やつかいなヤツを偵察隊に混ぜてきやがった、まさか西城をだしてくるとはな……………だがこんな手口、大神のやることにしては何か可笑しい気がする……………」

剛毅はチツと舌打ちをして、スピードをあげた。

目の前に見えてきたのは、威厳をたたいた建物、『霸光』の総本部だ。

入り口の門番に軽く頭を下げて、中に入る。

中は意外と豪華な作りをしていて、そのどれもが、すさまじい気配を漂わせている。

剛毅はエレベーターもじれったいので自分の能力を使い空中を上に走り出した。

最上階の一番奥の部屋に水鏡の部屋がある。

剛毅はドアをノックして、

「剛毅だ、水鏡いるか？」

「入っていいぞ」

許しができると、剛毅は静かに部屋の中に入った。

ソコにはベッドから少し顔を上げている水鏡がいた。

「もう平気なのか？」

「いや、最前線にはでれそうにないな……だから来たんだろ？」

水鏡はニツと笑い剛毅を見た。

「まあな、翔汰がまだ手配してくれるかもしれんから、まだまだ増えるぜ」

「世話になる……彰にはちゃんといつてあるから使ってくれ」

水鏡は申し訳なさそうに頭を下げた。

剛毅は水鏡が責任感が強いと知っているため、こう言った。

「おいおい、何もしない気がよ！？」

多少笑いを含みながら言う、水鏡は思い立ったように、

「そうだな、俺に出来ることをしよう、何かあるか？」

「俺が前線でお前の変わりをする、お前は後ろから何をするか伝達してくれ」

「分かった、お前は思う存分戦ってくれ」

水鏡は重そうにゆっくりと立ち上がる。

剛毅も立ち上がる。

「一応伝えておく、向こうに『蒼炎の破壊神』がいるぜ、気をつけろ」

「『蒼炎の守護神』か、その程度ならまあいいか、それよりもやっかいなヤツがいるからな」

首を傾げながら水鏡が剛毅をのぞき込む。

「誰だ？」

「お前は周りに気をつけながら後ろから指示を出せ」

「一拍おいて、」

「こいつは、俺の相手だ！」

「……ああ久しぶりにそのお前を見たよ、それほどなら俺がどうにかなると思わない」

水鏡はそのまま部屋を出ていき、剛毅もその後が続く。

『絶対防御』、それが剛毅が背負う、最強の呼び名。

：瞬夜2

「終わらないな……」

京はぼんやりと前を見ると、まだ何人かの『悪魔の正義』の増援部隊が溜まっていた、正確には止められていたのだが。

しかし様子を見るばかりでなかなかこっちにこない、さすがにこれには少々呆れてしまう。

「愛ちゃんも早く気付いてよね……下っ端が何してるか……」

だがこのままにしておくわけにもいかず手を前に出す、同時に増援隊は一步後ろに下がる。

「君たちはもう帰った方がいいな、これ以上の犠牲は無意味だと思わない？」

すでに後方で何人かが引き始めているのだが、がんとして引かない者もチラホラと……おそらく小隊の隊長あたりだろう。無駄なプライドで立っている。

「来るなら早く来てよー、ソッコーで終わらせるから」

引きもせず来ることもない……相手側としてみれば攻撃にでる隙をうかがっているのだがそんな隙を京がつくるわけもなく、必然的に場が硬直しているのだ。



「呆れた……これじゃラチ開かないね、だから……少し攻撃させてもらうよ?」

すぐさま木陰に入り指を噛む、血が溢れて地に落ちる。

「死んで」

血が落ちた地の上から木が現れ悉く辺りにいる者どもを貫きつねる。

出来た森に一人だけ、残された敵は、ガクガクと足を震えさせ立つ事もままならないようだ。そんなに恐い笑みを浮かべて近づく。

「悪魔……悪魔め！俺をどうするつもりだ！」

「君には役目があるだから運良く生き残れた、それだけ、別段君で  
ある必要性はないんだけどね？ちよつとした私の趣味で……  
ね」

なおもその一人に近づいていく。

男は腰を抜かしながらも離れようとする。

「それじゃ、近づけないよ〜そこにいて」

血を一滴垂らすと、また木が生える、今度は男の真後ろに生え、男が当たると同時に蔓で男の動きを封じ込めた。男から悲痛が漏れる。

京が近づくに連れて男は目に見えて震え始める。

二人の距離が限りなく近づいていた。

「いい？あなたはこれから眠らされます、起きてすることは帰ってこのことを提督大神 愛に報告するの、分かった？ちなみに私のことは忘れなさい！」

京はそいつの顔をのぞき込んだ。そいつはガクガクと震えながら、頷いた。

「よし！聞き分けがいい男は好きだよ！」

二人の距離が急激に縮まる。

男は強く目を閉じた。その瞬間に唇に柔らかいものが当たり、何かの口から進入してくる。

目を開けると、敵が目の前にいた。

「フグッ！フググッ！！」

なおも口の中を京の舌がなめ回す。

「プハッ！ハアハア……ごちそうさま、それとおやすみなさい、ちよつとだけ美味しかった……かも」

京は立ち上がる。そこでその男の意識はとんだ。

目の前にあるのは敵『悪魔の正義』の偵察部隊の本拠地である。

その近くにある部隊が近づいていた。

「あそこが本拠地ね」

麗香は偵察部隊のくせにその場所は基地ともいえるくらいのもので見ていた。決して羨ましいなどと……。

「麗香様、突撃しますか？」

後ろから声をかけられて振り向く。ソコには『近衛』のナンバー2、羽柴 冥がいた。

「そうね、でももう少し待とうかしら」

そう言って、敵本拠地を眺める。冥は理由を聞いたそうに麗香を見る。それを感じ取った麗香が、

「理由はね、私が一緒に此処まで来てるから、多分来ると思っただ……」

どういう意味ですか、と冥が首をひねる、

「優しい人がいるのよ、私にね」

辺りにすさまじい熱気が立ちこめる、気温は上昇し一気に真夏レベルまであげられる。

「ああ、キタキタ、皆準備して！行くわよ……」

皆一同に首を傾げる。

代表として、冥が聞く、

「あの……何が来たんですか？」

「あゝ気にしない気にしない、まあすぐに分かるからね」

麗香は一人つつこんだ、

「あつ、ちよつ！麗香様！」

残りのメンバーも麗香の後を追う、

その瞬間上がり続けていた辺りの気温が爆発的に上昇した。

「なんだこれ！？敵の攻撃か！？」

「なんだは無いだろ、せつかく加勢に来てやったのに……」

冥の後ろには本来いてはならない人がいつのまにかそこにいた。

「一閃……様？」

『地獄の使者』のトップ、元帥、霧崎 一閃が冥を追い抜き、先頭を行く麗香にからだ。隣の麗香の顔が花のようにパアツと明るくなる。

「やはり来てくれたのね、センちゃん」

「当たり前だろ、レイが行けば俺もいく、そういっただろ、それに・

「……」

一閃は少しの間顔を隠してから、

「明日、一人で映画を見ても楽しくないだろ？」

照れくさそうにそう言って、麗香を追い抜いた。

「今を持って『近衛』の全ての命令権を俺に移す！俺が先陣をきる！その混乱に乗じて速やかに敵を滅ぼせ！！」

一閃は躊躇いなく敵の本拠地に単身で乗り込んだ。

「！？一閃様！！」

後を追おうとする冥を麗香が引き留めた。

「後、一、二秒待たないと焼け死んじゃいますよ？」

直後目の前の敵本拠地が一瞬の間に真紅の炎に包まれた。

「どうしたの！？何この炎は！？誰か水系の『才気』はいないか！それとすぐさま警戒態勢を……！！」

木須は声を上げる、しかしいつこうに何の返事もない。

そう分かるとまず木須は外の様子を確認するために三津がいるはずの高台に向かおうとした。

……が、

「動くなよ？……命の保証はしてやる、動けばないと思え、教えといてやるお前の『才気』ではおれには勝てん」

首には何か熱いものがそえられている、おそらく炎を硬質化させたものだろう。

「私を知っていると？あなた何者ですか？」

木須は相手を刺激しないように聞いた。相手の顔が自分の顔のすぐ横にきたのを感じる。

「大神のお気に入りの名前くらいは把握しているつもりだが……  
・角祭 木須、で間違いないな？」

「大神提督を呼び捨てにするなど……もう一度問います、あなたは誰ですか？」

「可愛いお嬢さんを俺の争いに巻き込む気は無いぜ」

「誤魔化しは効きません、そんな手には乗りませんよ！あなた、相  
当な重役でしょう、何者ですか？」

木須は顔を横に向けようとするが、それは妨げられた、強引に正面  
に向けられる。

「向かない方がいい、まあ俺の質問に答えてくれれば、姿だけは見せてやる」

ゴクリと木須ののどが鳴る。

「そんなに緊張しなくてもいい、ただこの襲撃の命を出した犯人が知りたくてな、それだけを正直に答える！」

「そんなの、大神様に……」

「違うな、大神はこんなことしない、少なくともこの辺りにはな……なるほど、誰がしたか分からないのか、ということはそうとうな立場の人間だな」

木須は首を傾げる、その動作に何か感じたのか、首の熱いものが退けられた。

直後首に来る重い衝撃、木須は悲痛を漏らした。

「もうすぐ部下がくる、そいつに運んで貰う、木須、お前が死ぬと何かと大神が厄介になるからな」

木須は倒れた。

それをしばらく見ていると、不意にゾクリと何かを感じた。

「なんだ？妙に懐かしいのが混ざってるきがするな、しかもこれは……！」

一閃は長い廊下の突き当たりを見る、そこに、白銀の髪白銀の肌を

した、淡いブルーの目を持つ女が立ってこちらを見ていた。

視線がぶつかる、互いにずらすことなくただにらみ合う、相手は微笑、こちらは無表情という違いはあるのだが。

そこに冥が来て、一閃に話す。

「この方は確保、捕虜でございますか  
閃様？・・・どうされましたか？」

—

「ん？ああそうだと出来れば俺の部屋に運んどいてくれ、くれぐれも地下牢なんかに入れるなよ？丁重にもてなしておいてくれ、見張りは瞬夜にでも頼んでおけばいいから」

一瞬目を逸らしたただだが、廊下の先にあの女はもういなかった。

「・・・あいつ、来てたのか・・・」

一閃が眺める先を見た冥だが、そこには誰もおらず、冥は不思議に思ったがすぐに木須を抱えその場を後にした。

一閃はしばらく眺めたままだったが、少ししてまた行動を再開した。

「あいつがいると厄介だな・・・手を出さないでくれると嬉し  
いんだが・・・」

一閃はそう願いながら火の手を強めた。



そこには圧倒的な状態が成り立っていた。

「この程度か？お前の異名は尾ひれがつきまくっているようだな・・・」

何百という倒れた人々の中心にある男が立っていた。

その前には部下の倒れた部下の姿に畏れるどころかそれを踏みつけて、もう一人女が立っていた。

「やりますね、それが『地獄の使者』の後衛最強の守り手、『絶対防御』ですね、名は鬼垣 剛毅でしたか？」

「そうだが、そういうお前は『蒼炎の破壊神』幸崎 未亜でまちがいないな？」

未亜は部下を踏みつけながら剛毅に向かって突進する。

繰り出されるのは蒼い炎で出来た大きな剣。轟々と燃えるそれは炎でありながら、その質量故に物質化までしていた。

その炎の刃先は剛毅に向かう。

ガキイイイイイーン！！

が、その刃が剛毅に届くことはない剛毅から十センチは離れた空間で何かによつて受け止められていた。

剛毅が不敵に笑う、がその笑顔に喜々としたものはない。

「仲間を踏み台にして……それか？笑わせる！」

剛毅の手が未亜の首にのびる、未亜はもう一方の手にもう一本剣を造りその腕を切ろうとするがやはり届かない。

当たった瞬間の反動で未亜は後ろに退く。

「逃げるなよ、お前じゃいくら向かってこようが俺に傷一つつけられない、だからおとなしく捕まっとけ、それで全部収まる」

「バカ言わないでよ、私が捕まるとでも？」

未亜は正確に間合いを計る、こちらが一撃を先攻出来、なおかつ相手が向かってこれない距離、位置。

剛毅はため息をつく、

「未亜、君は今無茶なことをしようとしてるだろう？」

「何！？どういう意味だ！！」

「どついう意味って、俺に死角なんてないぜ？探せるはずがない」

剛毅の背後、数十歩離れた位置にいる……いるはずなのに、未亜は突っ込めない、剛毅が顔だけをこちらに向けているにも関わ

らずだ。

目は合っていないハズなのにその位置からでも感じる圧倒的な存在意識の認識。未亜は唾を飲む。

【そうよ、一撃……一撃さえ決まれば!!】

未亜は意を決して突進する。

最大出力で練られた未亜最強の一撃。

ガキイイイイイーン!!

それは剛毅の肌に当たるか当たらないかの場所で止まっていた。

未亜はその場で倒れる、その腹には剛毅の拳が叩き込まれていた。

「ち……くしょう……!!」

未亜の意識が飛ぶと同時に炎も消える。

剛毅は仲間を呼ぶ、そして未亜を一閃の部屋まで持っていくように指示する。

「たいしたもんだよ、俺に傷を付けたのはお前で五人目だ」

そして剛毅はある一点を凝視する、戦っている最中からずっとこちらを見ているものにめを向けたのと同義だ。

「今行くから待ってやがれ西城！」

途端に来る大量の氷の矢が天から剛毅に襲いかかる。

コンコン、そうドアがノックされた。

「開いてるぜ」

瞬夜は興味なさそうに、ドアの向こうの人に話しかける、今回は心配で、あいつ、ではないことはわかる。

コンコン、またドアがノックされる。

「開いてるぜ」

生返事でもう一度ドアの向こう側にいるであろう人に声をとばす。

今度はドアが開かれた。

そこに立っていたのは……。

「おお！？懐かしいのが来たな、華鈴」

「お久しぶりね瞬夜、大変地味な所にお住まいなのね、私が華やか

過ぎるからそう思うのかしら?。」

入って来た華鈴は部屋を見たなりまずそう言った。

瞬夜はそれに対して別に怒ることなどしない。

「まあ一時的に身を置いてるみたいなものだからな、それで……  
・何のようだ?まさか旧友に会いに来ただけってわけでもないだろ  
?。」

瞬夜は剛毅が置いていった缶詰を一つ手に取る。

華鈴はそれを見て、

「そんなものよく食べれますね……話しを進めても良いかしら?。」

瞬夜は缶詰を頬張りながら頷く。

「今日来たのは、かつて私達と肩を並べる事が出来たあなたに私の  
『八皇』に入って欲しくて来たの、どう、やってくれるかしら?。」

瞬夜は缶詰を頬張るのを止める。

「『八皇』?嫌だね、俺はあんな組織にははいらない、例えば天地が  
ひっくり返ったとしてもな。」

「そう、まあ予想の範囲内ですけど……ではこうしましょう、  
一時的に入るってのはどうかしら?。」

「華鈴、俺をなめるなよ、俺の能力、特徴は知ってるだろ？」

瞬夜は不敵に笑う、華鈴はかすかにその笑顔に嫌気がさした。

「もう少し言葉遣いを綺麗にしてはどうかしら？」

「へっ！……一閃にはもう話したのかよ？」

「まだよ、彼には会っただけで十分伝わるでしょう、お返事はまた伺うわ、それじゃ、いい返事を期待しますわよ」

華鈴はそう言っただけで出口に向かった。

瞬夜はそれを引き留める、

「何かしら？何か用がおりなのかしら？それとも、もう決心してくださいましたの？」

華鈴はまた腰を下ろす、それが致命となった。

「いや、実は今謹慎中なんだよ、それでこの部屋から出られない、そこで」

瞬夜は後ろから棒を取り出す。

「ちょっと遊んでくれないか？」

「私が君と？嫌だ」

「まあそう言わずに見るだけでいいさ」

瞬夜は棒を左右に奇妙に振った。

「！？瞬夜！あなた

」

華鈴は崩れ落ちた、

「ブラックでも人は人だ、しばらくは一閃のためにここで寝むって  
いてもらうよ」

瞬夜は棒で華鈴をつつく、華鈴は起きる気配さえ見せなかった。

・瞬夜2（後書き）

書いてるうちにどんどん頭がおかしくなってますW

話がちゃんとつながってるかふあんだなあ〜W



## 第二・五章：闇の影のお仕事（前書き）

文字数がバラバラ・・・  
結構増やしたんですがねw

何はともあれ投稿完了です！  
楽しんでくださいね！

無計画に行うのはだめですね；  
というわけで二・五章始まりですw

## 第二・五章：闇の影のお仕事

『悪魔の正義』提督大神 愛は自室の机に座り、誰もいない部屋を見渡してゆつたりとした雰囲気でお茶を啜る。

大神 愛。世界にいくつもある組織の中で力で、頂点に立つ二強の内の一つ『悪魔の正義』で提督をつとめる女。その『才気』もやはり最強に部類しており、やはり有名なレッドラインMAXの一人だ。猪突猛進な戦いを好んで行い、それでいて失敗することは限りなく少ないというハチャメチャぶりを発揮、刃向かわなければ誰にでも優しい性格をしている。戦略を練るのも上手く、自分の立てた戦略に誇りを持っている、間違いに気付けば自分自身が飛び込んでいくという性格だ。

一対一の名乗り合いの決闘において負け無しとみんなに言われるのだが、愛自身は一回だけ負けた事があるらしく、みんなにはあまり言って貰いたくないようで、たまにそのことを注意する。

「いるでしょ？出てきなさい」

そう声を掛けてやると、さっきまで誰もいなかった場所に一人の少女が現れる、この技は見た事がある、どうやら闇系『才気』の持ち主なのだろう。

愛はその少女に見覚えがあった、確か小さな組織の内部組織の隊長の一人だったはずだ。

「アレ？あなたは一閃のこの昴ちゃんじゃない？」

「覚えていてくださって光荣です愛提督」

女、一条寺 昂は行儀良くお辞儀をした。

愛は部屋にある接待ようのソファを勧め、

「愛でいいわよ、ソコに座って、何かいるかしら？」

昂は首を横に振っていらぬことを示した、それに座ろうともしない。

愛は、そう、と言って向かいのソファに腰掛ける、些細な事には気にしないし敵がそこにも、信頼出来る相手の使いということは見えてる。

「さて、本題に入りましょうか、『闇の影』の昂ちゃんを使うほどのモノって何かしらね？」

楽しそうに身を乗り出す、もともとこういつややこしくなりそうな事が大好きな愛は案外世話好きなのかもしれない。

昂は懐に手を入れ一枚の封筒を愛に渡す。

「一閃様が愛様に渡せと言いました、どうぞ」

愛はそれを読む。

「フムフム……なんだよ……こんな事のために昂ちゃんを使ったのか！」

その顔から嬉しいような面白くないようなとても微妙な表情が伺える。

その後呆れたように肩を落とした。すごく気になる。

「なんと書かれていたのでしょうか？」

「ん？ああ、今度あそこである祭りの誘いだよ……一体何考えてんだか、こんな事の為に昴ちゃんをつかうことなんてないのねえ……」

そう言つて、部屋にあるクローゼットに向かった。その中から丁寧にその祭りに着ていくためのものを探す。間違つても相手に不快な印象をあたえるわけにはいかないし、相手が相手であるから故、普段あまり気にしない服装を整えようとしているのだ。

「っで？昴ちゃんはなにかあるの？」

「何か……と言いますと？」

愛の突然の振りに昴はそう返した。

「うん……たとえば最近起こってるおもしろいこととかさあ、なんかあるんじゃない？ていゆうか私最近面白い事無くて退屈してたんだよーだから何かあるんじゃないかと思ってね」

要するに愛は何でもいいから自分を楽しませろと言っているのだ。

昴は敢えてそこでアノ話題を出す。

「愛様もヒドいですね、まさかあんな大群をで『地獄の使者』を攻撃して来るだなんて、おかげで祭りの準備が遅れてしまいそうですよ」

「え？・・・攻撃？何の事？」

愛は身に覚えのない事を言われ、とまどい、真剣に聞いてくる。

昴はその様子から今回の襲撃が愛直下の命令ではないことを理解した。それだけでも大きな収穫だ、あの『悪魔の正義』に借りをつくることが出来るのだから。

「昴ちゃん、どういうこと？攻撃って？」

「愛様はご存じではないの？今現在『地獄の使者』は『悪魔の正義』の偵察部隊とやらと混戦状態にありますよ？」

愛は驚いてすぐに自分の机の大きなボタンを押す。

「現在進行中の中で私が確認していないものを探して！なるべく早くお願い！」

愛はクローゼットを閉じる、そして横にあるもう一つの小さなクローゼットを開いた。中には真紅の色をした、愛の戦闘用の装束がおさめられていた。

愛の『蟻の巣』より預かった二つ名は『真紅の大地』。その由来の真紅の部分を表す装備である。

「ありがとう昴ちゃん、下が迷惑かけてるみたいだ、今度ゆっくり話しましょう！」

「分かりました、では私がいると何かと誤解を招きます故、これで失礼させていただきます」

さっきまで昴がいた場所にもう昴はいなかった、いや、正確には見えなくなったただけなのだが。

『紡ぎの糸』総指揮大涯 大介はある市場で楽しく食事をとっていた、その机にはもう何枚もの皿が積み重ねられていたがそれでもまだまだ余裕があるようだった。

大涯 大介。世界中の組織とつながる事で『悪魔の正義』と対等に渡り合っている二強の内の一つ『紡ぎの糸』の総指揮を務める男。その『才気』もやはりレッドラインMAXに位置しているのだが、お目にかかれたものは余り居ない。

完璧に練られた作戦は失敗した事がまるでなく、全てに置いて相手の先を読んで練られている。その為『紡ぎの糸』だけでもかなりの力があるように見えるのだが、それに加えて周りの小組織が絶対に加わるのでかなりの戦力だ。

大介一人の武もかなりのもので、『悪魔の正義』の大神 愛と拮抗するほどの実力を持っている、長期戦になれば負けるのだが。それ

に信頼がとてもあり、一度手をさしのべれば最後まで面倒をみるく  
らしい決心で助けを与える。

大介は大したことも見えていないかのようにはほんとして座って  
いる……ハズだが、

「ヤレヤレ……こんな所で私に何か重要な用事でもあるのか  
ね？私は今とても美味しい料理を堪能したばかりでとても気分がい  
いんだがね……もし気分を害するような事があれば間違つて  
殺してしまうかもしれないよ？」

大介が言うと、背後に三人の黒づくめが立っていた、もちろん『闇  
の影』の構成員なわけだが。

「『紡ぎの糸』大涯 大介総指揮様で間違いありませんか？」

その内の一人が事務的な口調で話しかける。

「こんな公衆の面前でおいそれと言えるような事ではないのだがね、  
まあ一応は肯定しておこう、それで、私にどんな用があるのかね？  
面倒ごとは嫌いですよ？」

男達の一人が封筒を取り出して、大介に渡した。

大介はそれを受け取り、じっくりと中身を見て、

「これだけなら良かった、なるほどもうそんな時期か……」

手紙には一列だけなにかが書いてあったが大介はそれだけでも理解  
出来た。

そしてそれを手持ちのライターで燃やしてしまった。

「大涯様!？」

男達は慌てて止めようとしたが後の祭り、すでに紙は燃え尽きていく。

「何、慌てることはない、内容は理解したし燃やした理由はただ内容が他人の目に触れられていいものではないからだ、それとも何かね？私の行為に不服を感じるのかね？」

「はぁ……. . . . .では確かに渡しましたよ」

男達は気配を感じさせずに、消えていった。

それを見送った後、大介は胸を躍らせた、なんといっても内容が内容だったのだ、とても楽しみで仕様がないうるか早くいきたい、行きたくて行きたくて仕様がないう。

こんな機会を年に一回設けてくれる、一閃にはやはり感謝している大介である。『地獄の使者』を認める理由の中にこのことも入っているのは内緒である。

「久しぶりに会うからなあ……. . . . .出来るだけ驚かしてやる！楽しみにしてるよ！」

大介は楽しそうに家に帰っていった。



第二・五章：闇の影のお仕事（後書き）

たまに遅れる事があるかもしれませんが；  
その時は勘弁してください；

：瞬夜3（前書き）

何気に瞬夜が最強キャラになりそうですw

ちなみに一人だけ完全な構成が出来ているのですが。。。。  
次くらいにキャラ紹介を乗せたいと思います。

では、またあとがきでw

：瞬夜3

天から無限に降ってくるように見える氷の矢の雨、それに注意して防御していれば一直線に向かつてくる本命の一本を避けられない。が、かといって本命を注意していれば矢の雨は防げない。

「なるほど、まともなやつならば即死だな……が、俺には効かねえ！」

無限の矢は剛毅に当たる直前に何かにあたりはじき飛ばされている。

剛毅の十八番、小さな砂の粒を自分を中心に漂わせており、自動防御オートガで護っている、もちろん浮かせる分だけは力を使っているのだが、いままでにこれを破られたことは……少ないとだけ。

だがそれがあり安全とは考えていても三津までの距離はゆうにキロはあり一瞬で間合いを詰めることは不可能だろう、そして間合いが無い弓兵など負けに等しい。ならば勝利条件は……！

「たどり着けば勝利だな、さてどうやって詰めるか……」

本命をはじき雨のような矢は無視する。

「なるほど、本命は威力は高いが装填に時間がかかるようだ、なら装填から装填までが勝負だ！」

また本命が来る、時間にして10秒くらいの間隔だろう、剛毅はそれをかわして、地を力いっぱい蹴り、前に進む。

「次が来る前に半分は縮めてやる！」

さつき計測した結果によるとそろそろ来るはずだ、よって剛毅は急停止して様子を伺う。

その状態でしばらく音沙汰無く、本命が来ない。

「?・・・どうする、攻めるか、待つか、何か策があるとしてもいいのか？」

どこからの攻撃でも避けられるように足に力を込める。

突如矢の質が変わった、細いモノから極太の巨大な矢に変わる。

「ちっ！この矢は避けなければ！」

ドストスと鈍い音と共に矢が地面に突き刺さっていく、一本一本が太い丸太のようなものだった、まともに当たれば骨折は免れないだろう。

剛毅はそれを軽々とまでは言わないが避けていく。

「一体どうしてこんなものが!?こんなモノ軽々作れるレベルじゃねえぞ！」

少し思考を違う所にむけたのがダメだった、その瞬間、極太の矢が剛毅の周りを囲むように突き刺さる。

「しまった！」

そう思ったころにはもう遅い、上からは何本も極太の矢が襲いかかってくる。

相手の声が聞こえる、たぶん音系の『才気』を使うヤツを通しているのだろう、そして端的に一言、

「チェックメイト！……死ね！剛毅！」

今までの極太が細くなるような超巨大サイズの矢が目の前からあり得ない速度で飛ばされてきた。

三津の必殺、溜める時間にとっても時間を要するのだが、貫通力と範囲を併せ持つ為円周を大きくした矢。『フリーズドキャノン』、相手を貫き、なおかつその状態のまま相手を凍り付けにして逃げ道を塞ぐという技。

【避けれない！防御するしかないがあの質量にあの速さ！防ぎきれるか！？】

剛毅は目の前に砂を収束させる。厚く固めて押し込めまた固めて……

「くっ！砂式超硬防御・硬門！頼む！防ぎきつてくれ！」

氷の矢がその砂と激突する。いとも簡単にその矢はその砂を砕いて進んでいく。

ガガガガガガ

！！！！！！

『フリーズドキャノン』が硬門を突き進んでいく。

硬門はいくらかは耐えたがやがて反対側に矢が現れる。

「ダメだったか！！くそつたれ！！」

剛毅は腕を前に出す、腕に当たった瞬間腕を犠牲にして、氷の矢を逸らすためだ。

だがその考えは杞憂に終わる。

なぜならそこに一枚の薄い砂が立ちはだかった。

「バカだな、『砂塵』の使い方がなってねえ、いや、砂の『才気』の使い方がなってないな！」

男らしい声が聞こえた、聞き覚えのあるいてはならないヤツの声だ、同時に安心することが出来るやつ声だ。

「瞬夜、どうして此処に！？」

「助けてやったのにその言いぐさはヒドくないか？」

そう、瞬夜はたった一枚の薄い壁で氷の矢を受け止めたのだ。

「砂の使い方……教えてやるよ！！ちゃんとみてやがれ！！」

大地から莫大な量の砂が持ち上げる、その全てが圧縮され硬質化している、一瞬でこの量、これこそ一閃が多大な信頼を寄せている理由だと言われている。

瞬夜は楽しそうに声を張り上げる、その声には喜々としたものが含まれている。

「こつするんだよ!」

砂はその質量とは裏腹にあり得ない速度で矢の雨を迎撃していく。

「イメージだ!砂に対する意識!絶対に打ち落とせるという確信、信頼!そこから砂は進化する!そういうことがお前には足りないんだよ!!!」

瞬夜は敵を見据える。向こうの方では三津が言い得ない恐怖に震えているとは剛毅は知らない。

「あと、お前には鍛え方が足りないな、俺や一閃ならこれくらいの距離……」

そこから瞬夜は消える。そして、三津の後ろに現れた。

「なんだと!?!」

瞬夜は、瞬夜の基準で軽く三津の首を手刀で叩いた。

「おやすみ」

そこで『悪の種』の作戦は失敗に終わらされた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここは？」

木須が目を開けて初めに見たのは豪華な装飾が施された天井だった。いかにも豪華な装飾に少しお嬢様気分になってしまいそうになる。

一人で居た時なら、間違いなくお嬢様ごっこで、踊り出していただろうに・・・・・・・・。

そんな考えを打ち消して、起きあがり辺りを見ると見知った顔がいくつか見えた。

「起きたかのか？木須」

声をかけてきたのは、先に目覚めていた三津だった。

もう一つ奥の椅子に美亜が座っていた、顔がとても悔しそうに歪んでいる。

「『悪の種』の任務失敗、私達は今捕虜の状態よ・・・・・・・・こんな弱小組織に対して、ね・・・・・・・・！」

美亜は悔しそうにテーブルに置いた手を握りしめ、三津はそれを慰めるようにその唇にキスをする。深く濃厚なキスだった。

木須は何となく目を真逆に向けた。

「これは気まずいな、今までよくこんな位置に耐えられたな、少し



お前に同情という名の念を送っておいてやるっ」

そこには初めて見る女が木須が使っているベッドの横を堂々と使ってその二人を楽しげに見ていた。

木須はその女が離れるように飛んだ。

「何者だ！」

「威勢がいいのはいいんだが空回りだな、ここは個室だそんなに高く飛んだら……」

個室という狭い空間で、勢いよく飛んだ木須の頭はもちろんのこと、

ゴンッ！

部屋に痛い音が鳴り響く。

「痛ッ！！」

木須は頭を押さえながらしゃがみ込む、その恥ずかしい始末に女が追い打ちをかけるように木須の頭を撫でながら。

「たまたまかい？それとも狙ってたのかな？狙ったんなら君には相当な天然要素があるぜ！」

笑いを含んだ声は木須をいらだたせ、今にも飛びかかりそうな木須を手で制する三津。

「木須、止めとけ、俺ですら勝てないんだ、お前には勝てない」

「せめて名前くらいは教えて頂戴！」

「そいつは瞬夜というらしい、男みたいな名前だ

な!？」

その瞬間、美亜と三津の間に瞬夜が割り込んだ。

「それは言わないほんがいい、ちょっと怒りっぽいからな、じゃないとその唇から奪われるぞ？」

今にも三津の唇を奪おうとしていた、瞬夜を男が止めていた。男は『悪の種』の三人が見切れなかった速さに着いてきていたのだ。

「一閃……あなた何しに来たのよ？ここは任せてくれたんじや無かったかしら？」

一閃を見た途端に女の様な言葉使いになっているが、そこは突っ込んだら負けなんだろうと『悪の種』の三人は黙っていることにした。

「ちょっとだけ忠告しておこうと思っただが、来て正解だった、瞬夜、君は見張り役だ、それ以上でも以下でもない」

一閃はそう言っ、強引に瞬夜を三津から引きはがした。

「私見張ってるよ？この三人に傷を負わせずに、一閃の命令通りじゃない」

「そうだな、ならもう一つ加えよう、性的行動も慎んでくれ、『地獄の使者』の品が疑われるからな」

一閃はそう言ってから部屋に一つだけのドアに、向かった。

「一閃と言うのですか？」

「そうだが……何か言いたそうだな」

「私達三人に一人の見張りとは……いささか侮辱されている気がしますが？」

一閃は木須に振り返る、

「君の能力を使うのかい、木須？残念だが『光明』止まりの君がいくら頑張っても瞬夜は読めないよ」

「なんだと！」

「そのままの意味さ、じゃ、俺は用事あるから、瞬夜、約束は忘れるなよ、そしたら見返りはでかいぞ」

「は……い！楽しみにしてま……す！」

一閃はその部屋を後にした、瞬間に瞬夜の態度が一変する。

「おとなしくしてるよ、俺の為にな」

木須は納得しておらずしばらくの間、『光明』で瞬夜を見続けたが、程なくして諦め、また眠りについた。

：瞬夜3（後書き）

そろそろ感想などが欲しいところです；

できればほしいんです〜w

どうかそのところもお願いしますね？

ちなみにキャラ紹介を前書きでは一話分使うという気持ちで書きま  
したが

あとがきかのどちらかにしたいです。

ですからその希望も書いて欲しい・・・かなあw

それではまた次回！

またね〜^^ノ

外章1：キャラ紹介（前書き）

遅くなつてしまいました（汗）  
ごめんなさい……

## 外章 1：キャラ紹介

なんとなくキャラ紹介なんかしてみようかなっておもいましたw

一閃「じゃあまずは俺からだな」

名前：霧崎 一閃

ヨミ：キリサキ イッセン

性別：

才気：劫火（あらゆるものを燃やす炎）

ライン：レッドMAX

備考1：『地獄の使者』の総督。

備考2：実は書かれていない事多々ありますw

一閃「なんだよこれ？」

仕方ないじゃないですかwこうしないとネタバレ要素がたつぷりな  
んだから、君はw

一閃「まあそうなんだが、てかもうちよつと何か付け足す事がある  
・・・むぐっ！」

麗香「まあセンちゃんなんてほつといて次の私に行きましょう!!」

いいですよ〜

名前：一角 麗香

ヨミ：イツカク レイカ

性別：

才気：大氷（すべての熱を奪い去る）

ライン：ブルー9

備考1：一閃と幼馴染みで一閃の事が大好きでもある

備考2：内部組織『近衛』のボス

備考3：基本的にみんなからは優しい性格として慕われる

備考4：最近体重がh.....ふげっ！

麗香「はいはい、余計な事は言わなくて良いのよ」

はいすいません.....

麗香「じゃあ次は誰にしようかな？」

W瞬夜「！」

お

瞬夜「なんだよ？俺に何か用か？」

一閃「自己紹介してくれだとき、してくれるか？」

瞬夜「うん いいよ〜一閃のためだもの、喜んでしますわ」

名前：瞬夜？

ヨミ：シュンヤ

性別：

才気：??? (???)

ライン：ホワイト1

備考1：基本的に謎がおおい人

備考2：一閃を大好き（からかい？）

備考3：一閃以外には男口調、でもかなり世話好き

備考4：本作ではかなり重要なポジションにあるが、役目はまだまだ先w

瞬夜「適当だな、おい」

麗香「一閃大好き（からかい？）ってなによ？」

一閃「ふむ……焼かれない？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

剛毅「瞬夜！！どこいった！」

瞬夜「やっべーじゃ、俺はもういくからな！」

瞬夜「……………」

剛毅「一閃、こちらへんに瞬夜がこなかったか？あいつ、俺の大切にしていたお菓子を食い逃げしやがって」

一閃「そんなことでかけっこが始まるんだな……………まあいい、瞬夜のことを教える代わりに自己紹介でもしていけ」



名前：鬼垣 剛毅

ヨミ：オニガキ ゴウキ

性別：

才気：砂塵（特殊な砂を意図的に操る事が可能）

ライン：レッド5

備考1：瞬夜のが好き？

備考2：内部組織『秩序』のボス。結構信頼があつて、『地獄の使者』で現在2番目に強い

剛毅「これでいいだろ？はやく瞬夜の場所をおしえてください！！」

一閃「必死になりすぎだ……多分俺の部屋にいるきがする、行ってみる」

剛毅「わかった！」

剛毅「……………」

麗香「嵐のようだったね……………」

一閃「そうだな……………」

翔汰「お呼びですか？」

麗香「！！？」

一閃「気配なく近づくなよ、レイがビビってるだろが（汗）」

翔汰「ははは！それが目的でしたのですね」

昴「翔汰！麗香さんと一閃様に失礼な事するんじゃない！！」

麗香「！！！！？」

翔汰「あなたもですよ」昴

昴「昴はそんなことしないもん！」

翔汰「してますよ？」昴「してないもん！」

翔汰「してます」昴「してない！」

翔汰「してる」昴「しない！」

一閃「五月蠅いぞ、じゃ、自己紹介一気にいっとくか」

名前：里島 翔汰

ヨミ：サトジマ ショウタ

性別：

才気：暴風（風をあやつり、その鋭さは刃のそれと同じ）

ライン：ブルーMAX

備考1：内部組織『法度』のボス。

備考2：昴のことで一閃となんらかの約束あり

備考3：約束を破る事があまりない、律儀になんでも護ってしまふ

名前：一条寺 昴

ヨミ：イチジヨウジ スバル

性別：

才気：??(??)

ライン：レッド1

備考1：なんだかんだ言っても翔汰のことが大好き

備考2：内部組織『闇の影』のボス、ただし特別訓練はうけていない

翔汰「した」昂「ない！」

麗香「いいかげんにしなさあああああああああああ！」

翔汰&昂「……………ごめんなさい」

京「まったく、しかたありませんね。でわ、私の紹介でもいきましようか」

名前：一ノ宮 京

ヨミ：イチノミヤ ケイ

性別：

才気：樹海（血を使い、それを媒介に生命をはぐくむ）

ライン：レッド9

備考1：内部組織『改水』のボス

備考2：こいつは俺のよm……………

一閃「こらあああああああ！！いつちやならんことをくちばしるなあああああ！！」

京「そうですよ、作者はまだ結婚出来るとしじゃないでしょう？後

「一年我慢しなさい」

麗香「そういうもんだい？」

京「はい」

翔汰「さて、今回はこのへんにしておきましょうか、今度暇な時にするネタがなくなってしまうからね」

昴「してないもん……してないもん……」

「閃」そうだな、今回はこの辺にしておこうか」

麗香&京「りょくかい」

「閃」じゃあみんな

全員「これからもよろしく〜〜」

## 外章1：キャラ紹介（後書き）

ほんとこれからもよろしくおねがいしますw

誰か紹介して欲しい人がいればいつでもくださいw  
後書きか次の紹介のときにもかきますw

### 第三章：麗香とデート

旧立帝國高校の校門の前に一人の女がオシャレな格好をして待っていた。よくみると額に青筋が微かに浮かんでいるのだが誰も気付いていない。

そこに一人の男が走ってきた、このあたりで知らない人はいない、『地獄の使者』のボス、一閃だ。

「おまたせレイ、待ったか？」

「……………待ったか、って言いました？」

麗香は今にもつかみかかりそうな勢いで一閃を睨み付ける。

一閃は怯む、なぜならば自分が約束の時間を二時間以上過ぎた時間に来たからだ。

「ヤクザ30前後5グループ……………スカウト三回……………通り魔6回」

麗香は淡々と何かの数字を出しながら、言いたくもないというような顔をしている。

「さて問題です、これはなんの数字でしょうか？」

「えっと……………待ってる間に来たひとの数でしょうか？」

麗香は怖いほどの笑顔を一閃に向け、軽く敬語を使ってしまう。

「おいしい、正解はね……………！」

麗香は一閃の頬を思いっきりビンタする、我慢の限界がきていたようだ。

倒れた一閃に馬乗りになり、なおもビンタを続ける。

「私が待つてる間に冷やかしてきた人の数でした！！笑いながら、今日も一閃様は遅刻ですか、ってね！！」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ！！悪かった、最善を尽くしたんだよ！！」

麗香はビンタを止め大きく溜息をついた後、一閃の上から離れた。そして一閃に手を差し出す。

「ホラ！……………何があったか説明してよね」

「ちよつと瞬夜に忠告しに行つてただけだ、別に何かあったわけじゃない」

瞬夜の名を聞いた瞬間わずかに顔をゆがませた麗香だったが、隠していたつもりだったが一閃にはばれてしまう。

「ありがとうレイ、でも別に瞬夜と何かあったとかじゃない……………だから安心しろ」

「別にそんなこと気にしてないわよ……………そんなことよりも映

画を早くみたいの！」

照れ隠しに大声で言っただけで麗香はこの辺り一番の商店街に続く道を走る、一閃はその後を遅れないようについていく。

商店街と言ってもここはほとんどなんでもあるような場所だ、ちなみに『改水』の本部がおいてある場所でもある。

その中で一番大きな映画館に向かう。

「ところでどんな映画が見たいんだ？」

「ラブ……ラブよ！今の私はラブを求めているの！」

大きな声で言うが別に誰一人として振り向いたりしない。

それもそのはず、麗香は大抵の場合、映画を見るためだけにこの場所を使い、このような無駄な大声をだすからである。

一番大きな映画館に到着する、受付には見慣れた女が座っていた。

「一閃様、ようこそ……デートですな」

「うるさい、京！券を早く出せ、金は払って置いたハズだ！」

京はニヤニヤしながら二人を見比べた後、二枚チケットを一閃に渡した。

一閃はそれを受け取ると麗香に先に行くように言う。



どついつ訳が分からなかった麗香だが、言われたとおりに先にいく。一閃はそれを見送ってから、何か言いたそうにこちらを見ている京に向き直る。

「なんだ？」

「いえ、ひとつお願いがありまして……我が『改水』の構成員が少し足りません、補充をお願いします」

「……何人分だ？」

「その件は後でお話ししましょう、今晚、いつもの場所をお願いします、日のあるうちは楽しんでくださいね」

一閃はまだまだ続きそうなハードなそして増えたスケジュールに頭を抱えながら麗香の待つ場所に向かった。

その姿を京は楽しそうに手を振りながら見送る。

映画は最高のモノでとてもよかった……らしい。

横では麗香が感動したように涙を流している。

「大丈夫か？」

麗香は声も出せないのか頷くだけだった。

一閃はとりあえず近くにあった店に入って、軽い食べ物を注文した。

「よかったなあんな映画が見れて、俺にはさっぱり分からんが」

「一閃があれっくらいなら私嬉しいな……」

一閃は今の自分と映画の主人公を重ねて一つの結果にたどり着く。

「ゴメン、無理！俺にあんなの似合わない！」

一閃は頭痛をこらえながら、頼んでいた紅茶を啜った。

「さて、どっかいこっか？」

「そうだね、ショッピングにでもいく？せっかくここまできてるんだし」

「いいぞ、じゃ、さっさと食べて行こうか」

一閃は残った紅茶を飲みきり、麗香は置いてあったケーキの残りをマルミ一口で食べきった。

それから二人は商店街を歩いていた。

これといって何かをするわけではなく、ただ店に入っただけは冷やかしたりなどして楽しんで時間を潰した。

時刻は夕焼け、そろそろ京との約束がある一閃は、麗香に提案して

麗香を送り届ける事にした。

二人は手をつないでゆっくりと歩いていて、麗香の顔はほんのりと紅に染まっていた。

「また……デートしようね、センちゃん」

「いつでも言うてこいよ、いつでももしてやるからな」

麗香の家の前に着いて、一閃は麗香に軽くキスをして頭を撫でた。

麗香は嬉しそうになつてから、家の中に入っていった。

麗香とのデートを終了して、ホツとする暇もなくすぐさま商店街へと逆送する一閃、目指す所は京の待つ『改水』の本部だ。

### 第三章：麗香とデート（後書き）

そろそろテストが始めるので更新出来なくなるかもしれません；

終わりしだい行きますから気長に待っていてねw

・頼み事（前書き）

明日、明後日は試合なので疲れて投稿出来ないかも；

その時はすいませんが気長に待っていてねw

：頼み事

その夜、一本の商店街地下に行くための扉が開いた。

一閃は迷うことなく躊躇いながら入っていく。

商店街地下、『改水』の組織の中枢が置かれている場所でもあり、地下は広く暖かく明るかった。

一番奥の部屋に行く途中、何人かに挨拶され、軽く返したが、一番奥に行くのは気が引けている状態でまともに返せていたのか分からない。

そう、商店街地下最深部ボスの部屋には一閃にとって苦い思い出があるのだ。

「あの場所で京が初めて本性さらけ出したんだよなあ……  
行きたくない……でもいかないと面倒なことになるなあ……」

初めは可愛いと思っていたがそれ以来結構苦手になっていたりする。

部屋の前までくると見計らったかのように中から声をかけられる。

「入ってください、一閃様……開いていますよ」

艶めかしい声が内から聞こえる、この声の京は久しぶりだ。

予想が正しければあの時の悲劇があるだろう、退いても良いが……

・・・。

一閃は部屋に入る。

「デートは楽しかったかしら？」

京は部屋にある椅子に腰掛けていて、正面にある椅子を一閃に勧めた。

「ああ、しかしあの類の映画はいまいち理解しがたいな……つで、用件は何だ？」

一閃はその椅子に座り、すばやく話を進める。こんなとこいち早く出ていきたいのだ、しょうがない。

京はヤレヤレといったふうに関を落とす。

「気が早いね、昼にも言いましたが、本件は『改水』の人員補充です」

「分かった、早急に人員を補充するように翔汰に言っておく……・終わるか？ならもう立ち去りたいんだが……・むしろそう言うのは翔汰に言っただけいいんだが……」

一閃は立ち上がり、出口に向かおうとする。

「いえいえ……おわかりでしょう？まだありますよ」

パチンと指を鳴らす音が聞こえると、ドアの向こう側で錠の落ちる音が聞こえる。

一閃はもの凄く嫌な顔をしながら振り向く、ソコでは京がすでに衣類を脱ぎ始めていた。

「脱がなくてもいいんだろ……何故脱ぐ？」

「こつしたほうが気分が出るからですよ！一閃様もお脱ぎになつたらっ？」

京の声がより甘いものになっている、それはどこか男を誘惑しているかのような声。そして大抵の男はこの声で理性が吹き飛ぶだろう。だが一閃はそんなモノには動じない、むしろ反発が強くなる。

「俺はいい、さっさと用を済ましてくれ、俺はここに長くいたくない……」

「愛想が無いのね……まあいいわ、でも上着は脱いでくれるかしら？それは邪魔なの」

一閃は言われたとおりに上着を脱ぐ、中から筋肉質の体が覗く。

京はゆっくりと一閃に近づいた。

「じゃあ……いただきます……」

京は一閃の首に甘く吸い付き、そして甘く噛んだ、しかし少し尖った形をしている歯は首に軽く刺さり血を出させる。

「っぐ……」



一閃は齒を噛み締める、痛いはずなのだが京がする時はコレが何よりも快感に変わってしまう。

京は尚も噛んだ場所から出てくる血を吸い取っていた。この時は快感が一番強くなり、一閃にとっても最も辛い我慢の時になる。

「まだ……………か……………!」

「もうちょっと……………」

一閃の無意識に握っている手から血が滲み出ている。

京は顔を離していく。

「ハアハア……………ごちそうさま、ありがとうね一閃」

「どっつてことない、じゃあ俺はもう行くぞ?」

精一杯強気で一閃は言って、その部屋を出ていった、もう鍵はかかっていなかった。

部屋に一人残った京は、服を着ながら、

「ふう、久しぶりだった、一閃様の血は……………おいしかったなあ」

着るのもメンドくさくなったのか、着かけの服のままベッドに横になった。

そして可愛い寝息とともに夢を見る。

「……………イッシエン……………シャマ……………  
……………」

外に出た一閃は壁に手をついた。

「くそ！やりすぎた、ダメだもう足が動かねえ……………」

一閃はとりあえず目の前にあるベンチまで自分を引きずって向かい、座った。そこで一息つく、

「血の契約か……………あいつがいないとこの場所を守れない……………  
…だが、俺がこんな調子の時に攻め込まれたら……………」

一閃は溜息をつく、自身はある、あいつ以外ならば誰が来ようとも追いつける自信はある。

突然、頬に冷たい感触がした。

「エラクまいてますね、僕がとどめを刺してあげようか？」

可愛い声が真横、隣から聞こえた。

懐かしい声、昔つるんでいたやつだ、最近は会っていないかった。

そして今もつとも会いたくない組織の構成員でもある。

「お前か、鋭美」

「そつだよ、一閃」

一閃の頬に当てていたものを離していく、それはカンジューズだった。

鋭美はそれの上を開けて一閃に渡す。

「ほら飲みなよ、疲れてるんだろ？」

「いや、実は体の自由が利かないんだ……飲ませてくれないか？」

「口移しで？」

鋭美がそういい、反対が出る前に一閃の口はふさいだ。

一閃は拒もうとしたが、京の所行の後で全身に力が入らない。

拒もうとしても入ってくる甘く冷たいハズのジョースは少し温くなっていた。

口が離れていく。

「おいしかった？」

「ああ……だが、気分は最悪だよ」

一閃は語気を荒げて言う。

鋭美はそれを嬉しそうに見て、

「どうだい、調子は？」

「どうでもねえよ、ただ退屈な日々だ、アレを抜けてからな」

一閃は昔懐かしむ感じという。

「へえ、そのアレに終止符を打った男が言う言葉か、惨めだよね」

鋭美は何の興味も無く言っ続けてける、

「そんなことはいい、どうだい一閃、もう一度始めないか？今度こそやり遂げよう」

鋭美は立ち上がって一閃の前に立ち片手を差し出す。

時間がゆっくりと流れていく、しばらくして、いや少しかったかも  
しれない、

「断る、俺はこの土地に引きこもり続ける、誰が何と言おうとな」

「そう、もしかしたら今度会うときは敵かもね、でも忘れないで、  
僕は例え敵でも君の事が……大好きだ」

最後の言葉が聞き終わる瞬間か前にはもう鋭美は消えていた。

「くそ、思い出しちゃまったじゃねえか！」

一閃は叫んだ後、そのままベンチで眠りに落ちた。

最後に翻した鋭美の背中にはやはりあの大きな文字が堂々と刻まれていた

『八皇』と。

…お祭り準備！（前書き）

めっちゃ疲れた……

でも頑張って投稿しておきました！

楽しんでいただければ光栄ですw

：お祭り準備！

『地獄の使者』にとつての大戦が終わり一息つくまもなく『覇光』は祭りの最終仕上げにかかった。

だが今はボスである水鏡が療養の為に休んでいる為に作業は遅れ気味に進んでいる。

そんな中彰はボーゼンと作業中の広場から少し離れたところで休憩していた。

「それにしても祭りの準備急げって……一閃様も無理を言うよな」

ついさつき一閃がきて、彰にそう直接言ってきたのだ。

「この人数に水鏡がない今、そんなことが出来るかね？」

初めから多くは無かった『覇光』のメンバーが今少し大戦のあとで減っている。

元々水鏡がその人数でもやっところさギリギリ間に合うようにくみ上げたスケジュールを水鏡なしでとわ……。

「サボリはいけませんね、ちゃんと働かないと終わりませんよ」

後ろから見たことあるような女性が話しかけてきた。

「え〜と……誰でしたっけ？」

彰がそう聞くと、げんこつが落ちてきた。

「こんな美少女を忘れるとは……『近衛』の冥です！羽柴冥！！」

【そついやこの前の副隊長の会でいたっけな】

彰は朦朧な記憶の中から冥をみつける。

冥は怒ったように腕を組んでいる。

「だいたいですね、この場での管理者がこんな調子では出来るものも出来ないと思っんです！」

「ああ、そつだな」

「水鏡さんがいなければこの『霸光』はこんなにも脆いんですか！」

「ああ、そつだな」

「こんな時のために副隊長というものが存在すると思っんですよね」  
「！」

「ああ、そつだな」

「折角『近衛』が手伝いに来たっていうのに、こんな調子じゃ」

「ああ、そつ……！！！」



さっきまでまどろんでいた頭がフル回転し始める。

「『近衛』が来てるだと！こんなことに『近衛』をつかうのか！？」  
もう少しで冥に襲いかかるような勢いで彰が立ち上がる。

冥は軽く引きながら、

「ええ、別に『近衛』だけじゃありませんよ、『法度』も『改水』、  
人員のほとんどがこの祭りの手伝いに来ています」

彰は驚いて、辺りを見渡した、確かに見る限り、明らかに人の数は  
増えていた。

冥は呆れたように

「……まさかきずいてなかったの？」

「自慢じゃないがきずいてなかった、それにしてもえらく力を入れ  
てるな……」

「いつもこのくらいしてるよ？……まさか、毎回サボってたの  
！？」

彰は逃げるように屈み込む。

「だってメンドくさかったし……一閃様は俺のトコまでこな  
かったし、俺の部屋放送用のスピーカー壊してるし……」

冥は屈み込んでいる彰を無理矢理持ち上げて、作業場に戻る。

作業は計画通りのトコまで何とか終わっていた。

冥は屋台の組み立てを手伝っている、……のだが、

「彰、これはどこでいいの？」

「違う、もう一個上にある穴に入れるんだ……オイ！ネジ忘れんな！これがなきゃ付けられんだろが！」

「これは？何の部品？ちよっと長すぎる気がしますけど……」

「部品じゃない！それはネジ巻くヤツだ！ドライバー！」

「屋根の布持ってきたよ！」

「おおありがとう、そこに置いといてくれ……冥！これらは下に敷くやつだ！ってよく見りゃ屋根のやつを敷いてるじゃねえか！」

「彰……何か外れた……！」

「ん？……ちよま！おい！これ屋根支えてる一番大切なヤツじゃねえか！こんなの普通にしていやはすねえぞ！むしろどうやって外しやがった!？」

ガッシャーーン！！

さつきできあがったばかりの屋台が大きな音と共に屋根から落ちた。冥は冷や汗をかきながらゆっくりと彰の方を見る、むろん怒られるのを覚悟していた。

が、彰は意外に溜息をつくだけだった。

「あの……怒ってる？」

「いや、懐かしくてな、まさか昔の俺が水鏡にどんだけ迷惑かけたと思うと……少々申し訳ない」

彰はまたその屋台をくみ上げにかかる。

冥は今度はおとなしくしていようと、座って見ることにした。

すると彰は振り向いて、

「何やってるんだ？お前も来いよ」

「え？だって迷惑だから……」

「おう迷惑だ、だけどやり始めた事を途中で投げ出すな！……水鏡が俺に言ったことだ、教えてやるから来い、それとも出来ない奴ってレットルを欲しいのか？」

彰は動こうとせず冥がくるのを待っている。

冥は初めはためらったが、自分が動かないと彰は絶対に動かないと分かる、

「後で後悔しても知りませんよ」

「後悔するのは目に見えている、どれだけ後悔するかだな、ほら、早く来いよ始めれないだろ」

立ち上がり、心持ち明るい気持ちで彰の元に行った。

その後も何度も失敗する冥に呆れ果てた彰はある一部以外の準備をやらせることにした。

「ここは何をする場所なの？」

「定食屋」

素っ気なく答えて作業に入る。

「何ポケットと突っ立ってるんだよ、さっさと手伝え！後ドライバー持ってきてくれ！」

彰の言葉に反応して工具箱から工具を取り出して走っていく。

「はい！持ってきたよ、ドライバー！」

工具を受け取った彰はそれをしばらく眺めてからゆっくりと立ち上

がり冥に寄っていく。

そしておもむろに持っていた工具と予備のネジを持たして言う。

「あそこ……この工具でネジを止めてこい、他は俺がするから……いいな、この工具以外使っんじゃないぞ？」

そういつて、彰は工具箱から違う工具を取り出して違う場所の作業にかかっている。

冥は嫌な予感がしつつも変える訳にはいかず、教えて貰った通りの工具の使い方を実行。

カン、カン、カン……

その間にも彰はゆっくりとしたペースで作業を進めていたり、ちゃんと出来ているかを確認しにいたりしていた。

カン、カン、カン……

休憩中も冥はひたすらにその工具を使った。

カン……カン……カン……カン……カン……カ  
ン……

ピタッとその動きが止まりちょうど休憩中だった彰の元に冥がきて言う。

「ネジが巻けないよ？」

「だろうな、そんなハンマーじゃいくらたっても巻けんだろう」

「ハンマー……言ってくれてもいいんじゃないかな？結構頑張ったんだよ？」

「それ以前に俺がどれだけ頑張ってお前に工具の名前を教えたと思ってるんだよ？それに俺は忘れてないからな？お前が、ちゃんと覚えたよ〜って自慢げに言った事を」

彰はそう言って、持っていた工具を渡す。

「ホラ、コレがドライバー、ちゃんと締めてこい、そしてら休憩しよう」

「うん……」

冥はドライバーを受け取って作業場所に戻っていき、しばらくして戻ってきた。

「出来た」

「そうかよ」

短く返して、スポーツドリンクの入ったコップを手渡す、それを受け取って冥は一気に飲み干した。

「プハッ！こんな調子じゃおわらないんじゃないかな？」

「お前が言うな、お前が！……大丈夫だ、他の場所はもうかなり終わってる、後は半分以上未完成なのは此処くらいだ」

「でも夜中の作業は中止だよ？日がある内に終われない」

冥はとても済まなさそうに伏せ目になるが、彰はニヤリと不敵に笑う。

「大丈夫だって、だってここ俺ん家だもん」

「え？ええええええええええええ！！？」

「どうせ知らなかっただろ？祭りの時隠れた名所なんだぜ？この定食屋、ちなみに作っているのは俺だ」

「どうして黙ってたのかな！？かな！？」

冥はとても怒ったように彰に詰め寄るが、依然と笑ったまま彰が言う。

「聞かれなかったから」

「うっ！……………まあいいけど……………そうだよね、なんか悔しいから勝負しよ！私が勝ったら彰は明日一日中私の奴隷ね！」

「別に構わん、なら俺が勝った場合はお前が奴隷と言っ事で」

「……………まあいいもん！どうせ私がカツから！」

「言ってる、っで？何で勝負するんだ？」

ふふふ……………冥はニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「今度から私がミスするかしないか！それでもちろんミスなんてもうしないと思うからミスが増えるたびに言う事聞く度合いを上げていこうよー！」

「じゃあそれで、とつとつとやるか、じゃないと終わりそうにないかな」

二人は互いに思う所をもったまま作業の為に家の中に入っていった。

もちろん数秒足らずで一回家の中から大きな音が響いたのは言うまでもない。



・祭り開催、二人の秘め事（前書き）

ちよつと短くなつてしまいました、すいません。

なんだかちよつと文が可笑しくなつてきたようなきがW

でも続けさせていただきますW

でわ、楽しんでいてね！

## ：祭り開催、二人の秘め事

祭り当日、旧立帝國高校は大にぎわいを見せていた。

そう、今回の特別ゲストが現在最も人気で強いと言われている二人だからだ。

まあソレ乗じて何人が良からぬたくらみを企てる奴もいるのだが、そんなことは『秩序』や『霸光』のメンツが許さない。

「久しぶりだな・・・まったく変わっていないねここ・・・でも変わらないという美しさもあるかしら」

正門から一人の若い女性が数人の屈強な連れと共に入ってきた。

それに気が付いた辺りがにぎわう、そう何と言っても今回の特別ゲストの一人だからだ。

『悪魔の正義』提督大神 愛、数日でこの組織を世界組織の仲間いりさせた大物であり、現在もつとも有名で人気のあるボスだ。

「愛様、少しハメをはずしすぎではございませんか？ここは弱小とはいえ敵組織です・・・いくら警戒してもしたりないほどです、しかもここには民間人が多すぎる、もしもの時は対応しきれないかもしれません」

後ろから愛に忠告する声がかかる、それに対して、愛はまったく気にした素振りをみせない。

「大丈夫よ、このボスはよく知ってるわ、お前が考えることをしたら組織が無くなるのは分かるやつだから、そんなことしないしさせないようにちゃんと計らってくれる」

愛は何も考えずに祭りにとけ込んでいくと、いつのまにか連れ達は愛を見失ってしまった。

「え………！愛様！！？」

連れがあわてふためいていると、どこからともなく声が聞こえる。

近くにいるようで遠くにいるような声、どうやら『音』系の才気を回して貰っていたようだ。

「私がそんな弱いように見えるの？大丈夫よ、絶対戻るから、だからあなた達も祭りを楽しみなさい！こんな機会滅多にないんだから思いつきりハメをはずしなさいよ！」

男達は呆然としたが、諦め、また信用して祭りを楽しむことにした。どうせ探した所で見つかる事は無いと思っているし何より、自分達が信用するボスである。

だから誰よりも知っているのだ、愛が誰かにやられるわけがないと。

数時間前、裏口からコソツとはいる影があった。

「助かった、正門から入るのは気が引けておつたのだ、それにもしも愛のやつと鉢合わせしてしまつたら大変だから、お前が近くに居てくれて助かった水鏡」

「ハハハ、警備中だつたんですがね、まああなたの命令なら仕方ありませんし、でもまさか大介さんがこんなトコから入るなんてね・・・」

『紡ぎの糸』 総指揮大涯 大介は水鏡につれられて、ある場所に向かっている。

もうちょっとで目的の場所に着くと言う所で、

「ところで、あんな倉庫に何か用があるんですか？」

「ふむ・・・世の中には知らない方がいいこともあるが？」

「・・・はいわかりました、じゃあ俺はこの辺で失礼します」

水鏡はひとつお辞儀をした後、どこかに走り去ってしまった。

大介はそれを見送った後、校舎から見えにくく、近寄りたくもないような外観をした倉庫に入っていた。

愛はちょっと小走りで校舎の裏に密かに建てられている小屋にすぐさま向かった。

中から三人の人の気配がして、楽しそうな笑い声が微かに漏れている。

愛は躊躇い無くその小屋に入っていく、思い通りの三人を見た。

「久しぶり、麗香、一閃、それと……」

愛はもう一人いる、そしてもう一人の特別ゲスト、『紡ぎの糸』総指揮大涯 大介を見て、

「大ちゃん!!」

「久しぶりだね愛!」

二人は抱きつき互いに互いの手を取り、キスをする。

こんなに近づいたのは何時ぶりなのだろうか。

・祭り開催、二人の秘め事（後書き）

何か疑問や、おかしなところがあればどうぞなんなりとW

第三、五章：ある男のお話、序（前書き）

ちょっと更新がおくれてしまいました；

これからテスト期間にはいるので更新ができません；

で楽しんで読んでくれれば嬉しいです^^

### 第三、五章：ある男のお話、序

『八皇』

かつて世界中を恐怖に落として、

その存在を後生にまで伝えることになる伝説の組織。

その組織に組織内敬称『阿修羅』とよばれる夜叉のような男がいた。

依頼さえ受ければどんな戦闘だって好んで向かっていき、とてつもない力でもって他を圧倒し力を見せつけた。

ある時、その男の噂が止み世界中の人々がその男が死んだと思った、だがそれは大きな間違いだった。

男は恋をしたのだ、それもゴクゴク普通の非力な女の子に。

それから男は『八皇』の仕事も『阿修羅』としての役目も全て放棄してその女の子を愛し、女の子の為にだけに依頼をこなし、女の子の為にだけに生きようとしていた。

だが世界は、『八皇』は、自分の身内を殺された人々がそれを許す筈がなかった。

そして悲劇は起こった。

それは唐突に、あまりにも偶然が重なり過ぎてその男の前で、起こってしまった。

『八皇』の一人、組織敬称『道敷大神』とよばれる男がなんの躊躇いもなく、何の躊躇もなくその女を……殺した、否、殺した



と言つにはあまりにも残酷に女の子は引きちぎられていた。

男はそこに気配を感じると、

「お前は……こんなモノのために歪んでしまったのか？ 我ら『八皇』の最終目標は分かつて……いや、もう聞こえてないか……今のお前は人じゃない、ただの憎悪に燃えた殺人鬼だよ」

見下す男は、泣き崩れる男を見て哀れんだ、その男の感情は既に悲嘆の域を超えて、あらゆるものを憎むようになった。

そしてその感情は全て殺意に変わり、男の『才気』が空間を焦がし当たり一面を一瞬で灰に変えた、燃やされ無くなった空間からは二次元の破片がこぼれ落ちてい、そして真っ先に言いようのない殺意を目の前の男に向けた。

女の子を殺した男はすぐに闇に溶けるように消え、残った男は堪えようのない怒りと堪える気もない殺意が残る形となる。

故にこれは必然による結果だった。

男は世界を、『八皇』を敵に回して暴れ始めた。

男の通る道は焼けこげ、あらゆる障害物は灰に帰す、それが建物であるうとも、相手の『才気』であるうとも……そして人であ

ろうとも。

男は暴虐の限りで世界を回った、もう目的なんてものは忘れ、残ってしまった激情の様な感情に身を委ねて暴れ回った。

そしてようやく、『八皇』の残りのメンバーがその圧倒的な力を弱める嵌めになるくらいな被害でその男の正気を戻された、だが残ったのは空虚な男。

そのころには世界の約半分が焼け野原になって、人工もおそらく半分以上は減っただろうと言われた。

正気に戻った男はその光景を見て、自分を恥じた、今まで自分がしてきた事の不用心さ、さらにはこんなことを起こしてしまった自分の弱さを。

そして、女の子が眠る地に舞い戻って、残った灰を埋め墓を作り、一生それを護ると誓った。

その場所は……

。

第三、五章：ある男のお話、序（後書き）

感想してくれるとうれしいんですがw

まあおいといて・・・（おくのか！

前書き通りしばらく更新出来そうにありません；

次の投稿は再来週くらいです。

#### 第四章・それぞれの想いと祭（前書き）

予定より少し早く更新します！

何故かって？

たまたま両親がいなかったからですよ！  
ハッピーです

でわ、楽しんでね

## 第四章：それぞれの想いと祭

小屋には一閃、麗香、愛、大介がいる。

「良かった、無事に手紙が届けてくれたようだな、それと改めて久しぶりだな、大神、それから大涯も」

「ふん、お前も随分成長してるの、一人前に俺に一分隊をつかうとは、恐れ入ったぞ?」

「愛で良いって前から言ってるでしょ?・・・って誰かに同じ事言ったような・・・デジャブ?」

小屋の中にある二つのソファーの内の一つに、愛と大介は寄り添うようにしながら座っている。

もう一つのソファーには一閃と麗香が座っているが、一閃の方が麗香と適度な距離を取って座っている。だからといって近づいても拒むことはないのだろうが。

「それにしてもごめんなさいね、配下に目が行き届いてなくて、迷惑かけたでしょ?何か欲しいものとかあるかしら?」

愛は申し訳なさそうに頭を下げる。

もちろん先日までの『悪魔の正義』の偵察部隊の件である。愛は自分の事のように感じているが、実際裏で根回ししていたのは『紡ぎの糸』の重鎮だったらしい。

大介はもちろんそいつに徹底した罰を与えたが、おそらくもう解放されているだろう。

「別にいい、俺はアレが護れりやそれでいいんだ、それに本気になつたらアレくらい一瞬だ……. . . . .」と思っしな、まあどうせ納得いかないだろうから貸し一つって事で」

一閃は自慢するようでもなく事実のようにそう言う。

「愛さん、祭りを私と回りませんか？」

「ええそうしましょう、でも待って、もう少しこの人のぬくもりを感じていたい、もう少しだけ……. . . . .」

愛はもう一度、今度は深くキスをしてから唇を離し、麗香と共に祭りに向かっていった。

残ったのは一閃と大介だけだ。

「まだ……. . . . .護り続けていたのか？」

「……. . . . .ああ、俺にはそれしか無いからな、大介こそどうなんだ？」

一閃は目の前の大介を直視し視線をはずさない。大介も離さずその真意を見透かそうとしている。まあ一閃の心をのぞける人間などいるわけがないのだが。

「なんのことだ？」

「愛のことだよ、まだ思い続けているのか？てかさっきのを見た限りじゃあそうなんだろうな」

大介はそれにはしばらく間をおいて、

「当たり前だ、俺にもそれしかないんでな」

「護るハズだったものが自分と真逆の道に行ってもか？……いや、答えは当たり前だ、だな」

「ああもちろんだ、もう彼奴も誰かを守れる人間になったという事さ、いいことだろ」

大介はおもむろに立ち上がる。

「誰か案内人が欲しいんだが……さすがに少し変わっているらしいからな、いい歳して迷子にはなりたくない」

「用意しよう、楽しい祭りだ、楽しんでくれ！」

大介は小屋を一人で出ていった。

一閃は携帯を取り出し、

《冥、今暇か？》

《何でございますか？一応祭りの見回りで忙しいんですが……いえ、これは見回りというのか……》

最後の方はゴニョゴニョとした感じで聞こえないかった。

《誰かを見回っているのか?》

《ええ……はい、『霸光』の彰と一緒にいますが……何か用事でございますか?用があるならすぐに向かいますが?》

《いや、誰かと一緒ならそっちを優先しろ……祭り、楽しみよ!どうせデートだろ!》

《え!いえ!ちがつ……!》

一閃は一方的に電話を切り空いてそんな人材を思い浮かべ、そして次なる番号をプッシュする。

《もしもし、こちらは……》

《空いてるだろ?『紡ぎの糸』の大吉の案内役してくれないか?そんな暗いところに引き籠もつてると陰キャラのなっちまうぞ?》

《……まあ空いてるのは確かですけど……なんかむかつく、ハイハイ回りますよ!回ればいいんでしょう!》

《ありがとうな、京くらいしか頼めるヤツが思い浮かばなかったんだ、よろしく頼む、すぐに正門前だ》

《りょーかい!りょーかい!やればいいんでしょ!》

《よしっ!切るぞ》

一閃が電話を切ろうとしたところで、向こうから、



《ちょ！いつせつ！待ちなさい！》

《どうしたんだ？》

《電話終わりのキス》

《……………はあ、

じゃあ切るぞ》

一閃は電話にキスして通話を切り、携帯をポケットにしまった。

旧立帝國高校の年に一度の最大文化行事、テオヤオムクイ今この辺り一帯を取り巻いている。

このテオヤオムクイは『悪魔の正義』や『紡ぎの糸』を中心とする多くの世界組織からいろんな人たちが来ることまで有名だ。

この祭りは表向きには確かに、国際交流に最適で『紡ぎの糸』としても重要な行事だ。故に周りを見るだけで『紡ぎの糸』の名だたる構成員を見る事が出来る。

だが自由すぎる故の悪点もある、ひとたび裏を見ると、そこは泥沼の底とも言える。

出入りが完璧に自由で世界組織がなかなか攻め込めない地域でもあるからだ。

「そこで役に立つのが我ら『闇の影』です、意義は？」

誰も何も言わない、それはこの組織にとっては何よりも肯定の意。

「さりげなく、客を護るのよ、じゃあ散って」

昴はそれだけ言って、表通りに出た。その顔には少しやつれた様子が見える。

「お疲れさん」

不意に後ろから声をかけられ、昴はすぐに後ろを向く。

「別に背後を取った訳じゃないぞ、ただちょっと一緒に祭りを見ないかなと思ってな、大丈夫だ聞かなかったから」

翔汰は壁にもたれて、カンジューズを昴に差し出していた。

昴はそれを受け取って、飲む。

「翔汰の飲みかけなら良かったのに……」

昴は気付いていないようだがこのカンジューズをあけていない。

「そうか？良かったなそれ飲みかけだぞ、遠回しに言えば間接キスだ」

翔汰は昴の手を取り飛び上がり、建物の屋根に昇った。

「久しぶりに、俺の『才気』を解放する、昴は特等席で見ている」

昴はゆっくりと頷くと、翔汰は己の『才気』『暴風』に力を込める。

普段は一閃の制止で本気を出すことは許されていないが、今回はサプライズをするようだ。それを昴には特等席で見せてくれるようだ。

「行くぜ！」

翔汰のかけ声と共に、雲の動きは変わる。

翔汰の頭上を中心に渦巻くような雲に変わり、真ん中にポツカリとあなが空いている。

そこから竜巻状に具現化した風が降りてくる。

翔汰はさらに力を込めてその風を制御し、頭上で球体に固定し、そこにさらに新たな風を加えていく。

すると、風の球体が小さく光り始める。

風が電子単位で分解し、それが何らかの反応で光を放っている。

翔汰はその状態を長時間維持し続け、そして、

「最後だ、これは中心にいる昴、お前だけに分かるものだ！行くぞ  
！！！」

ハッ、と声を上げて翔汰は風の球体を分散させる。

その後完全に風が元に戻るくらいに、昴は幻想的な光景を目にする。

「キレイ……………!」

光っているものだけが残り昴を中心に広がるような無限の星のような光の世界。

それは一瞬だけだが、決して忘れることが出来るようなモノでは無かった。

「どうだった？」

「いい……………すごく良かった、また今度許可が出ても私を呼んでくれる?」

昴は立ち上がり、翔汰に背を向ける。

その背中に翔汰の厚い胸板がつき、腕が昴を包む。

「当たり前だろ……………お前以外の誰に見せるっていうんだよ」

そこで、昴の意識はとんだ。

「え……………そうか、そうだったな、こいつのはこうだった」

昴の『才気』はレッドラインの『夜陰』は自分の姿を闇や陰にとけ込ませることが出来るものだ。

だが『才気』の闇系統に属するこれは、能力に見合った反動がつく。昴の場合、それは睡眠時間であり、これは『夜陰』を行使した代償だ。

翔汰は昴を担ぎ、『法度』に戻っていった。

「どうなの、一閃は心開いてくれた？」

「いえ、しかし会ったときよりよりは確実に良くなってますよ愛様」

祭りで一番人気の屋台に並びながら、愛と麗香は無駄話をしている。

「愛でいいわよ、さっきも言った気がするけど、彼は、一閃はよっぽどな闇を心に持つてるわね」

「闇……ですか？」

二人は少しずつ進む行列に着いていきながら、

「ええ、しかもかなり深い所に……過去に嫌なことがあったのか、何か重大な悩み事のどちらかを……」

「はぁ……まあその件は今度一閃様に問いただしてみます、今は祭りを楽しんでね、愛」

「もちろん！そのつもり！！」

麗香と愛はようやく屋台に入ることができた。

中では椅子が数席あるだけの質素なものだった。

「なるほどこれなら進みが遅い理由に納得がいく……もつと席を多くすればいいのに」

中から一人の男が出てきた。

見覚えがある、確か『霸光』の柿崎 彰、戦闘意外に関しては水鏡が一閃の言うことしか聞かない変わり者だ。

「いらっしやい！何にしますか？」

麗香は無難に普通のラーメンを注文する。

「ラーメン一丁！」

愛はしばらくメニューと睨めっこして、お奨め特大激辛ラーメンを注文した。

「良いのかい？食べきれなきゃ店の手伝い……もとい、恥ずかしい格好で客引きだぜ？」

「恥ずか……い、いいわよ！この『悪魔の正義』を纏める愛がこんなところでまけを認めるわけにはいかない！やってやるわ！！」

愛は挑戦的な目で彰を真っ向から直視する。

彰はニヤツと笑って厨房に声をかける、こっぴつ風に、

「死者一人！辛さはマックスだ！！」

そう言った後彰も厨房に戻っていく。

しばらくして水が運ばれてきた、一人の可愛い格好をしたウェイトレスによって、

「お水です！おまちどうさま！」

「……………冥？あなた……………」

冥は客が麗香と気付くと、慌てて厨房に戻っていった。

直後聞こえてくる怒声、そしてシヨボシヨボと冥が戻ってきた。

「ようこそ！お、お越しくださってありがとうございます！おいしいラーメン食べてげ、元気になっちゃってくく、くださいね！」

それだけ言つと顔を真っ赤にして、厨房に戻っていった、直後聞こえる頬をぶつような音。

また、しばらくして顔を腫らした彰が厨房から出てきた、その手には二つの大きさの違う器があった。

「へい、おまち！塩ラーメンと……………」

麗香の前に小さい方のラーメンを置く、

「特大激辛ラーメン、地獄ラーメンだ！」

二周りもデカイ器にもりもりに乗せられた具と一部分だけ見せつけ

るようにポツカリと間場所から覗く、凶悪な赤色。

「そちらのラーメンは一人で食べてるよ！見張りもつけるからな！」

「わ、分かったわよ！一人で食べるんでしょ！一人で！一人……  
で、ひ……」

愛は目の前に置かれた地獄ラーメンの迫力に圧倒される。

彰は厨房にいる冥を呼び、愛を見張っておくように言って、厨房に戻っていった。

「大丈夫ですか？」

「え！え、ええ！大丈夫よこのくらい！」

食べ物に対して愛は震える手を押さえていた。

唐突に冥が思い出したように言う。

「これは準備段階でのお礼として手伝ってるんですが……罰の服何ですが、アレは死にたいくらい恥ずかしいですよ」

愛は意を決して箸で具を掴み、口に持っていく。

「ん？案外いけるじゃん！これなら全部食べ……」

「あの性格は少し悪いですから、そろそろきますよ」

「え？何……が……」

「……！！！！！！」





「大介でいい、こちらこそよろしくだ」

二人は校門から、中に入っていく。

「この祭りには初めてかしら？」

「いや、何回か来たことがあるんだが……すっかり忘れてしまった」

京はおおかたの大きな屋台を回ることにした。

「じゃあ一番人気のラーメン屋なんてどうかしら？並ぶのに苦労しますが結構有名のくせにこの日しかあかないんですよ、一食の価値あります」

「そうだな、そう言えば昼はまだだった、どのくらいかかりそうだし？」

「場所はすぐそこですよ、ただ並ぶのに時間かかるだけです……  
・ほら見えてきました」

まっすぐ前に、行列の出来た屋台があった、しかも、

「この店のラーメンをたべ・て！」

そう甘い声で恥ずかしい格好をしながら客引きをする露出狂ともとれるような服装の女性がいた。

大介は固まる……何せその露出狂が愛だと分かったからだ。

「あの……行きたいですか？」

京は遠慮気味に大介に来た。

大介は、

「止めておく、他の場所を教えてください」

そう言ってその場から足ハヤに立ち去っていった。

：一閃の秘め事1（前書き）

やっとパソコンが解放されました！

前は作り置きしていたものをPSPであげたのですよ  
できてるか少し不安でしたが・・・。

でわ今回、楽しんでください^^

## ：一閃の秘め事1

校舎の屋上、立ち入り禁止の札が貼られて、誰も立ち入らない場所、そこに一閃が立っていた。

その顔には少しだけだが悲痛なものがあつた。

「此処にはあんまり来たくないんだがな……命日だけは来てやらないとな、ずっと一人は寂しいからな」

屋上の校舎の端っこに一つポツンと柩が置かれていた。蓋を開けると、二人分の死体が入っていた。いや二人とも生きているようだが、起きる気配はない。

一人はかつて愛した人、もう一人は……自分と同じ顔を持つ人間が眠っていた。

「それが、力の大半を力を封じ込めた化身かしら？」

いつの間にか校舎の屋上に落ちないようにつけられたフェンスの上に七人の明らかに強者と分かる奴らがいた。

その内の一人は白銀の髪に白銀の肌、淡いブルーの目を持った女、華鈴だ。今のいままでどこにいたのか、ところどころ縄で絞められた後がある。

また一人は、金髪で少し焦げた肌で、金色の瞳を持つ女、鋭美だ。見た目すこし肌がつやつやしている。

周りにいる奴らが全て一閃と関わり深い奴らだった。

「どうした？この死体を奪いにでも来たのか？これがどのような意味を持つかも知らずに……な」

一閃は凶暴で凶悪な目を華鈴に向ける。

華鈴は何もないように振る舞っているが、手は微かに震えていた。それをもう一方の手で押さええている。

七人の内で一番凶悪な気配を漂わせている男が、聞きようによっては機械的に聞こえる声で、

「かつての『阿修羅』も落ちたものだな、女に惑わされるからだ」

「ああ？死にてえのか？カス！」

一閃は語気を荒げる。

華鈴はその男を手で制して、

「黙っていなさい『道敷大神』、だからお前は連れて来たくなかったのよ、余計な事になるからね」

「了解、『セクメト』の仰せのままに……」

そう言ってまた他の六人と同じように直立不動の姿勢を取る。

「それで？ブラックラインの方々が俺に何のようだ？鋭美の話なら断っていたはずだが？それとも武力行使にでるとでもいうのか？」

「確認よ、もう一度だけ聞いておこうかしらと思って、あなたほどの力を野放しにするのは惜しいことだし、それに私達の目的の邪魔をしないともいいきれませんからね」

華鈴は近づいて一閃に手をさしのべるが、その手をはね除けられた。

「華鈴、今の俺はブラックじゃないんだ、入ったところで意味ないんだが？それともそれほど人員が足りないともいえるのか？」

「『劫火』の『一閃』でも十分強いですわ、自分を過小評価するのはよくないですわよ」

一閃は華鈴に背を向け、柩に向かい手を合わせる。

「去ってくれ、俺は何があろうとも此処を離れない」

一閃はしばらく祈った後、立ち上がり周りを見る、そこにはもう七人の姿は無かった。来た時もそうだが、消える時すらも気配は微塵もない。

流石だな……………。

一閃は柩に蓋をして、もう一度祈る。

「……………出てきて良いぞ、いるんだろ、冥？」

「はっ、申し訳ございません覗き見るようなことをしてしまい」

貯水タンクの陰から現れた冥は深々と頭を下げる。

「別にいいさ、あいつを除けば『忠誠』の一番である冥だから逆に良かった」

「また来てらしたんですか……」

「まあ一年に一度だからな、来ないとあいつが悲しむ」

一閃は屋上のフェンスの向こうに立つ。

「忘れられないんだ、彼奴の顔も！声も！！俺は……俺は！！……おかしいのか……？」

冥は端でうずくまって叫んでいる一閃の隣に立ち、

「おかしくなんかないと思います、一閃様さえ堂々とすればそれは可笑しくない！」

「……ありがとう、冥、俺明日から二日間チヨット外に出るから、見張り頼めるか？」

冥は一閃の隣で片膝をつき、

「我が主の命とあらば……喜んで」

一閃は立ち上がるベクトルをそのまま飛ぶ動作に注ぎ込む。



戻ってきた男は自らの轟いた異名を捨てて、その地で新たな功績を  
挙げ、『蟻の巢』より『不動明王』の称号を授かるのであ

：一閃の秘め事1（後書き）

ちよつと一閃の過去が明らかになりました。  
そしてなんか重要そうな位置に冥がいます・・・。

作者としては予想外ですw

作っておきながら・・・ですがw

外章2：またしてもキャラ紹介（前書き）

いや〜キリが良さそうだったのでw

でもあんまり詳しくかかれてないな〓x〓；

あんまり濃くないので飛ばして結構ですよ〜；

（残った方へ）ではどうぞぞ！

## 外章2：またしてもキャラ紹介

一閃「紹介場所をもつけたぞ、正直めんどくさいな……」

華鈴「どうしたのよ、一閃？」

一閃「お　いいところに来たな！　ちょっとこここの番頼まれてくれ」

華鈴「え、え、ええ？　何？　どういうこと？」

一閃「ここにいりゃあ誰か来るから適当に合わせてくれ、じゃあな」

一閃が消える。

華鈴「ちょwはやすぎw」

麗香「あれ？　どなた様？」

華鈴「一閃の代わり、おもしろそうだから引き受けちゃった　よろしくね」

冥「む……あなたは!?!」

華鈴「あら？　会ったことありましたっけ？　(あんまり話をややくしくないでよ、めんどくさいでしょ?)」

冥「あ……ああ、すいません、見間違いました」

麗香「冥が見間違えるなんて　いいもの見れちゃった」

華鈴「まあこんなことやっても始まらないし、紹介を始めようか」

冥「じゃああなたから紹介おねがいします」

名前：衛宮　華鈴

ヨミ：エミヤ　カレイ

性別：

才気：そろそろ明らかになるよ

ライン：ブラック

備考1：『八皇』のボス。

華鈴「今はこれくらいかなあ」

冥「名前と性別だけしかわからないじゃない！」

華鈴「だつて〜話せない事おおいんだもん！」

麗香「まあいいじゃないの」

冥「じゃあ次は〜・・・」

名前：霧崎 一閃（過去ver）

ヨミ：キリサキ イッセン

性別：

才気：??（その力の一端として『劫火』、ただし『劫火』のラインはかなり下のランク）

ライン：ブラック

備考1：『八皇』の一員にして『八皇』に終止符を打った男。

備考2：謎が多い。最多で同じ時間に三個所での出没が確認されたことがある。

華鈴「そつなのよね〜…………どうなってるのかしらね？」

麗香「まあわからないし次いつちやお！」

名前：大野 鋭美

ヨミ：オオノ エイミ

性別：

才気：??（???)

ライン：ブラック

備考1：『八皇』の一員。

備考2：一閃のことが大好きで、別れた現在でも好きなまま。

華鈴「まさかこんなことになってるなんてね〜」

麗香「なんなのよ、こいつ！私の一閃にいいいいい〜！！！」

冥「麗香様、おちついてください！」

華鈴「あはは じゃあ後一人くらいいつときますか〜」

名前：柿崎 彰

ヨミ：カキザキ アキラ

性別：

才気：海原（あたり一面に海を創製する）

ランク：ブルーMAX

備考1：『覇光』の副隊長。部下の信頼度は隊長、水鏡を凌駕する。ただしめんどくさいので指揮をとることなどほとんどない。

備考2：一閃、水鏡以外のメンバーからの命令はノリで答える。

備考3：基本的にノリで生活している。

備考4：少しだけ冥のこと

冥「きゃああ

ああああああ！！！！」

麗香「あらあら 冥ちゃんも年頃ね〜」

華鈴「恥ずかしがる事はない、年頃の少女なのだ……己は大切にな」

二人して冥の肩に手を置き神妙なまなざしを冥に向ける。

冥「って、何これでいっか〜、的な締めを持って行ってるんですか  
あああああ！！！！」





外章2：またしてもキャラ紹介（後書き）

ちよゝ短いw

すいませんねゝw

第五章：『海』の中（前書き）

初めての方は初めまして！

読んでくださっている方は、こんばんわ！または、お久しぶり！  
楽しく読んでいただければ光栄です^^

## 第五章：『海』の中

一大行事、テオヤオムクイが終わり、一息つく次の日の朝早くに『地獄の使者』の範囲ギリギリに二人の陰がある。

「上手くいったら明日には帰るが、そんなに早いと思うな、それよりは遅くなると思っていてくれ」

「かしこまりました、一閃様」

一人は冥、今は深くお辞儀をしている。

もう一人は一閃だ。

「じゃあ行く、戻ってくるまで頼んだぞ」

「お任せください」

一閃は久しぶりに『地獄の使者』の縄張りの外に出た。

向かうは来たの大地の奥、濃霧が周りを包む大森林にいる大親友の『海』。

今、どうしてもそいつに会いたくなってしまったのだ、だから一閃は行くことにした。

だが、一閃によって存在すると言っても良い『地獄の使者』を離れることは誰もが許すことを出来ない。

故に密かに行くことにしたのだ。

まずは全速力で境界線を離れていく、誰かに見られるという可能性をなくすために。

だが、そんな考えは甘かったようだ。

「一閃、何処にお行きになるの？」

妙に女っぽい声が後ろから迫ってくる、一閃は振り向かない、ただ自分の愚かさを恥じる、こいつはこいついうヤツなんだ、と。

立ち止まる、が振り向かない。

「瞬夜、何で付いてきた？」

「嫌だわ、一閃様がお行きになるのなら私も行きます」

瞬夜も立ち止まったようで、声は大きくなならない。

「すぐに戻るさ、だからお前は帰ってくれないか？」

「……理由をお聞かせください、納得できたならば帰りますよ、ただ何にもなしに行かれると少々心配なの」

「理由は言えないな、それくらい理由だと思ってくれ、それにお前までいなくなったら俺は何処に帰るか分からなくなるかもしれない」

「そうですか……ならばこれはお願いです、早めに帰ってきて

てくださいね」

一閃はまた走り出す、もう瞬夜がおってくる気配はない。

一閃を見送った瞬夜は反対方向、『地獄の使者』のエリアに向けて帰還する。

「もうここまでこれたか……今日はこの辺にしよう、明日何かあったら大変だからな」

一閃はその『海』がいる森の一步手前の宿屋で一夜を過ごすことにした。

その夜、一閃はなかなか寝付けず、仕方なく混浴だが今の時間なら誰もいないと思い風呂に行くことにした。

「やはり風呂には入らなくてはな」

浴槽は外に出て、露天風呂になっていた。

一閃は湯船のお湯をすくい上げ、体にかけて後、湯船に入り湯に浸かった。

「良い湯だな、疲れが落ちる……」

一閃は夜空を見上げる、いくつもの星が見えて幻想的な空だった。

「冥は上手いことやってるかな？俺がこんなトコまで来ると分かるらと麗香のヤツがうるさいだろうな……」

「じゃー来なかったらやかつたじゃん、何で来たの？」

不意に真横から声をかけられた。

「!？」

一閃は横に顔を向けると、人一人分の間を空けて裸の女性が同じように空を見上げていた。

「どうかしたの？」

「いえ、別になんでもありませんよ、ただまさかこんな時間に入ってくる人がいるなんて、とビックリしてるだけです」

「それはお互い様です、あなたこそこんな時間に」

横にいる女性は尚もうえを向いて、星を見ているようだった。

一閃もなんとなく諦めたように、上を見上げた。

「キレイだね、星ってなんであんなにキレイなんだろ……」

「さあ、星に聞けば分かるんじゃないですか？」

一閃は何となく面倒だったので、適当に答える。

「君今、面倒だな、って思ったでしょ！そういうのは嫌われるんですよ！」

その答えが気に入らなかったのか、その女性はつつかってくる。

一閃はこれまたメンドくさそうに、

「ハイハイ、じゃあなんて言えばよかったですか？」

「また……まあいいわ、こんな時は……って男が考えなさいよ！」

そう言ってお湯をかけてくる。

「ああ……あなたの方がキレイですよ（棒読み）」

「え！やっぱり、やっぱり私の方があんな月よりキレイなのね！」

「それはそれは、もうどんなモノにも変えられないくらいですよ（棒読み）」

「まあお上手ね！」

「あなたが相手ならあの月でさえ引き立て役に過ぎません（棒読み）」

「ありがとう、嬉しいわ！」

女性はそう言って一閃に飛びかかってきた。

「な！ちよ！」

一閃はなす術無く湯の中に顔を埋めるハメになる、それも柔らかく大きな物体と共に。

しかもそれがはずそうとしても外せないくらいの馬鹿力だった。

しばらくもがいていたが『才気』を使うわけにもいなくて、そのまま気を失ってしまった。

目が覚めると辺りはすっかり明るくなって、しかも寝ていたのは見知らぬ部屋で、もっとも重要なのは、

「やっと目が覚めたね、昨日は心配しちゃったよ、何せ気絶してたんだから」

目の前、息がかかる位の位置にあの女性が一緒に寝ていたからである。

しかもおでこを引っ付けている。

「うん、熱は下がったみたいだね」

「何してるんだ……お前？」



一閃は寝ぼけている頭でそれだけを振り絞る。

「看病だよ、一応私にもアナタを気絶させてしまった過失があるからね、でもお礼は言って欲しいな」

女性は、布団からはい出て、椅子に座る。

机の上にはもうご飯が並べられていた。

「座って、一人で食べるよりは二人で食べた方が楽しいよね」

「……ああ、そうだな」

一閃はゆっくりと立ち上がり女性と反対側の席につく。

「アナタの名前は？何時までもアナタって言うわけにもいかないよ  
名乗る、されはある意味重要な意味がともなうと思うだろうが、こ  
こはあくまでも戦場以外の場所、なのでかのルールは適用されない。

「一閃だ、詳しくは言えないが……まあこれだけあれば名前  
を呼ぶのに差し支えないだろう」

「そうだね、一閃、私は紅葉くればといいます」

紅葉は握手を求めるように片手を一閃に差し出す、一閃はそれを握  
り返した。

その手が女ののものにしては違和感があるほど……男の手より

もはるかに堅い手で驚いた。

紅葉は予想通りといった顔をして一閃を見ている。

「相当な修練の賜物だな、君は一体誰だ？」

「紅葉、それ以上でも以下でもありませんよ」

紅葉は意地悪い物言いをして、さめてしまつからと、机の上の食事に手をつけ始めた。

一閃も勧められて一応食事をとる。

「これから何か用事でもあるのですか？」

「おう、大事な用事があるんだが、こつ見えても意外に時間に余裕が無いもんでな、これが終わつたらすぐに発つ」

一閃はある程度食べ終えたら、立ち上がって軽くストレッチを始める。

紅葉はそれをじっくりと見て、

「いい筋肉の付き方してますね、それなりの強さなんでしょうか？ 私に言えないくらい」

「……ふつ、初めてのヤツに此処まで読まれたのは久しぶりだ、お前も大したヤツだと思うぜ」

ストレッチしながら一閃も紅葉を探る、かなり堅いガードがあるが・

・・・、

「止めておこう、あんまり探るのは性に合わないし・・・勘が鋭そうだ」

「あらやだ、そんな女に見えるかしら？」

紅葉は笑いながら言う、それにつられて一閃も笑う。

ストレッチを終えた一閃はシャワーを借りることにして、部屋に付いている風呂に向かった。

汗を流すときは一番気持ちよく感じる・・・。

「入るよ」

突然そう言って返事も待たずに紅葉が入ってくる。

一閃は慌てて出ようとしたが紅葉はそれを防いで止まっているように言う。

「大丈夫、怪しいことなんかしないよ、ただちょっとマッサージをしようと思ってね、ホラ、力抜いて・・・」

紅葉は一閃の全身を丹念にもみほぐし始める、

「ここ・・・疲労が溜まってね、一体何してたの？」

「・・・」

「閃はしゃべらない、いや喋れない。」

「少しでもしゃべってしまつと多分軽い喘ぐ声が漏れそうだったからである、それほど紅葉のマッサージは気持ちよかつた。」

「しばらくして紅葉は、」

「終了です、気持ちよかつた？」

「ああ、ありがとう、全身の疲労やらがとれた感じだ」

「フッフ、それはよかつた」

「紅葉は満足したかのように風呂場から出ていった。」

「閃は少しシャワーを浴びた後風呂場から離れていった。」

「もう行つちやうのかい？」

「ああ一刻も早く用事を済ませて戻らないといけない」

「閃は身支度を整えて、宿屋の玄関口にいた。」

「そうか、別れは悲しいな、また会えるかな？」

「……………帰りもこの宿を利用しようか？」

一閃がそう言うと紅葉は嬉しそうに顔をほころばせる。

「本当！？じゃあここの宿で、絶対だよ！」

「ああ」

短く返して一閃は宿屋から離れていった。

向かうはもう目の前まで来ている大森林の入り口の奥にいる『海』。

この大森林は奥にいる奴らのせいで特殊な結界が発生している、故に何にもなしにここに入るとは困難を極める。

だが、

「俺の『才気』を少し解放すればこんなもの……………」

一閃の頭上に炎の球ができあがった。

「いけ

」！

一閃の号令と共にその火球は一気にその大森林を貫いた。

その通った後の道を通り一閃は奥に向かう。

「待て、我らの森にいかよくなる用か！事と次第によっては切るぞ！」

炎の通った後の道に一人の少年が立っていた。

一閃はしばらくその子供を眺める、

「ん、なんだよ！さっさと見え！こっちは忙しいんだぞ！」

いかにも飛びかかりそうな少年を影が覆う。

「スマンな、息子にまだお前のことを話して無いもんでな」

「ああ、やっぱりあんたの子供か、どうりでにてると思った、まさかあの餓鬼がもうこんな成長してるとわな、大我」

少年は何が分からず目を白黒させている。

その少年を大我は持ち上げて自分の肩に乗せて、森の奥に向かっていく。

「あいつに会いに来たんだろ、こっちだ」

一閃は大我の後に付いていく。

森のおくには大きな湖が広がっていて、その中心には離れ島があり、その上には一件の家が立っていた。

中から人が出てくる。

「懐かしい匂いがすると思っていたらやはりアナタですか、一閃」

「少し相談事があったな、そのために来たんだ、迷惑だったか、紗」

代  
「

「いえいえ、それでは私にも外の話をお聞かせしてくれますか？」

「まかせろ」

一閃はその小屋までジャンプする。

「大我！楚良と遊んであげてね！」

「任せとけ！」

大我は楚良と共に森に戻っていった。

「どうぞ、入って」

紗代は一閃を小屋の中に招く。

第五章：『海』の中（後書き）

話が支離滅裂になってきたような・・・

とりあえず完結をめざしていききたいです！w



小屋の中は案外すつきりとしていた、というよりほとんど何もなかった。

紗代は一閃に椅子を勧め、反対側のの椅子に自分が座る。

一閃も椅子に座る。

「それで、相談事って何かしら？私がワクワクするようなことかしら？」

紗代は楽しそうに身を乗り出してきた。

「さあ、それは分からんな、『八皇』について聞きに来た、それも現『八皇』について、だ」

「あら、懐かしいね、『八皇』か……………どうして知りたいの？」

「この前あった祭りの途中に元『八皇』の連中がきて、俺を誘ってきた」

紗代は驚き、腕を組んで考える。

「そうね……………私は『八皇』が復活したことしか聞いてない、けど……………だいたいの予測はつくわ」

「へえ……………っで、その予測ってのは？」

一閃は興味しんしんに身を乗り出す。

紗代は少し悩んで、

「あくまでも推測の域なんだけどね、それでいいなら」

「言ってくれ、合ってなくても参考にはなる、あいつらが何をしたいのか、がな」

一閃も神妙な顔に変わり、紗代がしゃべり始める。

「多分前の目標と変わらない、もしくはそれ以上のことをしようとしているね、少なくとも止めることは不可能に近いわね」

紗代はチラッと一閃の方を向く。

「ダメだ今の俺じゃあやつらを止めるなんて不可能だ、もしかしたら俺の今の状態を確かめに来たのかもな」

「そうかもしれないわね、だとしたらもう行動を始めるかもしれないわね、天敵『阿修羅』が動けないと分かったんだから」

『阿修羅』、かつて世界を恐怖のどん底に突き落とした異名であり、一閃のもう一つの異名だ。

一閃は眉間にしわをを寄せて嫌な顔をする。

「今の俺は『阿修羅』じゃない、ただの『地獄の使者』の裏のボスだ」

紗代は心持ち声を低くして、

「そうね、ごめんなさい、でもね一閃、忘れないでアナタが奪った何億という人の命を、願いを、アナタには背負う義務がある」

「  
.....  
.....ああ、そのつもりだ」

それを聞いて場の空気が和やかなモノになる。

紗代は立ち上がり、夕食の準備を始める。

「今日は泊まっていくんでしょ？」

「そうだな.....いや、今日は飯が終わったら帰るよ」

「そう、じゃあ出来るまで大我と楚良と遊んで待っていてくれる、すぐに出来るわ」

一閃は、おう、っと一言言って小屋を出ていく、背後では楽しそうに料理を作っている紗代をおいて。

集中、森の隅々まで自分の気を張り巡らせ、二人の位置を探り出す。

「.....いた」

一閃は二人がいる場所に向かって走りはじめた。

「父上！覚悟！」

楚良は渾身の力を込めて大我に殴りかかるが、あまりにも攻撃を重視したパンチであったため、動きが遅く大我は軽くそれを避ける。

空を切りそのまま地を叩いたパンチは大地を大きく砕き、大きく揺らした。

「ハハハ！そんな攻撃じゃ当たらないぞ！」

離れた所に移動した大我は快活に笑いとばした。

「父上、油断はいけませんよ！」

楚良は思いつきり手を前に突く。

すると何故か大我は吹っ飛んだ。

「なに！？」

「ハハハハハ！父上！油断だね！僕は毎日本を読んで勉強してるんだ！これは一閃って『阿修羅』と呼ばれた男の技だよ！」

大我は地面にキレイに着地する。

「なるほど、通りでみたこと……ん？」

大我は緊迫した空気を消し去り、家のある方向に顔を向ける。

楚良は不思議そうに大我をみていた。

「父上、どうしたんですか？」

「ハハハ！楚良、喜べ！間近で本物が見れるぞー！」

突如楚良の腹に重たい衝撃がきて、吹っ飛ぶ。

そして、大我の隣にあの男が立っていた。

「何してるんだ？」

「ちょうどいいや、楚良に練習つけてあげて、倒れるつもりやってもかまわない」

そんな話を遠くから聞いていた楚良は、

「ちょっと！何勝手に……」

一閃は楚良がしゃべっているのに割り込んで、

「俺は一閃って言うんだ『不動明王』ともいわれる、『才気』は『劫火』だ」

「名乗っちゃった！父上！ちゃんと止めてくださいよー！」

「分かってるよ、だから早く名乗れ……」

「俺は楚良！『才気』は『大地』、レッドラインの5だ！！」

そう名乗った後、大我は付け足すように言う。

「そうそう、こいつは俺より強いからな！」

一閃の姿が消える、そして楚良の背後に一瞬で現れた。

「よろしくね楚良」

次に来るのは鉛が当たったかそれ以上の衝撃、一閃のパンチが楚良の脇腹を襲った衝撃だ。

楚良はそのまま吹っ飛ぶ。

が、空中でバランスを取り戻して、拳を振りかぶる。

「くらえ！！」

そのまま拳を前に突き出し衝撃破を一閃にとぼすが、軽々とそれを避ける一閃。

「その技は……そうか、なら少しレベルをあげてみますか」

一閃は嬉しそうに笑う、そしてまた消える。

そして姿が見える前に来る衝撃。

「なに！？一体どこから！？」

一閃は消えた場所から少しも動いてはいな。かった、ただ踏みしめている地面が何らかの衝撃でへこんでしまっている。

「無空拳だ、俺が開発した、並の……いや、普通の人間の筋力では絶対に出せない間接攻撃だ……何故使えるんだ？」

一閃はまた楚良の後ろに回り込む。

「二度目はない!!」

楚良は素早く反応して一閃から離れるようにめいっばい飛び退いた。

「甘い、注意力がたりない、だから気付かない……俺の腕は二本だけ？」

突き出されている腕と逆方向の腕が突き出される。

飛び退いた楚良は避けることが出来ずに、大きく飛距離を伸ばすハメになる。

そしてそのままのスピードのまま地面を二、三回転がって立ち上がる。

「怒った!!本気の本気だ!!覚悟しろ!!」

楚良は地面を力一杯踏みつける。

同時に一閃の下から岩が突き上げてくる。

「なるほどそう来るか……オモシロい」

一閃はそれを一振りで破壊して、楚良の方に向く。

「もう少しレベルあげるぜ？」

そう言って一閃が動き出そうとした瞬間二人の間に大我が割り込んだ。

「はい、しゅ〜りよ〜！ご飯出来たってさ、帰るよ！」

「はい、お疲れさま！」

紗代はそれぞれの前に料理を運んでくる、それはとても豪華なものだった。

全て運び終えて、紗代は席に着く。

「じゃあ、」「」「いただきま〜す！」「」「」

楽しいご飯の時間だ。

「一閃、今日は泊まりがけなのか？」

「いや、今日は帰るよ、ちょっとあまり大事じゃないんだけど用事があるから」



一閃は思い出したかのように、心持ちご飯を食べる速度をあげる。

「っで？楚良はどうだった？強かった？」

紗代は興味津々に乗り出してきた。

一閃は少し考えてから、

「昔の俺と戦っていたら一回の攻撃で死んでた………くらいの強さかな………」

「そう、かなり強いつてことね、まあ私達の子供だからね」

紗代は嬉しそうに楚良の頭を撫でるが、楚良は納得していないようだ。

「それくらい保って見せるさ！こんなヤツなんかに負けるものか！」

「あら？強気ね楚良、でもね多分それすらも保つか分からないよ、一閃の本気は強すぎる」

紗代があやすように言っているが、楚良はいつこつに納得しよつとしない。

「10………なんの数字分かるか？」

一閃はおもむろに言い出した。

楚良は首をひねり、紗代と大我は思い出したように頷く。

「古いものを持ち出してくるな……今でも適用されるかどうか分からないわよ」

「まあいいじゃねえか、こついつ身近な題材のほつが理解しやすいだろつしさ」

一閃は考えている最中の楚良の方に向く。

「これは、俺の覚醒と紗代の本気が戦つた場合においてどちらが勝つかと考えた、『正義』の完全予知で行つた結果で……」

「な……何の数字なんだよ？」

一閃は口の端を歪めて、

「10……9発の攻撃でブラックラインである紗代が負けて10発目でトドメがさされるという、最高の持ち時間だ」

「母上が！？10発だと！！」

楚良は驚いて目の前の男を凝視する、それから何かを求めて視線を紗代に移す。

紗代は何も言わずにただその視線を確認して頷く、そして横で大我も頷いた。

楚良が唾を飲み込むと同時に、

「まあ、今の俺にはそんな力はないんだがな……過去の話さ、俺

が荒れてた時のな……」

一閃はまた静かに食事を再開する、その顔はいつもより少し悲しそうな顔だった。

楚良も紗代も静かに続きを食べ始める。

そんな中空気の読めないやつが一人いた。

「ところで、麗香のやつは元気なのか？いつも一緒にきてたる？」

大我は場の空気を省みず言う……言ってしまった。

「そういえば麗香の姿が見えないわね、どうかしたのかしら？夫婦喧嘩？」

三人で囲む一角で紗代は不思議そうに一閃に聞く。

「そんなんじゃないよ！だから置いてきたんだ、あいつの指揮があれば大抵の軍は打ち返せるからな、俺にはあそこしかないんだ」

「そうね」

紗代は簡単にはなしをうち切って、今度はいやらしく問いただそうとする。

「っで？今夜はどなたがお相手なのかしら？そのつもりなんですよ？」

一閃は紗代から離れるように、椅子をずらす、どうもこつこついう彼女は苦手な様だ。

後を追うようにして、紗代はズイズイと一閃に迫ってくる。

「どつなの？どつなの？」

明らかに楽しんでいる、

「う……いや……なんというか……煩い！」

つと、横から傍観していたもう一人が割り込んできた。

「えつと……母上とお前の関係はどういったものなんだ？」

楚良は少し遠慮気味に、でも威勢は失わずに一閃に言い放つ。

二人は同時に楚良のほうに振り向いて真顔で答える。

「「え？恋人」」

「恋！？え？え？でも？母上には……！」

「そうよ、私は結局大我を選んだのよ、あの時は悩んでいたけどね、今では彼で正解だとおもってるわ」

紗代は心からの笑顔を息子に向ける。

それを見た一閃は少し苦い顔をして、

「それはそれは悲しいな、これでも上位の扱いしていたつもりだったんだけどな」

「フフフ、そんな何十人の一人じゃ満足出来ないわ」

見つめ合う二人、そしてこれまた遠慮気味に楚良がいう。

「後……そろそろ降ろさないと父上が……」

「あ……！忘れてた」

二人は宙吊りにした大我を、躊躇い無くドスンと降ろした。

「いてて……！もう少し易しく降ろしてくれよ……！」

「ゴメンネ大我、お願いがあるんだけど、ちょっと楚良と一緒に少しの間散歩してきてくれないかしら？」

紗代は頼むような視線を大我に送る。

大我は何かを理解したかのように頷き、楚良を連れて小屋を出ていった。

「……妙なことには鋭いんだな、彼奴は」

「フフ……それが彼のいいところでもあるのよ、でも今はあ

「あなたの事だけを……」

紗代は机を飛び越えて、一閃に飛びつく。

一閃も拒絶せずにそれを受け止める。

「紗代」

「一閃」

二人は互いに唇を近づけ、そして深く甘く淡いキスをする。

それには、長い年月の間を埋めるような愛が多く詰まっていた。

「じゃ、世話になったな」

「いやいや、たいしたこと無いわよ、いつでも来て良いからね、一閃達なら歓迎するわ」

「おう、何時でも来い、こんなトコに引きこもっているが……やはり外の世界については知っておきたいからな」

一閃は最後に楚良のほうに向き、その頭を無造作に掻き回す。

「なにするんだ!」

「元気でな餓鬼！……いつか本当に俺を倒せる日が来れば良いな、その為に、鍛錬は怠るなよ」

一閃が離すと同時に森の入り口が完全に閉じられた。

もう夜だろうか、辺りは暗く静まりかえっている。

：『海』の中（後書き）

いろんなことに手をつけてなかなか進まないW

出来るだけ頑張るのでよろしく願いします；



：新しい仲間

一閃は森を抜けて、来たときと同じ宿屋に向かった。

入り口を開けてすぐ、ロビーの奥の奥の席に紅葉は座っていた。

一閃に気が付いた紅葉は一直線に一閃の方に向かってきた。

「一閃！重要な用の割には帰ってくるのが早いよね、それとも私の為に早く帰ってきてくれたの？」

いきなり腕にひつついて、多分無意識にその凶暴な胸を押し当ててくる。

一閃は多少嫌な顔をして、腕を強引に振り解こうとするが、紅葉の力が強過ぎてまったく解ける気配が無いので諦めた。

「違う、用は済ませた、大事な用が長いとも限らんだろ、それと離れる」

「ケチなんだね、まあいいけど」

そう言つて、紅葉は一閃を捕まえていた腕をほどいた。

「立ち話も疲れるからね、部屋に来るかい？」

「いや、ここで十分だ」

一閃はロビーの一番奥の席に腰をかける。

紅葉は多少溜息混じりに、

「この乙女の心が読めないとは、君は案外鈍いのかな？」

そう言っつて、一閃の向かいの席に座る。

「紅葉は無所属なのか？」

「それを聞いたところで一閃、君はどうするつもりなんだい？」

「率直にいうとだな、今回此処に戻ってくるって言った理由は、紅葉、君を勧誘するためさ」

「あゝ・・・そういことね・・・・・・答えは一閃次第つてことになるかもね」

紅葉は足を組み、挑戦的な目を一閃に向ける。

「さて質問だよ、受ける？受けない？」

一閃は即答だった。

「受けない理由があるか、受けるに決まっている！」

紅葉は笑い、手を差し出す、

「簡単な事です、一度でも悩んだら私はその申し出を受けなかった」

一閃はその手をしっかりと握った。

つと、途端に紅葉が甘えた声でちやかすように言う。

「あああん痛いわ！優しくしてえ」

「……………俺はお前を殴っても良いか？いや、殴らせろ、思いつきり」

「あはは！冗談よ、もう発つの？それとも明日？」

一閃はそれについては考えていなかったようで、しばらく何も言わずに悩んでいる。

【コイツと一晚……………嫌だなあ〜コイツ絶対何かたくらんでるよ……………はあ〜、でも泊まるとこないしもう遅いんだよね……………】

そんな思案をしているとはつゆ知らずに、紅葉は案外気が合う考え事をしていた。

【言ってしまった！！早くもフラグよ！今夜は張り切って一閃を襲っちゃうんだから！】

語尾にハートマークがつきそうな考えが巡らされていた。

一閃はここで、ずっと警戒してればいいか、寝ないよりマシだ、という意見にたどり着いて、

「明日だ、今日は泊まる……………部屋借りるぞ？」

内心でガッツポーズを決めている紅葉はそれを欠片も表に出さない

ようにして、どう襲つか考えながら、

「いいわよ、ごゆっくり〜」

つと平然と同意した。

日が変わる頃、一閃はもうベッドに入って寝る準備を整えていた。

「あら一閃、早いのね」

「結構派手な運動をしたからな、久々に少し疲れてって思ったよ」

一閃は用意した布団の中に体を入れる、そこは結構暖かくなっていった。

一閃はここで少しの疑問を紅葉に向ける。

「っで？なんでお前は俺が用意した布団の中に堂々と入り込んでるんだ？」

「ん？だって布団出るのが面倒だったもの、別に気にせず入ってきたんだから、そのまま気にせずに寝ちゃえばいいのに、後は私に任せて」

「おいおいおいおい！！何を任すんだ何を！！」

一閃は怒鳴って布団から飛び出そうとしたが、紅葉が一閃をがっかりとつかんでいた為に飛び出すことは出来なかった。

布団の中から紅葉の凶悪な笑みが見えている。

「逃がさないわよ・・・さあ一閃、一緒に寝ましようか、ふふふふふ・・・!!」

「ヤメロ・・・ヤメロ~~~~!!」

宿屋内に一閃の悲鳴が響き渡った。

「ホホホホホホ！よいではないか！良いではないか！」

その後一番高いスイートルームからは一閃の悲鳴が絶えなかった。

：新しい仲間（後書き）

また仲間が増えましたWWW

ちよつと多すぎる気がしますが・・・W  
まあいいでしょう

・観察者

「ふん・・・！あんな女とイチヤイチャしゃがって！そこは突き放さなきゃダメだよ・・・一閃・・・」

遠く離れてその宿屋が点に見えるくらいの位置の丘に一人の女がイライラした雰囲気を出しながら立っていた。

女が手に持つてるのは望遠鏡、それも星を見るような馬鹿デカいものだった。

「ストーカーだな、そんなことをしてなんになる、彼奴はもう俺達にとつて無害だ、反抗しても今のヤツでは俺達を止めることは出来ない」

「うるさいな、僕の勝手だろ！・・・君から来るなんて珍しいな『道敷大神』、何か重要な用か？」

「『絶対先攻』、『セクメト』が呼んでる、すぐに来い」

『八皇』の中で唯一こいつだけはメンバーを敬称で呼ぶ。

「どうでもいいけど、『絶対先攻』って辞めてくれない？僕には鋭美ってすばらしい名前があるんだ」

「本当にどうでも良いな・・・」

そう言つて『道敷大神』は踵を返して、『八皇』本部がある方向に寸分違わずに向く、そう多分一ミリも違わずに。

鋭美は納得いかなかったものの、『道敷大神』が絶対に嘘をつかないと知っているから、仕方なく望遠鏡を片づけ始める。

「本部？それとも違う場所？」

「本部だ」

すぐに返答、それ以上は必要ないし意味もないのだが・・・、

「もうすこし続けてくれても良いんじゃない、何か他に用は無いの？」

「無い、早くしろ」

鋭美はわざと片づける音を出しながら、大きい望遠鏡を片づけ続ける。

その間『道敷大神』はピクリとも動かずに、その場で直立不動の姿勢をとっている。

「手伝ったりしないわけ？」

「手伝って欲しいのなら、そのことをはっきりと言うべきだ」

それでも手伝おうとしない『道敷大神』をほっておいて片づけを終わらせる鋭美。

それを確認した『道敷大神』は鋭美にかまわずにとつと歩き始める。



「おーい、待ってなくても良いんじゃないかなあ、って言うても無駄か」

鋭美は溜息を一つ漏らしてから『道敷大神』の後を追う。

「助言だ、その甘い思いは捨てておけ、戦場ではそれが死を招くぞ」

「おや？嬉しいな、君が僕の心配をしてくれるのかい？」

「助言だ、『絶対先攻』が死ぬと『セクメト』の作戦に支障が出るおそれがある、それをなくす為だ」

『道敷大神』は何の感情も無い声でそう言って、少し歩調を早くしていく。

鋭美は何かオモシロいものを見たかのように目を輝かせる。

「照れてるの？もしかして照れてるの？」

ニヤニヤと『道敷大神』に詰め寄る。

「そんなわけないだろ、俺にそんな感情は存在しない」

無表情で鋭美を離そうとするが、上手く腕を絡められているため解ける気配がない。

なおもニヤニヤと顔を寄せる鋭美。

「ほんとに~~~~？ねえねえ、照れてるんでしょ、照れ屋さんだ」

ね君は」

『道敷大神』はもう何言っても無駄と判断したのか、何も返事をせずに歩き続ける。

「返事なしって事は凶星なのかなあ〜？」

「そんなわけないだろ、メンドくさくなっただけだ」

鋭美は顔のゆるみを戻して、まじめな顔になる。

「つまらないね、まるで機械みたいだ、そんな君に少しでも人間味を求めた僕が馬鹿だったのかな？」

「……………ああ、そうだ、俺に人間を元にする感情はいらない」

二人は今度は何も言葉を交わすことなく歩き続ける。

そして荒野のど真ん中にある……………不自然にドアだけ立っている場所にまで来た。

「『グングニル』 絶対先攻』 大野 鋭美、帰還した」

「『道敷大神』 帰還」

そう言うと、そのドアは開き初め、二人分の広さに開いた。

中には真っ白と形容出来る女が長机の一番奥に座っていた。

「おかえりなさい、鋭美、それからご苦労様、『道敷大神』、さあ座ってちょうだい、会議を始めますから」

開け放たれていたドアは大きな音と共に閉まり、ドアは溶けるように消えた。

・観察者（後書き）

更新が結構不定期なものですいません；

これから出来る限りの努力をしますので大目にみてやってくださ  
い；

さて・・・ちよつとしたいいい雰囲気を作ってみましたw  
多分これが最後のほうで関係するかも・・・。  
まあ期待してください^^  
でわまた次回でお会いしましょう！！

：二人のメイ（前書き）

作り置きしているので、連続投稿出来るようになったW  
追い付く前に先に進めないと！！

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ：二人のメイ

『悪魔の正義』の本部がある一体の街に、最も屈強な猛者が集まる酒場『インデペンデンス』がある。

今日もここは馬鹿騒ぎ、乱闘などが多発していた、だが、誰もそれを止めようとはしない。

ここは『悪魔の正義』が唯一認めた騒ぎ場でもあるに加えて、この収入のおかげで領民には税がないくらいだ、領民にも不満は無い。そこにある一人の青年が入ってきた。

猛者達の目が一気にその青年に向けられる、が、すぐに皆元の騒ぎ用に戻る。

それはこの青年が自分たちにとってあまりにもとるに足りない存在だと認識した……というわけではない。

むしろ反対、この青年がこの歳にしてあまりにも並々ならぬ存在感を突きつけたからである。

「良い所だ、相手の力を見極めている故の放っておくか、やはり来て良かった、そう思わないか、瞑？」

青年は自分の後ろにいるであろう女性に振り向かず、声をかける。

「はい、そう思います」

いつものように冷静な声、だが感情が籠もっていないのとは違う、肯定の意だけが込められた言葉。

青年にはそれが当たり前のようになっているので、気にしない。

「っで？俺を呼んでいるのは誰だっけか？」

「『悪魔の正義』『悪魔の槍』のボス、大井 雲明様でございます、この酒場の三階のゲストルームにいるはずです」

たんたんと言明した後、暝はどこかに行くように酒場の奥に向かった。

不思議に思った青年は、

「暝、どうしたんだ？階段はあっちだぞ？」

「いえ、このようにデカイ酒場であればひとつやふたつの通信機器があると思ひまして、なので妹に久しぶりに電話しようとかかと・

「  
いけませんか、そう普段から感情を出さないように努力しているヤツが目で語りかけてくる、よほど大切な妹なのだろう。」

「止める分けないだろ！行って来いよ、妹によろしくな！」

青年が許可をだすと暝は嬉しそうにとつと酒場の喧騒に紛れていた。

一息つき、青年は階段に向かう。

「確か三階だったよな・・・」

さつき瞑に言われたことを復唱、そして一気に三階まで駆け上がる。

三階に入り一番はじめに見える廊下に、一人、下のやつらとは違う  
覇気のある男が立っていた。

男が聞く、

「あなたが大泰寺 皇、様で間違いないな？」

青年はニヤリと笑い、それについて驚愕の返答をする。

「ああ、といっても半分の正解だがな」

「! ! ! ! ! 半分、とはどういう意味だ？」

男は驚愕というより殺意に近いものをその青年に向ける。

青年は怯むことなく、

「今の俺は大泰寺 皇子だ、そして・・・・・・」

王子の取り巻く覇気が今までも強力だったものが、明らかに変わり、  
その男を覇気だけで圧倒した。

「・・・・・・こっちが大泰寺 皇だ」

皇は普通に歩いて、目の前の男に近づく。



男はガクガクと肩を震わせて、ガチガチと歯を鳴らす。

その男の肩に手をつき、耳元で囁くように言う。

「楽になつてろ、殺すわけじゃない」

プツンと歯が鳴り止まり、男はそのまま地べたに倒れ込む。

つと、一つの部屋から比較的小さな体格の女性が出てくる。

「あら、あなたが大泰寺 皇ね、私は大井 雲明です、さあお入りください」

そう言つて先に部屋に入つて行く雲明。

ポソツと小さな声で皇は感想を漏らす。

「雲明って女だったのか……………」

気が付けばもう朝日が差していた、寝ずの番など久しぶりで少々意識が飛んでいたようだ、人は来ていないみたいだ。

大きく背伸びをする、全身が伸び解放感を味わう。

「後どのくらい待てば良いんだろ・・・一閃様はすぐに戻ると仰つたのに・・・」

冥は軽く愚痴る。

組織において不可視の内部組織『忠誠』のメンバーでもあり、『近衛』の三番手である冥は今、一閃の部屋の警護をしている。

実のところ表しか見ていないが、一閃はそれで良いと言った。

その理由もすぐに分かったのだが・・・、

「冥、こつちには誰もきてねえよな」

「はい、来てませんね瞬夜さん」

『忠誠』のメンバーでもあり、『秩序』の二番手である瞬夜も何故か一閃の不在を知っており、監視を手伝ってくれている。

しかし、冥はこの瞬夜の事をよくは知らない。

「瞬夜さん、聞いてもいい？」

「ん？なんだ？後別に呼び捨ててもいいぜ、そんな細かいことは気にしないから」

そうですか、そう言って改めて瞬夜を直視する、言葉遣いは男ものだが、女であることは隠しきれしていない。

まず自慢するように出ているム……………。

「っで、なんなんだ？」

「えっと、瞬夜の『才気』ってなんなの？私大抵の上役の『才気』は知ってるんだけど、今思えば瞬夜だけ知らないの」

瞬夜はそれを聞いてしばらく固まる。

そして思いもよらぬ返答が、

「秘密なのだ！そんなの教えられる分けないのだ！それじゃあ、どっか行っちゃうのだ！」

可笑しな台詞と共に瞬夜は最上階、といっても10階程度なのだが、の窓から飛び出て行った。

「そんなに・・・教えたくないのかな・・・」

冥は最後の瞬夜の可笑しなものいいを少し思い出して笑い、また静かに辺りに注意を巡らせる。

と、ポケットから小刻みな振動が伝わってくる。

《もしもし、こちら冥ですが・・・》

出る、向こうから山びこのように返ってくる。

《もしもし、こちらもメイですが・・・》

軽い冗談を含んだ声、楽しそうな声だ。

聞いたことある懐かしい彼女の声。

《なんだ瞑姉ちゃんか、どうしたの?》

《あはは! たまたま通信機器がある酒場に來たから、久しぶりに我が妹に電話でもしようかなと思ってね、どうだ、嬉しいだろ!》

《まあね、でも今、寝ずの番で忙しいんだけど・・・》

妹の普通の反応にどう思ったのか姉は、

《悲しいこといわないでよ冥ちゃん、姉ちゃんも結構忙しい中電話してるんだよ》

《ゴメンゴメン、忙しいって例の仕事?》

《そうよ、しかも今は結構重要な取引の最中なんだけど・・・彼に限って間違いなんか起こらないわ!》

彼、というと、瞑の所属している組織のボスであり、彼氏でもあったはずだ。

《えっと・・・皇さんだっけ?》

《そうよ、でねでね聞いてよ! この前とうとう彼が『蟻の巣』から異名を授かったのよ!》

普段から冥意外には感情をあまり出さない瞑がここまで感情を出すということはそうとうの異名なのだと思っただ冥は、

《へえー！どんな異名なの？》

《フフフ！聞いて驚かないですよ！その名も『オーディン』って言うの！これは良いと思ったわ！》

《良かったねお姉ちゃん》

素直な感想を述べると、姉は何を思ったのか突拍子も無いことを聞いてくる。

《ところで冥ちゃん、好きな人とか出来た？》

《！！……どうしてそんなこと聞くの？》

内心かなり焦りながら冥は姉に聞く。

《ほら、冥ちゃんって今一人でしょ、悪い虫とかついてないか心配なのよ、お姉ちゃんとして……ね》

《う……そ、そうだね、ていうか最近出来たよ好きな人》

《本当！？どこの人なの？そこら辺の人だったらお姉ちゃん許さないんだから！》

《エヘヘ、同じ組織の中の違う内部組織なんだけど、副隊長を務めている人なの、一目惚れしちゃった》

正直に言つと、なにが悪かったのか、姉として怒っているようだった。

《副隊長ですって!?!なんで隊長じゃないのよ!?!》

性格的になのかな。

《しかも一目惚れって!?!》

それは仕方がないと思う。

《同じ組織なの!?!なんで!?!》

いや、聞かないで欲しい。

《お姉ちゃん、私の入っている組織ね、強さで区別されてないの、  
どれだけ有能かで決まってるから、彼は強いのよ!》

最後だけ声を大きくして、自慢するように言う。

それでも姉として何か心配なようだ。

《でもね冥ちゃん………って、何聞いて  
るんですか!向こう行ってください!》

突然電話の向こうで姉が何者かに襲われているようだった。

《瞑姉ちゃん!どうしたの!何があったの!》

慌てて聞いたさすが返事は男声で返ってきた。

《あゝ、あゝ、あなたが瞑の妹さんですか?私は大泰寺 皇子です、

ですが用が済んだので切らせていただきます、それではまた《

ツー……ツー……と電話の切れた音が虚しく鳴っている。

「……………ま、元気そうだからいつか」

一閃の帰ってくる気配がない、まだまだ寝ずの番が続きそうだ。

酒場『インデペンデンス』から二人の影がでてくる。

「……………」

「えっと……怒ってるのか？」

返事は無い。

「ゴメンって言ってるじゃないか！」

返事無し。

「何でもするからさー……」

ノーコメント。

「俺もあんなことしようとおもってたわけじゃないんだよ……」  
ピクツと瞑の耳が動き、短く端的に聞く。

「……………理由」

振り向いた顔は微かに涙が流れていた、妹との電話をあんな形で終わらせてしまったことが、相当なショックだったようだ。

これで任務放棄してないだけ、相当な我慢が伺えるわけだが。

冗談を言って和ませようと考えていた皇子だが、それをするとな自分の命が危ないと思い、止める。

「その……なんだ……お前が悪いんだよ」

「どういう意味ですか!!」

「あ、ゴメン！そういう意味じゃないんだ！……そのな、お前俺にあんな話し方したことあるか？」

無言、今にも襲いかかろうとしていた雰囲気消える。

「だからちょっと妬いてただ、分かってくれたか？」

瞑はプイッとそっぽむき、歩き始める。

皇子は小さくなりながらその後ろに付いていく。

と、



「皇子、何をやってるの？あなたは私の前を歩かなくちゃダメですよ、私達のボスで……私の……なんだから」

ある程度の感情は落とされてはいるが、そこには確かに嬉しさが混ざっている感じがした。

「ああ、そうだな、その通りだ」

皇子は瞑の前にでる。

「行くぞ！瞑！」

「はい、皇子」

二人から伸びた影の手はしっかりと重なられていた。

瞑の反対側の手が耳に持っていられる。

そして短く告げる。

《完了、『悪魔の正義』は私達を黙認、これより『八皇』を殲滅する》

《了解、こちら『紡ぎの糸』は関係がなければなんなりと、たとよ、たくつ、腐ってやがるぜ！》

これは影で蠢く戦争の始まり。

：二人のメイ（後書き）

どんだんがんばるぞおw

感想などもお願いしたいです・・・  
でわでわw次回であいまして！！  
；

## 第六章・動き出す正義（前書き）

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## 第六章：動き出す正義

「えつと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何で私がここに？」

「そうね、まず自分から来た人が言う台詞ではないわね」

凍り付く会議室。

ここ、『悪魔の正義』の中では今、重要な会議が開かれている。

最近になって名をあげた組織が加わり、あろう事か伝説で存在するかも分からない『八皇』を潰すときだ。

提督大神を初め各内部組織のボスが集まり会議をするはめになったのはその為だ。

そしてこの組織を加えた『悪魔の槍』の大井 雲明はこの有様である。

「任意って書いて珍しくきたと思えば来た理由を・・・雲明、あなたは今何を考えているの？」

「今、でございますか？・・・・・・・・・・・・・・・・この会議では飲み物は出ないのかと・・・・・・・・」

雲明のあまりにも場違いな反応に一人の女が机を強く叩きながら勢いよく立ち上がる。

「大井！！テメエ！ここを何処だと思っていやがる！！」

『正義の槍』のボス、舞鶴 千依。

「えつと……そうそう、千依さん……ここは大会議室です」

雲明は千依を確認して、そう告げる。

その物言いに対して千依が机を飛び越えて雲明に掴みかかる。

「ふざけてんじゃねえぞ！この女！！」

雲明を捕まえていないもう一方の千依の手に炎が収束する、色はオレンジ。

それをぶっ放そうとしていた千依に大井が告げる。

「やるんですか？いいですよ、あなたに勝ち目はありませんが」

大井の手を水が包み込み、その水が大爪の形に変わっていく。

「ヤメロ！！！！」

一喝、首座に座っていた愛が二人を見据える。

二人の動きは止まり、同時に愛の方に目をやる。

「やるなどと言わない、だが場所を考えろ、今はそれどころじゃないんだ、理解したか？理解したなら席に戻れ千依」

勢いよく雲明を突き飛ばして、千依は体ごと愛のほうに向ける。

「でもよ………!」

「二度も同じ事を言わせるな………席に着けと言っている、聞こえないのか千依、最後だ、座れ!」

自分の体にヒシヒシと伝わるプレッシャー、千依はそれを歯を食いしばって耐え、席に戻る。

それを確認した愛は今度は雲明に視線を向ける。

「まあさっきまでのことはいいわ、あなた、どういっつもり?」

「はあ………どういっつもりかと言われましても、私にはさっぱり………」

ざわめく会議室、その中でたった二人だけ静かに、瞬きもせず、一瞬たりとも視線を外さずにいる二人がいた。

その一方が溜息をつき、気を緩める。

「そうかい、なるほど分かった、それなら好きなようにやりな、雲明」

「ありがとう………えっと………いづれに  
ます………」

雲明はひとつ愛に礼を送り、その会議室から出ていった。

またしてもざわめく室内、愛はメンドくさそうに頭をかいて、

「煩い！黙れ！黙るんだ、みんな！・・・いいか、私は『悪魔の槍』には独自の決定権を保有させている、それと同時に伴うものもある」

静まりかえる室内、誰一人として愛の話を聞いていない者はいない。

「それは、責任だ、いいか私は一つに思わなきゃダメだけど他の組織は『悪魔の槍』に対しては違う組織として考えて欲しい、いいな！」

愛はこの部屋にいる全ての人の顔を見渡す。

誰の目にも反対の意志は映ってはいなかった。

「よし！これにて緊急会議を終了する！」

「まったく、何が私に任せてください、全ての責任は私が負います・・・よし！」

愛は部屋の中にある執務机に乗りかかり、足を組み、そのまま天井を見上げる。

「ま、一人くらい監視を送っておくか・・・いざとなったら手を貸

せばいいしね」

一人には静かすぎ、大きすぎる部屋の奥におかれている執務机の上で大きな声で愛は叫んでいた。

そして何も無い虚空を見据えて、

「今日は誰が来たのかしら？」

シンと静まる部屋、どこからともなく声が聞こえる。

「どうして分かったんですか？ 気配を完全に絶っていたはずですが・・・」

部屋のと真ん中に一人の若い男が現れる。

「残念ねこの部屋で私から気配を隠すなんて無理よ、そうね、例えば黒の紙に落ちた白い丸を隠せるかしら」

「そうだな・・・それが紙ならば隠せますよ、俺なら包みます」

男は手で何かを丸める様な仕草をする。

「そんなことはいいんです、少し僕とお話しませんか？ ちょっと外で散歩でもしながら」

「あら、デートのお誘いかしら、でも名も知らない人とは行けないわね」

「おっと、失礼しました愛提督、俺は大泰寺 皇子、『悪魔の槍』



の新参の組織ですよ」

皇子は愛に握手を求める。

「あなたがそのボスなのかしら？」

「そうですね、まだデートには足りませんか？なら『才気』も教えましょう」

「いや、結構よ、別に大した事じゃ無いしね、そんなこと・・・私が欲しいのは結果、それ以外は余計よ」

「そうですね、よかったです」

皇子は安心したように胸を撫でおろす。

愛は差し出された手を丁寧にはね除けた。

皇子は驚き半歩後ずさり、愛を凝視する。

「何・・・するんですか？」

「いえいえ、仮にも目上の人に対してそれは無礼じゃないかな？」

「なんのことですか？」

愛はジリジリと皇子との間を詰める。

「わからないの？それとも気付いてるハズがないと思ってるのかしら」

最後の10メートルくらいは一気に詰める。

皇子は反応出来ずに自分より少し低い愛を見下げる格好になる。

「さつきから漂ってるのよ、その内側からゾクゾクするような気配と存在感がね、ホントのボスはそっちでしょ？違っ？」

「はぁ・・・」

皇子はなるべくさとられないように心を閉ざす。

が、愛には無理だったようだ。

「心を閉ざそうとしても無駄よ、あなたはもう私の中にいる」

心の奥から無理矢理中のものを引きずり出されていくような感覚。

皇子は愛を突き飛ばす。

「分かったよ、悪かった、今から出すよ、ボスを・・・」

皇子は一つ大きく息を吸い込み・・・そしてそれをゆっくりと吐く。

途端、辺りに氷のように冷たい殺気が充満、埋め尽くされる。

その中で皇子だったものと愛は悠然と立っている。

「アナタがボスね、初めまして・・・でいいかしら？」

「フン、この中でそれだけ平気なヤツはそうはいない、さすがはMAXの一人だけのことはあるな」

それだけ言っつて、目の前の男はゆっくりと手を差し出す。

「初めまして、大神 愛提督、私が『天罰』のボス、大泰寺 皇だ、呼称は好きにしてくれ、気にしないたちなのでな」

「そう、じゃあ皇ちゃんていいかな？」

「どうとでも、じゃあ行こうか、出来れば良い店でも紹介してくれ、なにぶん初めてのことばかりだからな」

愛に対して良くも悪くもない態度、これが素であり、誰に対してもこうなのだろう。

「そうね、じゃあ私の行きつけに行くけど、その前に皇ちゃんのラインを知りたいわ」

「俺か？俺はレッドラインのMAX、愛提督と同じだよ、ただ普段は奥にいて誰の目にもとまらなかつただけだ」

「私も愛ちゃんていいわよ」

「……愛にする、早くしろ」

「はいはい、じゃあみんなで行きましょうか」

愛はそう言っつて皇の手をとり走る。

第六章・動き出す正義（後書き）

どんどん投稿しますよ

## ・動き出す槍

「この会議に意味はあるのかしら？」

「すみませんがボス、俺達に聞くなと言って良いですか？」

『悪魔の槍』の本部の会議室に、組織員全員が集まっていた。

この発言は、ボスの大井 雲明と副隊長である西城 三津のものだ。

『悪魔の槍』はほとんどの組織にも繋がりはなく、愛の命令、ボスに付いていく、己の友の頼みなどで動き、組織としての強制力はない。

組織員一人一人が他の隊での猛者にして、すべてが己が信念により動くため誰を殺そうが止まらない。

一度放たれた矢は到達点にまで行くまでの妨害は全て排除し進んでいく『悪魔の槍』の悪の一面。

だが、妨害にならなければ傷最小の傷で通り抜け、悪と判断しなければ誰の命令も聞かない正義の一面。

それが『悪魔の正義』の最も凶悪で、その性格が現れ、無関係で、独立した組織と呼ばれる『悪魔の槍』だ。

そのため、会議は行われるが参加は自由であり、来ても騒いだり、酒を飲んだり、喧嘩をしたりと、会議になっているのは一部。

一応会議が一番広いボス、雲明の部屋で行われるが、理由は他の場所だと雲明が来ないからである。

大体の作戦・・・というより成功の条件を提示するのは副隊長二人のしごとである。

「まあ任す、頼むよ三津・・・私は寝る」

「一応ボスだろ！・・・って寝るのはや！」

三津が瞬き一つしている間に雲明は寝てしまった。

戦場では考えられないボスの行動は組織員達にとってはもう当たり前のこととして認識されているため、誰も驚かない。

「はあーまあいいや、みんな聞いてくれ、一応何処までが目標か聞いてかないと永遠に戦うハメになるぞ」

みんな静かになる、一応永遠に戦うなんて皆したくないから。

「いいか、今回の目標は『八皇』の殲滅、これには一つの途中目標が入る、それは『八皇』の搜索だ」

どこかからの野次が飛ぶ、

「『八皇』なんているのかよ！！いないヤツなんて探せないぞ！！」

笑いが起こる、

「いもしない組織と戦うなんてまっぴらだぞ！ハーツハツハツハ！」

笑いは止まらない、

「誰がそんな組織と組んだんだよ！笑えるぜ！傑作だ！！」

一人、その命を無駄にした。

その発言をした男はこの部屋の真ん中にいて、みんなの中で死んだ、いや、殺された。

いつの間にか隣の雲明は起きあがり、手を前に出している。

シンと静まりかえっている。

「私だが……他に文句あるやつはいるか？」

誰もが首を横に振る。

「そうか、続けてくれ三津、私は寝る」

次の瞬間にはもうすでに寝てしまった雲明を見て、ようやく何人かが死んだ友を運び出していく。

それを確認した三津は、

「さて続けたいんだがいいか？いや、続けさせて貰う反論は聞かない、俺も死にたくはないからな」

三津は前の方にいる仲間を神を渡す。

それが皆に行き渡ったのを確認してから続ける。

「それには『八皇』の八人の『才気』とその力を分かりやすく示したものだそうだが、これより強いと考えて欲しいらしい」

紙には、

『零度』、敵意がある発動では大国を必ず滅ぼす力、敵意がなければ最強の盾となる、オールラウンド型。

『雷神』、一直線上の攻撃力は最強を誇り、一瞬にして一直線上のを刻むことが出来る、先攻一直超遠距離型。

『地震』、最強の硬度を持ち、一撃のスピードは遅いが破壊力は最強、後攻殲滅型。

『海鮫』、『地震』と同じ硬度を持ち、一撃は少し弱い但範囲は最大、後攻超遠距離型。

『正義』、絶対予知能力を持ち、外れることは限りなく零に近い、戦場では心理面に何らかの形で攻め込む、後方支援型。

『風神』、絶対回避不可能の攻撃がある、攻撃力はこの中では最弱だが、最も多くの国を滅ぼしたとされる、後方近距離型。

『大山』、行く先々に大国保有以上の要塞を一瞬で築き上げる、常に内部が変わるため侵入不可の砦、要塞。

『獄炎』、最凶最悪の破壊力を誇り、暴走すれば世界が崩壊の危機に直面する、先攻全範囲超遠距離型。

注意、この値は最低を推測したものであり、最高は計りしれない。

このような最強集団の最強の『才気』が結構細かく載っていた。



「これはどの程度信頼出来るものなんですか？これを見る限りでは我々に勝ち目など無いように見えますが・・・」

「信頼は出来る確かな筋の情報だ、そして持ってきたやつはこう言った、使い方しだいで勝てる、とな」

もう既に何人かは部屋を出ているようだ、それが、目的の為か、サボる為かは気にしない。

最後に三津は締める。

「ボスは頼りないが、出来ないことは受け入れない、この意味がわかるな、皆、ボスを失望させるなよ！」

「お前もな！三津！」

「任せとけ！！」

「行くぞ！誰か援護だ！まずは情報収集に行くぞ！」

皆それぞれがいろいろな目的を持って、長い戦場へと向かって行った。

「では雲明様、私はこれにて・・・」

最後に三津がその部屋を出て扉を閉める。

「それで？話って何かしら？」

この辺りでは一番有名なフードショップのVIPルームに三人のいかにも猛者達が机を囲んで座っていた。

「まさか、私までばれていたのね」

あまり感情は出ていないがなんとなく悔しがっているのが分かる。

「瞑、あれがどういう仕組みか分からないのか？」

今此処には愛と皇、それからいつの間にか瞑が加わっていた。

「・・・皇には分かるの？」

「へえ、是非聞かせて、私も一応興味がある、あってるかどうかってことだね」

愛と瞑は皇を見る、皇は事も無げに言う。

「振動、もしくは音・・・だろ、違うか？」

「あら、よく分かったわね、さっきのは音よ、でもあそこでは振動も出来る」

「ああなるほど、気配とかどうとかの問題じゃないのね、つまり増えたものが何かって事ね」

瞑はようやく理解したようだ。

「そういつもとは違う音の反響で私はそこに何がある、もしくはいるかが分かるの」

「結構な訓練だろ、そんなことはどうでもいいんだが、本題に移るぞ、何人か部下が欲しい、それも優秀な」

「あら？『悪魔の槍』には屈強の戦士ばかりがいるハズなんだけど・・・それじゃダメかしら？」

「『八皇』相手にあれだけでは足りない、戦力の無駄遣いだ、まだまだ欲しいんだが」

口では頼む素振りだが、皇はゆっくりと食事を口に運んでいる、それもキッチンと健康管理の行き届いた食べ方だった。

「なるほど、それでね・・・ところで『紡ぎの糸』のほうはどんなったのかしら？」

「それは問題ない、万事上手くいくように進めているからな」

瞑が話に割り込んでくる。

「どうして『紡ぎの糸』のことをって皇は聞かないんですか？」

「お前こそ下調べが足りないぞ瞑」

「あなたは調べ過ぎだと思っけどね、皇ちゃん・・・話は終わりか

しら？なら私は仕事に戻らないといけないんだけど」

愛は席を立ち、確認を二人にとる。

「無いようね、じゃ、会計は済ましてるから、ごゆっくり」

愛はその部屋を後にした。

「なかなかやるやつだな、愛ってやつはよ」

「そうね、もう少しで読みとれたのに失敗よ」

二人はそんな会話をして、机の上のご飯を全て食べ終えた後、その店を後にした。

## ・動き出す皇

ごくごく普通の大国の大通りに二人はいた。

「何か嫌な感じだな、これでは任務以外の時にも動きづらくなる、まったく厄介な野郎がいるもんだ」

デカくがっしりとした体格の大男はうなだれるように言った。

「でも、騒ぎを起こさない限りは平気だからいい、って思ってるんでしょ、フッフ、私もあなたがいるだけで嬉しいわ」

隣にいる大男まではいかないが十分なデカさの女がうなだれている男の腕に腕を絡める。

この二人はその大きな体を器用に操って、人混みをかき分けていく。

着いた場所はこの辺りで一番人気がある店だ。

だが、二人は入る前に少し嫌な感じを覚えた。

同時に店の扉から一組のカップルが出てくる、それも普通の状態です。周りに殺意をばらまいているようなやつだった。

そいつらが行って警戒を解いた、二人の前に焦げた肌の女性が現れた。

「なんだったんだろ・・・おや、これはこれは『ワダツミ』と『ガイア』じゃない、良く来たね、さあ入った入った!」

「へい」 「ハイハイ」

ゴクゴク一般の店の中の奥の席にそれぞれが目立った様相の面々がそろい踏みしていた。

髪の毛は金、銀、赤、緑、茶、灰、一人はフードを深く被っているため判断出来ない。

外装は確かに目立っているのに、誰一人として、彼等に注意を払うものはいない。

彼等の内の誰かが意図的に自分たちを認識させないようにしているようだ。

「よくきてくれました、まずは礼を言いますわ、『八皇』の諸君」

「ん？やはり彼奴はこないのだな」

「フン！来ようがどうせまた女におぼれて役に立たないさ、いない方がいい」

銀、衛宮 華鈴の礼。

緑、『風神』大平 疾風が一人の抜けオチを確認するかのようにつづく。

茶、『大山』干葉 梨理がその一人をけなすように続いた。

「そんなこと言わなくて良い梨理、それと今の彼には女におぼれる

ようなことは絶対はないと思うな」

金、大野 鋭美が少しムツとしたような表情で反論する。

「ハハハ！鋭美、まだ彼奴のことが好きなのか！？そろそろ諦めろよ！」

赤髪で大笑いをしているのは『地震』の穂蔵 白だ。

隣では『海鮫』の穂蔵 木根が抑えるように……締めつけていた。

「白！そんないいかたないじゃん！この乙女心が白には理解できないのかなあー!?」

「ちょ！木根！……止まる！血が……止まる！！」

白がヒューヒューと息を吐きながら木根の腕を放そうともがいている。

「そういえば最近俺らを潰そうとしてる組織が出来たらしいな、それはどうする？」

疾風は木根と白をはやし立てながら、不真面目な顔でまじめな意見を出す。

「その手の話はあまりしないほうがいいでしょ、どうせまたその馬鹿夫婦の意見が絶対に分かれるんだから」

梨理は仲が良いのか悪いのかといったふうに木根と白を苦笑いで見





華鈴は適当に話を再開する。

「今日ここに集まってもらったのはなんでかわかるかな？」

「どっかに攻める、もしくは何かの工作をするんでしょ、それくらいでしか集まらないもの」

『ワダツミ』がそう答える、さっきまでのふざけた空気は薄くなっている。

「そう、今日は攻めるほうよ、敵は『悪魔の正義』の内部組織『正義の槍』よ」

「随分と局所的に攻めるんだな、どうしてだ？」

「それにどうしてその組織なのかもついでに聞きたいわね」

疾風の質問に梨理が付け加える。

「そうね、どうしてかって言われれば、『グングニル』の威力がどれほど『彼』を補えるかって検証」

「そう、『彼』の先攻があったからこそ僕達は優位にことを進めることが出来たんだ」

「何故その組織かって言われると、強い部類で楽に倒せる範囲ならどこでもよかったの、そこのところは……」

「俺が視た、相手がどのような手を使おうとも、俺達に負けはない

と、俺はそういう風に視た」

「と、いうわけよ、まさか『正義』の『道敷大神』の予測が外れるとは私は思っていないからね、反論があれば聞くわよ」

誰も何も言わない、反論は無いようだ。

「つで、正確な時間は？俺にも準備してもんがある、できるだけ正確に頼む」

「そうだな・・・明日の日が沈むのと同時刻にしようか、いいな」

そう言つて『道敷大神』はその店を出ていった。

それに続いて『八皇』がどんどん出ていく。

最後に残ったのは華鈴だけだ、そして言い忘れたようにつぶやく。

「そうだ、『八皇』を『七皇』に変えるっていうの忘れたな・・・  
まあいいか」

そして最後に店を出ていった。

「ねえ曰・・・気付いてる？」

「何がだ、お前が後ろに手を当てる俺を影ながらに虐めていること・・・いで！いたた！やめっ！いたた！」

白の背中是不自然に反っている。

背中の中の服の下からミシミシと変な音が聞こえてくる。

「痛いって！ちょ！やめ！」

「気付いてる？」

「ああ！気付いてるよ！いてっ！後ろの・・・あいたたた！後をつけてるヤツだろ、気付いてるよ、マツタク！」

白は背中をさすりながら、メンドくさそうに言う。

「白が悪い！・・・この後をつけてるやつなだけどね・・・殺っちゃう？あの距離で一度も私達を逃してないし、後で厄介そうだもん」

この二人の家は人里離れた山の中にある、故にその行き道は山道や障害物が多い地形となっている。

しかもこちらからは視線しか感じない、少なくとも目視出来ない範囲を維持し続けている。

こうすれば敵から攻撃をうけることは無い、こちらからの攻撃も出来ないわけだが。

この二人にはその常識は通用しない。

「殺るのはマズいだろ、せめてビビらせる程度にして逃げ切ろう、あまり目立つ動きはしないほうがいい」

「そうね、じゃあこんなのは？・・・突然大量の水が一気に落ちてくる、良い案でしょ！」

「目視出来ない上にそんな局所的な攻撃は無茶だ、やめとけ」

自分の考えが否定されムツとした木根は、挑戦的な物言いで、

「へえー・・・じゃあ白には何か考えがあるんだ？」

「あるぜ、ここをどこだとおもってる？大地は俺のテリトリーだぜ？少々びびらせるくらいすぐにできるさ！」

白は不敵に笑って真下を一度、ドンツと蹴る。

遠方よりその二人を付けている者は何が起こったかも知らずに気付いていないという仮定の下、尾行を続ける。

そして白が蹴った場所でズボツと落とし穴にはまるのであった。

それも一度入り込んだときは柔らかいが抜こうとすると堅くなるよ  
うな細工がしこまれたものであった。

鋭美は昔を思い出すかのようにその場所を遠い目で眺めていた。

「まだ・・・彼を諦めきれないのかしら？」

後ろから同じように遠い目でその場所を眺めている華鈴。

「そうだよ、僕は彼がすきだったんだ、そんな簡単に諦められるわけがないよ・・・でも安心して任務はこなすから」

「そこは心配してないわよ、あなたの責任の強さは分かっているつもりよ」

「ありがと・・・それにしてもここにはいまだに生命の欠片すら現れないね」

眺める先は辺り一面の焼土、草木はくつきりと境目が分かるようにとぎれ、そこは円のような形を表していた。

「彼の『才気』がそうさせたのかしら・・・？」

そう、ここはかつて『阿修羅』と呼ばれた男の暴走が止まった地でもある。

そして、栄華を極めていた『八皇』が世の中から姿を見せた最後の土地とも言える。

「そういえば聞いたかしら？最近何処その組織が我らを探しているらしいってこと」

「聞いてたよ、でもいいんじゃないほっといても、どうせ伝説を信じるお馬鹿さんだよ、気にしたら負け」

「その組織はねこつ名乗ってるそうよ」

華鈴はそこで一拍おいて、

「『天罰』・・・『八皇』に変わり世界を平和に導く組織って掲げてるらしいわ、あ、今は『七皇』か」

どうでもいいよそんなの・・・、そう言っただけで鋭美は話を戻す。

「『天罰』か、生意気な事をしてくれるね、それで？その組織に対してはどんな対応を見せればいいのかしら？」

「邪魔するようなら殺しても構わない、出来れば生け捕りにして何か情報をひきだしたいんだけど」

「オツケ！それならやる気が出る・・・ん？ボスはどこか行くの？」

「フッフ、私はねこの世で一番諦めることが嫌いなよ」

華鈴は不敵な笑いを漏らす。

鋭美は何か分かったかのように納得する。

「無理だと思っけどな」

「いいえ、今度は彼じゃない、彼の周りを揺さぶってみるのよ、最

善が出来なければ次善を・・・それが私のモットーなのよ！」

鋭美はそんな華鈴を見て、やはり『七皇』に戻ってきて良かったと実感した。

なにせ解散した後はフリーの戦争屋でしかも力をセーブしていなくてはならないため何度も死にかけた。

同じ力がいないと周り全てを敵に回すはめになるからだ。

「そうなの、ガンバってねボス、いや・・・『セクメト』」

「任しておきなさい『グングニル』、私は本当にあきらめが悪いのよ」

それと、と付け足すように華鈴は、

「アナタはちゃんと準備してなさい、明日の日の入りまでにはしっかりともどってくるから」

そう言つて『地獄の使者』がある方向に突っ走っていく。

それを確認した鋭美は手を上にかざす。

「さて、これからが僕のみせどころだね、明日の日の入りまでにとどのくらいこれを増幅させることが出来るか・・・」

鋭美の手からすこしづつ光が発せられている。

『正義の槍』から反撃を喰らわない位置に突如大きな山が現れたことに気付く者はいない。

そうして千葉 梨理は敵本拠地を攻撃するのに最も適した土地にいとまたやすく大規模な要塞を築きあげたのである。

「こんなもんかな………」

もう誰がどう見ても完全な『山』にまだ納得いかないのか、首を傾げて歩き回る梨理だった。

そこに疾風が一番乗りにくる。

「終わったかー、梨理……？」

疾風が梨理の肩を叩くと、ヒヤウ、と可愛らしく飛び跳ねて、疾風の方に振り返る。

その振り返りざまにかまされた強力なパンチを疾風はすんでの所で手で受け止め、そして反撃のためその手を思い切り振り上げる。

強い風と共に振り上げられた梨理はあたふたと空中でもがく。

そして、風が一瞬を通り抜けて、梨理を地面に抑えつける。

「いきなりなんだよ！ビックリしただろ！」



抑えつけた状態で疾風はいう。

「ゴメン・・・でも、後ろからいきなり手をかける疾風も悪いんだよ？」

「ああそうだな、悪かった、今度から気を付けるよ」

そう言つて梨理を解放する疾風、そして、目の前の山に目を向け、感嘆の声をあげる。

「すごいな！今回はいつにもましてすごいものをつくつたな！」

「まあね、今回は『八皇』再生祝いと新『八皇』の初戦だからね！  
気合いを入れてとうぜん！」

梨理はそう言つてあまりない胸を大きく反らせる。

それを見た疾風が、

「そんなに反らすとあんまりない胸が強調されるぞ」

「あの・・・怒つて良い？」

鬼のような形相で睨み付ける梨理。

笑いながらそれを受け流す疾風、そして梨理の不意をつき、その胸をなぞる。

「きゃ！ちよっ！やめなさいっ！！」

軽く飛び退き、自分の胸を隠すような仕草をする。

これまた笑う疾風。

「隠すようなものなんてないくせに何隠してんだか！」

「うるさいよ！！私は今忙しいんだ！からかいにきただけなら帰ってよ！！！」

梨理は声を張り上げて、プイツとそっぽ向いてしまった。

今度慌てたのは疾風だった。

「ああ！ゴメンゴメン！ゴメンなさいって！ちょっとした冗談だろ、気にするなよ！」

「むー……」

それを無視して、梨理は何かを入念に調べている。

「………わかったよ、はあ……何が欲しい？」

それを聞いた途端に嬉しそうに振り返る梨理。

「いいの！？じゃあね……『インデペンデンス』の特製団子がいい！あれってなかなか手に入らないんだよ……」

「そんなものを俺に頼まないでくれよ……おれは待つのが嫌いなんだけどな……まあ仕方ないから買ってきてやる」

「アハハ！私をからかった罰だ！せいぜい1時間ほどならんでなさい！」

快活に笑う梨理、深い・・・本当に深い溜息をつく疾風。

「っで？もう出来たのか？」

疾風は己の目的を思い出して聞く。

「うん、確かに出来てるんだけどね・・・もうちょっと複雑にしようかなと、後外観に少し違和感があるかな・・・」

ふん、と疾風はしばらく梨理の作った要塞に目を向けしばらく眺めるが、

「・・・どこに違和感があるんだ？」

「普通の人には分からないはず、木の『才気』の派生型なら気付く程度だけど、いないわけではないでしょ」

そう言って、またその山に見える要塞の周りを見に行くと歩いて言った。

「さて・・・敵陣に乗り込むような行為はあんまりしなくなかったなあ・・・」

もう一度深い溜息をした後、疾風は風に混じるように消えた。

・動き出す世界（前書き）

結構ペースをはやくしていますw

書き溜めが減っていく・・・まあなんとかなるでしょw

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからもよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ・動き出す世界

限りなく満月に近い夜、麗香は華鈴にであった。

そこは小さな公園、一閃が初めて『地獄の使者』で行った、初めての仕事場。

そこでブランコに跨り、それさえなければ優雅に見える人形のような人がいた。

「初めまして麗香さん、私は華鈴といいます」

「え、あ、はい・・・初めまして・・・」

何故自分の名前を知っているのかそれは何故か気にならなかった。

「この公園は寂しいですね」

華鈴は麗香にとって意味のわからないことを言う。

そうだ、この公園は確かにキチンと整備されているが、使う人は滅多にいない。

もちろん理由はある、この公園を作る前、この土地で多くの人が死んだそうだ、それも跡形も残らずに。

故にこの公園には自殺者がよく集まる、しかしそれすらも何らかの恐怖で自殺を諦めるほどだ。

「明るい内は周りに人がいて、でも誰も入ってこない……暗くなれば誰も通らず、気付かない……そんな公園」

華鈴は美しくその白銀に見える髪をなびかせながら、立ち上がった。

その姿はまるで天使……さらには女神にさえ見えた。

「そんな人、あなたの身の回りにいませんか？」

目が合う、心の奥底を見られているような感覚、絶対に嘘を付けない人と認識してしまう。

だが、もしも何も思い浮かばなければ、それは単なる終わりのない抑えつけにしかならない。

「そうですね……やはりなにもしりませんか、彼のこと」

「彼……？誰のことをいつてるんですか？」

「そう彼……今では決して誰にも心を開かず、一人で何もかもでき、一人完成し、孤高に生き、孤独に死ぬ人……彼」

白銀の女神は悲しそうな声で言う、目は決して離されないし、離せない。

その目が微かに笑う。

「あなたは幸せですか？」

突然の質問に戸惑う麗香、だが続けて華鈴は問う。

「あなたは全てを知りたいですか？」

何のことを言っているのか麗香には分からない。

「全てを知って受け止められる覚悟がありますか？」

言っていることは分からない、でもこれが、自分を試していることはなんとなく分かる。

「そんな気持ち・・・あなたにはありますか？」

麗香は覚悟を決める。

これがいったい何のことを言っているのか、それを知るために。

そして、自分が幸せだと認識出来るために。

「あります・・・あります!!」

まっすぐに華鈴を見つめて、自分の本音を投げかける。

その答えに華鈴は微笑を浮かべる。

「では、あなたに教えて差し上げましょう、一人の男の悲しく、孤高に生きると決めた決意の話を・・・」

その微笑は一瞬・・・ほんの一瞬だけ、悪魔のそれに近くなった。

俺が彼女を見つけたのはこの場所だった。

一閃は誰も人がよりつかないことで有名な公園に脚を踏み入れた。

「ここも・・・もう壊さないとな・・・」

俺には今何も知らない恋人がいる、そしてこのまま、何も知らない彼女と共に生きようとおもった。

そう、それを知ればきつとその彼女は自分を遠ざけるであろうから。

そんなとき見つけた。

誰もいないハズの公園に一人、ブランコをこいでいる彼女、麗香がいた。

「センちゃん・・・」

「レイか、こんな人気の無い所で何やってんだ？それに風邪引くぞ、さっさと家に帰ったほうがいい、送ってやるから」

「う、ん・・・」

一閃が差し出した手を遠慮がちに取る麗香。

それを不信に思った一閃は、



「どうしたんだ？ほんとうはどこが悪いんじゃないか？病院に行くか？」

「いや！・・・いいよ、そんな・・・なんでもないから、でも今ちよつと不安なの、家まで・・・着いてきて・・・」

「?・・・ああわかったよ」

一閃は麗香を心配しながらその公園をさる。

麗香の家は『地獄の使者』の中でも最も金持ちが集まる一角にあつた。

「ほんとに大丈夫か？」

「大丈夫・・・大丈夫だよ、さああがつて」

「いや、俺はこれから用事があるから・・・」

「あがつて!!」

いつもなら諦めて早々と別れるのに今回に限って麗香は意地を張ったかのように別れようとはしなかった。

それを感じ取った一閃は、

「わかった、じゃ、邪魔するよ」

麗香につれられて客間まで通る一閃。

それを確認しながら後ろを歩く麗香。

「?・・・そんなに警戒しなくても俺は逃げないぞ?」

「ううん、多分これをいいたせば絶対に逃げる気がするから・・・  
ゴメン!」

そう言っただけで体当たりで一閃を一つの部屋に押し込んだ。

勢いよくその部屋になだれ込む二人。

「一応訳を聞いておこうか・・・」

「この部屋は『才気』を封じる特殊な部屋・・・一閃、ここはレッシュ  
ラインのMAXつでさえも『才気』を使えないのよ」

「っで、俺を此処に入れたのはなんでなんだ?」

一閃は倒れた状態のまま、上に乗っかかっている麗香ののぞき込んだ。  
だ。

そして驚く、その目に涙が溜まっていたから。

「おい!どうしたんだいったい!何があった!?!」

「センちゃん・・・本当のことを話して・・・一体何を見てるの？」

一閃は何を言っているのかさっぱり理解出来なかった。

「どういう意味だ？」

「センちゃんの目に映る私は本当の私ですか？それとも・・・  
ずっと前に死んだ・・・恋人？」

「!!!!!!!!!!」

一閃は顔全体で驚きを表していた。

そしていままでにない顔を見せる、それは麗香の見たことのない表情、怒り。

「それを・・・誰から聞いた？」

言葉の奥に潜む殺意がにじみ出ているような感じがする。

「先に答えてよ・・・センちゃん・・・」

それに負けないように踏ん張りながら言い返す。

「・・・レイ、俺はお前しか見ていない・・・今度はレイの番だ」

その目は優しそうな感じだったが、一つも笑いと感じる要素が無かった。

「あの公園に舞い降りた・・・優しい天使様が教えてくれた・・・」  
「嘘をつくな！」

一閃は本気で怒鳴っていた。

が、思い出したように訪ねる。

「レイ・・・お前は何処まで知った？・・・知ってしまった!？」

一閃としてはこれが一番重要なことだったのだ。

だが、麗香はそのギリギリの妥協点さえも、自らで壊してしまう。

黙っていたればみな丸く収まっていたであろうのに・・・。

「全部・・・天使様がセンちゃんのすべてを話してくれた・・・」

瞬間一閃から優しさが消えた。

そしてその後を追うように溢れ出てくる地獄を連想させる気配。

ドロドロの気配がこの部屋を包み込む。

「セン・・・ちゃん・・・？」

「もういい・・・止めだ」

一閃が『才気』を発生させる、このレッドラインなら発動出来なくなるこの部屋であり得ない光景だった。

またたくまに一閃の手に集中する赤黒く輝く炎の塊。

それはどこか怖く、恐ろしく、油断すれば自身さえも燃やしてしまうほどの火力だった。

しかし、それよりも美しいと思えるような輝きだった。

「お別れだ、麗香……『獄炎の槍』」

塊の炎が形作るものは槍、ありとあらゆるモノを無視してその槍は、あらゆる障害物を排除した。

壁に出来た穴から一閃は飛び去った。

それを呆然と見送る麗香。

「センちゃん……………」

一閃は一人街の裏側の道を歩いていた。

その脚は一步一步門の出口に近づいていた。

影が重なる。

「バレタのね・・・それで？これからどうするの？」

「お前は来なくて良い・・・俺はまた違う場所に根ざしてそこで今度は静かにやる」

目の前の人を通り抜ける、その後続く足音。

「来るな・・・」

「いやよ、私は一閃のほうがいいから、それに私は一閃のものよ」

「ならそれも解除だ・・・もう二度と俺の前に現れるな」

「いやよ・・・それに今私はアナタが欲しいモノを持ってる」

人は静かにその手に持った、巻かれた紙を突き出す。

一閃は鬱陶しそうにそれを見て、

「なんだ・・・？」

「証拠写真・・・とでもいいでしょうか？」

刹那、一閃が消え、女の後ろに現れる。

が、女はそのさらに上を行って、一閃の後ろに回り込んでいた。

「瞬夜・・・俺を怒らせる気か？ならば貴様を消して奪ってもいいんだぞ？」

「出来ないわね、アナタにそんな加減が出来ると思っているの？」

「なら奪う！！！！」

「試してみるかしら？」

凶悪な笑みを浮かべ消える一閃、その状態での攻撃をまるで見えて  
いるかのように避ける瞬夜。

と、突如瞬夜の逃げ道をふさぐかのように炎が吹き出してきた。

そして唯一の逃げ道を一閃本人がふさぐ。

「チエツクメイトだ」

炎に包まれた獄炎の炎が瞬夜を襲う。

しかしその手は虚空を捕らえたただけだった。

「甘いわよ、一閃」

「ちょこまかと・・・さっさと・・・！」

「一閃！」

瞬夜は一閃を睨み付ける。

いきなりのごとで少し後ずさる一閃。

「一閃、私はね・・・『八皇』とも肩を並べたことがあるのよ・・・」

その私に手加減して勝つつもり？なら・・・死ぬわよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだな、悪かった、一瞬で終わらせてやるよ」

その後の一閃の動きは別物だった。

その動きが全て基本通りであり、洗練された動きだった。

そこに混じる不釣り合いな、炎の軌道、それにより瞬夜は一瞬にして捕まってしまう。

「さすが、一閃だね」

「それはなんなんだ？」

「これかい？これは、一閃のことを麗香に喋った張本人が映っている写真よ」

抑えつけられているにもかかわらず、一閃の前に写真を突き出す瞬夜。

その写真には麗香と見覚えのある白銀の女がいた。

「本当にこいつか？間違いないな？」

「ええ、だって私が直に見たんだもの」

瞬夜を話す一閃。



「っで、どつするの？それで行けば相手の思いつばよ」

「行くに決まっているだろ？」

「そう、じゃあガンバってね、私はアナタの帰るその時まで彼女に仕えておくから、必ず一回は戻ってきてね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった、努力する」

そんなもの嘘だと分かっていた、しかし止めることは出来なかった。

瞬夜は呆然とその一閃の後ろ姿を見送るだけだった。

その次の日、『地獄の使者』を揺るがす噂が流れた。

その記事はこう伝える。

“一閃・脱退”

・動き出す世界（後書き）

これからちよつとだけ激しくなっていくます・・・！！

それにともない、少し稚拙な部分が多々みられるような感じがしま  
すが・・・（もとからかw

大目に見てやってねw

でわでわ、また次回！

またね！^^ノシ

## 第七章：轟く七皇

「いい天気ですわね」

大きな伸びをしながら華鈴はそう言った。

部屋の中には誰もいない、梨理がそういう風に考えて作ったのだ。部屋をノックする音がして、声が続く。

「起きてるか？」

聞き慣れた声だった、時間に寸分のくるいもなく起こしに来た者の声だった。

「起きてるか？」

もう一度問う声が聞こえる。

このまま黙っていても良いのだが、多分自分が起きるまで言い続けるであろうから、此処は素直に返事をする。

「起きてるわ、今日もいい天気ね」

「起きたか・・・天気などしらん」

怒ったような声が向こうから聞こえる。

彼は『道敷大神』、この組織で一人だけ素性が割れていない者の一人だった。

もつとも、もう一人は今やこの組織にはいないわけだが。

「入っていいわよ、そして朝ご飯を作ってくださいと嬉しいわ」

「俺を誰だと思ってるんだ！！」

そう言つてドアの前の気配は消える。

「あらら、怒っちゃった」

楽しそうにそう言つて、今日の予定を頭の中で反芻する。

「そうか、今日だったわね」

そう言つて部屋をでる。

「いよいよ今日の日没だな、鋭美、準備は出来てるか？」

「もちろん！僕をだれだと思ってるんだい？」

その部屋では、疾風と鋭美が待ちかまえていた。

「おはよう、お二人さん、朝から騒がしいのね」

「おはよう、華鈴」

「華鈴か」

朝の挨拶を返す鋭美と何故かホツとしたような事を言う疾風。

華鈴はとっさに思い浮かんだことを実行するため、疾風に近づいていく。

そして不意打ちとばかりに抱きつく。

「ツツツツツッ！ヤメロ！！離れる！なにするんだ！！！」

「朝の挨拶よ……それと、そんな大声で叫ぶと、寝てる人に迷惑ですわ、例えば昨日遅くまで此処の点検してた梨理とかにその間も力を緩めない華鈴、それを聞いて青ざめていく疾風。

必死にもがくがこの抱擁を解くことが出来る者はこの場所にはいない。

出来るだけ押し殺した声で疾風は聞く。

「わかった！わかったから！離してくれ！！頼む！何でも買って欲しいやつ買ってやるから！！」

「私金持ちなので、いりませんわ」

上の方で扉が開く音がする。

それが聞こえた疾風はかなり動揺した様子で、訪ねる。

「た……頼む！！じゃあ何すればこれを解いてくれるんだ！？」

流石にこの場面を見られて疾風の行動に支障が出れば困るのはこっちである、なので仕方なく適当な理由を言う。

「朝の挨拶がまだですわね……」

「悪かった！！……おはよう！華鈴！」

その言葉を聞いて華鈴が疾風から離れたところでこの部屋にもう一人、入ってきた。

「おはよ〜です」

もの凄く眠たそうに梨理が入ってきた。

「おはよう、梨理、今日もいい天気ですわね」

華鈴の挨拶に寝ぼけた声で驚きの返答をする梨理。

「今日は私がこの空を黒に染めてやる〜」

その後続く微かな寝息、その状態で倒れそうになった所を寸でのところ疾風が受け止める。

「そのまま彼女を部屋まで運んであげなさい疾風……変なことしてもよろしいですよ」

「しない!」

「そう、でもその部屋にはいなさいよ、また起きてくるかもしれないから……それだけ強く言っただこまで理性が……」

「変なこと言うな!!断じてしない!!」

「あらそう……ちよつとくらいならいいのよ?日没に影響がない程度なら」

「するか!!!」

疾風は顔を真っ赤にしたまま梨理を担いで、その部屋を出ていった。「っで……うまくいったのかな?」

「当たり前よ、後はあの子がどういう風にそれを一閃に伝えるかどうか、もしくは伝ええないか……どちらにせよ崩れるわね」

楽しそうに笑う華鈴を、何の興味も無いかのように見る鋭美。

「きつと大丈夫よ、なんてっただって彼は元『八皇』の一員なんだから」

「!!僕はそんな……一閃が誰かにやられるなんて思ってないよ!」

「そう、ならいいのよ、私も彼がこんな『場所』でやられる分けなかって知っているから」

「さて……そろそろ昼だね、だいぶ近くなってきた」

鋭美は何気なく言ったが華鈴にはもう届いていなかったであろう。華鈴はなにやら真剣な面もちで一方を見つめていた。

「どうしたんだい?」

「いえ……なんでもありませんわ、ちよつと外に出てきます」

「……?まあいいけど」

私には関係ないともいった声調だった。

華鈴も別段きにも止めずにその部屋を出ていく、その時に小さな声で言う。

「地獄が制裁にくるか、オモシロい、ならばその悉くを導いてやるう……」

「むっ……気づかれたか、しかしまだ一人……さすがは華鈴といったところか、そこまで甘くはないようだな」

一閃は『八皇』の拠点である『大山』の要塞から、数百キロ離れた位置から、その要塞の方向に向かって歩いていった。

急ぎはしない、なぜなら敵がまだ逃げるわけないであろうと知っているから。

「あちらもこちらを捕捉したか……攻撃する様子は無いみたいだな」

あちらがこちらを捕捉、および観察をするというならば、今日はこれ以上近づかない方が無難である。

今日はこの辺で野宿になるな。

仕方なくそこで野宿の準備を始める。

日は頂点に達したくらいなのだが、暗くなってから万事を行うのは疲れる、なので早めにいるんなモノを確保する。

周りに一切街が存在しないため、食料を取ろうとその辺の草を観察したりする。

つと突然後ろから誰かが近づいてきた。

「誰だ！」

そう言って振り返ると、そこには短剣を持った少女がいた……尻餅をつきながら。

「どうしたんだ？」

「うるさい！！突然振り返ってくるからビックリしたのよ！！」  
女は顔を真っ赤にして怒りの表情をこちらに向ける。

「何よ！！女性が倒れているってのに手も差し出せないの!?!」

むちゃくちゃなことを言っている。

どちらにせよ、こちらに不利益はないので一応手を差し出そうとするが、その途中で手を止める。

ちよつと遅れて、手を通ろうとしていた場所を女の短剣が鋭く割く、もちろん空気を。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

女はどうして読まれたのかと目をパチパチさせながら一閃を呆然と見つめる。

一閃は一閃でその女を見下したように睨み付ける微妙な間が出来た。

「どう・・・・・・・・して？」

女はまだ呆然として、今度は自分の短剣を見つめる。

「そんな中途半端な殺気の攻撃なんてバレバレなんだよ、っで、お前は何しようとしてんだ！！」

「え？あなたを殺そうと思って」

「なんでだよ？」

「なんかいかつそうだったから賞金首かかって思って、そうだったから久しぶりにご飯が食べられるから」

そう言う女はどこかやせているようだった。

「お前・・・・・・・・いつから食ってないんだ？」

「えっと・・・・・・・・昨日の一食からかな？保存してたやつが昨日で無くなった」

さも当然のように言う女。

一閃にはよく分からなかった、すくなくとも自分のたった今さっきまでいた組織にはそんな人間一人としていなかった。

「・・・・・・・・おんな、名前は？」

「角理です、・・・・・・・・ってああ！返してくださいよ！！それ、あたしのです！」

一閃はほんの一瞬の隙について、角理から短剣を奪い取った。

その短剣を取り返そうと一閃に飛びかかる角理を手の力だけで叩き落とす。

「痛いです……」

「そりゃそうだ、本気でやったんだから、俺を狙った罰だ」

「ヒドいです……こんなか弱い乙女に……」

「どうでもいいし、か弱い乙女はこんなことしないだろ」

うう、とうなり声をあげて一閃を力無く睨む角理。

「っで、そろそろ起きたらどうだ？別にどうでもいいんだが俺は今から飯の調達に行きたいんだが……」

「……それって私にすこし分けてくれるって意味なの？」

「条件付きだぞ？それでいいなら一緒に来ても良い」

それを言うつと見るからに嬉しそうな顔をする角理、油断したら飛びついてきそうだ。

「っで、あなたの名前は？」

「おれか、俺は一閃……霧崎 一閃だ」

角理の表情が険悪なモノに変わっていく。

「一閃って……『八皇』の一閃？」

「まあそう言えばそうだが、今は関係ないな……それがどうかしたのか？」

そして重大なことに気が付く、角理が『八皇』を知っているようだった。

悉くを皆殺しにしてきた『八皇』は架空の組織として恐怖で世界をまとめていた……ことになっていたはずだ。

「……みつけた」

瞬間白い光が身を翻した一閃の横を通り過ぎた。

「殺す、絶対に殺す！！」

次々と放たれる矢をいとも簡単に避けながら、食べられる薬草などを調達していく一閃。

日は頂点に達して少しずつ高度を下げているようだった。



「あらあら・・・あんなか弱い女の子に手をあげるなんて、ほんとに非常識なんだから」

要塞の屋上で一閃を観察していた華鈴は楽しそうにその様子を見ていた。

後ろから『道敷大神』が現れる。

「彼の様子はどうだ？あいつの強さは未だに未知数だ、作戦に支障が出るかもしれん・・・」

「そうね、彼が本気を出した所なんて見たこと無いものね、もしもの場合の作戦を考えておいて」

「そう簡単に言うな、これでもかなりの精神が必要なんだ、もっとも俺にそんなモノは無いが」

『道敷大神』も華鈴と同じ所を見ている。

「私が外れる場合を考えていて頂戴、時間稼ぎに行くかもしれないわ」

華鈴の周りから白い煙が落ちている。

「了解、練るから部屋に戻る、日没までに戻らない場合呼びに来てくれ」

「はいはいわかりましたわよ、さっさと行って頂戴」

『道敷大神』はすぐに踵を返しその展望を後にする。

そこに残った華鈴はまた楽しそうに一閃の観察を始める。

「唯一だったはね、唯一彼だけが私と同じ地平に立つことが出来た、その彼が何処まで私を追いつめるのかしら？」

日はだんだんと戦いに近づいていく。

「んにゃ・・・」

梨理はだるそうに起きあがった。

自分の部屋の自分のベッドで。

「・・・にゃ？」

まだ頭がぼけているため頭が回らない、確か食堂に行っていた記憶があるのだが。

つとそこで、気づく、自分の隣にいる人間の存在を。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

.....

「お・・・おはよう、疾風」

「ああ、気持ちいい目覚めをありがとう梨理」

疾風は顔と腰をさすりながら皮肉混じりに梨理を睨み付ける。

当の梨理は苦笑いを浮かべながら目を泳がせている。

そこには今の自分の状況を理解していないからっということも含められている。

「.....解いて」

「嫌だ、そのまま日没まで置いとく」

そう言っただけで今度もまたベッドに横になる。

梨理はベッドにはいない、もちろん部屋から出さず、目の届く位置に拘束している訳だが、

「でもこれの状態で誰かが入ってきたらヤバいと思うんだけどな・・・」

ガチャ、つと鍵が閉まる音が聞こえる。

「お前が入念にしている要塞だ、これで誰も入ってこれないだろ」

「.....本気で叫んだらみんなに聞こえると思うよ」

「大丈夫だ、俺の風が遮断する、振動も同様に」

「疾風はこんな私を見ながら楽しむんでしょ!!」

「いや、寝る、眠い、おやすみ」

そのままいびきをかきながら眠りに落ちる疾風。

「ちよつと~~~~~」

半泣き状態で椅子に縛り付けられている梨理、解放されるのは多分日没直前。

日が半分沈みかけていた。

華鈴の元に鋭美が現れる。

「そろそろ放つよ、突撃の準備にかかって」

「わかったわ、すぐ行くから待ってて」  
今静かに七人の皇が動き始める。

舞鶴 千依はいつもとは違う空を見上げていた。

「あの雲は不自然だな、誰かが起こしているモノなのか・・・？  
こちらに逸れなければいいんだけど・・・」

空に浮かぶのはあまりにも不自然すぎる巨大な黒い雲。

それが鋭美のそれと気づくモノはいない。

「何にせよ、この組織を狙うということは世界に対する挑戦に等しいと知っていれば誰も手は出そうとしないだろうけど・・・」

それでも千依の不安は拭い去れなかった。

心に残るこのモヤモヤしたものは一体なんだろうか。

「今日は雨が降りそうね・・・」

日は最後の光を途絶えさせた。

「グングニルの大槍」

一度闇が覆った世界を一瞬にして莫大な量の光の塊が通り過ぎた。

それは一秒よりも短い時間で何十年分かの人間を殺して消えた。

悲鳴はない、恐怖が支配した世界において、悲鳴をあげることが許されなかった。

凍り付き、今何が起こったのかを確認することで頭が精一杯になり、一瞬思考が停止する。

通ったのは避けることの出来ない完璧な、絶対的な先制の一撃。

その刹那、七人の皇が『正義の槍』に進行した。

その中の一人が静かに告げる。

「開戦ですわ、新『七皇』の力、世に知らしめてやりましょう」

始まりから、『正義の槍』の戦力は十分の一にまで削られたという。

・混乱する地獄の使者

旧立帝國高校のいつもの集会所に各内部組織のボスが集まっていた。空いているのはボス、一閃の席のみ。

「……………、つというわけなの」

麗香は白銀の天使より聞いたことを包み隠さずすべてみんなに話した。

そしてもちろんのこと皆の間で混乱が生じた。

「一閃が……元『八皇』の構成員だっただと？ふざけてるのか、

『八皇』など存在しない!!」

まっさきに反応したのは『法度』のボス、翔汰だった。

「仮にもしも存在していたとして、一閃がその構成員だったとして、どうして今になってこの組織を抜ける必要がある？」

もっともな意見であり、それについての回答は麗香は知らない。あくまでも聞いた話であるからだ。

「とりあえず、どこかに一閃が隠れていないか探すぞ！それでももしもいなかったらその時また考えよう！」

いの一番に翔汰はこの教室を出ていった。

「そう、だな……まずは本当にいなくなつたかを確かめないと」

次に続いたのが『霸光』のボス水鏡。

無言で去ったのは『闇の影』のボス昴。

部屋に残ったのは四人だけになった。

「その話は確証がある情報なのか、麗香？」

「ないわ、でも、私はセンちゃんのある姿今まで見たことなかった……私、どうしたら良いんだろう……？」

「そうか……なら俺は行く、一応確かめたいしな」

最後に出ていったのは『秩序』剛毅だった。

部屋には剛毅と入れ替えに一人入って来て、不思議そうにその様子

を眺めていた。

「どう……したんだ？」

「それよりなんで彰がこんな所に来たの？」

部屋にいた一人、冥が予想外の訪問者に驚き、席を勧める。

彰はその席に座って、一息つくとすかさず問う。

「っで、何があつたんですか？」

冥は麗香に目で確認を取ってから、彰に今聞いた話を全て話す。

それに対する彰の反応は、

「流石一閃だな、まさかそんなにすごい力の持ち主だったとわ！」

それを聞いて大笑いするのは、瞬夜、部屋の隅の方で腹を抱えて笑っていた。

それにつられて彰も大笑い始める。

「二人とも、笑い事じゃないんだよ！」

麗香が二人をなだめるが二人はいっこうに笑うことを止めようとはしない、むしろドンドン大きくなっていく。

麗香は溜息をついて、机に項垂れる。

冥も同感ですと言いたげな感じで溜息をつく。

その時、彰の電話が鳴った。

「ん……？ちよつと失礼！」

彰が電話を取ると何も喋らず、聞く側に回っている、そして十分くらい聞いた後、

「《俺は遠慮する、俺はここでいい》」

そう言つて通話を終えた。

麗香は何となく嫌な予感がしたのだが、念のため聞いておく。

「誰から……だったの？」

「……水鏡です」

「なんて……言ってきたの？」

「聞きたいか？」

麗香は静かに首を縦に振る。

「なら言うが……水鏡が『霸光』の構成員と共に世界組織」

紡ぎの糸』に転属した……つまり『地獄の使者』を抜けた」

「……うそ……でしょ……!」

「事実だ、さっきの電話は俺にも来るように言う電話だった、俺は行かなかったがな」

「それは私につくってことかしら……?」

麗香は少し安堵したような声で、彰をみるが、

「すまない、それは違う、俺はあくまで一閃に仕える、だから俺は俺の為に行動し俺の為に居続ける」

これまた大笑いする瞬夜、そして同じく大笑いし始める彰。

その二人をみて先が心配になる麗香と冥だった。

「水鏡さん、彰さんはなんて?」

部下の一人が聞いてくる。

「俺はいかない、だとさ、しょうがないから俺達だけでもいくぞ!」

水鏡は歩き、その足で『地獄の使者』の領域から外にでた。

目指すは『紡ぎの糸』の総本部、『キューラー』。

「すみません……」

ソコに来たのは翔汰の弟、戒だった。

「ん?翔汰はどうした?」

麗香はまたも嫌な予感がしてきたのを堪える。

だがやはり戒の口からでる言葉はその予感が的中するものだった。

「そのいきなり兄貴が、ボスはお前に任せた!おれは今から大事な用があるから、戻るまでしっかりしておけ!って言ってどこかに行っちゃって」

少々遠慮気味に言うのは戒の性分だ、翔汰とでは気兼ねなくはなせるのだが。

それを聞いて一層瞬夜と彰の笑いが大きくなる。

冥はもう苦笑いに変わっていて、今の顔は最高に引きつっていた。

「それで一応、連絡しておこうと思ひまして……どうかしました

か？」

「いや、なんでもない、本部に戻って待機していてくれ」

戒はなんとなく腑に落ちなそうな顔をしていたが、自分ではどうしようも無いと悟ったのか、その部屋を後にした。

冥も呆然としている。

「……あなた達は、あなた達はどっち？一閃？私？自分？」

まず彰が、

「俺はさつきも言ったが自分だ、一閃以外の下につけるとは思えない」

次に冥が、

「すいません麗香様、私は彰についていきます、ですが麗香様の言うこともなるべく聞きます」

最後に瞬夜は、

「俺は麗香、君に就く、一閃がいない間は外勢力からは私が『地獄の使者』を守り抜く、だから安心して作戦を練ればいい」

そして、両手をあげてあることを特殊な意味に変換する。

「俺の名は瞬夜、麗香、あなたに忠誠を誓い、あなたが望むままの力になるぜ、俺の命が尽きるその時まで、俺は麗香の部下である」

両手をあげた状態での名乗り、それはつまり相手に対する忠誠を誓う証。

ふと、部屋の隅にあるパイプから真っ赤な液体が流れ出てきた。

それはおびただしい量の血のようなもので、それは多くなるにつれ人の形を取っていく。

できあがったソレは、『改水』のボスーノ宮 京だった。

「一閃がいなくなったそうね、それであなたがボスになるのかしら、麗香？」

「はい、少しの間でも一閃が戻ってくるまでの間、この組織を護り抜こうと思います」

「そうか、では私の言うことはないな、私と一閃との契約はこの地

を護ること、ただ、その行動が麗香という人間に引き継がれたただだ」

そして、両手をあげ、

「私の名前は一ノ宮 京、私は『改水』全員の代表として麗香に誓う、私達の命はすべてあなたの手の上に」

そう言つて水がはじけるような音と共にその京がパイプに戻つていった。

それをはたから見ていた彰は、

「良かったな麗香、これで少なくとも二人の強戦士が忠誠を誓つた、これで結構安全だろ」

そう言つて彰は立ち上がり、踵を返す。

冥はその後を追う。

「じゃあな、次会うときに敵になつていないことを祈るよ」

「そういうこと言わないの！じゃあね麗香様、頑張ってください」

彰はそのまま出ていったのに対して、冥は一度振り返り、ペコリとお辞儀をした後、先に行つてしまった彰を追うために早足に出でいった。

「彰つてやつはなかなかオモシロいやつだったな！あいつだったら良いペアになりそうだ！」

「ところで瞬夜、アナタはなんで私なんかにつくの？あなたの実力なら何処の組織でも雇つてくれるでしょう？」

麗香は自虐的に言うのに対して、瞬夜は何を聞くのかと思えばといった口調で、

「決まつている、一閃に誓つた、一閃が戻ってくるまでの間俺が『地獄の使者』を守り抜くとな」

しばらく静かに時間が流れる。

そしてボソツと麗香はつぶやく。

「………ありがとう」

「いやいや、大したことじゃない、そんなことよりお前はお前のしなければならぬことをやるんだ」





：瞬夜？いや俺は再砂だ

《一閃様はどうやら本当に出ていったみたいですが、見張りの死に方が焼け死ぬなど、一閃様・・・一閃しかありません》

電話の向こうから部下の怒りに満ちた声が聞こえてくる。

《そうか、そいつを丁寧に埋葬したあと、すぐに帰還しろ、これからの方針を考えるぞ》

そう言つて乱暴に電話を切る。

「一閃、やりやがったな、まさか人さえも手にかけるようになってしまったとわ・・・これはもう一刻の猶予も有りはしない!!」

そして剛毅は隊長室に掛けられているあるものを手に取った。

それは一閃が隊長のみに渡した『地獄の使者』としての証、『秩序』の組織印である剣が盾を突き破った形に刺繍が施された旗。

「一閃、俺はお前についていくと誓ったんだ、そのお前がここにいないくてどうする!!」

剛毅はそれを力一杯へし折った。

「一閃!!俺はお前を求めてお前を殺す!!」

剛毅はその前段階としてあることをするために電話をかける。

《こちら剛毅です・・・・・・・・・・・・・・・・愛様ですか？》

《あら剛毅ちゃん、どうしたのかしら？それと愛でいいわよ》

電話の相手は『悪魔の正義』提督大神 愛だった。

《・・・・愛様、この剛毅かねてからのものを受理します》

《へえー、どういう風の吹き回しかしら？》

《つきましては一つお願いがあります》

《何かしら？私に出来ることならなんでもしますよ》

《・・・・私の組織と共にそちらに移りたいと思います、よろしいか？》

《ええ、構わないわよ、ただ、アナタの部下が有能じゃなければ勝

手に辞めてしまっただろうけど》

フフフと楽しそうな笑いが向こうから聞こえる。

《明日日にはつきます》

《ええ、待っているわ、ちょっと早いけど……. . . ようこそ》正義の悪魔『え!!』》

そこで電話を切った、後悔はない。

「さて、何人ついてくるかな？」

剛毅は違う電話、今度は部屋に完備されているものをとる。

《みな聞いてくれ!! 私は今から『正義の悪魔』の配下に降る! もちろん強制はしない! 明日発つ、それまでに用はすませておけ!》

「ありがと、瞬夜、もういいわ」

瞬夜の胸から顔を離す麗香。

「そうか、いいぜ、気にするな、俺もお前に一つ言わないといけないことがあるんだ」

「いいわ……. . . なにかしら？」

「俺は女だ」

シラケた雰囲気が出る部屋。

「……. . . . . 知っているわ瞬夜は女ね」

「ああ、だから瞬夜つて可笑しいと思わないか？」

思えば女で瞬夜とは少し可笑しいハズだ、しかしつけないとわ言い切れない。

それで瞬夜は一体何が言いたいのだろうか。

「何が言いたいの？」

「そう言うことだ、麗香、俺に名前をくれ、『瞬夜』は一閃が俺に与えた名前だ、だが今の俺はお前の部下だ、だから、名前をくれ」

「……. . . . . あなたの本当の名前は？」

知らなかった、『瞬夜』が一閃が付けた名前だったとわ。

「知らない、俺は瞬夜以前の記憶がない……. . . . . それに、必要な  
い」

「その名の由来は？」

「……瞬く間に夜を駆け、我を助ける守護者、だ」

一閃は瞬夜のことを何より信頼していたのだ、故にどんなピンチになっても瞬夜が助けに来てくれると信じていることが出来るのだ。

「そうね……考えるわ、ちよつと待つてくれる？」

「ダメだ、すぐに決めてくれ、俺はソレを使って初めの仕事をしないといけない」

この女は砂を通じていろいろな場所から情報を聞くことが出来る。もちろん自分の入る組織『秩序』には常に聞いている状態にしているのである。

故に剛毅がしようとしている事は理解している。

そして瞬夜はとある約束により、剛毅には逆らえない。

だが……瞬夜でなければ聞く必要はない。

「そう急かされても良い名前は出来ないわ、少し考えさせてくれな  
いと」

「良い名前じゃ無くても良い、早く頼む」

その後少しだけ考えた麗香はこう出す。

「再砂……再砂よ」

「わかった、少々可笑しい気もするが別に良い、今日から俺は再砂  
だ！」

その意味する所は、

「何度でも立ち上がる不死身の砂の守護者、こういう所かしら」

「………良い名だ」

タイミング良く電話がなった。

「すまないボス、少し出させて貰うよ」

そう断りを入れてから瞬夜……いや、再砂は電話を取り、周りにも聞こえる用に設定した。

電話の相手は『秩序』の剛毅だった。

《剛毅だ、手短かに用件だけ話す、俺達は『正義の悪魔』に入る、いいな？》

《残念だ、俺はその命令には従わない》

《なに？？どうということだ？お前は俺には逆らってはいけないはずだろ！？》

《何の事だ？．．．そもそもお前は人を間違ってるんじゃないか？》

《．．．．．瞬夜だろ、ふざけているなら怒るぞ！》

瞬夜は少し焦らすように溜めを置く、その間に麗香を見て少しだけ笑う。

《瞬夜？誰の事だ？俺の名前は再砂だ、やはり間違っているんだな、それともう一つ、瞬夜なんて人間はこの世には存在しなかった》

そう、瞬夜は仮の名前、一閃がつけた仮の名前にすぎなかったもの。《どうということだ！！その声は瞬夜だ！！おちよくるのも大概にしろ！！》

《おちよくつてなどいない、俺は．．．今の俺は再砂だ、麗香に使える新たな『地獄の使者』の護り手だ！！》

そして今までに無いほどの暗い声色で、

《抜けるのはいい、どうとでもしろ！だがな、もしも『地獄の使者』に牙を剥くというのなら俺は例えお前だったとしても容赦しない！》

そこで一方的に電話を切った。

「．．．．．ありがとう、瞬夜」

「おい、間違ってるぞ、俺は再砂だ」

再砂は悪戯っぽく麗香を見る。

「そうだったね、ありがとう、再砂」

麗香は見つめる瞳をしっかりと見て優しく微笑んだ。

・圧倒的な皇と、劫火VS暴風（前書き）

あまりPCが使えないので、

たまに溜めおきしているのをPSPであげることがあります。

その場合前書きと後書きがないのであしからず、

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ：圧倒的な皇と、劫火VS暴風

そこに広がっていたのは戦争の後のような荒れた大地だった。

一面に土煙、白い地面を這う煙、霧、静電気、そよぐ風、無惨に生えている人を貫いた木々。

「以外と早く終わったね」

その中心にいる七人の生存者の一人、鋭美は満足そうに顔を綻ばせる。

「俺達が全員で来たんだ、むしろ良く保った方だろ、さすがは最強と呼ばれる組織の一つで最高位につけている組織だ」

「そうよ、鋭美は自分の力を過小評価しすぎよ」

「そうかな、僕はいたって普通だと思っただけね」

大きな二人に挟まれてなんだか居心地が悪そうな鋭美だったが、当の二人はそんなこと気にしていないらしく大きな声で笑っている。

そのちよつと離れた所にいる二人、疾風と梨理は、

「終わったな………やつと」

「そうだね、私何にもしてないな」

みんな強すぎ、そう言って久々の光景に呆然とする梨理。

それを横からまじまじと見てしまう疾風。

その視線に気づいたのか、梨理が、

「どうしたの疾風？私の顔に何か付いてる？」

「いや何も付いていない！！」

慌てて即答、しかも語気は粗めで。

後悔する間もなく梨理は涙目になりながら、

「ゴメン………私変なこと聞いたよね？」

「………いや、気にしてない」

何となくそう言っても、場の空気は重い、なので疾風は違う話題を振る。

「そうだ、例のヤツ買ってきたぞ、ほら、お前が欲しがってたヤツ

！」

梨理はバツと振り返り疾風に詰め寄ってくる。

もう少しで鼻が当たるような位置にまで詰め寄ってきた梨理は、

「例のヤツってアレ？」

「そうだ、苦労したんだぞ、何時間並んど思ってる」

「やったー！！ありがとう疾風くー！！」

その位置から疾風に抱きつく、疾風としては素早く避けようとしたのだが、あいにくこの距離では避ける事すらかなわない。

なので必然的に疾風は梨理と密着状態に入る。

「——————！！！！！！」

疾風は声にならない声をあげた、それも嬉しくて仕方ない方で、なおかつそれを欠片も感じさせずに。

またまたその光景を端から見ている二人はそんなこと気にも止めずに、ある一方を睨み付けているようだった。

「来なかったわね、絶好のチャンスだと思わせたハズなんだけど……」

「ああ……俺も、考えた作戦が実行できなくて残念だ」

どうでも良さそうな声なのだが、これが彼、『道敷大神』のちよつと悔しがっている場面なのだ。

その様子をまじまじと見つめる華鈴に気づいた『道敷大神』はちよつと口調を、そのの微かに上げて、

「何を見ている、見せ物じゃねえ！！」

つと少し言葉を間違っつて記憶しているようだった。

「何でもありませんわ、それより考えていた作戦とやらを聞きたいわ、一体どんな対抗手段を考えていたのかしら？」

「全員で向かう、それだけだ」

「そう……まあこの際だから言っておくけど、あなたは彼を過小評価しすぎよ」

「俺の『正義』に綻びがあるとでも言いたいのか？」

『道敷大神』は華鈴を睨み付けた。



「いえいえ、そこまでは言っていないわ、ただ・・・あなたのソレ  
は彼の『存在』を計るには小さすぎるのよ」  
楽しそうにそう言っただけで華鈴は足早に要塞の方に向かって駆けていっ  
た。

「あいつの・・・『存在』だと・・・いったい何のことを言っ  
てるんだ、華鈴・・・」

日はそろそろ明けてきている。

女は目を開けると、空は明るくなり始めていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここは」

まだ微かに首筋辺りに痛みが残っている。

確か私は久しぶりの強者を見て意気揚々と向かって・・・。

うち負かされて、ソレで、その人が名乗って・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・一閃!!!」

ガバツと体を起きあがらせるが、なにやらロープの様なもので腕と  
足の自由を奪われていた。

「これで良く起きあがれたな・・・私ってすげー」

つと妙な事で関心しているとさらに重要なことに気づく。

服が・・・はぎ取られていた、しかもご丁寧な手の届かない位置に  
置いてなにやら檻の様なものが上からぶら下がっている。

無理だ・・・と思っていると不意に後ろから声を掛けられた。

「起きたか、頭は冷めたか？」

「頭ならとつくに冷めて、今は体も冷えてるわ!!!」

精一杯の皮肉を込めて言ったのだが、一閃は軽く受け流す。

「・・・・・・・・・・飯、食うか？」

「食べたいけど、手足がふさがれてるのよね、外してくれるかしら  
？」

「外すと襲ってくるだろ、後念のため体中を調べさせて貰った、逃  
げられてもかなわないからな」

そしてなにやら大きく頬が膨らむくらい食べ物を口に詰め込んだー

閃は、隙をついて角理を抑えつけた。

そして素早くキスをする。

「ん……んんんん?????んんんんんん————!!!!!!」

もがこうとする角理だが、一閃によって完璧に抑えつけられた体は言うことを聞かない。

すると口に無理矢理一閃が口に含んでいたものが押し込まれてくる。しばらくしてあっけないほど簡単に束縛は解かれた。

「旨かったか?」

「………なんですよ、なんで今頃こんな事するのよ、憎めなくなるじゃない、どうしてくれるのよ!!!」

角理の頭は混乱中だった。

「あの時あなたはもつとも酷い殺しをした!!!覚えていいのか!!!」  
「知っている」

即答、一閃はためらわずに言った。

「初めの村だな、俺はあそこでしか恨みを覚えさせていないはずだ、何故なら俺はソコ以外では老若男女問わずに皆殺しにした」

「そうよ!!!あなたはもつとも無惨な……殺さないという方法でミンナを殺した!!!」

「ああ、覚えている、俺の『生かす劫火』のことだろ、あれは酷いよな」

まるで他人事だ、一閃は別段気にするともなく続ける。

「……今お前が思った通りだ、俺にとってはそんなこと……  
……ただの他人事だ、何の興味も湧かない」

「つく!!!貴様!!!」

角理はすかさず白い雷を一閃に飛ばす、ソレを軽々と避ける一閃。

「ものは提案なんだが……俺はお前を何があっても殺さないし、殺させない、だから俺と一緒に来い角理」

「何を言うか!!!それでは貴様に見張られているのと一緒にじゃないか!!!」

「だが、それが俺を殺す最高のチャンスだとは思わないか？」  
無言になる角理、たしかに最高の手段であることは変えることは出  
来ないからである。

「……………いいわ、その代わり私からも条件を  
だす」

「なんだ？」

「あなたは……………あなた以外の『八皇』を殺して!!」

「閃はなんだそんなことか、といった感じで、

「当たり前だ、その為にお前が……………!!伏せる!!」

「閃は角理の頭を掴み力任せに地面に押しつけた。

ソコを風が通り過ぎる。

その轟々となる爆音の中で角理は確かに聞いた。

「いいい……………せえええええんんん

!!!!!!」

怒り狂った烈風はそこにいたただ一人を見て、怒鳴り上げる。

「ホントに人気者なのね、閃は……………フッフ、今度は元部下  
ですわね、どう出るのかしら……………フッフ」

要塞の展望に戻ってからゆっくりと閃の観察を始める華鈴だった。

「ここにいたころの彼なら一瞬で灰に変えてたでしょうね」

それは本当に楽しそうな、墮天使のほほえみのようだった。

「閃!!!!貴様、こんなところでなににしてやがる!!お前が『地  
獄の使者』を離れてどうするんだ!!」

「鈍いな翔汰、いつものお前なら気づくだろ」

それは翔汰にとって死にも等しい宣告だった。

「そんなことはどうでもいい、ここまで来たって事は俺と戦うって  
ことだな、なら容赦はないぞ」

「閃の左腕が真っ赤な血のような炎に包み込まれる。

対して翔汰は何もしていないようだったが、次の動作は限りなく速

かった。

「そんなこと！！！！こつちがさせてやるか！！！」

『暴風』により加速を付けた拳は衝撃破を伴いながら一閃を襲う。しかしソレを軽く右で受け止めた一閃は、左の手で殴りかかる。

ソレをギリギリかわす翔汰だが、今度は捕まれた手を力一杯振り回され、投げ飛ばされる。

「すまん翔汰、俺にはこんな技もあるんだ」

投げ飛ばした翔汰をめがけて正拳を繰り出す一閃、二人にはあいだがあるが、一閃のソレは確実に翔汰に当たった。

少しその苦痛に顔を歪める翔汰だったが、それもすぐに引き締めて、怒りと共に溜めていた第二破を送る。

「烈風神・鎌鼬！！！」

無数の見えない風の刃が飛び交い、乱暴に交差しながら一閃に向かつて飛んでくる。

一閃はその攻撃全てをかわしながら、

「その程度で俺を狙ってきたのか？」

「まだだ！！風楼殺！！！」

無数の飛んでいる風をそのまままき散らし、なおかつ一閃を取り囲むように、風が包み込む。

四方八方上下左右全ての逃げ道を風が覆い尽くす。

「死ぬ！！！！！」

包み込んでいた風は凝縮していき、次第に人一人収まる大きさになり、しばらくして消えた、そこに一閃はいない。

「は・・・はは、ははは、やったぞ・・・一閃は死んだ・・・」

┌

「誰が死んだって？」

翔汰の後ろで無傷の一閃が冷笑を浮かべていた。

「そんな、完璧だったはじめなのに！！！」

「あの程度で俺に挑んだのか、馬鹿馬鹿しい、お前は死んでろ！」

一閃の炎が翔汰を一瞬だけ包んで消える。

翔汰はその場に崩れ落ちる、全身に火傷を負い、最大の攻撃を無傷で耐えられた精神的ショックにより、翔汰は立ち上がれない。

「貴様はそこで俺に挑んだことを後悔しながら死ね」

一閃はそれだけ言って、角理の方に向く、そして嫌な顔をして、

「おいおい、まだ服も着てないのかよ、早く着ろよ」

「手足縛られたまま着れるわけないでしょうが！！！！！！」

一閃は仕方なく角理を縛っていた縄を解いてやる。

角理はすぐさま服を着る。

「下着が替わってる……」

「捨てた、新しいの買ってやったんだ、ありがたく思え」

一閃は興味なさそうにヤレヤレと首を振る。

逆に角理は少々本気で怒ったように語気を荒げて、

「ブラがないじゃない！！」

「ブラ？なんだそれは？まあいい、とりあえず行くぞ！」

一閃はまっすぐ要塞の方に向かって歩いていく。

角理は仕方なく上は生でそのまま服を着た。

「……擦れて痛いな……」

残ったのは全身が焼けただれた半死人、そして黒い影だけだった。

・圧倒的な皇と、劫火VS暴風（後書き）

結構進んできたなあ・・・  
もっともっとかきまкруうw

でわでわまた次回で^^  
まったね〜ノシ

・全ての始まり（前書き）

こんにちは^^

最近PSPまでも取られてしまっている作者です・・・；

僕が何をしたというのだorz

PC、PSP、DS、PS2・・・。。。。どれほど僕の楽しみをと  
ればきがすむんだあああああああ；

作者はゲーマーでわないです。

でもこういう親の居ない時は頑張ってあげるので^^  
よろしくね〜！

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

…全ての始まり

「再砂・・・私決めたわ、私のしたいこと、これからの『地獄の使者』の目標を」

「そうか、それは良かった、ならそれに向かって頑張ってくれ」

「何か聞かないの？」

「大体分かる、それに俺の任務は此処を外部から護る事だ、それにはそんな事まで考えたらそれに集中出来なくなるだろ」

再砂は麗香の隣で立っていたのだが急にソコを離れる。

「どうかしたの？」

「ああ・・・どうやら二回目の仕事が出来たみたいだ、ちょっと行ってくる、不意だが、仕方ない奴だ」

「相手は？」

こんなにはやく攻めてくる部隊でもいるのだろうか、それならば弱い組織なのだろうか、などと考えている麗香に一言。

「ああ・・・剛毅の奴だ、どうやら俺に恨みがありそうだな、なに、彼奴になんか負けないぜ」

再砂はその部屋を出ていった。

その扉を悲しそうに見つめる麗香だった。

『紡ぎの糸』に行くまでの道のりの半分を過ぎた頃、水鏡達の前に大きな湖が姿を現した。

「この場所には湖なんか無いはずだが・・・」

戦いの後だろうかと考えていた水鏡の目の前に見慣れた人物が向かってきていた。

副隊長にして、頼れる片腕にして、親友である彰・・・柿崎 彰が水鏡の目の前に立ちはだかった。

「よお水鏡」

「彰か・・・俺達と来る気になったのか？」



「いや、ちよつとした余興だよ水鏡」

次にでた言葉で水鏡は絶句することになる。

「俺は柿崎 彰だ、『海原』でブルーラインのMAXだ、よろしくな」

「お前・・・それは・・・」

「名乗りだ、お前も名乗れ水鏡」

彰は水鏡を睨み付ける、ソコには怒りと共に侮蔑の念が込められていた。

「・・・大空 水鏡、『雷人』でブルーラインの9だ」

「行くぜ、水鏡、俺はお前を殺す気で行くからな！お前も殺す気で来い！！」

彰は力強く地面を蹴り、一直線に水鏡に特攻をかけた。

『七皇』の猛攻が終わった後の場所に二人の人間が来ていた。

「此处で間違いないな、瞑？」

優しい声がかもう一人に確認を取るように言う。

もう一人はかなり感情をそぎ落とした声でそれに答える。

「はい皇子、ですが蛻の殻のようですね、逆探知しましょうか？」

「そうだな、頼む」

許可が出ると瞑は瞑目を始める。

その間に皇子は辺りを観察することにする。

【辺りに生えている木が、梨理と呼ばれているやつのが才気の後だな・・・木系の『才気』は精神の消耗が激しいと聞くが、この量は・・・】

すでに辺り一面に木々が生い茂っていた。

それも戦場の後を感じさせないほどに。

【なるほど・・・これで逆探知をさせないようにするんだな・・・だが、俺の瞑はこんな事じゃ騙されないぜ】

瞑を見るとまだ静かに瞑目中であった。

逆探知出来るとはいえ、隠されている分時間がかかる、それに隠し

たのが『七皇』なのだ、時間がかからねばおかしい。  
つがしばらくして瞑は目を見開く。

「……………いた！」

「良くやった、お前はすぐさま近場の通信機で全員に連絡を取って  
くれ、俺は直接向かう！」

皇子が出した手を取り、瞑はもう一度目を閉じる。

「よし、わかった！いけ！」

瞑は名残惜しそうに皇子の手を離すと、すぐさま近場の通信機を探  
しに駆けていった。

ソレを見送る皇子。

「さて……………行きますか！」

気合いを入れた途端、周りの空気が変わる、それはいるだけで辺り  
に恐怖をまき散らす様な気配だった。

「いくぞ！」

皇子……………いや、皇は要塞に向かい一直線にかけ始める。

旧立帝國高校の門の前に一人の女が立っていた。

「遅かったな」

女はとても男らしい口調で言う、美しい髪や凛々しい顔立ちからは  
想像も出来ないような声だった。

その目の前に一人の男が立ち、肩で息をしていた。

「俺が何しに来たか分かるな……………瞬夜」

瞬夜と呼ばれた女は心持ち明るくした声で、

「瞬夜？誰だそれは？俺の名前は再砂、この『地獄の使者』を護る  
守護者だが……………そもそもこれが何を意味するかわかるか？」

「どういう意味だ？」

ヤレヤレといったふうに首を振り、当然のごとく言い放つ。

「俺は名乗ったんだ！早くお前も名乗るがいい！！そして俺にお前  
の理想を押しつけてみる！！」

「いいだろう！！俺の方が上だと理解させた上でお前を連れて行く

「！！今度は一閃は関係なく、だ！！」

そして、自身の腕に砂を集結させ剣を為し、ソレで地面を力の限り叩く。

地面は割れ、地が揺れる。

「剛毅・・・鬼垣 剛毅、『砂塵』レッド5・・・瞬夜、貴様を奪い返す！！」

「いい、それでいい剛毅、これで俺も・・・」

再砂は大きく飛び、何も無い空間に着地する。

「・・・心おきなく対決することが出来る！」

再砂は両手を天に掲げる。

その上空に砂が収束し始める。

「始めようか、お前は俺を、俺は組織を・・・護るための戦いを！」  
振り下ろされた大量の砂を固形化され、凝縮された砂が受け止める。

「そして、これからの俺達を決める戦いを！！」

「嫌な気が近づいてるね・・・彼じゃない、もう一つだ」

「この気・・・あの時あの料理店にいたやつじゃないか？」

「そのようね、誰か・・・二人でて相手をしてあげて、決して二人以下でいかないように！」

華鈴は展望室から声を張り上げる。

そこからは全部屋に続く管があり、何処にいても華鈴の声を送ることが出来る。

すぐ後ろには『道敷大神』もいるのだが。

「・・・」

わざわざ言つまでもなく動いている二つの影が外に出ているのを知っているので無駄な事はしない。

華鈴も気づいてはいるが、何となく叫んだだけのようだ。

「・・・今失礼なこと考えたでしょ」

「そんなことはないし、そんなことする必要もない」

「今考えていることを正直に話して頂戴」

「もう向かった奴に気づいてるだろ阿婆擦れめ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

互いに何も喋ることなくその場の空気は零点をこした。

要塞までの道のりを半分くらい過ぎた頃、一閃はまた休憩に入る。

角理は逆らうわけにもいかず、同じように立ち止まる。

つと、一閃がもの凄く不機嫌な顔をこちらに向けた。

「・・・・・・・・何よ？」

「お前はこの先にある街に行つてそこの宿屋で寝るんだ、そして何らかの情報を持って明日の朝戻つてこい」

「・・・・・・・・寝込みが襲えないわ」

「安心しろ、例え襲えてもお前になど殺されない、分かったらいけ」  
角理は渋々つとといった様子で街に向かって歩いていく。

不意に後ろから、

「そつだ、これを持っていけ！」

振り向きざまに顔面に直撃したのは丸い物体だった。

「手を離すなよ、離れたら発動する仕組みだ」

「これは何？」

「ん？爆弾だ・・・・死ぬという訳じゃないけど、死ぬくらいな目に会うから気を付けろ」

「一閃・・・・・・・・死んでくれ」

「ありがとう、俺にそれ以上の言葉はないよ」

ムスツとした表情で角理は街に向かっていった。

その姿が見えなくなるまで見送る一閃はその姿が見えなくなり少し本音を漏らす。

「今日の事で俺を狙う奴がいると分かった・・・・お前を、危険に晒す訳にはいかない」

その一瞬だけ一閃はあの一閃に戻ったが、またさっきまでの一閃に戻った。

・全ての始まり（後書き）

でわでわ^^

また次回に会いましょう！！

・散り散りになる仲間（前書き）

あゝ・・・学校ダルいなあゝw

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：散り散りになる仲間

轟音とともに空一面を覆うような砂の塊が、質量とは裏腹に早すぎる速度で地に落ちてくる。

それをまともに直撃する剛毅。

「ハハハ！弱いぞ剛毅！！この程度か、まだまだ・・・俺の言ったことが理解出来ないようだな！！」

再砂は砂で剛毅を抑えつけたまま、もう一つ同じ大きさの砂の塊を作りだす。

「いいか！砂への信頼、愛情、欲・・・こういったものが強くなればなるほど砂は強くなる！！」

第二破、今度は地面を大きく揺らしながら襲いかかってくる。

その震動が収まり静まりかえる。

「死んだか・・・この程度の男だったとわな」

再砂はつまらなそうに地に降り立ち、麗香の元に帰っていく。

心の中では決して疑っていないことがあるが、この場で言うわけにはいかない。

だが、ほんの少し漏れてしまう。

「また・・・会いましょう」

それだけは絶対に成し遂げたいことだった。

雷が進れば、それを誘導するように水が現れる。

「俺達は、一閃にしか仕えないはずだ！・・・なら何故お前は・・・どこに向かおうとしてるんだ！！」

津波のごとく攻めてくる膨大な生み出された水はただ一点、水鏡にのみ狙いを定めて、襲いかかってくる。

ソレを逆に雷が水を誘導して、水鏡は避ける。

「俺達の未来はもう『地獄の使者』にはない、まだ間に合う、彰、俺と共に『紡ぎの糸』に行こう！」



「それで、どうなる？」

水鏡の目が点になる。

【そうだ……行って俺は、何をする？……何をすればいい？】

目の前の彰を見ると、その目は何か信念のようなものが伺えた。

対して自分にはない……この違いはなんだ……。

「水鏡……お前のソレは逃げだ、そんなものに動かされている部下の気持ちにもなって見る」

彰は片手を天に掲げる。

「はつきり言おう、迷惑だ、お前の……そんなものの為に何故俺が動かなけりやいけない！」

「黙れ、彰……ならばお前にはトップに立つ者の気持ちが分かるだけでも言うのか？」

「ああ、わかるさ、俺は一度その重みに耐えきれずして挫折した事がある」

手が振り下ろされると、雨のような水の刃が天から降り注いでくる。それに気づいた水鏡が咄嗟に展開した『雷の防壁』を、水の刃は悉く貫通していく。

「その挫折を親友のお前には味わって欲しくない……『紡ぎの糸』の中でもいい、答えを見つけたしてくれ、そして……」

水鏡の周りに観戦していた同士たちが募る。

「……俺にその答えを教えてはくれないか？」

彰は水鏡に背を向ける。

「その絶望の先には何かがあるのかを……」

「止まれよ、怪物」

「止まりなさい、怪物」

二人の声が重なる、両方とも共に覇気がある声だった。

ここは要塞から数キロ離れた平地の場所だった。

二人の目の前にはあからさまに存在感を振りまいている男が一人、

立ち止まっていた。

「一つ聞いておこう、貴様等は『八皇』か？」

「半分イエス」「半分ノーよ」

二人が同時に言う。

「確かに俺達は『八皇』だった、だが今は『八皇』ではない」

「確かに私達は『八皇』でした、でも今は『七皇』と呼んでいるわ  
息のあったいいコンビだ、相手にすればこれほど厄介なペアはいな  
いだろうな、そう考える皇。

二人とも、皇の放つ気によって怯むどころか、反応して逆にこっち  
がプレッシャーを感じるようだった。

「さすがは『八皇』・・・いや『七皇』だったな・・・ところでそ  
れは一人抜けたと言うことか？」

「そうね」「かもな」

「要するにとても曖昧な位置にいると見て間違いなさそうだ・・・  
ではまずあなた達から召し上がりましょうか!!」

皇は『才気』を全快にしながら二人、臼と木根に向かって全身する。

「いい心がけだ、相手が誰であろうとも全力で行く・・・だが、相  
手を間違つたな」

「私達にするそれは単なる自殺行為に過ぎないと言うことを理解さ  
せてあげるわ!!」

日が沈んだ頃、一閃は野宿の準備を完璧にすませている。

「昴・・・か？」

「はい・・・一閃様、昴です、今回は一閃様にどうしてもお聞きし  
たいことがございました・・・」

「なんだ?・・・それと様付けは辞めてくれ、何か不愉快だ」

一閃は珍客に目の前の切り株を勧める。

昴はお礼を言ってそこに座る。

「一閃様・・・一閃様はもう『地獄の使者』の元帥ではございませ  
んよね?」

「ああ・・・」

「なら、あの約束は・・・？」

「無効だ・・・昂、お前を信頼して一つ頼み頼みたいことがあるんだが・・・」

「・・・何でしょう？」

「それはな・・・」

それはまだ残っている『地獄の使者』の元帥としての、仲間を思う心の塊。

「剛毅隊長！大丈夫ですか！？」

傷ついた剛毅の元に数名の構成員が集まってくる。

「今すぐ、『正義の悪魔』に向かうぞ・・・出発だ」

剛毅はそれだけを言って、自分を支える手に全体重をゆだねた。

第八章：皇VS・・・（前書き）

やっとここまでできました・・・まだまだストックがあるからドンドン投稿出来ると思いますw

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## 第八章：皇VS・・・

「臼と木根のペアが向かつてる・・・相手は死んだな」  
自室で疾風は呟く。

部屋には誰もいない、『防音の風』を部屋中に張り巡らしているため中からも外からも音は入ってこない。

「・・・腹が減った、飯食いに行こうかな」  
疾風は自炊を可能としている。

彼は『七皇』が休んでいるとき、小国の軍隊で修行をしていたからだ。

だが、今は自炊はしない。  
いや、したくないのだろう。

疾風はすぐに食堂の空間に足を運んだ。  
「何か簡単に食べるものをつくってくれ〜！」

声を大きくして厨房の奥に声をかける。  
「は〜い！今作るからそこで待ってて〜！」

梨理が厨房の奥から返してくる。  
疾風は備え付けられている席についた。

「ままごとか・・・この歳で」  
不意に後ろから声を掛けられ、慌てて危うく椅子から落ちそうになる疾風。

「『道敷大神』か、ビックリさせるなよ」  
「ふむ・・・やはりそのようなことを考えていたのか？」

『道敷大神』は意味深な微笑とともに出ていった。  
ドキドキしながらそれを見送る疾風、奥からいい匂いが漂ってきた。そこにもう一人、寝起きみたいな声で入ってくるやつがいた。

「おはよ〜」  
今は昼だ。

「なんだかおいしそうな匂いがしたから起きちゃったよ〜」

どんな嗅覚だよ。

そして入ってきた女は厨房の奥に向かって叫ぶ。

「梨理~~~~~!!!僕にもご飯作ってよ~~~~~!!!」

「おはよ~~~~鋭美~~~~!!了解で~~~~す!!!」

疾風はなんとなく嫌な予感がしてきた。

『七皇』の中で最もこの手の話題にするどい奴は鋭美だ、その鋭美が今この場にいてわなにか嫌な感じしかない。

しかしかといって梨理が作っているであろう料理を無駄にするわけにもいかず悩む疾風。

そんな疾風をよそに真向かいの席を陣取る鋭美、その顔は不気味に見えるくらい笑顔だった。

「~~~~~なんだ、鋭美？」

「い~~~~や~~~~なんでもないよ」

否定はしていても絶対に確信犯とわかる態度に少々腹が立つ、だがここでそれを見せれば相手の思うつばだ。

「そうか~~~~~」

なのでそこで話を打ち切ろうとした。

何故かあんまり食いついて来なかった鋭美に感謝しながら梨理の料理をまつことにする。

ボソツと鋭美が呟いた。

「~~~~~侵入者」

その声は誰にも届かなかった。

華鈴は自室の中にある展望室で外の景色を眺めているように見えた。だが、違う、その部屋にはもう一人『道敷大神』ではない誰かが立っていた。

「何のようだ？」

華鈴はもの凄く不機嫌な声でもう一人の影に声を掛ける。

「元上司と現部下の様子をみにきてあげたのよ、喜びなさい!」

「~~~~~なら私の胸にある手をどけてくださる？」

影はしばらくだまつた後、名残惜しそうに華鈴の胸から手を離す。

「それで、様子を見に來ただけなの？」

華鈴はめんどくさそうに言う。

「ええ、あなたがどのようにしてイレギュラーな二人を対処しているか見てみようと思ってるね、それにその内の一人は大変興味がある」「私を知る彼等はとても別次元の『存在』であり、まったくの『違う』ものだった」

華鈴は報告するような感じで言う、どうやら本当に影は華鈴の上司のようだ。

「一人はわかるわ、私がしりたいと言うならばもう一人のほうよ」

「・・・あくまで私の仮説だけど、彼は機械ね、それもこれから先人類がたどり着くかどうかくらいのこと・・・」

「へえ・・・根拠は？」

「根拠になるかどうかわからないけど・・・彼には人間味があるすぎるのよ、そう『不自然』なくらいね・・・」

外には青空が広がっていた。

「囲まれたな」

「こんなの囲まれた内に入りません、私達の移動要塞、『梨理王国』をなめないでよ!!」

「自信あるの？」

「あるにきまつてるわ!!」

「そう、なら頑張ってるね・・・・・・忠告しとくけど近くに彼もいるもとを忘れないでね、足下をすくわれないように」

女は空間をなぞる。

しばらくして空間が割け、中から何か心地よいような空気が垂れ出てくる。

女はその中に入りしたから空間を閉じていく。

「また来るわよ、華鈴」

「二度と来ないで、紅葉」

空間が完全に閉じたと同時に『道敷大神』が中に入ってきた。

「独り言か？」

「違うわよ………何人いるかしら？」

『道敷大神』が遠回しな言い方をすれば人一倍以上に時間がかかるため、用件だけを先に聞いておく。

「………かなり多いな、一つ二つじゃない、これは一組織並だ、それに全員が全員かなりの精鋭だぞ」

「こつちが勝てる確立は？」

「良くて60パーセントだ、しかし悪ければ全滅も考えられる……彼奴が便乗してくればの話だが」

「そう、それなら心配いらないわね、私の予想だと彼は来ない、みんなに伝えて、すぐに戦いの準備を整えてって」

『道敷大神』は頷いてから踵を返して部屋を出ていった。

華鈴はそれを見送った後部屋にかけてある一つの服を取り出す。

その背中には紅く、どこか恐怖を感じる色でもって、

『七皇』

と書かれていた。

華鈴はそれを羽織る。

「さて行きましようか、私が楽しむため、任務を遂行するため、そして……決着をつけるために」



・信じる事、強くなるうとする心(前書き)

はあ・・・サブタイトルがあまり関係なくなってきたW  
気にしないでねW

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

・信じる事、強くなるうとする心

【俺は……いきているのか……？】

全身が痛む、それに加えて自分で立つという気力さえ起こらない。このまま此処で死んだ方がいいとさえ思った。

だが、翔汰はいつの間にか開けた平野から涼しい木陰に移動していることに気づいた。

無理矢理体を起こして辺りを見ようとすると、体は起きあがらず、

『才気』のコントロールも上手くいかない。

うっ、っと軽く苦痛が漏れる。

そこで後ろから自分を支えるように手が伸びてきた。

「無理しないで、翔汰……今のあなたは動けるような体じゃない

……」

「昂か……どう、してここが……？」

「一閃を探していたら倒れていたあなたをみつけたの……だから、無茶はさせない、私が見てるまえでは」

昂はそう言って翔汰の頭を自分の膝の上に乗せる。

翔汰は無理に起きようと何回もトライしてみるが、その頭が昂の膝を離れることはない。

ソレを何も言わずに見守る昂。

その行為は数十分間続けられた。

「くそ……！こんなはずじゃなかった……俺は一閃を目覚めさせたかっただけなんだ……」

心底悔しそうに、そして達成できなかった悲壮感に、そして簡単に負けてしまったという敗北感をにじませて言う。

「彼奴は俺の目を覚ましてくれた、俺は仕方ないと言いながらも彼奴に付いていこうと思ったんだ」

それはかなわなかった、一閃は立ち止まらなかった、振り向きさえしなかった。

だから悔しい、されたことを出来ないことが。

だからもういい、翔汰はここではじめて自分の生きる意味を、また、失った。

「あの・・・！翔汰・・・！」

何か言い出そうとした昴を弱々しく、それでも素早く制する翔汰。

「昴、お前は帰れ、早く戻らないと、俺は何のためにアレを一閃に願ったんだかつてなる・・・」

翔汰がやっとこさ体を持ち上げて、木に背を預けながら弱々しく立ち上がる。

そしていつになく真剣な面もちで辺りを見渡す。

「どうしたの？」

昴はまだソコに座っていた。

「立て・・・昴、俺が合図したら一直線に組織に戻って・・・出来ればもう二度と戻って来るな・・・」

「いやよ・・・なんつ・・・！」

「頼む、行ってくれ、俺も後で戻るかもしれない、それまで俺を持つていてもいい、だから、今は行ってくれ」

「・・・」

それでも昴が歩き出す気配はない、だが、何も言い返せないようだ。翔汰はソレをみてほんの少し表情をゆるませると、ソツと昴を抱きしめ、小声で言い聞かせるように、

「昴・・・大丈夫さ、俺は戻るから、家に帰って楽なベッドでも用意しといてくれ・・・頼む、昴・・・！」

それを聞いて昴は躊躇いながらも組織に向けて走り出した。

「はあ・・・はあ・・・出て来いよ・・・いる、はずだ・・・分かっている・・・」

音も気配も匂いすらも感じさせずにたちまち翔汰の周りを囲むように黒装束の人が現れた。

「ボス、昴様に反逆の意思あり、制裁を開始します・・・付け加え翔汰様にも消えていただきます」

「・・・やだね」

「いえ、決定権は私達にあり、弱っているあなたでは私に勝てません、どうか抵抗なさないように、安らかに殺せません」

その物言いに対して翔汰は鼻で笑う。

「抵抗する権利はある、これでも隊長の格だ・・・昴が逃げ切るまで・・・俺は諦めたりはしない！」

炸裂するのは最後の力を振り絞って最後になるかもしれない戦いを開始した翔汰の『才気』の本来の姿。

「昴・・・生きるよ、お前にはその権利がある」

「やるな・・・さすが『七皇』だ！」

皇は肩で息をしながら目の前にいる巨体なカップルに目を向ける。

「あなたこそ、怪物君」

「貴様もな、怪物野郎」

対してこっちはそれほど息を切らすことなく悠々と皇の前に立っていた。

【ちっ・・・これが『七皇』か、俺がここまでやられるとわな、だが、目的は達成された】

皇は端から見れば強がりとも見れる笑いを浮かべて、言う。

「あんたら二人を除けば、5人だったな」

「そうよ」

「そうだ」

「5人でどのくらい持つかな、例えば精鋭が集まった1万以上の軍勢に・・・」

皇はニヤリと笑い、一瞬の隙を衝いて撤退した。

「くそ！本部のほうか！」

「戻るわよ、曰！」

二人は後ろを振り返ったがそこで見れたのは、いつの間にか小さくなつた本部。

「つち・・・！あの野郎、俺等をここまで誘導しやがったな！」  
「それに、私達も本気でしたから障害物が多すぎる！！」  
「畏だったのか、二人は互いに畏にはまった馬鹿ときめ、戻るため奔り始めた。」

「二人は、いないのかしら？」

「どうやら相手が相当のやり手のようで・・・だいぶ遠くまでやられてしまいました、今帰還中です」

大机の一角に華鈴は座っていた。

答えたのは反対の一角に座った『道敷大神』だった。

横から疾風が言う。

「俺が出て風障壁を展開しておくか？少しは保つと思っぜ」

「僕は簡単に抜かれる自信あるけどね」

鋭美が自慢げに胸を張ると、ソレを憎らしげに、

「ないのがまるわかりだぞ、鋭美、そんなに胸張るんじゃないよ」

「あれ？貧乳好きじゃないのかな？梨理をよく見てたからそうかと思っただよ疾風」

「喧嘩は止めなさい二人共、私からも特にない、なので提案する」

「なんだ？」

「ここは私が引き受けるわ、その間に二人一組で逃げて頂戴、梨理は新しい要塞の再建、疾風はその護衛、他は適当に暴れて頂戴」

5人はうなずき、席を立っていく。

「鋭美！あなたは彼の監視を続けてくれるかしら？」

「わかったよ、『道敷大神』と一緒にだね、二人にも適当に暴れるように言っておこうか？」

「ええ、頼むわ」

「幸運を」

「あなたこそ、幸運を」

『悪魔の正義』の入口で大勢の人が溜まっていた。

そこに提督の愛が現れる。

「ようこそ『悪魔の正義』に、歓迎します、これからは世界一の組織の一員としてがんばってくださいね」

その愛の前に剛毅は両手をあげて、

「俺は剛毅・・・『秩序』のボスとして代表として愛様に忠誠を誓います」

「よろしくね、剛毅、その体どうしたの？」

愛はぼろぼろに傷ついている剛毅を見て驚いたように聞く。

「ちよつと出る前に一悶着ありまして・・・大丈夫ですそれほど問題でもありません」

剛毅がそう言うとき愛はそれ以上追求せずにそのまま準備していたパーティーが始まった。

剛毅はそれを無視して外で涼むことにした。

そこに愛が出てくる。

「どうしたの？」

「・・・俺より強かったんだ、半端なく強かった、でも俺は致命傷を一つも負ってない、俺は本気だったのに・・・」

剛毅は悔しそうに言葉をつなぐ。

「・・・彼奴は最後まで俺の心配をしてくれて、そして、どこまでも手加減してくれた・・・！」

ほんとに悔しそうだった。

その肩に手が置かれる、小さいが暖かく、とても硬い手だった。

「それでいいんだよ、私をはじめて負けたとき、相手はこういったわ」

後ろから愛に抱き留められるような格好になる剛毅。

「負けたことを悔しがらんじゃない、勝たせてしまった自分の弱さを嘆け、そしてそれを糧に強くなれ」

誰か、知っている人がいいそんな言葉だった。

「俺は一回しか負けたことはない、それ以来強くなりつつけた、それが俺とお前の差だ」

「それは……」

「これで俺とお前は対等だ、次会うときは絶対に手を抜かせないように努力しろ！それが負けた者の義務であり、勝って貰った奴へのお礼だ！」

「……いつせつ……！」

言い出そうとした剛毅の口を押さえる。

「誰でも良いのよ、でもね、それで私は強くなった、今では彼に手を抜かせない自信はあるわ、あなたは……どうなるのかしら？」  
愛は離れて、会場に戻っていった。

剛毅の手は硬く握りしめられていた。

・信じる事、強くなるうとする心（後書き）

ようやくここまでできましたか・・・w

スペックの量もかなり減ってきております・・・

少しずつだけどすすんでるけどね



・帰ってきた安らぎの風の法度、優しい雷の覇者（前書き）

おお・・・なんかめちゃくちゃ強くなっているような感じがw  
僕のことながら少々呆れてしまいそうですw

まあ何はともあれ面白そうな雰囲気に来た感じがしますw  
これからもよろしくね〜

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：帰ってきた安らぎの風の法度、優しい雷の覇者

【俺は一体何をしているのだろうか……俺はこの先ずっと、一閃の下で戦うつもりだったんだがな……】

水鏡は『覇光』に与えられた『紡ぎの糸』の部屋にいた。

ここには何も無い、すべて自分で用意しなければならぬ。

だが今の水鏡には何も出来ず、唯、そこに居ることしか出来ない。

「俺は……間違っていたのか？」

いやそれは無い、自分の問いにすぐ否定する。

「俺はちゃんとやっていた、そして向こうが先に破ったんだ、俺はそれで解放されたんだ……」  
だがそれでいいのか、不安になる。

まさか自分は間違っているのではないのかと。

「間違っていないんだ、俺は……間違ってたんか……」  
でも何かが引つかかる、それに加えてこの空虚な感じはなんなんだろう。

ドゴツ、突然部屋の壁がぶち破られた。

「頭は冷めたか？」

彰はそこから水鏡を見下していた、隣には冥がいた。

「彰……か」

「今度は本気で殺すぞ、水鏡……俺はお前がここで分かったことを俺にぶつけて見る……！」

水があふれ出し、部屋を満たす。

水鏡はそれに飲まれる、抵抗はしない。

息が出来ない、死ぬかもしれない、それでも、水鏡は何もしなかった。

でも、ボンヤリとした意識の中で生きている。

「俺の……今までの……あの組織での動きに何か意味があったのか……」

ボンヤリ、はつきりした答えは出てこない。

『覇光』、外部組織にその名を轟かせ、警護と防衛、たまに秩序の役割さえもしてみせた組織。

「水鏡、お前はなんであの組織にいたんだ？」

「そうだ、俺はなんのために……。」

「ただ、一閃に負けたから入ったのか？」

初めはそうだったはずだ、俺はこれでも一組織の隊長を務めた男だから。

だが、違う、それだけではない。

「そう言うのであればお前には勝てない、どうあがいてもお前はそのままそこに這い蹲るだけだ!!」

ああ、俺はそれで終わってしまうのだろうか……。

ガハッ！

口から血を吐く。

目の前が霞み始めている、だが、ここで倒れるわけにはいかない。周りにいる黒づくめの奴らの一人が告げる。

「もう諦めてください翔汰様、これ以上はあなたが不利です、それにどれだけ頑張っても昴様は必ず……。」

「……ああ？させねえつつてるだろが!」

会話を終え、また渾身の力でもって風を繰り出す。

「あきらめが悪いですね」

冷ややかな声が耳元で囁かれる。

いつの間にか一人の黒づくめが翔汰の背後に立ち、剣を喉に突きつけていた。

動けない、翔汰はそのままの状態で固定されてしまう。

さらにもう一人のくろづくめが何かを運んできた、翔汰にはもうソレがなんなのかわからない。

「それでは『闇の影』昴様の処刑を開始します」

残酷に告げられた事を耳にすら入れていない翔汰であった。

「角理、よく眠れたか？」

「おかげさまでね、それと情報よ、『八皇』はある組織からの攻撃を受けて散り散りに逃げてます」

角理はめんどくさそうにソレを告げて手を前に出す。

一閃はそれをなんのことかと見る。

「・・・私の荷物返してください、それからこの爆弾を外して！」  
今度はもう一方の、話すと爆発すると言われたものを持っている手を突き出す。

「ああ、それか、離して良いぞ、それ偽物だからな」

「え？」

角理がそれを離すが何も起こらずに、ソレは地面を転がる。

角理はしばらくソレを眺めてから、ハツと目を見開き、一閃を睨み付ける。

「まさか、騙されるヤツがいたとわな」

ソレを拾い、カバンにしまう一閃。

そして半歩後ろに下がる。

その眼前を角理の精一杯の力を込めたパンチが通り過ぎる。

「騙したな！！一閃！！」

通り過ぎた拳を受け止め、力任せに宙を介し、地面に叩きつける。

メキツと痛々しい音が聞こえるが気にしない。

「騙される方が悪いんだ、さっさと行くぞ」

そのまま角理の荷物を置いて歩き始める。

「何を寝ている、さっさと行くぞ、今度は適度に大きめな酒場などに行くぞ」

「あの・・・手伝ったりは、してくれないのですか？」

「・・・お前、そこに好きでねてるんだらう？」

「・・・はい、わかりました、自分で頑張ります・・・覚えてるよー！」

角理は弱々しく立ち上がって一閃の後に付いていく。

ちょうど隣になつたくらいで、一閃は立ち止まった。

「あ……こりゃあぶないな、ちよつと頭下げとけ、角理」  
唐突に角理の頭をわしづかみにしてじめんにたたき伏せる。

「ぐっ……二回目……！」

そんな眩きが聞こえたか聞こえなかったというくらいに轟々と氷の柱が立ち貫いてくる。

その爆音の中で可憐な声が響く。

「よく気付いたわね、一閃、その子は……あなたの新しい恋人かしら？」

目の前に白銀の髪、淡い蒼の瞳をした華鈴が仁王立ちしていた。

一閃は華鈴を睨み付ける。

華鈴はそれにマツタク動じることなく、いや、ふるえを手だけに抑えて、立っていた。

「一閃、話し合いましよう、戦いでは解決しないこともあるわよ」

「てめえと話すことなどない」

一閃は次の言葉を待たずに、手に炎を宿し、ソレを振るう。

辺りは一瞬にして炎に包まれてしまった。

俺は、結局は何がしたかつたんだ……。

一閃に敗北し、全てを無くして一閃に仕えた……、それは何故か？

「俺は……」

手に力を籠めた。

自分を証明するものなど簡単なものでいい、簡単ですぐに説明が付くもの。

「俺は……俺は！一閃を支える！そして、自分自身を一閃のために掲げるんだ！！」

それは『霸光』を任された者の義務で有り責任。

水鏡の『雷人』はそこで進化する。

雷が自身を纏い、そして雷と人が半分融合する。

そこは脚。

「雷速蹴り」

雷のスピードのまま放たれた蹴りは簡単に彰を捕らえる。まともにくらった彰は、軽々と遠くまで飛ぶ。

そしてワクワクとした顔で言う。

「そうだ！水鏡、お前はそうでないといけない！それがお前だ！」  
『地獄の使者』の大空 水鏡だ！！」

両手を上にあげ、莫大な量の水を収束させる。

それをすべて無理矢理凝縮させ、槍状にして水鏡に放つ。

水鏡はその脚で以てそれを蹴り返そうとするが、蹴りが当たった瞬間破裂、水が散弾のように奔り抜ける。

「つく・・・！！」

咄嗟に顔を庇った腕に水が大量の矢の如く当たってゆく。

「だが、まだまだ！そんなものでわ無いはずだ！一閃を、そんな脆弱な力で支えられると思うなよ！！」

その槍を数本、いや、崩れれば何億ともなる様なばかでかい水の槍を片手に彰は顔を綻ばせる。

「これは俺の最大の攻撃だ・・・水鏡、お前なら是を破って見せてくれるだろう」

大きく上体を後ろに反らせ、手にありつただけの力を籠める。

水鏡が雷速で後ろにさがったのと同時に初動だけの腕と腕以外で無理矢理大槍が放たれた。

そして、一瞬にして空気抵抗をくらい分散していく。

彰は、ソレを放ち、様子を見るが、

「水鏡、お前は何で前に出なかつたんだ、いくら雷速とあれ、この数億に匹敵する水槍を防ぐことや避けることが出来るわけないだろうに」

その時水鏡の顔が不敵に綻んだかと思えば、急停止し、あるうことが前にでた。

それもかなり無理をしているかのような速度、それに加えて手を広げ空気を巻き込んでいく。

「ハッ！！！！」

水鏡はまたも、そしてあろう事か急停止して、身を捻りながら渾身の蹴りを放った。

結果雷速の蹴りと巻き込まれた風、それに加え少しの帯電した大気は、轟々とならしながら数億の槍を消し飛ばした。

彰はそれを呆然と見つめるしか出来なかった。

自分の一番の攻撃を防がれたどころか、打ち負けてしまったからである。

「彰！！！」

声を呼ばれる。

「俺は『地獄の使者』に戻るぞ！」

待っていた言葉、そして此处で彰はこの男には逆らいたくなかった理由を知った。

この男は・・・自分よりも脆く、そして、自分よりも遥かに強かったのだった。

「お前も来いよ！」

自然と顔が綻んだ、これは『あの場所』に居たときには無かった、自然な笑顔。

「ああ、どこまでもついてくぜ水鏡、俺はお前の部下だからな」

ソコには戦った二人と、大勢の『覇光』の構成員、そして、最も遠くに微かに風を纏った冥が立っているのだった。

『地獄の使者』の威光を広める為の優しい雷は新たな進化を遂げてこの瞬間、戻ってきた。

「翔汰！聞いて！お願い！翔汰！」

【誰かが俺を呼んでいるのか・・・フンッ、かまうものか、所詮はここで死ぬ、聞いた所で意味は無い】

翔汰は完全に手足を封じ込められた状態で顔すら上げない。

目の前ではいかにも殺す為の道具がそろい踏みしており、翔汰はそれを眺めていた。

【あの鎌がいいかな、殺されるなら・・・】  
布の様なものが目の前をちらついてもそれにたいする興味は湧かない、ただ漠然と何かが通ったと思うくらいだ。

【首だな・・・やはり首を落とされるのが一番良い】  
そう考えるだけで首の辺りがちくちくとしてきたが、翔汰はそんなこと気にしない。

「翔汰！ねえ翔汰！！聞いてるの！？翔汰ってば！！」

【五月蠅いな、最後までらい静かにさせてくれないのか？俺はもう覚悟が決まったんだ】

ふと翔汰は何かに引つかかった。

【何故覚悟が決まったんだ？】  
大したことはない、自分が覚悟が決まったと言えば決まった事になる。

だが、それでも翔汰は不自然な感覚がぬぐえなかった。

【俺は何故此処に居る・・・俺は殺されるためだけにここに居たのか？】

ちよつと前の記憶さえ飛んでしまった、もう何も考えれそうになかった、でも、翔汰は何故か考えてしまった。

「翔汰！翔汰！」

【俺を呼んでるこの声はなんだ？・・・顔を上げれば見れるだろう、だが顔が上がらない、どんなに頑張っても顔があがらない】  
上げようとするとたびにちよこつとだけ顔が揺れるだけだった。

【だが、懐かしい様な、嬉しくさせてくれる様な、心が落ち着くような声だな・・・一度でいいから顔が見てみたいものだ】

今度はさっきまでの呼びかけとは違う、明らかな怒声が頭に響いた。  
「翔汰！！！！」

そのあまりの大きさに、反射的に顔を持ち上げることが出来た。  
ソコにいたのは天使の様に綺麗な女性だった。

「あ・・・あ・・・あ・・・」

声は出ない、かろうじて口の間から音が漏れる。



そんなことはお構いなし、自分も捕まえられてるにもかかわらずその女性はぐいぐいと顔を近づけてきた。

「翔汰聞いている？聞いているなら目を閉じて」  
翔汰は目を閉じる。

安心したような気配が瞼越しに伝わってくる。

そして優しく告げられた。

「翔汰、伝言、一閃様から・・・許す、お前達はもう自由だ」  
意味が分からなかった、今の翔汰には一人でこれを理解することは出来ない。

だが、そこにはもう一人、いた。

「翔汰、思い出して、私達の記憶を、優しくった、翔汰を、そして、荒れていた時の、翔汰も・・・」

初めは『悪魔の正義』に所属していた。

そこで三狂として畏れられていた。

誰かに出会い、同時に誰かを好きになった。

『悪魔の正義』は抜けて別の組織に入った。

まだ名を広がっていない組織だった、だがそこには快い空間と仲間がいたはずだ、そして、彼女もそこにいた。

彼女の危機を誰かに聞き、彼女を守る為に何かをした。

彼女は反対したが、おれは無理矢理押し切った。

約束は・・・これは覚えている。

「許すと言つまで、お前達は結ばれてはいけない」

それが、その、誰かとの約束だった。

俺はそれきり、ずっとソレを守ってきた、そして破る気はさらさらなかった。

そして・・・。

【そうだ、ここで何かがあったんだ、思い出せ、過去もひっくりめて全てを・・・】

そうだ、約束は破られた。

思い浮かぶのは目の前にいた女性の名前、そして破った本人の名前。

【昴……一閃……】

昴は俺が約束を守るたびに嫌になったように可愛らしく怒った。

俺はそれが見るのが嫌だった、でも、昴の存在が近くにあるだけで嬉しかった。

【俺は昴を、守りたい……そうだ、俺は昴を守る、守らなきゃいけないんだ！】

翔汰はそこで考えるのを止め、カツと目を開く、目の前には昴と、黒装束の者ども。

見えないのは拘束された自分と背後に居る多分黒装束の者ども。

体は動かなくなっている。

だが、そんなことあり得るわけがなかった。

「精神の束縛か、『闇の影』の特殊能力だったな」

また目を閉じて精神を収束していく。

「だが、俺にはもう、それは通用しねえな、俺も一応その訓練受けてるからなあ……」

そう、誰かの代わりとして受けた、今日の前に居る女性を守るために。

また目を開き、一気に風を吹き付け黒装束に限り吹き飛ばした。

目の前には服を剥がれた女性、昴がへたり込んでいる。

翔汰はそれに自分の来ていた上着をかける。

「昴、ちよつと待つてる、今片づけてやる」

次に昴に攻撃されないように全員に対して威圧をふりまける、そう、

『まき散らす存在感』。

それに加えて、一人一人、個々に向けての殺意、『まっすぐな殺意』。

それがそろった時、翔汰の、『暴風』は真なる力を解放した。

「烈風刃！！」

いつもは大きなひとつの風の刃が飛び出るだけなのだが、今回は違

う。

今回は、大きな風の刃が幾重にも重なり、あたりに飛び回る。黒装束の半分は片づいた。

残りの者どもは、自分の『才気』を使い精神崩壊をまくろんでいるようで、何回かからだが止まろうとしてしまっ。

だが、翔汰はそのたびに昴の顔を見てそれにうち勝った。

翔汰の頭の上に莫大な風の塊が収束する。

ソレを無理矢理に押し込み、その周りにまた空気を纏わせ、また押し込める。

そしてできあがったのは明らかに重そうな外見を伴った空気の球体。すでに轟々という音すらも聞こえない。

「死ね」

ソレを割る。

渾身の力でもってその塊を粉碎した。

中身が暴走して、風が荒れ狂う、もちろん、発動した本人と、昴も例外なく襲いかかってくる。

翔汰は昴を抱いてじっと脚を踏ん張る。

やがて風は止み、あたりに静粛がおとずれる。

その中心に二人はいた。

「昴……お前のことが大好きだ、だから、俺は俺のけじめをつけてくる、でもな、今度こそ……」

「分かっているわ翔汰、気持ちいいベッドでも用意して待つてるわよ……行ってらっしゃい！」

翔汰は軽く微笑み、昴の頭をぐしゃぐしゃと撫でた後、走り始めた。今度は暗く重い声ではなく、明るく尊敬の念を込めた声で、

「いいい~~~~~せええええええんんん  
!!!!!!!」

咆哮高らかなそれは遠く空の彼方まで響きそうだった。

そしてこの瞬間、『地獄の使者』に安らぎを与える風、法の番人が戻ってきた。

…再び集まろうとする仲間達

水鏡は彰に『地獄の使者』に戻っているように指示を出した。自分もすぐに戻ると言って。

「やっと戻れるな、『地獄の使者』に・・・」

「そうね、私は一刻も早く戻りたかったよ」

彰と冥は、帰りの路についていた。

「・・・あの時、何で水鏡に力を貸したんだ？」

「気付いてたの？」

「もちろんだろ、俺を誰だと思ってるんだ？」

「私を怒るの？」

「いや、ただ、その動機だけは知っておきたいと思ったただけだ、どちらにせよ、俺は負ける気だったんだが・・・」

彰は淡々と言うが、事実あの水鏡でさえかなわないような力を彰は持っていた。

だが、それは使わないようにしていたのだ。

「彰にも気付いて欲しかったのよ、あなたが水鏡さんに気付いて欲しかったことと同じ事を私はあなたに」

冥はそれだけ言って歩くスピードを速めた、その耳が赤く染まっているのを必死に隠しながら。

彰は冥の歩くスピードに自分のスピードを合わせた。

「そうか、ありがとな」

そのまま静かに歩いて行く、二人仲良く、寄り添いながら。

旧立帝國高校の特別クラスには今二人の人間がいた。

「ここ的人数も減ったな・・・なあ、麗香」

部屋のすみ、いつもの場所にいるほうがボスの隣、つまりはまた、いつもの席にいるほうに声を掛ける。

「そういうこと言わないの、再砂、私は私の目的を果たせばそれ

でいいのよ、それ以外は余分な行動」

「良い考えだ、でわ俺もそれに同乗させて貰おう、俺の目的は例えどんなことがあったとしても、『地獄の使者』を守り抜くということだ」

俺もソレは守る、そうだけ言っつて、窓の外を眺める。

「きたな・・・」

ボソツと呟いたそれを麗香はきくことが出来なかった。

そこに一組のカップルがはいつてきた。

「久しぶりだな、麗香」

「お久しぶりです、麗香様、彰と冥、ただいま戻りました」

正規の『地獄の使者』の構成員でわない二人だった。

彰は我が物顔で一つの席を陣取る。

その後ろで控えめに冥は立っていた。

「えらく違うんだな・・・性格的に」

再砂はボソツとそんなことを呟いた。

「瞬夜がそんなことを言うなんてな」

「彰、俺の名前は瞬夜じゃ無くなったわ、俺は再砂、真『地獄の使

者』の最強の守護者だ！」

彰は呆然と見つめていたが、全てを理解したように頷くと微かに笑った。

「っで、何のようかしら？彰、それに冥」

「良い知らせだ、水鏡が帰ってくる、『霸光』の復活だ」

故に、と続け、

「俺は『霸光』に、冥は『近衛』に行く・・・これからもよろしくな」

ソレを聞いた麗香は、安心したように胸をなで下ろして、

「よかった・・・これで私は私の目的に集中できる、ありがとね、

彰、冥」

「麗香様、目的とはなんですか？」

冥が聞くと、先に再砂が反応して、

「俺はソレを聞くわけにはいかない、だから外にいる・・・終わったら呼びに来い、彰お前が一人だな」

「俺か？・・・わかった、終わったらいく、何処にいるんだ？」

「そだな、じゃあ俺の部屋で待っている、必ず一人で来いよ」

そう言つて入口から出ようとして、冥の横を通るとき、冥だけに聞こえるように、

「お前にとつて不利益はないことだ、不安にならなくていいぞ  
そうだけ言つて全速力で駆けていった。

心持ち部屋の空気が軽くなつたみたいだ。

「自分の砂まで離さなければならぬほどのことなのか？」

「???・・・まあいいわ、二人には聞いといて貰う、私の目的、私の意思を」

麗香は静かに話し始めた。

「まず初めに、私の目的、それは、一閃を守ること、一閃が守ろうとした全てを守ること」

胸に手を当て心持ち顔を赤らめた麗香が言う。

彰と冥はソレを黙って聞く。

話は、始まつたばかりだ。

「もう一度いきでやろう、なんだって？・・・水鏡」

「大介さん、俺は『地獄の使者』に戻ります、『紡ぎの糸』を抜けます」

ゴクゴク普通のカフェの店に二人はいた。

一人は何処の誰でも知っているような有名人、『紡ぎの糸』総指揮  
大涯 大介。

もう一人は最近『紡ぎの糸』に入った元『地獄の使者』『霸光』の  
ボス、大空 水鏡。

二人は今あることについて話し合っている。

「『紡ぎの糸』は繋がりを重んじる組織だ、故に脱退など認められないと言っているだろう？」

大介はウエイトレスを一人呼んで、コーヒーを注文する。

「お前もいるか？」

「結構です」

後甘いケーキも頼む、そう言っただけでまた正面の水鏡を見る。

「何故急に抜けたくなっただんだ？そもそもあちらで地位が無くなっただからきたのであろう？何故戻る必要がある？」

大涯の目は一瞬たりとも水鏡から離されない、そう、怖いくらいに「俺はやるべき事があつたんです、だから戻りたい」

「そんな理由で戻りたいのか？そも、もしそのやるべきことが出来なかつたらどうする？また逃げてくるのか？」

ウエイトレスがケーキとコーヒーを運んできた、大涯はソレらを受け取り、コーヒーに砂糖とミルクをいれる。

それでも目だけは此方を向いているようだった。

「どうするんだ？多少力を付けたようだが所詮はその程度、俺クラスかそれ以上のやつらがくれば楽に負けてしまう力だ」

「……………それでも、戻りたいんです」

「ふむ、それほどの硬い決意か、だが、もう少し早くにそれに気が付いていればよかつたな、今ではお前は俺の部下だ」

コーヒーを啜り、少し間をおいてから、

「優秀な部下を見放すほど、俺は余裕はない」

「ありがとうございます、ですがそれでも俺は行きます、なんとかわれようが、例え許可されなくともいきます！」

「『紡ぎの糸』を敵に回すということか？」

いつになく敵意を剥き出しにした目が水鏡を射抜く。

その威圧感に多少後ずさる水鏡。

「別段自慢するわけではないんだが、俺の組織はどこに居ても必ずお前をみつけだす、そして必ず追いつめるだろう……それでも行くか？」

「…………部下達はもう戻る道に付いて戻っている最中です、後は俺だけ、もし攻撃するというのであれば俺は、戦います」

多少怯んではいるがそれでも精一杯力を籠めて睨み返す水鏡。

それを見た大介は、楽しそうに笑い、ケーキを頬張る。

「いいだろう、ならばその指揮は俺がとらせて貰おう、気を付けるよ、お前が背負っているのは、仲間の命だ」

大介は電話を掛ける。

《大涯だ、至急多くの兵を募ってくれ、出来るだけ強いのを頼んだぞ！》

その後二、三交わした後電話を切る。

「何をしているんだ水鏡、早く行かねばお前の仲間が死んでしまうぞ」

「そんなに早くあつまるわけが・・・」

「水鏡、集まるからこそ『紡ぎの糸』は『悪魔の正義』に対抗できただ、それはいつも変わることはないこの組織を強みだ」

不敵に笑い、勘定を済ませる。

「それに俺はこう見えて用心深いんだよ、気をつける、精鋭しか集めてないからな」

水鏡がハツと気が付くと辺りを囲まれていた。

すぐさま雷を脚と同化させる。

「水鏡、俺を楽しませろよ、さもなくばお前は死に、やりたいことは永遠に為せなくなるからな」

水鏡の姿は消え、何人かの精鋭部隊は吹き飛んだ。

大介は倒れる精鋭達の真ん中で鬼の様に立つ水鏡に目を細めながら、  
「戻る気は・・・ないんだな？」

「はい、すこしの間でしたが、大介さん、ありがとうございました！」

「フン・・・！さっさと行け、俺はまだお前を諦めたわけじゃない、帰るまで仲間を大切にしろよ」

『地獄の使者』の治安地域線をこそそとまたぐ女性がいた。

「まだ、ばれてないよね・・・」

ゆうっくりゆうっくり入っていく影の足を砂が捕らえる。



「おかえり、昴・・・翔汰はどうなった？」

再砂は笑顔で昴を迎える。

昴は多少引きつりながら、それをあんまり出さないようにして再砂を見る。

「大丈夫だ、俺はお前が出ていった時から知ってる、それよりも翔汰はどうした？」

「必ず戻ってくるわ」

昴はそうとだけ言って表情をかたくする。

「なるほど、それ以上は聞かないで欲しいってわけか、安心しろ無粋な真似はしねえよ」

再砂は昴を捕まえていた砂を離す。

「早く自分の席に行け、そこでこれからのことを麗香が話している、それでも聞いてこれからどうするか考えるんだな！」

再砂の姿が消えると、昴は言われた通りに学校に行こうとするが、何かを思いだして、その足を違う方に向ける。

## 第九章：一閃と麗香の会談（前書き）

会談にしては短い気がしますますがきにしないでw

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## 第九章：一閃と麗香の会談

辺り一面に炎の形をしている氷が覆っている。

その外に角理がいて、その中には二人の怪物が向かい合っていた。

「あら、あなたには話し合いという言葉は存在しないのかしら？」

「そんなもの俺とお前には無意味だろ・・・それに何を話し合うとでもいうのだ？」

片や血のように真紅の炎を全身に纏い、その『才気』解放中の燃えるような赤い瞳をした一閃。

もう一方はどんなものよりも冷たい氷を纏い、その周りを輝く氷の粒が漂っている華鈴。

「それよりもいいのかしら一閃、あなたも気付いてるでしょう？」

「それがどうかしたのか？邪魔するなら殺せばいい」

「出来るのかしら・・・あなたに？」

「・・・お前を殺して逃げればいいだけだろ」

また炎が沸き上がり周りの氷を溶かしていき、辺りにある水蒸気でさえ熱くなり大気を燃やしていく。

「あなたなら出来るでしょうね、でも時間はかかる、きてしまえば私はあなたの全てをばらしてしまうわよ」

あたりの燃えた水蒸気の熱を一瞬で奪い氷の粒としてそれを収束、そして加速をつけ真下に落とす。

すべてのそれは一閃に当たる直前に気化してしまう。

「そうだな、だがお前が逃がすとは限らない、それなら戦うしかないだろ」

「話し合いに協力してくれるなら、私は追撃しないと約束するわ」

渋々炎を消す一閃、笑顔で氷の机と椅子をだし一閃にソレを勧める華鈴。

それに座り外の華鈴に檄を飛ばす。

「角理！！そこで見張ってる！何か近づいてくるならすぐに呼べ

「!!」

外から非難の声やら嫌がる声が聞こえるがそれは無視する。  
再び顔を正面に向け、心底嫌そうな顔をする。

「そこまで嫌がらなくてもいいんじゃない？」

「俺はお前が大嫌いなんだよ、顔も見たくないし、なにより・・・  
その『存在』は鬱陶しくてかなわん」

「それは諦めて頂戴、『存在』は不変のものよ、それに私は結構あ  
なたのような人が好きよ」

微笑と相手を見透かすような瞳は揺らぐ事はない。

「つち、つと舌打ちして、本題に入ろうとする一閃。

「つで、何をはなすんだ？・・・いや、この場合要求と言ったほう  
がいいか？」

「あら、せつかちね・・・まあいいわ、私達の要求はこうよ、私達  
に近づかないで、これだけ、簡単でしょう？」

「・・・断る、おれは何があるとお  
前達を殺す」

殺意の籠もった眼はソレが本気であることを証明していた。

「ヤレヤレといった具合に華鈴は肩をすくめる。

「でわ、一時的に見逃すのはどうかしら？少なくとも一日、流石の  
私達でも大組織とあなたを相手にすればまげちゃうわ」

「・・・いいだろう、一日の猶予期間というわけだな、それならば  
ギリギリ許容範囲だ」

もう用は無いとでもいたげに席を立つ。

「もう少し良いでしょう座りなさいよ一閃」

「まだあるのか？それ以外には俺に興味はない」

なおも止まる気のない一閃をみて、愉快そうに呟く。

「『地獄の使者』に危険が迫っている詳細が聞きたくなくて？」  
一閃の動きがピタツと止まる。

「あら？興味ないんじゃない？」

「さっきの・・・どういう意味だ・・・!!」

「さあね、可能性はあるわよ、私がみんなに下した命令は自由に暴れるっただけ、なら大きくとも強くもない組織はかつこのまどでしよ？」

ふんつと鼻をならし再び歩き始める。

「あら？きかないの？」

「忠告だその組織には近づかない方がいい、死ぬぞ、お前の仲間」

「……どの口がそんなことほざきますか？」

「これは絶対だ、なんせあそこにはあいつがいるからな、あいつだけは『八皇』の強さを凌駕出来る術を持つてる」

一閃のそれは信頼と言えるものなのだろうか、ならこの畏怖するよ  
うで奥に見え隠れする愛情は一体……。

華鈴はそれ以上なにも言わなかったが、しばらくして席を立ち去っていった。

一閃は空を仰ぐ。

「なあ瞬夜、お前は絶対しなねえよな……なんせ、

」

## 第九章：一閃と麗香の会談（後書き）

ちよつとした伏線をはってみた。

これをどうしようかなやんでますがW  
まあすぐに解消されるとおもいますW

でわでわまた次回に！

ごきげんよう！

・帰る雷を阻む糸（前書き）

大介さんと戦闘かいしです!!

また来てくださった方ありがとうございます!  
はじめての方はこれからよろしく!  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：帰る雷を阻む糸

人が連なつて歩いているという異様な光景、その全てがある組織の構成員だとは誰も気付かない。

その内の一人が後ろからあらぬスピードで追いかけてくる影に気が付いた。

「おい！！あれをみる！！」

みんながソレをみる。

ソレは足を雷のように進らせ薄く残像を纏いながらかけてくる・・・

「水鏡様！！」

「む・・・やっと追い付いたか、少々早くないか、まあそれだけ俺が強くなったのか・・・」

水鏡は楽しそう笑顔を振りまけながらある程度の構成員を確認する。

「・・・全員か？」

「はい、我ら一同水鏡様の行くところどこであろうと着いていきます！」

水鏡は一瞬驚いた後、ある一人の顔を思い浮かべる。

【彰は・・・こいつらとは違うふうには俺を尊敬していたのかな・・・そうだといいが・・・そうじゃないのかもな】  
どうでもいっとその考えを切り捨てる。

【そんなことよりも彰が俺に着いてきてくれるとわかったほうが重要だ】

「水鏡様、どうかしましたか？」

いきなり黙ってしまった水鏡を心配してか部下の一人がたずねる。

「ああスマン、ちょっと考え事をな・・・お前達は走って『地獄の使者』を目指せ！」

「水鏡様は？」

「俺はちよつと用事があるんでな、後から行く」

その言葉に数人の組織員が振り返る。



「水鏡様我らも一緒に！」「水鏡様！」「もう離れません！」

「おいおい、俺は後で行くつていったら？」

水鏡はその反応が嬉しかったのだが、ソレをだせば俄然やる気をだすに違いないと思い、それをかくす。

「ほんとうで、ごさいますか？」

「ああ本当だ」

水鏡が言うのが早いのか、一瞬で周りを、覇気のある連中に囲まれる。

「あ……はいなあ……」

それぞれが臨戦態勢に入る中、一人の人間は足に力を籠める。

轟々と『才気』が放たれるその一瞬前、その人影は雷を迸りながら、他の『才気』とは格別した力を見せつける。

次々と吹き飛ぶ謎の使者達。

驚くのは敵だけではない、むしろその強さをみた仲間達でさえ一瞬その強さに驚嘆する。

「ああ、スマンな、やりすぎた」

その暢気な声だけが辺りに響く。

それを聞いて何人かの敵はその場を早々に立ち去っていく、多分相手の力量を計る事ができたのだ、そして加減されたことも。

そして残った敵は相手の力量を計る事が出来なかった、そして全力でもって始末される哀れな……。

「お前達、もう一度言う、先に行け」

その声ですべての仲間は我に戻って尊敬のまなざしを向ける。

「おいおい、そんなのはいいからさっさと戻って、そうだな、彰を呼んできてくれ」

「了解しました、水鏡様………御武運を」

「ああ」

仲間は一様にあるべき場所に帰っていった。

残る影は二つ、一つはやはり水鏡。

そしてもう一つも……。

「一人になつたのか？」

「正直あなたの実力は未知数なんですよ、大介さん」

『紡ぎの糸』総指揮大涯 大介、実力こそレッドラインのMAXで、最強の一人と数えられるがその戦う数の少なさは異常だった。

すべて部下に任せきり、前線にもほとんどでない、でも人望や力についてはくる、これにどんな法則が働いているのか。

「そんなに警戒しなくていいぞ、それと俺の対戦成績なんだが勝ち星は少ない」

「そんなこと信じれるわけがないでしょ・・・根拠はあるのですか？」

「俺はこう見えても人殺しはあんまりしないし、それに勝ちへの執着もない」

「そんなこと根拠にはっ・・・」  
「だがな、と優しそうな声で続ける。

「負けるほど弱くもないし、それで誰かが傷つくようなら俺は人だつて殺す」

それが大涯の生き様にして、この男をここまで引き上げた原動力でもある。

「お前は少々きけんだ、後に『紡ぎの糸』に悪しき様に立ち回るかもしれない、なら悲しむ人だつて出てくるだろう？」

だんだん声色が変わり重く低いものになっていく。  
それに伴い大涯を包む空気が変質する、覆っていた穏やかな空気は、どす黒い殺意へと変貌する。

「だつたら今殺せばいい、俺は本気でお前を殺しにかかる」

水鏡はその気に圧倒されつつあった。  
「だいすけ・・・さん・・・」

「最後の忠告だ、お前は本当にお前は『紡ぎの糸』を抜けるのか？  
水鏡は完全に圧倒された。

これが大組織のトップにたつ人間の迫力、そして重圧。

おおよそ、そのいくつかを受け取っただけでも自分では倒れるとい

う感触があつた。

そして自分のしていることがどれほど自分勝手に小さいことかと思つた。

それは他の人にも言えたかもしれない。

【一閃・・・お前はこれほどの・・・】

突然去つたボス、そしてそれにともない直に落ちてきた責任や重圧。そしてそれに逃げてしまった自分自身。

「大介・・・さん・・・」

「言つてみる、お前は何を選ぶ、また・・・あの重圧のもとに帰り耐え抜けるのか？」

「俺は・・・俺はもう逃げない！！俺は戦う！そして皆まとめて守り抜いてやる！！」

それはもう仲間を守らなければならないというほどまでに膨れあがつた『絶対的責任』。

脚が雷と完全に同化してバチバチと火花を散らす。

圧倒された中で唯一明確に一つの感情を読みとる事ができた。

それは絶対に殺すという大涯の感情、それを肌に感じたとき脚が地面に着きそうになる。

だがそれを必死に踏ん張り持ちこたえる。

「行く・・・ぞ・・・！！」

「甘いぞ水鏡、名乗れ・・・本気だつていったらだろ？」

「・・・『地獄の使者』大空 水鏡！行くぞ！」

「それでいい・・・『紡ぎの糸』大涯 大介、行かせてもらおう！」

「また殺されに来たのか？」

一閃は角理を下げながら振り向く、そこにたつのは、

「一閃！俺はお前を信じる！だから戻つてこい！」

翔汰は声を張り上げて小さな玉を放つた。

それは風を幾重にもして圧縮し、その中で強化したもの。

・それぞれの目標と鉄壁の砂（前書き）

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：それぞれの目標と鉄壁の砂

旧立帝國高校特別クラス、その部屋にまた一人仲間だったものが入ってくる、そして仲間になるであろう。

「久しぶりだな昴」

真っ先に声を掛けたのは元帥代理の麗香ではなく、一組織『霸光』の副隊長、彰だった。

その横では『近衛』の三番手冥が昴を確認し、軽く会釈する。

「よくきたわね昴、おかえりなさい」

多分自分が組織を抜けて翔汰に会いに行った事を知らない麗香に対して少々悪い気がした昴は、

「心強い人が後からくるよ」

とだけ言って自分の席に着いた。

皆別段興味も持たずそれを流す。

それがちよつと不思議だったのか、何故かと訪ねると答えは一瞬に彰から返ってきた。

「翔汰だろ、もうあいつしか考えられんからな」

「水鏡さんもぬけたのでは？それに剛毅さんだって」

「水鏡は帰ってきてる途中だ、剛毅は知らないが、再砂ならやってくれるさ」

「そうですね・・・」

「そうよ、じゃあもう一度話すのもしんどいから今度はあんた達の意見を聞こうかしら」

麗香はそう言って彰、冥、そして昴を順に目で見る。

彰は、ダルい事は嫌だ、俺は命令に従うだけだ、などという雰囲気在大いに醸し出して黙りこむ。

「そうですね、一閃様も抜け、麗香様もお忙しいようですから、『近衛』を・・・私に任せてくれませんか？」

「いいわよ、それは私も頼もうと思ったの、私の目的遂行にはちよ

つと弊害になるかもしれないから」

「謹んでお受けいたします、何かあればすぐに呼んでください」  
冥はやはり軽く頭を下げる。

だが、彰は知っていた、深く頭を下げればバランスを保てないようなドジッ子だということを……。

その後何故か頭をはたかれる彰。

「そんなわけありません」

「心を読むな、心を……!」

麗香は最後に残った昴をみる。

「昴、あなたの意見、目的はどうかしら?」

正直なところ今の昴には是には答える事はできない。

『闇の影』が潰れて、この立場にいることさえ不安に思っている昴にはこれといった意見や目的を提示出来るわけがなかった。

そしてなによりここには、大切な、彼が近くにいなかったから。

でも、言いたい事はあった。

「わかりませんが、ですが……私は翔汰についていきます、何かあると、絶対に離れたりなんかしたくない!」

「そう……いい目標だと思うわ、頑張つてね」

話は一段落、そしてまた昴のために麗香が自分の目的を話そうとしたところで、廊下からどたばたという雑音が響き始めた。

「彰さん!! 彰さんはいますか!!」

多分全速力で走ってきたのだろう、ゼイゼイと荒い息をで肩を上下させながら『霸光』の構成員が何人か入ってきた。

「どうしたんだおまえら? 水鏡はどうした?」

彰が入ってきたやつに近寄る。

「彰さん! すぐに向かってください! 水鏡さんが呼んでいます!」

「何かあったのか?」

「『紡ぎの糸』の追っ手を撃退しています、いつまで保つかわかりませんが、それに……」

「なんだ?」

「水鏡さんに彰さんと呼んでくるように言われました」

それを聞いた時、微かだが彰の顔がゆるんだ。

それをばれないように隠して、顔を引き締める。

「わかった、すぐいく、どこらへんだ？」

「土蜥蜴の丘です！」

「わかった、お前等は待機してる、俺が向かうからその間に、水鏡の居場所を元通りにおけ」

素早く身を翻しその部屋を出ていく、その後を冥が無言で追いかける。

「久しぶり、と言うには少々凶暴な顔だな」

「お前が瞬夜か」「あなたが瞬夜ね」

まったくもって揺るがなく完璧に息が合った悪魔のようなペアを前にしてさえ霞むことさえない存在感を放つ少女の姿。

「ああ、今は再砂という名で通ってるんだ、だから再砂と呼んでくれ」

その存在感はどのように考えてもこの世界に存在していいものの範疇を越えている。

その事に気付いた二人は少し黙りこむ。

その様子が予想通りだったのか、不敵な笑みを浮かべて再砂は一歩前にでる。

「つで、『八皇』屈指のペアがこんな弱小、それに世界になんの影響も及ぼさないような組織に何のようだ？」

「それは……」「この組織を潰すため」

「潰す……いったいどこにそんな必要があるんだ？」

ここは『地獄の使者』の領域から大きく外れて、よほど強力な探知能力を保有した、光や闇系の『才気』でないと気づけない場所。

それを『才気』を極力抑えている状態で、まったく『才気』を感じさせない再砂が感づいてしかも接敵してきたのだ。

「この組織は一閃が戻る為のものだと報告されている」

「早めに潰しておかないと戻られると厄介でたまりませんわ」

「確か名前は……穂蔵 臼、穂蔵 木根だったか、『八皇』で間違いないか？」

「それも正解ではあるけど、満点ではないですよ」

「今は一人賭けているので必然的に『七皇』と名乗っています」

「そうか、『七皇』か、なら殺す理由はなくなったか……殺したくない、さっさと去れ」

再砂はまるでゴミをはたくかのように手であつちにいけというよう  
な仕草をとる。

その仕草がそうとう癪に障ったのか臼は地面を踏みつけた。

次に来るのは衝撃、そして地面より岩が突出して再砂に襲いかかる、  
その数、数百。

だがそれを大きく下がるだけで躲す再砂。

「この程度では領地を踏む事さえ無理だ」

「私達をこの程度扱い、少々頭に来ましたよ、三下！」

襲うのは雨のように降り注ぐ水の槍。

あまりの威力のため、地面や襲いかかった槍を砕き、土煙がまう。

「やったか!？」

いままでこれで少なくとも傷をつけなかった事はない。

華鈴でさえ、己の能力を駆使しなければ防ぐ事は出来なかった、そ  
んなモノを……、

「これだけか？」

一瞬、二人の脳裏に悪魔のような恐怖の感覚が埋め尽くした。

そしてそれは必然的に土煙の中にいるものを恐怖の対象と認めてし  
まった。

「ふんっ……所詮はこの程度か、今度は断言しよう、お前達は絶  
対に俺を越える事は出来ない！」

再砂が腕を振りかざすと、地面よりあり得ない量の砂が二人を襲う。

「私は『盾』、『地獄の使者』を他一切全てから守り抜く使命を請  
け負った再砂だ!！」



・才気の戦闘(前書き)

いや〜話が飛び回っています；

もともとコレは友達に見せる為だけに作ってたからほとんど時系列というわけでこんな感じに；

お許しを・・・。

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ：才気の戦闘

土蜥蜴の丘、大小様々で起伏があり、戦闘において最も戦いに向いていない土地となっている。

「どうした、その程度の力だったのか？」

大介は止まった水鏡の顔に盛大な蹴りを見舞う。

「ぐあっ!!！」

防御が間に合わず、あっさり蹴られる。

つが、踏ん張ってその衝撃を抑えつけ、その反動を惜しみもなく前進の推進力に変換する。

だが、走り抜けるのは一瞬前まで大涯が居た場所。

「直線的だ、何より読みやすい動きだ、そんなもので俺を倒せると思っているのか?・・・水鏡」

そして残るのは顔面の位置にあげられた脚。

急停止など、出来るわけがない。

がごっつと思ひ音が聞こえたかと思うと次の瞬間には脚は背中におかれ、そのまま地面へと水鏡を導く。

「つく！」

脚に力を籠める、地を這いというより抉りながら大涯の脚から身を離す。

「ほう、選択としてはいいと言わざるおえない、だがそれがこの後にどう響くかな？」

大涯は次の出方を伺うようにゆっくりと水鏡との距離を詰めようとする。

【いったん距離を置かねば負ける!どこか隠れる場所を探さねば!】

「止めといたほうがいいぞ、俺の探知能力はこの世界に置いて現在最強・・・俺から逃げれるとでも?」

水鏡は考える前に後ろに跳んだ、見事なまでに距離をとることが出来た。

素早く身を翻して岩陰に隠れる。

「はあはあ……何だ、何故攻撃があたらない……？」

大介さんの『才気』と関係あるのか、そうまとめてみたところできつ気付く。

「大介さんは『才気』すら使った様子がない……！となると光が闇系のモノで間違いなさそうだ」

「正解だよ、そして……大間違いだ！！」

轟音、隠れている岩を砕かれた。

素早く地を蹴り、岩盤の破片を避ける。

「ハアハア……ハッ！」

一瞬前自分が居た地面が砕かれる。

「いろいろと問題はあある、しかしやはりその『才気』は本物だ、流石、俺が目をつけただけの事はある……な！」

決して早くはない大涯の突進、しかしその速さは見た目以上に早いように見えた。

避けれる、そう思った頃にはもはや眼前にまで迫りくる恐怖の影。

雷の脚を手に入れた水鏡は防戦一方に追い込まれるばかりであった。だが決して大涯の力が強すぎるというわけではないようだ、むしろ、スペックにおいては水鏡の方が上である。

「何故自分が防戦一方なのかしりたそうだな、それに俺の『才気』も知りたいだろう」

適度な間合いをあげて二人は相對する。

水鏡は肩を大きく揺らしながら荒い息を繰り返している。

大涯はいたって平然と水鏡の目を睨み付けていた。

「俺の『才気』は『知識』、さっき言ったな、アタリでハズレと、俺のこれは珍しい闇と光の複合型だ」

「複合……そんなものがあるはずがない……」

「そうだ、『才気』の重複はあり得ない、故にこう纏められる、そう、初めから一つの二つ、これならばいけるだろう？」

「つく……だが闇が入る以上何か対価が必要なはずだが……」

大介さんにそれが無いようだか・・・？」

「忘れたのか？闇はそうだが、光は真逆だ、そしてそれぞれの対価が同一ならばどうなる？わかるだろう？」

「そんなことが・・・それでこれほど強いのか・・・！」

大分息も落ち着いてきた、脚はぱんぱんに膨れあがっているが気にしない、所詮同化してしまえば痛みはない、後でツケがくるが。

「そろそろ回復出来たか？お前には一生かかっても治せないような心の傷を刻みつけてやる、覚悟しろよ、水鏡」

バチバチという音と共に第二ラウンドが開始された。

辺り一面の世界、その中には猛者とも呼べるような戦士が凍っている。

「俺がついていればよかつたな・・・まさかこれほどまでとは予測出来なかつた、さすがは『七皇』、おそらくは『零度』の者だな・・・」

「私でも予測は不可能・・・故にあなたが悲しむ事など有りません、責められるべきは私です」

眼は悔しそうに歯を噛む、それはそれは強く、血が出るほどに。

「大丈夫だ、これくらい何の心配もいらぬ、だから自分を責めるんじゃない」

皇子、いや皇は眼にキスをして血が出ている部分をなめる。

「あう・・・ふうう・・・」

すぐに眼から甘い吐息が漏れだしてくる、ソレを見計らったかのように素早く口を離す。

少しの間はまだ求めようと口を近づけてくるが、それもすぐに終わり、元の眼に戻る。

「分かつたな、心配なぞ不要の権化だ、そんなものがある内は俺の相手にはふさわしくない」

「もうしわけございません・・・追跡は・・・試してみますか？」

「いや、無理だろう・・・これほどまでの氷の『才気』見た事が無い、流石は『七皇』と言った所かな・・・」

「不思議な氷の形がいくつも確認できる、その形は雷であったり、炎、砂、木、風、霧のようなものといろいろだ。」

「『才気』さえ凍らしてしまう無敵の温度・・・ですか、これは相当な長期戦になりますか？」

霧状の氷を分析しながら瞑は呟く。

「これは、精神に直接作用するような類のもですね・・・ここまですぐと、本当に同じ人間か心配になります」

「いつになくおかしな事を言うな、瞑・・・コイツは人間だ、だが相当狂ってるというだけだ」

まあしかし、冷静過ぎるがな、と呟く。

「凍っているのが、女だけというのも気になるが・・・何より、俺の力が通じるかどうかだな・・・」

「大丈夫です、皇が勝つ、私はこれが全ての未来の帰結と信じています」

「それは仲が良い事で・・・ホホホ、じゃまでしたかな？」

突然後ろからもう一人の声が割り込んできた。

仲間は拠点地域か、適当に散開し、『悪魔の槍』の人達には、動き回って貰っている、故に二人だけしかいないはずだが。

皇は振り返りその姿を確認する。

中くらいの背に優しそうな顔立ち、そして漲るような覇気、『森の妖精』『情報屋』、浦上 紗代がニヤニヤとしていた。

「紗代様・・・ですか、なんのご用かしら？」

不意を付かれたからか、若干怒り気味に聞く瞑。

皇も振り返るが、口は開かない。

「ちよつと用事があつたのですが、ちよつと途中の道に見知った顔がありましたので、声を掛けたままでです」

「用事？ここらあたりには『悪魔の正義』しかなく、あなたのような異邦者は呼ばないと思えますが？」

「いえいえ、個人的な用事ですよ、組織は関係ありません」

「じゃあどんな用事ですか？」

「それは言えない・・・いや、言っても良いですがあなた達には関係ありませんよ？」

そう言つて話を切り、目線を瞼から皇に向ける。

「なんだ？」

「ちよつとした興味よ・・・あなたは『七皇』に勝てると思いで  
すか？」

皇はしばらく考える。

「そうだな・・・勝てる確立は悪くて半々くらいだ」

「『七皇』相手に大言しますね・・・頑張ってください、一応応援  
はします、ですが我々はあくまで中立、それだけは肝に命じてくだ  
さい」

紗代は踵を返し、もときたみちである道に歩いていく。

「待て、聞きたい事があつた、それにさっきの話聞いて確信に  
変わったぞ」

紗代は歩みを止めて振り返り、続きを促す。

「さっき『七皇』と言つたな、奴らの人数で『八皇』・・・という  
事は誰かが抜けたという事だな、誰が抜けたんだ？」

「鋭く、わないわね、むしろ当然の考えよ・・・誰が抜けたか、  
それを聞いて何の意味があるんでしょうか？」

「もう死んでいるなら探すだけ損だ、しかし生きているなら、探し  
当てて殺す必要がある」

「なるほど・・・それほど殺したい理由を聞きたい所ですがいかん  
せん興味がありません、一言で纏めるなら、『獄炎』です」

「そうか、ありがとう」

「そしてさらに付け加えるなら、彼は死んだも同然です、今は」  
それでは、と行ってまた帰ろうとする。

「どういう意味だ？」

「そのまま、彼にはもう『八皇』にいた頃のような力はないという

意味です」

今度こそ本当に帰ってしまう紗代。

「どう・・・するんですか？」

「予定に狂いはない、『八皇』は皆殺しにしてとつとこの世界の異物を取り除こう」

皇と瞑は立ち上がり、その氷のフィールドを去っていった。

轟々と唸りを上げる風がいまだに辺りの木々をめちやくちやにへし曲げている。

「すごい威力だ、しかし全力で来たからといって俺に手が届くとは限らないぞ」

炎を発して、温度により風の吹き方を狂わせようとする、それはいままでのやり方で今まではこれで妨害出来た。

だが、今回は違った。

妨害など関係なく当たり前であったかのように風は一閃に襲いかかってきた。

多少は驚くが難なくそれを回避、もしくはわ相殺していく一閃。

「少しは・・・力を付けてきたようだが・・・！」

風の合間を縫うようにして炎が飛ぶ。

ソレを面のような風が一瞬で吹き消す。

風が、止んだ。

「一閃、俺はお前と、いや、その他の仲間も含めて『地獄の使者』に戻りたい」

「まだそんなことを言っているのか、そんな甘い考えは自分の身を滅ぼすだけだぞ、翔汰」

「そうかもしれない、甘い考えだ」

だが翔汰は胸を張った。

「だけどコレが俺の思いだ！願いだ！・・・誰でもない『地獄の使者』『法度』、里島 翔汰の力の形だ！」

辺り一面に翔汰の思い、気配で満たされている。

その欠片、打倒してでも連れて行くという、一閃に向けられた真っ直ぐな殺意。

翔汰の周りを風が吹き荒れる、しかし制御されていないというわけではない、ただ、風が己を使う主人を守るように……。

「……まだまだ、そんなもんじゃ俺には勝てない、そんなヤワな思いでは俺に振り向かせる事さえ出来ないぞ」

「勝てなくて良い、傷つかなくて良い、ただ、想いが届きさえすれば……！」

「ハハハ……もう何も言うまい、ただ俺に向かい全力で来い……万が一、いや、億が一にも振り返るやもしれん……！」

一閃は体を据え、緩やかに手を基本姿勢に持つていく。

みたこともない姿勢だった、いや、姿勢というにはあまりにも自然体過ぎた。

手を前に出し、指をそろえて前に出す、そして不敵な笑みと共に一言、

「何も喋るな、喋る暇を戦う事に変えろ、俺を追って抗え、俺からの最後の警告だ」

伸び揃えられた手をゆっくりと二、三回曲げる。

「全力で来いさすれば振り向くかもしれない……！」

不敵な笑みが悪魔の様な笑みに変わる。

炎が一閃と翔汰を囲むように、そしてそれ以外の敵に邪魔されないように広がる。

先に動いたのは翔汰だった。

「烈風刃・竜巻」

振るう腕から幾千もの風が、巨大な防御不能の風の刃となり、一閃を全方位から狙う。

だが、触れる事すら敵わないはずの風の刃を、悉く叩きつぶす一閃、眼は翔汰を見たまま。

しかしいかんせん数が多すぎて、一閃はじょじょに翔汰から距離を置くように避けるようにもなった。



姿勢は依然と崩れることなく、

「  
飛んでいくつかの風の刃を躲した後、翔汰に初めと同じく、指を揃えて伸ばされ、確認したのを確認して、二、三回折り曲げた。

そしてその悪魔の笑みは、まだまだいけるぜ、とでもいいだけに歪められていた。

「烈風刃・切り刻み」

今度は風の刃が空気に溶けるように消える、半瞬後、周りにある木の一本が粉碎した。

見えない刃か、そう一閃が呟いている気がするが、そんなことは気にしない、ただ全力で一閃を叩く。

いまのところ圧倒的にこちらの有利、しかし、どこまで保つか……。

二人は軽く肩で息をしている、その二人をちょっと離れたところで余裕を持って傍観する一人。

「なかなか、やるな・・・再砂」「なかなかやりますわね、再砂さん」

「ふん、まだまだ、これからだ・・・俺は本当に貴様等と戦う気などない」

いつでも、どこでも、誰に対してもこの余裕、いつたい再砂は何なんだろうか。

「故に、ここで引くというならば追撃はしない、だが攻めると言うならば容赦はしないぞ？」

しばらく沈黙する。

「諦める気になれたか？なれたなら俺に背を向け、ここから去れ、もう一度言っが追撃はしない」

溜息が二つ、ほとんど同時に聞こえる。

「引くわけには、いかないんだよな・・・だから、本気を出すぞ」

「いままでは本気じゃなかったとでも言いたそうだな、でも、俺に

膝をつかせることすら適わんぞ?」

「ああ、普通に『才気』を使ったら勝てないな、俺の才気は強すぎるからな、消費が激しいんだよ、だったらどうするか・・・決まってる」

笑いながら、白は両腕の拳をガキツとかち合わせた、メリケン代わりに岩の指輪が嵌められている。

「使わなければいい、そして、その分の力を全て肉體戦の力として費やす」

「そんなことで俺に届くと思うのか?」

「届かないと思うのか?」

白が距離を詰め、拳を振るう。

その拳は何か当たるかのように轟音を響かせながら、再砂を殴り飛ばした。

「じつ・・・は!」

地面を抉るような勢いで叩きつけられるが、地面割れず、土煙が空に舞う。

「地面を固くするオマケ付きだ、ありがたく思え、ここまで本気を出す事は本来ないのだがな」

土煙が一瞬で下に下がる。

「小型の海の大量発生、そこに水蒸気じゃない訳があるのでしょいか?・・・いわば、大気は私のものです」

後ろで木根が傍観、もとい観察し、その場に応じた湿度を白の周りにとりつかせる。

「嫌な組み合わせだな、今頃になってそれを思い知らされる・・・そして、褒めてやろう、俺に膝をつかせたことを・・・!」

「そんなこと、誇りはしない、何故ならおまえはここで、俺より弱いということを証明されるからだ!」

「そんなこと、誇りたくもないわ、あなたはここで死に、二度とそんなたいそうな口を利けなくなるのだから!」

雨粒の槍、その間を埋め尽くすように、隙をなくす、掌底破の嵐。

再砂はをそれをギリギリ躲していると見えなくもない動きで捌いていく。

しばらくすればもう、立場は逆転し、二人の目の前で、再砂は肩で息をしていた。

「まだまだ、これからだよな、再砂……さっきまでの虚勢がないぞ？」

「もしかして、これで終わりなのですか？私達を楽しませる事も出来ないのかしら？」

「はぁ……せいぜい、吠えて、口……すぐに、はぁ、追いつめてやる」

【だが、この状況はヤバいな、アレを使いたいが、一閃に固く禁じられているしな……さて、どうしたものか……】  
平坦な土地、充分にあるのは地面、もっと言えば砂。

再砂はしゃがみ、砂を手のひらいっぱいに乗せる。

「ここまでなら、許容範囲内だと思う、いや、そうと信じよう」  
再砂は呟いた後、その砂を一気に口の中に放り込んだ。

臼と木根はその光景を見て、啞然とするばかりであった。

「いい見せ物だよ、『砂』系統の力の増減は基本的に砂に対する愛で変化する、俺のこれは歪ではあるが、もっとも愛していると言えよう」

最後に喉を砂が通り、ジャリジャリと音になる。

「残念だよ、おまえ達はもう、俺に傷はおろか、触れる事さえかわない！」

：才気の戦闘（後書き）

とうとう再砂の手加減が始まります！

あくまで手加減ですが威力はたいしたものになりますわ

でわでわまた次回でお会いしましょう！

またね！

・才気の姿、真っ白な姿の邂逅（前書き）

どうも^^

ちよつと遅れてしまいました；

ごめんなさい・・・

さて、おそろく何じゃこりゃ？ってなりそうな気もするのですが・

・・・！

そこは気にしないで行きましょうw

後、水鏡の才気は少しだけ特別なもの思ってください。

ほかの才気ではハッキリとした姿は現れません。

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：才気の姿、真っ白な姿の邂逅

『近衛』本部に、一人の影が闇に紛れて動いていた。

「どうなってるのよ！？この部屋は！？なんでドアが開かなくて開ける事が出来ないのよ!？」

紅葉は、元ボス、一閃の部屋を探る為、部屋の前にまで来ていたが、扉には鍵がかかっていて開ける事が出来ないでいた。

もちろん、針金などを使って、開けようとしたのだが、鍵穴に特殊な細工がされている為、針金を入れる事ができない。

周りの壁も、壊せるかどうか調べたが、壊れそうな場所は一つとしてなかった。

「早く、用事を終わらせて寝たいのに・・・なんでこうめんどくさくするのかなく、一閃は!？」

それからしばらく、開けようと粘り続けたが、程なく諦めて、与えられた部屋に戻っていった。

雷脚風陣　そのスピードで築き上げた、風の防御壁。

幾重にも巻き狂う風の刃が水鏡を包み、護ろうとする。

だが、大涯はそんなものを無視して近づいてくる、まるでどこにくるかわかっているかのように。

「こんなことでいちいち驚くなよ、こんな事、出来て当然だ・・・お前は俺を馬鹿にしているのか？」

「馬鹿になんかしていません！故にもう手は打ってある!!」  
死角からの最後の一撃。

それすらも、大涯は軽く身を捻るだけでかわしてみせた。

「『知識』、あらゆる『才気』を肌で以て感じ、攻撃を予測、計算し、相手の標準を少しずらせる力」

ニヤツと笑う大涯。

「まず攻撃があたらない、当たらなければ焦る、焦れば精神が揺ら

ぐ、揺らげば当たらない、あたらなければ・・・その繰り返しだ」  
プレッシャー、闇の力が水鏡の心を圧迫する。

「デスループ、そのままの意味を込めてつけた、そして、そのほうがよくわかるだろう？」

「大介さん」

「なんだ水鏡？戻る気にでもなったのか？もう遅いがな」

「戦ってる最中におしゃべりはしないほうがいいです、しんでしま  
うよ？」

避けたはずの風がもどってきた。

大涯は瞬時に反応して避けるが、避けきれずに頬に一線の傷を負う。

「・・・躲したはずだが・・・なんで戻ってくる？お前にそんな動  
作はなかったはずだが？」

「大介さん、あなたは忘れている・・・俺は風の『才気』を使うん  
じゃない、雷を使って風を起こしていただけ・・・」

重たい衝撃、いつの間にか間合いを詰めた水鏡の蹴りが、大涯の腹  
に深くめり込んだ。

飛ばない、衝撃がきたことさえ気付くことに時間を要する。

「もう一つ、これは正しいかどうかは判らない、でも、俺が絶対に  
こうしなければならぬと思えば思うほど、俺の『雷人』は進化し  
てる」

絶対に大涯を倒して、『地獄の使者』としての在るべき場所に帰る、  
それは目的などではない。

水鏡、『霸光』のボスとしての『果たさなければならぬ義務だ』。

「ほお・・・見つけたか、自分だけの『情』を・・・！コレで対等  
に近くなった、まだまだ、俺には勝てないぜ？」

「そんなもの！やってみなくちゃわからない！！」

『才気』の気配さえ感じさせずに雷の如く速度で動き回る水鏡。

大涯はそれを見極めるかのように凝視する。

躲し・・・見る、離れて・・・見る、詰めて・・・見る。

飛んで、計って、狙って、偶然、その全ての場合を見て、考える。

「持続型、それに雷だから速さがあるな、しかし、一直線のみ、曲がる場合、一旦停止が必要、それにちよつと力を加えれば・・・」  
突っ込んできた水鏡を躲して、急停止する瞬間、背中を軽く、判らない程度に押す。

また大涯に突進しようとした水鏡は、曲がるときにバランスを崩して転ぶ。

「よし、計算通りだ、ドンドンいくぞ!!」

なかなか起きあがれない水鏡はとりあえず座って、大涯を睨む。

【強い、強すぎる・・・コレが『紡ぎの糸』総指揮大涯 大介！その実力か！勝てる気がしないな・・・】  
足は、もう痙攣を起こしてガクガクになっている。

【無理をすればまだ動くな】

足に光が灯る、雷を注入、同化させたのだ。

「止めとけ、水鏡、もともう死んでる、その足は動かない」

立ち上がった瞬間すぐに尻餅をつく、足があるのかわからないのかかわからない。

【はは・・・俺より俺の『才気』のことをわかっているのか・・・なんか悔しいな、俺は使う事しか出来ないから】

奥歯を噛み締める、ギリギリと嫌な音が口の中から聞こえて、最後に小さくパキツとなる。

【死にたくない、俺はまだ出来る事があるはずなんだ、それを見つけるまで俺は諦めることを・・・！】  
目の前が真っ白になった。

【真っ白って・・・真っ暗じゃないのかよ・・・】  
辺りには何も無い、ただただどこまでも真っ白な世界が続いていた。いや、いた。

ポツンと一匹、豹が此方をみていた。

「大空 水鏡、この姿で会うのは初めてだが、そこまで驚いたような顔をされると傷付くな」



豹が喋った、そのこと自体が驚くべきことだった。

「どうでもいいが、早くその口を閉じなさい、みっともない、それでも私の持ち主なのかしら・・・嫌んなるわ、どうして私がこんなのに」

豹は心底嫌そうな顔をして、溜息をつく。

水鏡はとりあえず言われたとおりに口を閉じる。

「それで・・・何しに来たのかしら、こんな所へ、こんな、何も無い場所に・・・まあ一応言っておくわ、ようこそ」

よく見ると豹は所々汚れて、まるで最近まで遊んでいたような雰囲気を感じ出していた。

「お前は・・・なんなんだ？」

「失礼ね、私はあなたの『才気』よ、そんなことも気づけないのかしら？また、嫌んなる」

「だが、俺のモノは『雷人』だ、なのに何故豹が出てくる？」

豹は前足を使って器用に頭を掻く。

「ねえ水鏡、人は、人になりたいかしら？」

唐突に訳の分からない質問をされた。

「人は人にはなりたいとは思わないだろ、すでに人なのだから・・・」

「そうね、正解よ、人は人にはなりたいとは思わない、これが私が人以外である答え・・・さすがに判ったでしょ？」

納得がいく説明だったかはわからない、しかしこれ以上聞いても馬鹿にされるだけなので聞かない。

水鏡はまたあたりを見渡すが、やはり何もなく真っ白な世界がどこまでも続いていた。

「それで、わたしの質問の答えは聞けないのかしら？それとも、一方的に質問だけ？それは男として最悪ね」

いちいちかんにさわるが、豹相手に怒っても仕方がない、だからそれを必死に抑える。

「どうしてここに来たか、だったな・・・俺にもわからない」

「答えになつてないわよ、もつとまともな答えはないのかしら？」

「ゴメン、本当にわからないんだ、俺にも」

「何故謝るの？形だけとはあなたは私の主人、マスターといつてもいいわ、主人が従者に謝るなんて滑稽よ」

「俺にはお前の問いに対する答えは見つからなかった、だから謝つたんだ、それだけだ」

豹が近寄ってくる。

お互いの距離の半分まで迫ってきていた。

「あなたは何も悪くないのに？主人はただ従者を使い捨てればいいだけなのに」

その言葉は酷く頭に響いた、そして熱が体を奔る。

「従者は捨てられるためだけに存在し、主人を護るためには命をもかけることをいとわない、それが良き従者だと思つ」

従者、仲間は捨てられるもの、そんなこと、考えた事もなかった。

「あなたはそんな事考えなかったでしょう、でもね、下のものは上のものを尊敬したり、ねたんだりする」

だが、考えたくない、俺がミスをすれば仲間が死ぬ、それはいやだった。

「あなたが完成させた組織は格差がなかった、ある意味とても不完全で、とても壊れやすいモノだった」

この感じはどこかであった、最近とても身近な所に。

「なのに壊れなかった、とてもすごい事だね、なんでかしら・・・  
あなたは妬みを感じた事はある？」

一閃が組織を去り、少なからずとはいえ自分にもその負担がのしかかるうとした。

「あなたは十分妬まれていた・・・」

俺は、立ち向かう事さえせず、自分には出来ない諦め、そして逃げた。

「だけど、それと比べるには余りにも膨大な信頼や尊敬を保っていた、同じ時に」

俺の仲間は俺の決定に従い、ついてきてくれた。

今の俺はその信頼に何か答える事が出来たのだろうか。

「あなたは悪い人だ、そんなにもいろんなものを貰って、あなたは何かしましたか？・・・していませんでしょ、私が知る限りですがね」

「俺は戻る」

「そう、それで・・・それだけですか？」

1メートル先で豹は止まった、そして品定めするような眼で水鏡をみる。

口の先にまで出た言葉を出すのを止めた、それでは前までと一緒だとわかったから。

だから豹に背を向ける。

「また逃げるのかな？」

「従者なら・・・」

「・・・！！」

「何も言わずについてこい」

「・・・いいですね、あなたについていきましょう、多分コレが最後の面会で、いつまでも続く意思疎通の始まりです」

最後、真っ白だった世界は、豹であふれかえっている世界に変わった気がした。

立ち上がる、今度は転ばない、足はガクガクとしているが芯は折れていない。

大涯が少し離れた所で此方を凝視している。

「もう、遊びは終わったのか？」

「なんの事ですか？」

「さっきまで四足歩行だっただろう、だが、早すぎて攻撃もあたらんし、逃げ回るだけだった」

また、心がズンと重くなる。

「また、心へのプレッシャーですか・・・」

「念には念を、勝負事の基本だ」

「そうですねか……でも、その遊びにもう少しつきあって貰う事になるかもしれません」

足に雷を同化させる、そして、それとおなじ事を両腕にも施す。

「それは……?」

「言っただけだ、もう少し遊びにつきあってもらうとな」

最後には四足歩行をする状態で大涯を睨む。

「なるほど、それで俺を突破するきだな……無駄なお事をお！」

大涯と水鏡はまた、戦いを始めた。

・近づくと真実(前書き)

こんな時間にあげちゃいます！

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## …近づくと真実

「戦ってるのね、一閃は……この間にどうしても、一閃の部屋に忍び込みたいんだけどな……」

紅葉は自室でそっと遠くを見る。

コンコン、とドアがノックされて一人の人間が入ってきた。

「確か、紅葉だったか？……来てくれ、もうみんな集まってる、後はお前だけだ」

「冥さんだったね、なんのようかな？」

「それを話す為に呼んでるんだけど」

「ははっ、それは悪い事を聞いたね、ところで冥さん、私一つ良い事を知ってるんだけど聞きたいくないかしら？」

「……聞きたい気もするが、嫌な気がする……後で聞けるか？」

紅葉は笑って首を振る、もちろん横に。

冥はしばらく考えて、話せ、というような仕草をとる。

「でも一応言っておくけど、コレは戯言です、信じる信じないはあなたの裁量に委ねます、強制は出来ませんしね」

冥はいぶしかけな顔をするが、それを逆に喜んだように紅葉は声を少し上げる。

「単刀直入に言います、『存在』一閃はこの世のモノではありませんん」

「……どういふこと？」

混乱する冥は頭痛を感じていた。

「そのまま、『一閃』はこの世のモノではない」

それにさらに拍車を掛けるように紅葉は告げる。

もちろん余計に頭を悩ます冥は、付き合っていられないとばかりに踵を返す。

だが、その前に部屋のドアは独りでに閉じた、まるで冥を逃がさな

いとばかりに。

「なんのつもりかしら？」

「聞くといったからには最後まで乗っていたかどうかと、いいでしょう？」

冥は明らかに嫌な顔をしたが、そこらへんのゴミをのけて、ドカッと座る。

楽しそうにそれを見て、自分はゴミの上に座る。

そして意外な事に冥が先に口を開いた。

「それで？その理屈はどのようなものから来てるのかしら？」

「それはね、私も、彼と同じ『存在』だから、同じ『存在』は互いに惹かれあうんだよ」

「それにも根拠はないわね、遊びなら付き合いたくないわ」

「どうとらえるかは強制しないっていいましたよ、ですが嘘とは限らないよ」

眉間に皺を寄せてあからさまに困った顔をする。

そして、目の前でやはり楽しそうに笑顔が一つ、紅葉がいる。

「・・・それで、仮にその『存在』があったとしよう、それはいつたいなんなんだ？」

「あら、疑い深いわね・・・そうね、一言で言うには少々デカすぎるから、こつちの言葉を借りてわかりやすくすると、それは『天使』」

「『天使』？」

あまりにも常識とかけ離れた言葉に、思考が追い付かない。

付き合っついていられない、そう思っって立ち上がる。

「あら、短気ね」

「頭が逝かれたやつの話なんて聞くんじゃない、こつちまで頭がおかしくなりそうだし！」

ドアを開き、最後に大声で怒鳴るその前に、紅葉は言う。

「信じる信じないはこの際どうでもいい、だから言おう、彼は、いつかここに戻ってくる、全てを終わらせるためにね」

「……一階の大広間だ!! さつさと来いよ!!」  
ボタンと力強く閉じられた。

「『天使』か……彼は確かにそれなんだけど、何で彼はあんなに完璧に……ある意味とても歪にいるのだろうか?」

地面は抉れ、起伏が激しい場所になっていた。

「まさか、素手がそこまで強いとは思ひもなかった……やるな、  
白」

「馴れ馴れしく呼ぶな」

「馴れ馴れしく呼ばないで! てゆうか、それだと私は驚異じゃないように聞こえるんですが!?!」

白の拳を止めた状態で、再砂は喋っていた。

白は拳を止められ、次の攻撃が繰り出せずにいた。

その様子を離れた所から木根がみている。

「まさか、俺の砂が突破されるとわな……いけ、俺を倒した  
褒美だ……」

再砂はその場に倒れる。

その脇で大きく肩を揺らした、白と木根が立っていた。

二人ともかなりの手傷を負っていた。

「馬鹿野郎……こんな状態で攻められるわけがねえだろ、お前の  
勝ちだよ!」

「悔しいけど、私達を相手に良くここまでしたもんだわ、それだけ  
は褒めてあげましょう」

白と木根は『地獄の使者』にいくのとは反対方向に歩を進め、去っ  
ていった。

そして再砂には、大きな影が重なった。

「瞬夜、もう大丈夫だ……!」

焦げた臭いが辺りに充満し、まるで地獄の如く炎が煌めいていた。  
その場にいるのもはみな等しく死を予期し、その圧倒的な『存在』



を前にひれ伏すだろう。

その炎の世界の中心には一人の炎を纏う男が立ち、その前で風はひれ伏していた。

「はあはあ……一閃……」

「どうした、お前の本気はそんなものなのか？お前の思いとはその程度のモノなのか？」

一閃はまったく疲れを見せず、普通にそこに立ち、そこに凜然とある。

対する翔汰は、服の所々が焼き破れ、疲労困憊、立ってる事さえままならない状態にあった。

【この力の差はなんなんだ！？何故ここまで力に差がつくんだ！？】  
強くなったと思った、しかし、世界は広がった。

「俺がお前に対して最高の侮辱をくれてやろう、翔汰」

一閃は背を向ける、翔汰が、這い蹲って動けないにもかかわらず、背を向けた。

翔汰の中で熱が暴走する。

「悔しいか？敗者にはちょうど良い罰だよ」

「一閃……いつか、また、挑んでやる……覚悟、しとくだな……！」

翔汰は最後にそう言っ、気力だけで保っていた意識を手放した。

「まったく翔汰、お前ってヤツは……」

一閃は岩陰に隠れていた角理を呼ぶ。

「……さつき鼻打ったんだけど！どうしてくれるの！乙女の顔を！！」

「いいだろ、乙女じゃないんだから、それよりこいつ運ぶの手伝え」  
「え〜〜〜〜、一人で出来るでしょ〜？」

「いいから、足を持ってくれ、なるべく慎重にな」

嫌々、ほんとうに嫌そうな顔をしながら、ぐちぐちといいつつ、角理は言われたとおり翔汰の足を慎重に持った。

一閃は両脇に両腕を入れて持ち上げ、二人して翔汰を木の根本まで

持っていった。

翔汰の顔はどこか満足したようだった。

「どうして、慎重に運んだの？」

「そんなこともわからないから俺に勝てないんだよ、ボケ」

角理は力チンときて、白雷を一閃に連発する。

それを軽やかに全て避けて、角理を地面に叩きつける一閃。

「痛い・・・!!」

「痛くしたんだよ、アホ、いいか、ヤツはほとんどずっと本気を出し続けていたんだ、これがどれほどの労力かわからないのか!!」

「鼻折れてそう・・・」

「すぐ治る、『情』を解放した状態での本気は、並のモノがあればだけの時間使えば精神崩壊レベルの労力だ・・・」

一閃は誇らしげに翔汰をみた。

それは部下の成長を楽しみにして、その成長を確かめられた時のものだった。

「それよりはやくここから離れるぞ、やっかいなのが近づいてる、こいつに迷惑をかけるわけにはいかないからな」

一閃は立ち上がり、角理を見る。

「おいおい、そんなに地面が好きなら地面を這ってればいいだろうに・・・まあ趣味は人それぞれだからとやかく言わないが・・・」

「貴様のせいだ~~~~!!!!!!!!」

角理がガバツと起きあがると同時に、頭をがしつと掴まれて引きずられる。

「遅いぞ〜早くしないからこうなるんだ」

「お~~~~ろ~~~~し~~~~て~~~~!!!!!!」

角理は覚えているだけで六つたんこぶを作った後、気絶してしまっただ。

「あら？冥、どうしたの？てっきり彰に付いていったのかと思ったわよ？」

「彰が付いてくるなといったので・・・それで、これは話そうか迷ったのですが、一閃についての情報です」

それを聞いて麗香が冥を睨むように見る。

冥が少し後ずさっている間も、続きを言っつて、といったように見続ける。

「でわ申し上げますが、あくまである意見の一つとしてお聞きください、私はこの意味がよくわからず、受け入れる事に反対です」

「いいから・・・！早くいいなさい・・・！」

いくらか我慢したようだが、それでもいらつきは隠しきれてはいなかった。

「一閃様は、人間ではありません」

「人ではない・・・？センちゃんか？」

「はい、これを話した者は彼の事を『天使』と呼びました、こんな常識から外れています」

冥は心底言うんじゃないなかつた、と後悔した顔をしている。

麗香は冷静に、その意味を考えている。

「わからない・・・な、そんな人外のもの・・・人外？そうか！彼女に聞いてみよう！」

「彼女？彼女とは誰ですか？」

「秘密よ、そういう約束なの、ごめんなさい・・・冥、私の留守の間ここを頼むわね」

冥は軽く頭を下げ、お辞儀する。

麗香はそれをみてから、その教室を出ていった。

## 第十章：戯れと二人の皇（前書き）

今回は何も言う事ありませんね・・・

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## 第十章：戯れと二人の皇

「角理、お前にはこれから遠くの街に入って情報収集してもらおうと思う」

「……下着返して」

「仕方ないな……そこには『八皇』の一人が潜伏していると思われるから、あまり近づけない、故に俺はここで一日間待機する」

「……ズボンも返して」

「贅沢だな……一日して戻らなかった場合俺はお前を切り捨てるからな、ソコの所忘れるなよ」

「……服返して」

「いちいち五月蠅いぞ……集める情報は『八皇』についてのことと、『八皇』を追っているものについてだ」

「……靴返して」

「裸足でいいだろうに……わかったらすぐに戻ってきてても良い、わかったらとつとといけ、あの森を越えた向こうだ」

「……楽しんでる？楽しんでるでしょ？ねえ！ねえ！楽しんでるんでしょ！？」

「違うな、俺はただ、羞恥プレイ……いや情報収集をしたいだけだ」

「何にも言えなくなったのか、少し涙目になりながら言われたとおりの街に向かつて、走っていった」

「なんだかんだ言っただけでちゃんと行ってくれるの……まあ聞いてくれるぶんにはいいんだがな」

溜息をついてその場にドシツと座る。

肩をほぐしながら辺りを見る。

「誰もいないか……なんか久しぶりの休みだな、誰にも見られていないのは気分いいな……」

しばらくボウツとしていたが瞬間的に背後を見る、だがそこには誰

もない。

少しの間そこを見ていたが、また溜息をつき、ソコに寝転がる。

「熱心な奴がいるな、まあ・・・手出しが出来ないあたり、あいつといったところか」

関係ないか、そう呟いてから本格的に寝る一閃。

「『阿修羅』が寝た、どうやら俺達を危険とみなさなかったようだ」

「それはいいことだよ、てか僕的には来てくれると嬉しかったんだけどな」

「感情はどうでもいい、これから先の戦いの成功率のが大切なんだ」

「それは弱い人の台詞だよ、強い僕たちはそんなこと気にしちゃう駄目だよ」

「確かな根拠があるわけじゃない確立は高いに越した事はない、それで？どうするんだ？」

鋭美と『道敷大神』は『悪魔の正義』『悪魔の槍』の本部の近くで、バカンスを楽しむようにくつろいでいた。

だが、

「困まれているのを理解しているか？相手は強者ばかり、勝率は五分五分といったところか・・・そろそろ動いて貰わないとこちらが困るのだが？」

「大丈夫」

鋭美は楽しそうに本を読んでいる、それもかなり楽しそうにしている。

『道敷大神』は呆れたように、だが落ち着いた雰囲気で構えている。

「どうでも良いのだが、それはどんな本なんだ？」

「興味あるなら貸してあげようか？ちなみにチョク恋愛物だけだね、もちろん主役は彼でヒロインは僕ね」

「自作かよ、それより半径100mには近づいている、そろそろ気合いしてくれないと俺が困る、お前のでいで俺が死ぬようなことは嫌だ」

ふうつと溜息をつき、開いてるページに栞を挟んで閉じる。  
辺りに火花が散り、静電気が迸る。

「あゝあ、ほんとにダルいなあゝこんな雑魚に本気を出さないといけないなんてゝ」

「こんな雑魚でも、だ・・・ちゃんと本気を出さないといいつけるぞ」

「はいはい、ちゃんとやりますよゝだ・・・」  
本をゴム製の鞆の中に、本を鞆の中にしてしまう鋭美。

全身から静電気は、一瞬で雷に変質して鋭美を包む。

「俺のほうに飛ばすな、とかく俺は電気には弱いんだよ」

「リョーカイ、じゃ、行くよ、僕は建物を！『道敷大神』はそこらへんの雑魚を頼んだよゝ」

「頼まれた、思う存分その力を振るえ、今回は先攻出来なかったみたいだな」

「何言ってるの？私は『絶対先攻』、ただ、誰よりも早く攻撃するだけだよ、見ててみ・・・コレが名前の由来よ！」

ニヤリと笑って、通告も無しに最大級の雷を『悪魔の槍』の本部に放つ。

雷はその半分を吹き飛ばして通り過ぎた。

「外したな」

「こっちのほう楽しいでしょー？いいじゃない」  
まわりから一斉に敵が飛び出してきた。

鋭美はウイंकをして本部の方に向かっていく。

「生きてたらまた会おうねゝ」

「あ、おい・・・この人数めんどいぞ」

「大丈夫、なんとかなるよ」

そのまま去ってしまう。

「だから・・・俺はめんどうなんだって・・・って、もういないし」  
『道敷大神』はめんどくさそうに『才気』を展開する。

辺りに不穩の空気が張りつめ、次の瞬間には敵が味方同士で殺し合

いを始めた。

『道敷大神』は何の感情も抱かずにその行為を続けさせる。

例え、『木偶』から悲鳴や、懇願が聞こえようともしめて止める事はしないし、むしろそういったやつはより酷い死に方を迫る。



## 第十章：戯れと二人の皇（後書き）

とかいいつつも少しだけつけておきましょうw

道敷大神の強さはかなり上の設定してるのですが……

今でもまだ抑えてる状態ですw

一番強い状態になるとどこまでいくのでしょうかかねえw

期待して見ていてくださいw

でわでわまた次回w

：水鏡、その存在怒れる稲妻の如し

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ！！！」

突進、反転、突進、反転、突進・・・突進、反転、そしてまた  
突進。

何回躲されようが、決して止まることなく攻め続ける水鏡。

反転をより早く、突進をより強く、人間としてのメカニズムを越え  
る為に、雷との同化をつよくする。

よって、反転は早くなり続け、突進は強くなり続ける。

その攻撃する間隔はもちろん短くなってきている。

【どうやら成長しているようだな、それも尋常じゃないスピードで  
・・・早めにケリをつけないとこっちが危ないな】

大涯はそう決めて、奥歯を噛み締めて、拳を力強く握りしめる。

「お前の力、相当精神の消費が激しいだろう・・・次で最後にする  
のはどうだ？」

「うっうっうっ~~~~・・・ぐっうっうっうっうっうっうっうっうっ~~~~  
・・・」

牙を剥き、うなり声を上げる。

その気配の影に、豹が目をぎらつかせて牙を剥き、うなり声をあげ  
ていた。

「もう、心まで獣か、いいだろう・・・その獣の心のまま、貴様の  
一番を踏みにじってくれる！」

足に力をいれて踏ん張る。

水鏡にもそれが伝わったらしく、最後の一撃を放つ為、距離を大き  
く取る。

「いくぞおおおおおおおおおおお！！！」

「あああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああ！！！！！！！！！！」

大涯は足が地面にめり込むほどに踏ん張り、握りしめた拳をゆつくりと後ろに引く。

水鏡は一直線に大涯のもとに突っ込む、レーザーと烈風をつれて。二人の交錯は一瞬以下の刹那。

結果、大涯は吹き飛び、水鏡はその場でぴたりと止まって動かなくなった。

だが、水鏡側には影が立っていた。

「よくやったよ、水鏡、もういい、一緒に帰るぞ、『地獄の使者』のもとに！」

瞬間、水鏡の体を取り巻いていた雷はなくなり、水鏡は倒れた……その顔は苦しげだったが、満足したような感じだった。

崩れた岩の下に大涯はいた。

「つく……やりやがったな、あいつ……まさか俺をここまでぶっ飛ばすとは……」

まだ手が痺れている。

あの瞬間、大涯の拳は水鏡に当たり、相手の顔面を破壊したような手応えが確かにあった。

だが、その直後に襲ってきたのは水鏡の、加速をつけた体当たりだった。

「確かに手応えがあったはずだ……確かに粉碎したはずだ……だが……」

吹っ飛ぶ瞬間に見たものは、水鏡の、満足したような顔だった……自分が粉碎したはずの。

大涯はゆつくりと立ち上がる、全身がビキビキと悲鳴を上げる。

「いってえ、最後のはキツかった……次会うときは必ず殺してみせる」

大涯は水鏡のほうに向かって拳を突き出す。

「覚悟しとけよ！水鏡！！」

ゆつくり『紡ぎの糸』の本部に帰る大涯。

：一閃の真実・序

商店街を手順通りに行かなければたどり着く事の出来ない扉。

それこそ『改水』の本部の入口に麗香は来ていた。

「ここならわかるわね・・・まあ彼女もある意味反則的な人だしね」  
「嫌な予感がしたから来てみれば、いきなり反則的とは・・・ちよつと傷付くわ」

麗香の背後に『改水』のボス一ノ宮 京が立っていた、とてもダルそうに。

「今日は用事があるの、入れてくれるかしら？」

「いい気がしないけどね・・・まあいいですよ、一応認めただボスだしね、入って」

京が何かを呟くと、扉は重い音をたてながら開く。

その中に二人は入っていき、京の招待でその中を進んでいく。

「誰もいないね」

「フフ・・・みんな寝てるんでしょうね、さ、こっちです」

京は最深部の部屋に麗香を招待する。

麗香がその部屋に入ると強い血の臭いがして、暗い内でもはっきりとわかるくらいに血で水玉模様になっていた。

「ここは・・・？」

「気にしないで、ささ、こっちです」

京は麗香に椅子を勧めて、自分はベッドの端にトスンと座る。

「っで、聞きたい事って何なのかしらね？」

「それは・・・」

「あ、ちよつと待って、一つ確認しておきたいの・・・それは私にしか聞けない事なの？」

「多分・・・」

「そう・・・まあいいわ、なら言って頂戴、力になれるかどうかわからないけどね」

「一閃の事なんだけど・・・!!」

「ごめんなさい、一閃のことなら嫌な予感があたってると感じるの、今から聞かないってのはアリかな？」

「・・・駄目、これは元帥命令、です」

京は深い溜息をついて、無意識に顎で先を促す。

「天使つて聞いて何か感じる？」

「・・・ヤツパリ当たってる、絶対当たってる・・・いいわ、聞きましょう」

「一閃は天使なのかしら？」

「答えはどちらとも言えないですね、『存在』つて、使っているのかしら？まあいいや、『存在』的にはイエス、でも、彼は違う」

京は冷蔵庫から赤いものが入ったペットボトルを取って、コップに注ぐ。

麗香にも勧めるが、麗香は要らないと首を振る。

「言いくいわね・・・てか口止めされてるし、言っちゃうと彼を嫌いになるかもしれない」

「それはありません！私が一閃を嫌いになるなんて、彼が例えどんな悪者でも私は彼を受け止められる！絶対に！」

突然の大声に、京はビクリするが、その顔は和らぐ。

「まいったね、そこまで言われた後に命令なんかされたら、絶対に吐いちゃうな」

「一ノ宮 京、一角 麗香が命じる、そのすべてを吐きなさい」

京はベッドから下り、麗香の前に跪き、正座で座り、胸に手をあて頭を下げる。

「わかりました、あなたの命を全うしましょう」

「早く話して頂戴」

「でわ、まず初めにもうしますと、一閃は神に仕えるものを天使とみるなら『天使』です、だけど、一閃そのものを表すなら『悪魔』のほうがいい」

注がれた真つ赤な飲み物を一気に飲み干す。

「『天使』と『悪魔』、ふたつの『存在』は酷似している、その違いはただ一つ、自我があるかどうか」

「自覚？」

「そう、『悪魔』は神から見放された集団、その見放された原因は自我があつたから、彼等はとても完成に近づいた『天使』の一部だよ」

もう一度真つ赤な飲み物をグラスに注ぐ京。

「そして『天使』、神の使い？違う！神の言いなり人形だ、自我がなく神の言う事しか聞けないくずだ」

「それで？一閃はどうなの？」

じれつたくなつたのか麗香が身を乗り出す。

京は焦るな、つとでも言いたげに麗香を抑える。

「一閃はね、とても不安定な『存在』なんだ、良いかい、最も神の領域に近づいた男であり、墮天されて悪魔を統べる王と互角に戦いぐびぐびと真つ赤な飲み物を飲み干す。

「黄泉の国を制覇して、『悪魔』という身で死神に仕える『天使』

となつた……さて彼、一閃は『天使』？それとも『悪魔』？」

「それは……私は『天使』であつて欲しい……かな？」

「……ここまで言つたけど、一番肝心な部分は省かせてもらうね、そして最後、彼のその行動の全てはただ一人のために成されたことなの」

「ただ、一人のため？誰ですか？その一人は？」

「ごめんなさい、それだけは言えないわ、権限で言わそうとするなら、私はこの命を自ら葬ります……命じますか？」

「いや……いいのよ、聞いて良いかしら？その人はまだ生きているのかしら？」

「それは……秘密です、こつ見えて私は秘密主義者なんですよ」

京は笑つて麗香の前に立つ、その目には光が無くなっているような感じだった。

麗香がその姿に少し驚いていると、京は容赦なく麗香を椅子に縫い

つけるように抑えつけた。

「ごめんなさい、麗香、ちょっと我慢できなかった・・・許してね」  
麗香の首筋にめがけて、京はその鋭い牙を突き立てた。  
そしてそのまま、突き刺し、血を吸う。

麗香の悲鳴が地下に木霊した。

：一閃の真実・序（後書き）

感想がほしい・・・w



・雷神と悪魔の槍（前書き）

なにかとてもすごそうな能力者が登場してまいりました!!

・・・どうなるのでしょうか・・・w

期待しましょうw

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：雷神と悪魔の槍

「あなたが総大将かしら？」

鋭美はまだ残っている部屋で雲明の前に立っていた。

雲明は奥の椅子に座って、突然の訪問者をボケツと見てる。

その前に三津が腕を後ろに組み、堂々と立っているようだった。

「その餓鬼は外したらどうだ？手が震えてるんだろ、その背中の後ろで震えてるんだろ？」

「な……！うるさい！黙れ！」

「……黙れ？誰に口聞いているんだ？」

鋭美は瞬間で距離を詰めて、三津の肩に手を乗せる。

バチツと弾けて、三津は転がる。

それを普通に見て、あまつさえ転がってきた三津を蹴り飛ばして反対方向に転がす。

「それはどういう考えでの行動かしら？」

「汚れるじゃない、だから違う所にしただけ、それがどうかしましたか？それとも、その男に何かいかがわしい感情でもおあり？」

ピクツと鋭美のこめかみが動く。

「あるわけないでしょ……！」

「それならいいじゃない……で、私に何か用かしら？」

突然、部屋を眩い光が包みこんだ、そして同時に水分が部屋を満たした。

鋭美は素早く雷で自分を包み込んで水を弾いた。

「先手必勝だ、別に攻撃するって宣言しないといけないわけじゃないからね……でも、反応はやかっただね」

雲明の頬には少し焦げが付いていた、それを擦って取って、立ち上がる。

「聞く所によれば『雷神』で間違いないね？」

「私を知っている、どこからの情報かしら？……おおかたの予想

はついていますか」

「私の質問の答えはないのかしら？」

雲明はつまらなそうに、本当につまらないように溜息をつく。

鋭美はその様子にいらつきを感じる。

「答える義理はないね、もういいよ、じゃあいくよ……僕は君を殺す！」

「ええ、こっちもそのつもりで……そうだな、雷だから、純粹な水で、形は弓だ」

雲明が言うと、周りを覆っていた水が雲明の手に収束していき、最終的には弓の形に収まる。

「水を弓として飛ばす類の『才気』かな？そんなの当たらないよ」

「口うるさいですね、嫌われますよ……矢は、一で千を生み、全ては貫通に特価、先は捻れ」

雲明の周りに数本の矢が水により出来ていく、全てが雲明の言った通りの形状をしている。

【矢は弓の一部……で片づけられるな、少しレベルのたかい『才気』なんだろう】

鋭美はそう決め、雷を雲明の向けて放つ。

雲明はその一つ一つに弓をはなち、撃ち落としていく、とても平坦に。

撃たれた雷は捻れてあたりに飛び散った。

「反射したね、その水は雷は通さないみたいね、どういうことかな？」

「これには鉄分が含まれていない、水は単体では電気を通さないのよ、それにこの水は私の『才気』によるもの、だから予想外の事も起こる」

そう言って手を横に突き出す。

「飛ばす物は槍、長さは矢、不可視、防御は突破、初速と到達速度は倍」

手に、水が収束して矢の長さの槍が現れた、先端は鋭く、妙なギザ

ギザが付いていた、棒には深い溝が刻みつけられていた。

それを確認した後、消えて、矢を構える。

「避けた方がいいですよ、避けれるわけないから、出来るだけ楽しませてね」

矢は放たれた。

：剛毅の帰還、京の本性

目を開けると見慣れた自分の部屋だった、しかし、よく判らなかつた。

「……俺はこんな所で倒れてたのか……無意識に戻ってきたのか？」

体を起こして改めて周りを見渡すが、やはりどこからどう見ても自分の部屋だった。

そして、謎を解く男がいた。

「イヤンツ」

「変な声出すな、別になにもしてねえから……ほら、コレでも食べ」

出された食べ物を弾いて飛ばす。

皿の上の食べ物が部屋の端っこに無惨にまき散らされる。

「何するんだよ、食べ物がもつたいないだろ」

「不味そうだったんだ、こんなの食える訳がないだろ……っで、何でお前はそこにいんだよ？」

再砂はいらついた表情をしながら目の前にいる男、剛毅を睨み付けた。

剛毅はヤレヤレと首を振り、落ちた残飯を拾い集める。

「何でつて、戻って来ちゃ悪いかよ？……まあ、一人で戻ってきたんだよ、後で仲間を呼ぶ」

拾ったものをゴミ箱へと捨てて、新たに食べ物を持ってくる。

「………食べない」

「じゃ、食わせる」

剛毅はそれを口に含んで良く噛む、そして、そのまま再砂の口に自分の口を合わせようと飛びついた。

っが、その試みは虚しく、再砂の砂により地面に叩きつけられた、食べていたものと一緒に。

「来るな変態」

「……………変態じゃねえし、てか何か食べないと、調子でないぞ」

言われてみれば体が少し重たい感じがする、筋肉もビキビキと割れるように痛い。

仕方ないので、部屋に完備してある冷蔵庫から、缶詰を取り出してほうばった。

「こっちのが栄養あるのに……………」

剛毅は残った食べ物を食べ始める。

「ところで……………お前誰だっけ？戦場で会った気がするが、そんな細かい事覚えてられねえ」

「……………そうだな、見ず知らずの奴にここまでする俺っていたい……………」

何か引つかかる言い方だった。

「見ず知らず……………」

「ああ、お前が誰かは知らないが、俺にとって一番大切な奴に似ていた、だから助けたんだ」

ここに来て、それが本人だと知っていても、知らないと言い張り、大好きという。

【こいつは……………それほど俺のことを……………少しくらいは、いいか】

一閃の言いつけはこの際無視してやろう、何、少しの間だ。

「そいつの名前はなんて言うんだ？」

「瞬夜、俺からみて、誰よりも強く、とても美しい女性だった」

「瞬夜、俺と同じ名前だな」

剛毅は驚いて再砂、いや、瞬夜を見る。

瞬夜はさも当然のようにその様子をみて楽しそうな笑みを浮かべた。

「おかえり、ボス、絶対戻ってくると思じてたぞ」

「……………突然いなくなったりするなよ、お前はこの組織の副隊長だぞ？」

「ああ、すまない・・・俺のいない間に何かあったか？」

瞬夜は普通の調子でさくのだが、剛毅はまだ堅さが抜けていない。もちろんそんなことは気にしない瞬夜なのだが。

「聞いてくれ、一時抜けるときにある女に出会ったんだ、お前みたいなやつだった、形こそ歪だが、とても俺を心配してくれた」

「へえ、物好きもいたもんだな」

「名前は再砂っていうんだが、俺は彼奴に何か学べる気がするんだ、それに瞬夜と同じように大好きになるかもしれん」

「へえ・・・」

瞬夜は黙る、もう何も言うべきではないと判断したから。言ってしまうえばギリギリの境界線を越える気がしたから。

暗い部屋に甘い吐息の様なものが木霊していた。

その一番奥、隊長の部屋のベッドの上に、京は寝転がり、とても気持ちよさそうな顔をしていた。

そしてどこか若々しくなっているようにも見える。

「まったく、吸うだけ吸って寝るのね・・・」

麗香はその姿を見て、恐怖と共に頼もしさを感じていた。

「これが一閃の言つた京の本性、畜生界の化身にして、吸血鬼の始祖ね・・・ちよっと貧血かも」

麗香はとりあえず、ここを出ようと壁を這う。

## 第十一章：これからの使者達（前書き）

最近気が付いたら文字数がかなりばらばら・・・  
まあ気にしないでください；w

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^



## 第十一章：これからの使者達

旧立帝國高校特別クラスの部屋、その中心に置かれている長机の一番奥に麗香はゆったりと座っていた。

何かをするわけでもなく、ただ、誰かを待つようにしてそこに座っている。

ソコに、部屋の影になった部分に出るように取り付けられたパイプから、血が溢れ出て、京の形を成す。

「やあ、昨日ぶり」

「おかげで貧血気味だよ、なんとかしてくれない？」

「それは無理だね、感情の操作は難しいんだ」

そう言つて、常に日陰となるように備え付けられた特等席に座る京。麗香はそれを確認してから、またさつきまでのようにゆったりとする。

京は京で、ペットボトルに入れた真つ赤な何かを飲んでいる。

シンと静まりかえっている教室に、今度は三人組が入ってきた。

「よくきたね、彰、冥・・・そしておかえり、水鏡」

「ただいま・・・・・・ボス」

それが水鏡の、水鏡なりの麗香に対する忠義の証であり、そして一閃を必ず取り戻すという決意でもあった。

それがわかつたからこそ、麗香は何も言わずに、水鏡を元の席、『覇光』のボスが居るべき場所に座るように命じた。

水鏡は命じられたとおりの席に座る。

彰はその隣に、冥は『近衛』のボスが居るべき場所に座った。

「『紡ぎの糸』とはどうなったの、水鏡？ただで帰してくれるとは思えないんだけど？」

「大丈夫です、ちゃんとまいてきた・・・・・・はずですから」

「曖昧ね・・・まあいいわ、これからもよろしくね、水鏡」

「はい、ボス」

「麗香ー、こいつはちゃんとまいてきたから安心しな、ただ、まくに力使い果たして、記憶がないだけなんだ」  
彰が横から補足する。

「いいわよ、どのみち私達・・・いや、私の目的にはさして差し支えがないだろうし、今のあなた達なら任せられるから」

「ありがとね、ところで・・・これだけか？」

彰は何個か空いている席を見る。

残るのは『秩序』と『法度』と『闇の影』のボスが座る席。

「翔汰と昴は戻ってきているようだから安心だが、剛毅はわからねえぞ？」

「俺がなんだって・・・彰？」

剛毅が部屋の中に入ってきた。

横には再砂が連れ添っている。

「おかえり、剛毅・・・『悪魔の正義』は楽しかったかしら？」

「なんてこととはない、こっこのほうが俺にはあっているようだ、よろしく頼むぞ、麗香」

「堅物がもどってきたな、もっと柔らかくならないのかー？」

彰が剛毅に向かって言う。

「副隊長の分際で俺に指図するのか？」

「・・・やるか？俺のがつええぞ？」

「やめなさい、無駄な戦いに労力をつかわないの、これから私達が戦う相手はもうわかっているでしょ？体力が持つと思ってるの？」

麗香が二人をなだめる、決して強い言い方でもなく、覇気もそこそこで、まったく動じるような要素がない。

ただ、二人の動きは止まった。  
真実を突きつけられるというだけで、ここまで想いが伝わり、自重させる。

「悪かった、ちょっとした悪ふざけだよ、そんなに責めないでくれよ」

「・・・悪かったよ、俺もふざけてただけだ」

「分かればいいのよ・・・剛毅、はやく席に着きなさい」

剛毅は言われたとおりに自分の席に座った。

再砂は何も言わずに麗香の真横に位置に直立不動で立っている。

「あなたの席は剛毅の横でしょ？『秩序』の副隊長なんだから」

「まだそんな命令は受けていなかった、俺は再砂だからな、それに、俺にはあそこにいく資格はない」

再砂は直立不動を崩すことなく答える。

「それに、俺にはもつと大切な仕事がある、だからそんなコトして暇はないんだ」

「そう、ならいいわ・・・後二人ね」

またゆつたりと構える麗香。

みんなも席につき、ゆつたりするが、そこには抜けた空気はない。

この空間がヒシヒシと体を感じるくらいの威圧感をはなっているようだった。

そこに最後の二人が入ってきた。

一人は全身焦げだらけで見るも無惨な姿をしていて、もう一人はその一人を支えている。

まず支えられている方に麗香が声を掛ける。

「おかえりなさい、翔汰・・・センちゃん・・・一閃はどうだった？」

「やつと帰って来れたぜ・・・ただいま、麗香、一閃か・・・やっぱり強かったな、でも絶対勝てないってわけじゃなさそうだ」

「弱いといたいのかしら？」

若干怒ったように麗香が翔汰を睨む。

だが、翔汰はそれを軽く流して、いいやつと首を振る。

「強い、強すぎるんだ、でも勝てないって強さならどうにもならないだろ、一閃にはなんとかしても勝たないといけない」

「・・・そうね・・・そうね・・・まあいいわ、おかえり、昂」

「忘れられたかと思ったよ、ただいま、麗香」

「ははは、ごめんごめん、ところで……『闇の影』の事なんだけど、どうする？」

『闇の影』の構成員達は翔汰、昴を殺す為、ふたりに向かい、返り討ちにあい、全員死んでしまっている。

残った『闇の影』は昴ただ一人となっている。

「『闇の影』は潰すよ、在ってもなくても一緒だしね……でも、そういう類の仕事があるなら私が代わって引き受けよう、仲間の代わりに」

「わかったわ、これで全員ね、じゃあ、二人も座って頂戴」

翔汰は『法度』のボスが座る席に腰を下ろし、その隣に昴が座った。

「でわ、これより一閃をこの地に戻る為の話し合いを開始する！！」

## ：折れた槍、ブラックとは

『悪魔の槍』本部があつた場所はもう、ぼろぼろで崩れ果てていた。その引導を渡した本人と、本来護るべきはずの者は互いに建物を壊しながら死闘を演じてた。

「槍を右手に、先端を針の如く、神速の突きを再現・・・大剣を左手に、軽量、薄さは紙、強度はダイヤモンド」

「そんなもの効かないよ」

雲明の右手に握られた神速で突き出される槍を、光速で躲す鋭美。時折左手の大剣を混ぜるが、鋭美には見えているかのようにさけられてしまう。

だが、鋭美には傷がいくつかついている。

「つち、他にもなに仕掛けているな」

鋭美が距離を開けると同時に雲明が言う。

「弓をこの手に、矢は一で百を、全ては追跡、当たれば爆発」

水が槍から弓に代わり、大剣はそのまま矢となる。

躊躇わず放つ。

鋭美に当たるまでは一瞬だが、その間に大剣はいくつにも分裂して個々に鋭美を襲う。

「それは厄介だね・・・まあ、当たらないんだけどね」

当たらない確実な自身があり、鋭美には確実に避けられる能力があった。

だが。

「矢は追跡だ、さらに、一つ一つは展開、面として敵を襲え」

矢の軌道がかわり暮盤目状に並列になり、展開して速度はそのままで、開いた傘のようになる。

何処に逃げようが面は躲すことが出来ない・・・故に、鋭美は雷を自身にまわりつかせ、そのまま、面を突破する。

向こうではやはりボウツとした雲明がそこに悠然と立っていた。

「その『才気』、いろんな武器を使えるとは、反則じゃないですか？」

「反則じゃないですよ、こういう『才気』なんですからこういうもんなんです、それよりよそ見はいけませんね」

鋭美を背後から大剣が襲う。

よく見れば、大剣にはいくつもの繋ぎ合わさった後が残っており、それが先ほどの矢の集まりだとわかる。

「卑怯な手を……！」

「先手必勝を主とするあなたの言う事じゃないでしょ、それにこちららは注意をしましたよ」

「ツチ！めんどくさいな、周りに迷惑とかいろいろ考えてたけどやめだ！一瞬で殺してやる！」

鋭美がイラつきと共に自身が放てる最高の『才気』を解放する。

ゴロゴロと雷が天空で鳴り響く。

「水は………私の周りにつき二層、外層は鉄分をおおく含ませる」

「そんな防御簡単に突破して見せてやろう、そして二度と僕らに会いたくないような精神状態にさせてやる！」

雷鳴がどんと強く大きくなっていく。

「結界を模せ、出来るだけ多くの数だ、すべてを強化、貫通しない、雷の一部を浸食しても構わない」

水が雲明の周りを薄く何重にも張られていき、さらには天空を覆う、雷鳴を響かせる雲にまで覆い被さる。

鋭美にはその行動がとつもなく腹が立ってしまったようだ。

「無駄だああああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

一瞬、あたり一面、目視で『悪魔の槍』を確認できる程度に遠くまで光が景色を、飲み込んだ。

「生死は確認しないよ、生きているとは思わないからね……でも、もし生きているというのであれば……！！」

鋭美の体中を雷が通り、同化する。

「追つてきな、また・・・返り討ちにしてやるう・・・!」  
鋭美はその場から、空気に溶けるように消え去った。  
雷が直撃した場所、そこにはいくつかの膨らみがあった。  
ふくらみが動いて・・・。

さつきまでいた場所が変わらず彼が立っていた。

「本気だったか？」

「いや、ちよつとは加減したよ、この世界が滅んだら僕と一閃のラブコメが始まらないでしょ」

鋭美にしては普通の声質で返事してきた。

「もとからそんなもんじゃない、誰がお前なんかとラブコメを展開するかよ、演じさせられるこつちの身にもなれよ」

「君じゃないよ『道敷大神』」

「俺は何も言っていない」

「俺だよ・・・ばか・・・!!」

鋭美が吹っ飛ぶ、すぐに『才気』を展開しようとした『道敷大神』も展開する前に飛ばされた。

二人が立っていた場所には一閃が拳を振った状態で止まっていた。

「少々、見過ごせない単語が出てきたから制裁を加えようと思って参上した・・・なんちゃって」

「そんなことのためにか・・・『阿修羅』」

「そんなことのためにだ、『道敷大神』・・・俺が来たのはそつちのほうだがな、鋭美」

一閃は『道敷大神』を無視して、鋭美の方にむく。

「僕が・・・何か言ったかい？それとも、そういう口実で僕に会いに来てくれたのかな？」

「この世界が滅んだら・・・つと言ったな、その脆弱な力でよくもそんなたいそれたことが言えるな！」

「ブラックである僕にそれが出来ないとも思うの？」

「ブラックごときの力でそんなことが出来るとも言いたいのか？」

鋭美の質問をオウム返ししていく一閃。

「一閃、あんたもブラックでしょ、僕と同じなのに何でそんなに自分を下げるような事いうのかな？」

「そうだな、ここは見逃しといてやる、殺したい奴もいるが時期じゃない、だが、世界はお前ごときでは滅ぼせん」

それだけ言つて、一閃は帰っていった。

「結局何しに来たんだろうな……ん、華鈴からの招集だ、行くぞ、俺が案内する」

「わかった、いくよ」

鋭美は不機嫌な顔をより一層不機嫌にして、先に行く『道敷大神』の後を追った。



・折れた槍、ブラックとは（後書き）

そろそろそれぞれの才気の説明でもしようかなあ・・・

・短い会議（前書き）

短すぎる・・・こんな会議とは呼ばないような・・・w

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからもよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ：短い会議

「つで、実際の所何をどうするんだ？」

「一閃をこの『地獄の使者』に連れ戻せばいいんだろ、強引にでも連れて帰ればいいんじゃないか？」

「それが出来ないから考えてるんだよ、もっと考えて発言しようね、彰」

「みんなで行けばなんとかならないのか？さすがの一閃でもこのみんなには勝てないだろ」

一閃を無理矢理連れ戻すという方向で話が進むなか、三人がそれに反対した。

「無理だよ、一閃はそんなんで連れ戻せるようなたまじゃない・・・それに、私は以前のままの一閃を連れ戻したいの」

「駄目でしょ、つて麗香様の言ってることに賛成します」

「お前等死ね！！そんなこと出来るわけねえだろうがあ！！もっと無い頭を総動員して、自分で纏めてから発言しやがれ！」

若干一名ここには相応しくないほどの暴言を吐く奴が居るが、誰もそいつに文句は言わない。

「再砂、落ち着いて・・・それでね、一閃が何故ここを抜けたかを考えたの、答えは分かっただわ・・・」

麗香は一呼吸置いてから、

「一閃は『八皇』という伝説の組織から私達を護る為に抜けたと思っわ、だったら・・・私達がすることは分かるわよね？」

「そうですね、『八皇』を潰せば一閃は目的が無くなり戻ってくる・・・！」

麗香はその言葉に頷く。

だいたいの方はこれに賛成のようで、みんなウンウンと頷いている。その中で京と再砂だけは、腑に落ちないといった顔をしている。

おそらくこの中ではもっとも『本当の』一閃を知っているであろう

二人だ。

「再砂、それから京・・・何か引つかかる事でもあるのかしら？あるなら話して頂戴、あなた達なら良い作戦の一つや二つあるでしょう？」

麗香に言われて京がすこし嫌な顔をする。

「言いなさい、京」

「多分、それが出来たとしても一閃が戻ってくる事はないと思いますよ、理由は言えません」

「・・・再砂は何か言う事はあるのかしら？」

「俺が言う事は何も無いぜ、俺にはここを守る以外のことはしない、そして一閃がそんなことで止まるとは思わない」

再砂はそういつて逃げるように窓から飛び出た。

それを見ていた京が仕方ないと言った感じで言う。

「それでも、当分の目的としては妥当だと思うわ、それでいっても構わないと思いますよ」

「結構、これでいくわ、各組織は個々に準備をして頂戴、準備が出来次第報告を頼んだよ、私はここで待つてるから」

みんな思い思いに部屋を出ていく。

残ったのは麗香、冥、そして京だけだった。

「麗香、私は今回の作戦では役に立てそうにない、それだけ言おうと思つてな」

「どうしてなの？どこか体調が悪いの？・・・それとも私が隊長だから？」

「いや、一閃が本気を出すと水が無くなり、雲が無くなる、私にとつて日の光とは最強の敵であり、唯一の天敵なのよ」

「そう、なら、気にしないわ」

「ごめんね、でもちゃんとその他の事を頑張つて手伝うから、追つて分身に伝えさせるよ」

「たのんだわよ、京」

そういつて麗香が出ていった。

残るは、京と冥。

「京様、私に一閃について何か知っておくべき事を教えていただけ  
ないでしょうか？麗香様の助けになりたいのです」

「そうね……あなたに言える事は少ないわ、私は麗香に仕えて  
いるから……でもね、一つだけ助言しといてあげる」

京は冥に近づいて、口を耳に近づける。

「もしも一閃が来た時、麗香が悩んだら、その背中を軽く押してあ  
げて、多分麗香は絶対に躊躇うと思うの、だからその背中をソツと  
ね」

「はい……わかりました、任せてください！」

京は笑って、血となってパイプに入っていく。

冥はそれを見送ってから、部屋を出ていった、自分の成すべき事を  
成す為に。

：短い会議（後書き）

感想がほし  
iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!  
（笑）

・地獄を目指す皇（前書き）

・・・テスト勉強に忙しいです・・・

その為詳細の説明を書く時間がありませんw；

ということのでテストが終わり次第書く事にします！

それまではおそらくPCも禁止されていると思うので前書き後書き  
が書けないとおもいますが気にしないでください！

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ：地獄を目指す皇

いくつも連なる山の内に隠した山型の要塞。

その中には七人のブラックが机を囲んでいた。

「っで、それぞれの成果を聞こうかしら……正直な所期待はしてないですけど」

「俺達は、最初に『地獄の使者』に向かって……」「振り返ちです」

臼と木根が全身に生傷を付けている風貌からそれは軽く予想がついていた。

華鈴は、ちよつと溜息をついて、

「誰に進行を阻まれたのかしら？……っでこれは聞かなくても分かりますわね、一閃がいらないとなると残りは一人ですので」

「その予想通りだ」「相手は再砂、元瞬夜です、名前変えたようですので」

「はぁ……やっぱり彼奴か、無駄に強いからな、あいつは」

今度は深く溜息をつく、そして、今度は鋭美と『道敷大神』のペアに目を向ける。

「とりあえず、めんどくさい『悪魔の正義』の『悪魔の槍』を壊滅状態にしてきた」

「一閃と出会ったぞ、奴は何か隠している……だが相当上位の精神プロテクトをかけている、俺が侵入出来ないほどのな」

「まあ、彼なら出来るでしょうね……それで、戦闘になつたのかしら？」

二人が生きている時点でそれはないと気付いてはいるものの、聞いておく必要があるのできく。

鋭美はあからさまに嫌な顔をしている。

「戦闘、っでというよりは牽制された……世界はお前に滅ぼせないとかいって、どういう意味なんだろう？」



「さあね……………」

「華鈴、何を隠している？」

『道敷大神』が華鈴を睨む。

「どうして、そう思うのかしら？」

華鈴は軽くあしらうように言うが、目は笑っていない。

『道敷大神』は、さも当然のように言い切る。

「俺の『才気』に隠し事は難しい、相手の心を無理矢理のぞき込めるからな、ある信念のもとに」

「……………仕方がないわね、でも、これを聞いたらあなたは例外なく心に重いものを背負う事になるわよ？」

皆押し黙る。

華鈴はそれを楽しむかのように見る。

「……………わかった、黙って置いてくれ、後で俺だけ聞く」

「いいわね、それで……………じゃあ、これからの方針を言うわよ皆頷く。

「私達が次に滅ぼすのは『地獄の使者』よ……………あそこは本当に邪魔だから」

「だが華鈴、あそこにはそうとうな強者が集まっているぞ、それはどうするんだ？」

「僕の強者リーダーにかかった人が少なくとも5人はいるよ？」

「再砂もいる、彼女……………まだ何か秘密兵器を隠している様な感じだったわ、それがどれほどかはわからないんだけど……………」

「あそこには『吸血鬼』一ノ宮 京もいる、彼奴自体は大したこと無いが、あいつの能力は少々厄介だ」

「一人分の血で百人以上の自分を複製……………厄介すぎる、しかし、一閃が本格的に活動している今、奴は外の状況を知る事は少ない」

「日の光が苦手、なんだよね……………それくらいの対価が必要だよそんな能力」

皆が思い思いのことを喋りながら責めかたをどうするかをまつめる、これが『七皇』式の作戦のたてかたなのである。

「京は『道敷大神』に任せた、次はやはり再砂だな……」  
「やはり再砂は誰にも止められるとは思えない、だからこいつは華鈴に任せたい、いいか？」

「まあ妥当な判断ね、いいでしょう、わたしが引き受けましょう」  
「ありがとう、次は誰が居た？」

「麗香とか言う一閃の引つ付き蟲だよ、僕がやる、いや僕以外にやらせるきは無いよ」

「いいでしょう、そこまで言うからにはミスは許されませんよ？」

「僕がミスなんてするわけがないでしょ……後注意すべき人は、剛毅、翔汰、水鏡……この三人を抑えれば勝ちよ」

「それぞれの『才気』を教えてください」

「剛毅は『砂塵』、私達にとっては驚異じゃないわね」

「なら私が行くよ、それくらいなら出来そうだもん」

梨理が手をあげる。

「良いでしょう、梨理に任せます、水鏡は確か『雷人』だったわね、臼と木根、任せて良いかしら？」

二人とも頷く。

「でわ、残った翔汰を俺がやるんだな？そいつの『才気』はなんだ？」

「僕の情報が正しければ疾風にもってこいの相手よ、彼は『暴風』、風の派生だからね」

「ほんとだな、くくく……俺の『風神』にどこまでくいついてくれるか見物だな」

「じゃあ、攻め込む時間を決めるわ、明日の明朝、日の出と共に行くわよ」

「……おう……！」

全員が気合を込めるように握り拳を掲げる。

だが、まだ『七皇』知らない、その計画が、攻め入る前に崩れ去る事を。

そして、こともあろうにただ一人の『人間』によって阻まれる事を・

・  
・  
・  
知らなかった。

・地獄を目指す皇（後書き）

感想していただきたいです！

ちゃんと返信はしますが・・・ヤツパリテストが終わるまでは  
出来ません><

後、感想ではなくこうして欲しい等の要求や、

ここが変じゃない？っていうのもして欲しいです・・・。

まあこれは強制は出来ないので書いてくれれば嬉しいですよ^^

あ、いまさらながらこんなキャラ考えた！ってのもいいですよw

## ：天罰、地獄の盾

『インデペンデンス』の屋上に十人前後の屈強な猛者が集まっていた。

「今日集まって貰ったのは他でもない、『悪魔の槍』が攻撃されて、ボス大井 雲明が行方不明になっているからだ」

「それが何か問題なのか？」

机の一方に皇が座つて、もう一方に残りの全員が座っている。

その内の一人は『紡ぎの糸』に働きかけているチームのリーダーで、李 瞬といい、『地爆』を持つ。

地を爆発させることが出来る能力で、使い方次第ではかなりの応用が利く代物だ。

「いいか『悪魔の槍』だ、曲がりなりに、『悪魔の正義』の組織が攻撃を受けたわけだ、これは『七皇』の余裕の象徴だ」

「なるほど……やつらは俺達のこととはさして驚異じゃないと見ているわけだな……それで、どうするんだ？」

「今すぐにも攻め込みたいんだが、いかんせん奴らの身を隠す能力は桁違いだ、出てくるのを待つしかないんだ」

「瞑を以てしても無理なのか？」

皇は残念をうに首を振る。

そこに瞑が入ってきた。

「皇様、報告がございます」

いつになく感情を表に出して、焦燥感を抱いているようだった。

「どうしたんだ？」

「実は、我々『天罰』と目的を一緒にしていると思われる組織が見つかりました……」

「どこだ！それは！」

瞑はそこで口を紡ぐ、どうやら言いたくないらしくった。

だが言って貰わねば情報の交換などが出来ない、故に無理矢理にも

聞き出そうとする。

「頼むよ、瞑……どうしても教えて欲しいんだよ」  
皇は皇子に人格を変える。

瞑はとても困ったように数歩後ずさる。

「卑怯です……！そんなの……そんなことされたら言う  
しかないですか……！」

「言っただけなんだからしてるんだよ……さあ、言ってくれな  
いかな？」

どんどんと顔を寄せていく皇子、後ろに下がっていく瞑。  
だがやがて壁にぶち当たり、下がる事が出来なくなった。

皇子はにこりとほほえみ、素早く、両手で逃げ道をふさぐ。

「瞑、僕の頼みでも聞けない？」

「あう……絶対、絶対私が漏らしたのなんていわないで  
くださいよね……！」

「わかってるよ、俺がそんな悪者に見える？」

「うう……ん……えっとね私の妹知ってるでしょ？そこ  
の組織がそうなのよ、今攻める準備を始めてるって言ってるわ」

「ありがとう、瞑」

皇子は軽く唇にキスした後、自身を引つ込める。

「瞑ありがとう……でわ、お前にはこれから任務を与える、妹  
の所に行ってその組織を調べてきてくれ」

「でも……何か隠してるみたいでいやだな……」

今度は皇はそのままの状態で瞑の顎に軽く手を添えて、優しく上を  
向かせる。

「大丈夫さ、俺は俺じゃないときでも約束はちゃんと護る……それ  
はお前が一番良く知っているだろう？」

そして軽いキスをおでこにする。

瞑は焦った表情を消して、今度は自分から皇の唇を奪つ。  
そのキスは10分くらい続いて、やっと皇を解放する瞑。

「行ってこい」

「任せといて……皇、行ってくるね……皇子」  
そういつて暝は駆けていった。

「相変わらずアツアツだな、見てることうちが火傷しそうだよ……  
・それで、その組織には本当に何もしないのか？」

「ああ、約束だからな、だが場所は突き止める、狙っている以上何か知っているはずだ、なら『八皇』が現れることもあるはずだ」

「しばらくは待機……ですかね？」  
皇は静かに頷く。

反対側では久々の休みに喜喜としていた。

「嫌な感じがするな……何も起こらなければいいのだが  
な」

皇はそのまま、椅子に座り、寝てしまった。

再砂は『地獄の使者』の真上、空、いや空中に立っていた。

「感じる……嫌な奴らだ……この戦いで、俺は死ぬかもしれない」

その手には一粒の丸薬が握られていた。

「まあ、護る為には仕方ないことだ……だがこの丸薬を飲めば最後、俺は俺じゃなくなる」

一つで数億もまかなえるような気配が周りから迫ってきている。

再砂は丸薬を歯に挟む。

「だがそれでいい、俺は、俺がしなければならぬことをするだけだ」

それをかみ砕いた。

## 第十二章：森の入り口（前書き）

名乗った瞬間から勝負は始まるのです！



## 第十二章：森の入り口

少し話を遡り、角理が駆けていったところまで戻そう。

「まったく、人使いが荒すぎる……しかもそれを聞いてる私って……」

嫌気がさして、がっくりとうなだれる角理。

そして行き先を思い出しただけでもその嫌さが倍増した。

「この森の向こうか……この森は危険区域なんだから通り抜け出来ないし、かといって一日で行くには此処を通らないと」

一閃が言う事は此処を通れと行っていることと同じだ。

「はあ……仕方ない、よね……」

角理はゆっくりとその中に足を踏み入れた。

辺りから程良い寒さの空気が角理の体を吹き付ける。

「ヤダ……怖い……何か出そう……」

「じゃあ入ってくんな、出てけよ」

突然目の前に真上から男の子が現れた。

「ヒヤウツ!!!!!!」

角理は突拍子もない声をあげながらしりもちをつき、上から木の蔓にぶら下がっている男の子を見据える。

男の子は蔓から下りて、もの凄く不機嫌な顔をして近づいてくる。

「こんなことでいちいち驚くなよったく!つで、世間一般に言う危険地域にそんな気持ちで入るとはどういうことだ?」

男の子は困り顔をさらに険しくして、まだ腰が抜けてる角理を見下す。

「……アホだな」

ボソツとそんな事を呟く。

角理は尻餅をついたままの状態で精一杯男の子を睨み付ける。

「うるさいわねえ！！私だってこんなところ通りたくなかったわよう！！あんたみたいな子供と違って大人の……！！」

「楚良だ」

男の子は角理が言い終わる前に名乗る。

角理は少し驚き、楚良を凝視する。

「あんたじゃない……俺には母上から貰った楚良という名があるんだ」

「そうなの……って、どうでもいいわよ！！」

「後、念のため拘束させてもらったからな、これ以上先に入られても困るし、俺の事を話されるのも困るから」

言うのが早いが大地が抉れて角理を後ろ手に捉え、埋める。

「え！？ちよつと！私には用事がある……むぐう！」

楚良は角理を足で地面に縫いつけた。

そしてすこしぐりぐりとする。

「関係ないな、俺の顔を見た時点でお前はもうここから出る事も入る事も出来ない」

「むぐうう！！」

「そうだな、ちよつとした慈悲だ……」

おもむろにおさえていた足を離して、その足を角理の顔の前に持っていく。

「………つふ」

「勝ち誇ってんじゃ無いわよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

差し出された足を『白雷』を付けた歯でかみつく角理。

森の中に叫び声が響いた。

「また楚良の奴が過ぎた遊びをしてるな」

「そうかしら？今回ののは少々何か違う気がするわ、きつと良い事よ湖の真ん中に建てられた小屋では大我と紗代が仲良くお茶を啜って

いた。

周りは深く霧がかかっている森があり、それを成しているのはもちろん紗代である。

大我は地面の揺れを感じ、楚良が何かしていることは知っているが、何をしているかまでは範囲外である。

一方紗代は浮かんでいる水蒸気、小さな海の粒全てに干渉しているため、何をしているかまでわかるようだった。

「どうなってるんだ？」

「角理って何か用事で入ってきた女の子に淫らな悪戯……もとい制裁を加えてるわ」

「何！？俺も行きたい！」

水に飲まれる大我。

「逆の立場で再現してあげましょうか？」

大我は目が笑っていない紗代を見て震え上がっていた。

「言ってみただけ……冗談だって」

おそろおそろ言うと言つと簡単に紗代は解放してくれた。

「こつちも冗談よ、そんなこと言う人は私は好きだけどね……」

楚良に悪影響なの、気を付けてね、パパ」

「……わかった」

大我はお茶の代わりを取ってくる為に小屋の中に入る。

紗代は依然としてお茶を啜っているが、その目は歓喜の中にあるようだった。

【息子の力が、私には堪らなく楽しみ、あの子はやがて一組織を束ねられるほどの強者になれる！】

それはこれからの未来の断片の一部を知る者の不安が払拭された事を意味する。

そして、『七皇』と同じ存在にして世界を観察する事にまわったものの唯一の不安の消滅。

いや、もうこの『存在』にとってはそれだけではないだろうが……。

「……………お茶、無くなった」  
紗代もお茶を補給するために小屋の中に入っていった。

「いってええええええええ!!!!!!!」

楚良は噛まれた足を手でさすりながら角理を力一杯睨み付ける。

これまでの角理なら、この程度の殺意を向けられた時点で気絶には  
いたらないものの、動けなくなっただろう。

だが、今回は何故か普通に話して自分の無事を確認できるくらい  
余裕があつた。

すかさず『白雷』を肌から放つて、地を呪縛から解放される。

「ふう……………逃げますか」

角理は何故か落ちていた様子で言う、少しでも優位に立ったのが良  
かつたのか、顔は微笑。

対する楚良は一発出し抜かれただけで、相当ご立腹なようだ、腕に  
力を溜めて後ろに引く。

「馬鹿にするなあああああ!!!!!!」

思いつき前に突きだした。

見えない拳は空を飛び、角理に直撃した。

角理は吹っ飛んで森の中心、湖の真ん中まで飛んで行ってしまった。

「……………やっちゃった、母上に怒られそうだな……」

そう言つて角理を飛ばした方を見る。

「フフフ、それにしても俺って結構成長してるんじゃないか、これ  
つて」

：天使と悪魔（前書き）

章わけにはあんまりこだわってないです；  
すいません

：天使と悪魔

一閃は立ち止まっていた。

鋭美、『道敷大神』の牽制に行った後だったのだが、二人はとりあえずはブラックの者。

目の前には確実にそれ以上と捉えるべき存在が立っていた。

「遅かったね、もうちょっと簡単にあしらって来るかと思ったよ、まあ待つのは嫌いだから早く来てくれて嬉しいけどね」

「紅葉、貴様どうやってここにきた、俺の感覚が正しければ瞬間移動をしているような感じだったぞ」

「正解！さすがは一閃だね、そう私は瞬間移動してきたんだ・・・  
・これだけでもう、私が何をするかわかるよね？」

「俺を殺しに来た、これでまず間違いないだろう、だが問題はそこじゃないんだよ」

「私達にあなたを殺せるような術は無いはず、なら何故出てきたか・・・それが聞きたいんでしょ？」

紅葉は一閃を見透かしたかのように見る、一閃はその目を普通に見返した。

二人の間の地面がひび割れた。

「聞きたいとは思わない、俺に適わない事がわからない奴らだって『そこ』にいるさ、ただ少し失望したんだよ」

「失望？それは私があなたの慈悲に甘えていない事を言っているのかしら？言っちゃ悪いけど迷惑だったわ」

「そういう割には随分と積極的に入ってきたじゃないか、それともそれはお前の意思じゃなかったとでもいいたいのか？」

「そうよ、元の『私』がそれを望んだからそうしたまで、そっちの意思に反すれば動きが鈍るからね」

二人の視線が外れる事はない、二人とも、瞬きの回数すらも減らして見つめ合っている。

「あなたがこんな愚行さえしなければ『私』は幸せだったのに、あなたはやってはいけないことをやってしまったの」

「俺の目的が貴様らにわかるとは思えんな、少なくともその目的の真相には誰も辿り着けないはずだ」

「あら、それは何でかしら？そんな大言を吐くには相手を見た方がいいわよ、もしかしたら私に心を覗く能力があるかもしれない」

「………目的はなんだ？」

「さっきあなたが言ったんでしょ？私はあなたを殺す為に来たのよ、それが私の最終目的」

「そうか、質問が悪かったな………どうやって？」

二人の間のひび割れた地面はビシビシと不快な音をたてながら軋みに軋んでいる。

「あなた、それ代替物でしょう？」

一閃はその言葉に初めて眉を寄せる。

「私以上だったあなたがその『存在』をこの世界に顕現すればなんらかの影響が出てしまう」

「だが、俺はお前とは違うぞ、なんていっても俺は堕『天使』、いわゆる『悪魔』だからな」

「『悪魔』も、流石に世界の影響は考えると聞いたわ、そりゃそうよね世界が変わると自分たちはどうなるか分からない」

「愚かな『悪魔』もいるかもしれないだろう、完全に無いとは言い切れない」

「でもそれは代替物でしょう？見たわよ、あなたがいた学校の屋上、死んだように眠る『本物』のあなたを」

視線が揺らぐ、いや、間に在る空間がゆがんで視線が強制的にゆがまされているようだ。

その歪みはだんだんと大きくなっていき最終的にはこの世界から隔絶された広い空間となった。

一閃は初めて視線を外して、辺り確かめる。

「ここは………貴様、何をする気だ？」

「私？私は『私』を召還するのよ、でも世界を歪ませる事は主の意思に反する、ならばあなたをこちらに持つてくるまでのこと」

「ということはここは『天界』で間違いないのか？俺がいた頃と違って随分と殺風景になったものだな」

「『天界』ではないわ．．．もう、あなたの存在は『天界』の許容範囲ですら凌駕してしまうほどに大きくなってしまったから一閃が視線を戻して、二人はまた見つめ合うことになる。」

「．．．『現世』と『天界』の狭間だな、考えられるのはもうそこしかない」

「正解！やつぱり、あなたは最高ね一閃．．．これからあなたを戦えると思えると．．．ゾクゾクしちゃうわ」

紅葉の目がドロドロと染まっていく。

「それでも私がここに顕現できる時間は最大で10秒、これであなたを倒したいわ．．．でも、無理でしょう？」

「ああ無理だ、そんな短時間で俺を殺せる野郎は一人もない」

「殺せる人がいるってことね．．．」

その言葉に一閃が初めて殺意を表に出した。

それはあたりの空間を歪ませ、何も無い虚空にひびをいれるほどに強力なものだった。

「何か知っているのか．．．？」

「さあ、どうでしょうかね、私を倒せば聞けるかもしれないわね．．．．．加減出来た時の話ですが！」

途端、辺りの空気が清浄になった。

そう、決して有り得ないほど正常で清らかで、そしてどこまでも濃い、濃すぎる殺意があたりに充満する。

「行きますよ一閃、せいぜい瀕死にまではしてみたいですかね！！」  
「っふ！やつてみやがれ！『天使』の分際が！」

有り得ないほど澄み切った殺すという気持が込められた純白の炎が一閃に飛びかかる。

対してそれに対抗するのは、これまた有り得ないほど濁りきった殺



す気持ちちが込められた真紅の炎。

白と紅、善と悪、『天使』と『悪魔』。

互いに相容れぬ者同士の戦いは今、切っておとされた。

## ：人ならざる戦い

戦いが始まってすぐ、紅葉の体を何か包み込み、懐かしいモノを形成した。

『天使』、人ならざるモノにして、神の御使い、かつての自分の『存在』、そして今の最も反対の存在。

一秒

天の上の炎、純白の炎は、あたりを包み込み、膨大な熱量質量を伴って一閃を取り囲む。  
炎による戦場の設定。

概ね自分にとって都合のいいように戦場を設定し、相手がそれから逃げられなくする炎の壁の内側の世界。

一閃は抗おうとはしない、そこまでされてもまだ一閃にとってこれはまだ余裕の範囲であり。

自分の強さを理解できていない愚か者だと、心のどこかで笑ってさえいる感じた。

決められた戦場の形はまったくの平地、隠れる場所すらなく、盾にするものもない。

ただ、自分と相手、紅葉と一閃だけが立っている平原ができあがった。

二人とも何も喋らない、汚れていても神聖さだけはかねそろえる二つの『存在』に言葉など要らなかった。

ただ紅葉が純白の炎ほ体中に纏って、その炎を大きくすること。そして、それに答えるかのように真紅の炎を腕に纏わせる。

曰く、行くぞ……！と。

二秒

交錯は刹那よりも短く、打ち合いは数回に及んだ。

もはやこの戦いに人間の理などない遠く及ばない。

純白の炎塊はその炎の一片たりとも漏らさずに、真紅の炎に突進した。

それに対して行われた反撃は単純明快、ただその凶悪な力をふんだんに使って、圧倒すること。

衝突と同時に混じり合う紅と白の炎、そのなかで紅の炎、真紅の炎は白の炎を凌駕して、はじき出した。

だが一瞬離れた炎はすぐにまた重なる。

紅葉が何も無い虚空で、何らかの推進力を得て、食らいついてきたのである。

一閃としてはこれは予想の範囲内にギリギリ収まる、故にその推進力の元を絶つ為に紅葉の背中を狙う。

だが簡単にそれを許すはずもなく、身を翻して純白の炎を纏った蹴りが一閃に向かつて放たれる。

真紅の炎を纏った手でガードして、素早くその足を乱暴に掴む。

が、今度は同じく純白の炎を纏ったもう一方の足が襲いかかる、その速さは、およそ二倍強。

ガードは間に合わずに、一閃はもろにそれを食らう事となる。

紅と白の炎は今度こそ一度目の分離を果たした。

一閃は何度か転がった後、体勢を持ち直して傷つけられた場所を手で拭い、紅葉を睨みつける。

紅葉は余裕の笑みを浮かべて、さらにその『存在』をデカくする。

その背中には『天使』を連想させる白銀の翼が三対六枚生えていた。そして不敵に手を揃えて前にだし、二、三回挑発するように曲げる。

曰く、かかってこい……!と。

三秒

甘んじて挑発にノル事にした一閃は、炎を全面広範囲に展開して、自身の領域を確立する。

その中に身を投じて、真紅の炎を握る。

すると炎が質量を持ち、その形は槍を形作る、一閃はそれを何本も紅葉に向けて放った。獄炎の塊が、灼熱の風と共に一直線にかつあらゆる方向から紅葉に襲いかかる。

だがこれでもまだ一閃は足りないと感じた、もっと強く、もっと圧倒的に勝つ為に次の布石を用意する。

手の中には一閃の強靱な精神力によって押し固められた炎球、もはやそれ自体が一惑星の質量に匹敵するほどだ。

だが、今回は質量は無い、ただ量子を決してくっつけることなく押し固めている、非常に不安定な球だ。

一閃は完成したそれを見て笑みを零し、紅葉の行動を観察する。曰く、俺は本気だ……!と。

四秒

数本の獄炎の真紅の槍があらゆる方向から襲いかかってきた。

触るだけで、その『存在』自体を灰に帰して、その纏う灼熱ですら掠っただけで大火傷をするという魔槍。

触れる事は出来ない、さらには完全な攻撃範囲が広すぎる、避ける事は……出来ない。

紅葉はそう決断を下して、それをもとに最善の行動を模索し、実行する。

避ける事は出来ない、全ての方向……ならば迎撃して穴を作れば良いだけの事。

純白の炎を固めて、一閃には劣るスピードであるがほんの刹那で質量のある、純白の三本の槍を作る。

それを同時に一閃から全くの方向から襲いかかろうとする一本に投げつける。

真紅の一本に対して純白の三本がぶつかり合った。

だが相殺、一体どれほどの精神をつぎ込まれた代物なのか。

紅葉は空いた隙間を通して、外に飛び出る。

残った槍は先ほどまで紅葉がいたところに突き刺さり、爆炎をまき散らしている。

もう一度純白の槍を三本ほど作り出し、牽制の為に一閃がいるであろう方向に渾身の力で投げ飛ばす。

純白の槍は爆炎を薙ぎ払って飛ぶ。

だがその向こうには誰もいなかった。

ハツとしてしゃがむ紅葉。

だがそれが仇となり背中を足で押さえつけられる。

同時に背中から何かが無くなるような感覚が襲ってきた。

曰く、口ほどにもない……!と。

五秒

翼が消し去られた、『天界』一を誇る『天使』のそれはすなわち、だ。

一閃の勝ち誇ったような顔が目に見える、そして、その後の悔しそうな顔も。

翼が消えた事により、主から新たに強力な翼を授かり顕現する。

一瞬で行ったその行為は、一閃に大きな隙を与える、その一瞬を見逃してやる謂われは、無い。

無いのだが紅葉は攻撃しなかった、攻撃するよりも先にすべき事があつたからである。

全神経を外側から内側に流し込む、さらにはそれを体の一部分に強制的に持つていく。

心が真っ白に洗われていくような感覚が、紅葉を襲い抗うことなくその力に己の全てを委ねる。

力の源となるべきものの『存在』は分かっているから、抗う理由はない。

その身は『天使』によって作られた『天使』の所有物であり『天使』によって生死を決められるのだから。

そこに一切の私情は入り込む余地はない、入れようと思った所で代

替物である紅葉に拒否権はない。

心に確固たる確信を持って、『何か』があることがわかり、その『何か』が溢れ出ると自分が無くなる事も分かるが、抗えない。

紅葉はフト思った、抗えないと考える『自分』とは一体誰の事なのか、そしてそれを許容する自分は、一体。

その考えすらも心の奥底に強制的に沈められて、紅葉の専心は一閃を妥当する事に向けられる。

紅葉は両手を広げて小さく告げる。

「神に似たるものは誰か」

途端、全身を高密度の炎が体を新たに取り巻いていく。

一閃はその紅葉の姿を見て懐かしくも、『天使』だったころの部下を思い出し、顔中で嬉しさを表した。

さらには、油断していた心を一瞬で締め上げ、構えを但し、殺気を充満させる。

曰く、これで対等だ……!と。

六秒

【いい感じに『存在』を上げてきたな……嬉しい限りだ、これなら俺も本気が出せるかな……?】

溜息をつく、紅葉の成長には目を見張るモノがある、それは認めよう。

だが、この場合によってはまったくもって厄介なものでしかない。

「高き館の主」

言いたくもない言葉を言い、微かに違うと思う。

【だが、あいつの相手としてならこれでいいのか、『天使』に肅正される『悪魔』だよな、まあ逆は……あってもいいか】

口の端を歪めて奇妙に笑い、背中に意識を集中させる。

かつて主に貰い受けた純白の四対八本の翼は、今となっては全て黒く濁って恐怖をかき立てるようになってる。

刮目、同時に溢れ出す憎悪の炎。

包まれた真紅の炎から真つ黒な炎を纏っている、何か、がそこから出てくる。

全身から溢れ出すような『存在』をまき散らして超絶かつ恍惚な目を以て紅葉を単純に射抜く。

ただそれだけの行為なのだ、だが『天使』を圧倒した、絶対的な差でもって戦うと誓う目を向けた。

『天使』は刹那で体勢を持ち直して、一直線に『悪魔』に突撃する、純白の炎とともに。

刹那よりも早い未知の領域で、間合いは詰められた。

『天使』は純白の炎を固めて作った光り輝く長い剣を上から下に振り下ろす、その剣は聖剣と呼ぶに相応しい気配を宿していた。

一閃は同じ領域に立って同じように炎を固めて剣を作る、ただその炎は今までの真紅ではなく漆黒になっていた。

剣の形は歪曲がりくねった剣身とギザギザで痛めつける事を目的とした刃、そこにあるのはまさしく魔剣、聖剣と同等の気配を放っている。

その剣を一閃はあくまで防御の手段として使った、振るうことなく、ただ敵の攻撃を受ける為だけに。

剣と剣が混じり合う時、光と闇はその『存在』をかけて、反発しあい、そして一部で混ざり合う。

これはたがいの『存在』が切っても切れない関係で在ると同時に、全く対照的である由縁からだ。

『天使』は苦しそうな顔をする、対して一閃はどこまでも愉快気にその様子を観察している。

曰く、まだ何か足りないだろう……!と。

七秒

一閃の楽しそうで不敵な笑顔を見て、『天使』は最後の切り札の投入を決定する。

純白の世界、その世界に長い時間掛けて閉じこめてきた己の『才気』

を使う。

全方向逃げ場はない、どこかを切り開けばなんとかなるといっレベルを超している、どこを突破しても、絶対次がある。

故に付けた名を『永遠の牢獄』、一閃にダメージを与えあわよくば殺す為だけに研ぎ澄まされた『天使』の一撃。

純白の炎の到達は発している本人にしかわからない、元から白だった世界からの純白の攻撃などわかるはずがなかった。

現に一閃は何かを感じているようで周りをきよろきよろしているが、何かわからなかったよ、楽しそうな笑顔を引っ込めた。

『天使』はそれが堪らなく嬉しくて、余計に興奮して強くなる、余計に自分の『存在』を紅葉に委託しようとしていく。

つばぜり合いのまま、両者は一步も引かずならみ合うハメになる、もちろん紅葉のほうが優勢だ。

ギリギリと迫られることに紅葉の力があがっていることがわかる。

だが、まだだ。

一閃は集中して耐える事に専念する、まだ倒れるわけにはいかないから。

また少し『悪魔』としての自分を用いて、均衡する状態まで立ち直らせる。

反動だ、あまりに強すぎる力を保有している為、自身の高揚感をおさえる事が出来なくなり、自然と顔は綻ぶ。

『天使』はさらに苛立ちを覚えて、未知の領域の速さで以て鏢迫り合いから離脱する。

至近距離まで迫った『永遠の監獄』を閉じる、途端一閃の姿は何かに呑み込まれるように消えた。

時折黒い炎がちらつくが、長くは続かない、すぐ何かが呑み込んでしまう。

逃げれるわけがない、いわばこの世界そのものが『天使』が研鑽し続けた炎の集まりなのだ。

そうやすやすとかいくぐられては困るのだ。



『天使』は一閃は助からないと踏み、すぐさま次の行動に移る。

『自分』を完全にこの『自分』に移し替える事、それこそが最後で一番重要なことだからである。

まず、下準備として、複雑な図を書いていく、指がなぞられる度に世界に蒼い線が刻み込まれる。

紅葉の体は『自分』の器を受け入れる事が出来た唯一の人間だ、こんなことで死なせるわけにはいかない。

だからこそ、限界ギリギリの十秒という間で『自分』を顕現させて、さらには戻す必要があった。

一閃が自由な状態であったならばコレは妨害される、故に一閃が手が出せない状況でこれを行う必要があった。

今回の目的は一閃を傷つける事、これ以上は不要だ、すぐさま離脱しないといけない。

幸い一閃は紅葉を殺さない、これは嬉しい誤算だったと『天使』は思った。

式は完成した、これで完全に委託してすぐに戻る事が出来る、一、二撃くらい放つ余裕も出てくるはずだ。

『天使』は万全に仕組まれた策の中で一人わらっていた。

一閃の生死は不明だ。

八秒

紅葉がビクビクと痙攣して、白目を剥く、だが死なないだけマシであるう、『天使』を受け入れるならば本来人間では役不足なのだから。

次の瞬間痙攣は止まる、そこには『天使』がいるだけとなった。

『天使』は無表情で手を『永遠の監獄』が発動している場所にかざす。

手から今までのどの炎よりも強力な一撃が放たれた。

放たれた一発は辺りに取り残されている炎と融合して、さらにデカ

くなつていき、到達するころには一メートルはある球となっていた。爆発は見えなかった、爆発しただろう。

次は自身を『天界』へと返すことをしなければならぬ、よって注意が一瞬それた。

振り返ればそこには、何もなかった、書いておいた蒼い線も見あたらない、周りを見るがそうだとはいえるものはなくなっていた。

その時だった、今までに感じた事の無いほどの殺気を感じたのは。振り向くとそこにはボロボロにはなっていてなお凜然と佇む一閃の姿があった。

まるで、お前の攻撃なんて聞いていないとでもいうかのよう、お前では俺を弱らせる事は出来ないというように。

『天使』としての何かが『天使』から外れた、そこにいるのはただの『傀儡師』となっていた。

『それ』は気が動転してしまっていて、逃げる、という最重要項目を忘れ去っているみたいだった。

そうなっているのならば簡単だ、一閃は前に出た。

迎撃する為に未知の速さで攻撃が繰り出される、それを苦になくすべて叩き落としてさらに前に、手には凶悪な漆黒の炎がある。

『それ』はさらに攻撃の速さをあげていく、いつもの調子ならもう少し考えて攻撃していただろう、だがいまは出来ない。

一閃はそこをついて、まばらに中途半端な攻撃を全て叩き落としていく。

そして、盛大に振りかぶって漆黒の炎を放った。

炎は刹那で『それ』を通り過ぎた、そこに残ったのは紅葉だった。

曰く、殺したのは『天使』だ……!と。

九秒

体から『天使』が抜けた紅葉が力無く倒れようとしたところで一閃は紅葉を抱える。

曰く、もう大丈夫……!と。

十秒

一閃が合図するとともに『間』から『現世』へと場所は戻ってしま  
った。

同時に紅葉のなかから完全に『天使』の気配が消えていく。  
曰く、これで終わり……!と。

：本来の姿

「長い十秒だったな……『間の世界』とはいえ、だな」

一閃は元いた場所に戻っていた、その手には嬉しそうな顔をした紅葉が抱えられている。

結局はすべて一閃の謀の内に入っていたのだ。

紅葉の『才気』を『地獄の使者』に役に立てる為に引き入れる。

そして、紅葉の内に隠れている『天使』を殺すこと。

後は、適度に麗香あたりの心を揺さぶるような事を言ってくれていれば上等だった。

「………ん……」

紅葉が一閃の腕の中で嬉しそうに寝返りを打っている。

そう、本来殺しておくべきの紅葉を一閃は生かした、殺す事も出来たのだが生かす事にしたのだ。

戦っている最中観察した、紅葉は生きようとしていた、自分が死ぬとわかって受け入れたんじゃない、受け入れたように思いこまされていた。

そして、最後までそれが可笑しいと思っていたのだ、だから生かした。

「まったく、あいつほどの『天使』、本来片鱗を触れるだけで狂気乱舞するところを……こいつってやつは」

一閃は紅葉を優しく撫でた、撫でたその手を紅葉の手が掴む。

「優しいね、一閃」

「起きてたのかよ!!」

「ねえ、一閃……私、あなたが好きよ……大好き」

一閃は黙って紅葉を見ている、紅葉も一閃の目を覗き込むように見ている。

「好き」

一閃にはその言葉の真偽は分かっている、だからこそ黙っている。

「大好き」

これは本当の言葉だ、そして一閃にも心のどこかで紅葉のことを好んでいる感情があることがわかる。

だからこそ一閃は黙ったまま、紅葉の顔を見ている。

「超好き」

一閃はそろそろ何か言おうかと本気で悩んだ、確かに言葉の真意はあるのだが、そろそろ語彙が追い付かないだろうから。

だが、待つのもオモシロいと思って黙っている事にした。

「……………チヨースキ」

そろそろ無くなってきた頃か、一閃は次が気になるモノの、拗ねられると厄介なので提案する。

「俺も好きだ、でも俺の心中心にはお前はいない、それはわかるか？」

「ええ……………わかつてるは、あの人……………麗香でしょ？」

「さあ、わからないぞ？」

一閃は意味ありげに微笑むと、間をおいて聞く。

「『地獄の使者』に行ってやってくれないか？あいつらだけに任せるのは少しだけ不安だな、人員は多いに越した事はないからな、どうだ？」

「……………愚問ね一閃」

「それは何故だ？」

紅葉は優しく笑っている。

「私はもう『地獄の使者』の一員のはずでしょう？あなたが誘って私が受け入れた事を忘れたのかしら？」

「……………ああそうだったな、でわ敵からの忠告をボスに伝えてくれるか？」

「任せなさい！敵さんがそれで満足するならいいわよ」

二人とも大声で笑う。

「はは！じゃあ頼もうか……………俺はそこにいる、それは絶対に割るな……………そう言ってくれ」

「『本物』を壊さないようにね、了解よ、じゃあ！我らがボスがあなに会うまで死なないでね！」

紅葉はそう言つて『地獄の使者』に向けて疾走していった、その姿は一瞬で見えなくなる。

一閃はその姿を愉快そうに見ている。

「これでいい、『七皇』の予想外が現れる、これでもしもの時は万全だ、そしてこの戦いでおそらくは……」

一閃は少し悲しそうな顔をする。

「みんな俺が唯一人の為に戦つたり死んだり墮天したりしてると知つたらどれだけ笑うかな？」

一閃は自嘲気味に弱く笑い、その目を森に向ける。

「俺の言つてる意味がわかつているならそろそろあいつらと出会つてる頃かな？」

かつて『阿修羅』と呼ばれた代替物の主は最も聖なる所にいた。

それ故に、そのもつとも聖と感じた行為は、その他誰から見ても最悪のものだったのだ。

唯一人を助ける為に、『天界』で、自分の行為を認めなかった神に攻め込んだ。

唯一人を助ける為に、『現世』において、その『存在』の断片を集めて、器を作った。

唯一人を助ける為に、『地獄』の最深部で、『存在』の塊を奪い、悉くを破壊して持ち帰り、器に入れた。

そうあらゆる世界に置いて最もしてはならない行為、『蘇生』を行つたのだ。

その行動の原理は、唯一人、最も愛する人を救う、それだけの為に……

## ：皇と地獄の砂

華鈴は一人で向かっていた。

耳に手を当てて通信機のボタンをオンにする。

《みんな聞こえるか？》

言つと目の前にある組織『地獄の使者』の周りでそれぞれの反応が返ってくる。

雷が二本一個所である、鋭美が目に見えない『才気』を持っている『道敷大神』の分まであげているのだ。

次に違う場所で大きな岩が打ち上げられた、臼が打ち上げたものだ。その近くで水が天に伸びている、木根のものだろう。

そこから『地獄の使者』を挟んで正反対の位置で風が目に見えるように葉を巻き上げている、疾風だ。

その風の中に何本か大きな木が混じっている、梨理が疾風に打ち上げて貰っている。

そう、この通信機は一方通行、華鈴からのみつかえるものだ。

《でわ、これより目の前の障害物を排除します、個々の最重要ターゲットを優先すること》

華鈴は氷を使い視点を絞っている、その先には空中に立つてこちらを見ている再砂の姿が見えている。

《鋭美の『グングニル』の発動とともに攻め込むわよ、合わせて、五・・・四・・・三・・・》

通信機を降ろして戦闘態勢を整える、足に力を精一杯籠めて次のダツシユを目前に控える。

世界が一瞬光で包まれた、鋭美の『グングニル』の発動されたときのモノだ。

華鈴は踏み出した、距離など関係なく、完全に詰めた、大概のものならばこれで手傷の一つを負う。

そんな悪魔じみた攻撃を苦に受け止めた再砂。

「この場所に手を出したのが駄目だったな！お前は此処で死ぬ！」  
「あなたにはここで退場して貰いましょう、少し力を持ちすぎたようですよ」

華鈴が手を前に突き出す、触れたモノを一瞬で凍らせる魔の手だ。再砂は軽くソレを躲して、砂により大きく距離を離し、違う場所に目を向け、手を上げる。

好機と思い踏み込んだ華鈴は何かに当たり急停止せざる終えなくなる。

そうならば好機は再砂のものだ。

躊躇うことなく華鈴の懐に正拳突きをかます、拳は深く腹にめり込み突き飛ばす。

「ぐっ！……何かいつもと違いますわね、何をしたんですか？」

「何でもねえよ、ただ砂を愛しただけだ、俺にとっては少し親愛を深めただけだけだな……おっと」

再砂は慌てたように手を上げる。

「何をしているのかしら？私との戦闘の最中に他のものを見るなんてとても無礼ですよ」

「戦闘中という意味においては俺の行動は正しいがな、俺は決してお前一人と戦ってるわけじゃねえし……ふっ！」

また手を上げる再砂。

華鈴の体は何かに阻まれてなかなか自由に動く事が出来ない。

「さきほどから何かに邪魔されている感じがしますが……何なのかな？」

「それを教えてやるほど俺は優しくねえ、どうしても知りたくば俺が口を滑らすのを待つ事だ」

上げた手を妙な動きで振り回す再砂、それを両手で行っている為どう考えても隙が出来るはずだ。

なのに再砂からそれは感じられない、全ての隙が意図的に見せられていて何か反撃させられる雰囲気醸し出している。



「かかってこないのか？今の俺は格好の餌食だと思うんだがな」

「そんな手には乗りませんわ」

華鈴は後ろに下がって氷を飛ばす。

さきの言葉がホントであれ嘘であれ、十分な距離をとって戦えば大丈夫とふんだからである。

再砂は手を奇妙に動かしたまま移動してそれを躲していき、組織に落ちようとしたモノは例外なくぶちこわした。

「簡単には組織にいれないというわけね……ん!?」  
華鈴は異変に気が付いた。

『地獄の使者』の中に気絶者はいるが、死亡者がいない。

それに加えて『グングニル』が通った痕跡が全くないのだ。

「再砂！あなたいったい何をしたの!？」

「俺か？俺は言いつけを守っているだけさ、この組織、ここに居る人々、そして俺自身……全てを守れと言われたからな」

奇妙な手の動きは止まる気配がない。

華鈴はもう一つ奇妙な点に気が付いた。

今頃ならば『地獄の使者』に入り、個々の最重要目的を達する為に組織内を破壊して回っている『七皇』の姿が見えないのだ。

それぞれ時間差で攻めていく為、今は鋭美と『道敷大神』が攻め込んでいるはずなのだ。

「まさか……!？あなたが戦っている相手って全ての『七皇』!？」

「どうした？それがそんなにすごい事なのか？俺にしてみればこんなこと朝飯前だぜ？」

「……貴様!」

「どうした華鈴、お上品な物言いじゃ無くなってるぞ？」

不敵に笑っている再砂の姿は、華鈴を余計に怒らせる。

・雷神と知識の戦の始まり・・・阻止（前書き）

どんだんサブタイトルが雑になってくw

：雷神と知識の戦の始まり・・・阻止

鋭美は目の前に起こっている現象について理解が及ばず立ちつくしていた。

「ねえ『道敷大神』・・・僕の『グングニル』、ちゃんと当たって被害は出てるよね？」

「ああ、出てるな」

機械的に返す『道敷大神』、実は表面には出ていないが彼も混乱しているのだった。

「じゃあ何で被害がこんなものなんですの？」

そうソレがもつとも不思議な点。

鋭美の十八番『グングニル』は、最低でも一日丸々使って電撃を溜めて放つものである。

その膨大な精神力と込められた『才気』の強さは、一直線の攻撃ならば一閃をも凌駕していた。

固められた『才気』のため質量を以て物理的なダメージすら与える事が出来る代物だ。

その通った後には例外なく通った後が刻み込まれて、それが一種の『七皇』を示す印となって、世界を恐怖させるのに一役かっていた。

「信じがたいがあの砂が止めているようだな、だが必要最低限だ・・・」

二人の目の前には、『グングニル』の質量を持った部分の残骸が落ちていた。

「一体誰が・・・ってやる奴ってより出来る奴は一人しかいないか・・・」

「そうだな・・・」

「再砂!!!」

『道敷大神』は目を閉じて再砂の居場所を探す、それもすぐに見つかった。

それはそうだが、再砂は初めから、逃げも隠れもせずにそこで華鈴と戦っているのだから、それも開けた場所で。

「再砂は予定通り華鈴が戦っている、このまま攻めきる……………」  
「！」

攻めると言った所で強烈な殺気を感じた。

【この『体』で震え上がるような『才気』を感じたのはいつぶりか・  
・再砂、お前は何者なんだ？】

「『道敷大神』、そう簡単には入れてくれないみたいだよ、こんなものがいきなり現れるからね、多分僕の雷では倒せなさそう」

「そうだな…………早くしなければ、三十分後には『歩く災害』

『暴虫』が攻め込み始める…………それまでには」

「そうだね、早くしないと！」

二人の前に立ちちはだかっているのは砂で出来た巨人だった。

回り込むように動く二人、止まってしまえばもちろん下の砂に呑み込まれてしまう。

迂回しようとしたところで、二匹の砂の大蛇が行方を阻み、悩んでいる所に巨人が襲ってくる。

鋭美は雷速で動いているのだが、砂の大蛇が楽々追い付いてくる。

『道敷大神』は『才気』を使って相手の『才気』に混乱を与えようとするが、すぐに何かが割り込んできてそれを拒む。

二人は一度併走する。

「強すぎじゃない？」

「……………動きに操作系を感じる、多分再砂の自立の砂だ」

「倒す方法はあるかな？」

「……………難しいな、もう少し時間をくれ」

「了解」

二人はまた散り散りに動き始める。

### 第十三章：角理修行開始

「ごめんなさい……母上」

「駄目よ、謝るくらいならさっさと隅の洗濯物全部干してきなさい、もちろんちゃんと洗うのよ?」

「……はい」

「しゃっきと!」

「はい!」

楚良は未だにビクビクしながら隅に山になっている洗濯物を抱えて外にでていった。

紗代はさっきまでの怖い笑顔から、普通の優しい笑顔に戻して角理を見る。

「それで?なんでこんなところに来たのかしら?」

「えっと……それは……ちよつと頼まれごとをされまして、此処を通らないと時間的に無理だったので……」

「頼まれごと?」

「ここを挟んで反対側の街に行つて情報集めて帰つてこいって言われました」

紗代にも少し読心術の心得があるのでその言葉に嘘がないとわかるが、腑に落ちない点がある。

「その人は本当にその街に行けといったのよね?それならちよつとおかしいわ」

角理はわからないといった感じで目を瞬く。

「だってその街、とうの昔に無くなっていくんだもの」

社会について、囁る程度にしかない角理の知識ではまだその街があるはずと認識していたようだ。

驚いた顔を顔中であらわしていることがその証拠だ。

「頼んだ人の名前はなんて言うのかしら?」

「……一閃」

それを聞いた紗代はめんどくさそうに溜息をついた。

「あゝ・・・・・・・・・・彼ね・・・・・・・・あなた、名前は？」

「海原 角理です・・・・・・・・あの、名乗りが済んだので縄を外してくれませんか？」

紗代は忘れてた、つといつた感じで角理の縄を解いた。

「まず角理ちゃんに言っておかないといけない事があるんだけど・・・・・・・・いいかしら？」

「構いません、彼の弱みとかなら喜んで聞き続けますが？」

「残念ね、彼に弱みはないわ・・・・・・・・それにあなたがここに来るようにし向けたのは一閃よ、何をさせたいかもわかってる」

「本当ですか！？でわ一体どのような目的で？」

詰め寄る角理をはじき飛ばす紗代。

驚いた顔を紗代に向ける角理。

「説明するより行動した方が早いから、ちゃっちゃと詰め込むよ、はやく覚えてね」

「え？え？どういうことですか？つて、うわっ！！」

言い終わる前に紗代は目一杯の蹴りを放つ。

それをすんでの所で躲す角理。

「んゝとね・・・・・・・・短く言うとな、強くなってこいつてことね、ということと私と特訓しましょう、大丈夫、殺さないわよ」

「殺さないのか、よかった・・・・・・・・ん？あのゝそこらへんの鉄になにやら変な足跡が！？」

「加減はするわよ、でも出来るだけはやく強くなってね、加減われちゃいそうだから」

紗代はニコニコ笑顔のまま蹴りを連発、角理の体を何発掠めて、どんどん傷つけていく。

角理は泣きそうな顔をしながら必死で攻撃を避けている。

「あはははははははははは！！！！！！」

紗代の楽しそうな笑い声が湖の上に響いていく。

・戸惑う海鮫と地震(前書き)

ちょっと余裕があったのでもう一話あげときますねええw

どうかお許しを(爆)

・戸惑う海蛟と地震

「そろそろ」「攻め始める時間よね？」

白と木根は顔を見合わせて、なかなかあがらない合図を待っていた。

「何かあったのかな？」

「何かあったのでしょうか、『道敷大神』と鋭美だからやられてはいないと思うけど……」

「そうだな、でも助ける為に予定よりは少し早いが攻め始めるか？」

「そうね、とりあえず目標を倒して加勢しましょうか」

白は頷くと地面から球の形をした大きな岩を引きずり上げて、上に掲げる。

掲げられた岩の後ろに水が圧縮されていき、大きく膨れあがっている。

「この距離ならこのくらいね、カウントダウンするわよ、踏ん張ってね」

「任せろ、俺はこの程度なら反動すらないよ」

「そう、じゃあいくわよ、……」

「ちよ！おまー！！」

「零ー！！」

何かによって圧縮されていた水が、留め具を失ったように暴走して大きな岩を『地獄の使者』の方に放つ。

「ーから始めんなよ、ビビるだろうが……ーから始めるくらいなら何も無い方がまだマシだ」

「今度からそうするわ」

「……あ……う……」

頭痛があったのか白は頭を抑え、それを心配したのか木根が白の頭をナデナデする。

「ああ、ありがとう……って原因お前だー！！」

「ばれちゃった、テヘッ」



カワイコぶって自分の拳骨で軽く自分の頭をポカツと叩く木根。

「はあく……まったくお前ってやつは、その体格で良くやるぜ」「あら？私が可愛くないと？それとも年増のやったこれじゃ満足できないと？」

いつの間にか白を締め上げている木根。

その時、白は何を見たのかとんでもない形相で木根を遠くに突き飛ばした。

「きゃ！何するのよ！」

顔を上げると同時に大きな岩が目の前に落ちた、さきほど二人で放ったはずのモノだ。

何か有り得ないモノを見るように固まる二人は目標のほうに目を向ける。

ソコにあったのは砂、その方面から見た時に視界に収まるそれをすべて覆い隠していた。

「まさか砂が俺達の攻撃を返したとは言わないよな？」

「考えたくないわねこんなこと、それよりも遠距離が駄目なら近距離に行けば良いだけよ！」

「よし、援護したのちすぐに俺も行く、お前は構わずに突っ込め！」

言われて駆け出す木根。

白は大きく拳を振り上げて、それを地面に叩きつける。

叩きつけられた場所から地面が揺れ初め、まるで操られているかのように木根の横を通って目的地に向かう。

尚も走り続けている木根は、走るという行為からドンドン滑るといふ行為に移行している。

手をかざすと『海』が収集され、凝縮してハンマーを模す。

木根はそのままの推進力を残したまま、回転を始める、下の摩擦力を無くしている為回転してもまっすぐに前に進んでいく。

だが、今までどんなモノに対しても絶対優位に立ってきた連体攻撃は、単純な力によってねじ伏せられる。

ひび割れしながら迫り来る地震は、目的地から一キロほど離れた所で金属の音の様な衝突音とともに止まった。

そして木根が使っていた『海路』も同じ場所できれていた、もちろん突然の摩擦力の発生で木根は盛大に転ぶ。

手に持っていたハンマーは、空中でドンドン体積を失い、地面にくくことなく消え去った。

そして二人の目の前に現れるのは巨大な砂の兵士に、それに負けず劣らずの大きさを誇る砂の大蛇だった。

後ろから走ってきた白が木根を持ち上げる。

「近距離は無理そうね？」 「近距離は無理そうだな」

「どうする？ どうみても厄介そうな敵だけどやる？」

「やるしかないだろう、そして早く終わらせてゆっくり休憩しようぜ」

「それ死亡フラグ」 「それは死亡フラグクラッシュャーだな」

二人は向かい合って笑い、一瞬で気を引き締めて目の前の大物に向かっていく。

## ・紗代の教え

「それはもう盛大に反省してるわ、悪かったと思う、けどね人にはどうしても抑えられないものつてのがあるのよ!!」

小屋の外で紗代は角理に熱弁を振るっていた。

先ほどまで本気で殺すような勢いで猛威を振るっていた紗代から、気迫はぬけていた。

「まあいいですよ、一閃の謀って時点で何かもうあきらめが入ってましたしね……」

「そう、ならいいわ次に進めるわね、まず一閃のあなたをここにやった目的だけど、これは単純明解、あなたを強くする為よ」

「私を強く？それにどんな意味があるの？」

「大きな理由は二つだと思っわ、一つはあなたに『地獄の使者』という組織に入って貢献して貰いたいから」

「それは何故ですか？」

「その組織は一閃がボスを務めていた組織よ、彼はああみえて優しいから仲間の事が不安なのよ」

紗代が優しいといったときに、角理が素晴らしい程有り得ないと顔中で表現したのは言うまでもない。

「甘いのと厳しいのは違うわよ？」

紗代がそう諭すが納得いかなかったように渋々と頷く。

「そうね……私が息子に厳しく当たるような感じかな？」

余計混乱したかのように悶絶している角理。

紗代はその動きがオモシロかったのか、その姿をじっと観察していた、しばらくして回復した角理が聞く。

「二つ目は？」

「もうちょっと見たかったな……え！ああ二つ目ね、二つ目は自分を殺して貰う為よ」

「殺させる為、ですか……」

角理は神妙に何かを考えているようだが、それに反して紗代の声は明るい。

「じゃあ、実践終わったし知識の方に移ろうかな？こうみえて私は教える事が大好きなんだ」

エツヘンと胸を張る紗代、それにもなつてぶら下がっているものも大きく誇示されている。

角理は一瞬、ほんの一瞬だが殺したいと心からおもったのであった、もちろんおくびにも出さないわけだが。

「じゃあ力・・・才気」について説明するね、ところで『才気』について何か知ってる事聞きたいんだけど？」

「少し前からこの世界の人々に現れた能力でしょ？それに人それぞれに差がある」

角理は自慢するように続ける。

「下から順にホワイト、ブルー、レッドの三つに分かれて入れ、その他にはブラックという伝説の力が存在する」

ブラックの名を口にする時だけ怒ったような言い方だった。

「ブラックとして知られているのは伝説とまでいわれた組織『八皇』だけといわれているはずですよ」

ブラックの事を話す角理は形容しがたいほどの嫌な顔を發揮していた。

「えっと・・・後はそのちからにはいろいろな種類があるということですよ・・・このくらいでいいですか？」

「まあ・・・合格点ギリギリかな、いいと思うよ・・・じゃあこれから教える事に関しては多分まったく知らないだろうから覚悟してね」

紗代はそう言つて角理の頭を手でわしづかみした。

「ふむふむ・・・なるほど『白雷』だね」

「!？・・・どうしてそれがわかったのですか？」

「こういうのには慣れててね、ちょっとした趣味みたいなものだよ・・・じゃあ雷派生の『才気』について教えておこうか」

紗代は角理から離れて、自分の椅子に座る。

「雷……まあ空気中の静電気の集まりだね、上のほうの『才気』になると何も無い所から作ったり、生体電気を使うこともある」  
紗代は何かを掴むような仕草を試みる。

「ほとんどどこにでもあるからいつでも使える便利なものの一つに上げられる、発動しなかったことないよね？」

「はい、よほど過度なトレーニングの後はでませんでした」

「それは疲れてたのよ、でもいい話だ、それは後で役に立つからね」  
紗代はほつほつと感心しながら言う。

角理は言うつか言うまいか悩んでいたが覚悟を決めて話す事にした。

「あの……座ってもいいですか？」

：始動、風神と大山

疾風と梨理は二人そろって苛立ちを顔中で表していた。

そろそろあってもおかしくない戦いの匂いというものが『地獄の使者』からまつたくもって感じられないのだ。

「おつかしいなあゝ．．．．．そろそろ粉塵のひとつくらいあがってもおかしくないはずなんだけどなあゝ、疾風はどう思う？」

梨理は隣にいる疾風に聞く。

「ん．．．．．？そうだな、少しおかしいかな．．．．．風に聞こう」

疾風は目を閉じて耳を澄ませる、と突然ゾツとしたように顔を青くした。

「どうしたの!？」

「いや．．．．．風に耳を貸したんだが、おかしい事にあそこには何も無いと言ってるんだ、しかもその後には．．．．．」

思い出して気分を悪くしたのか頭を抑えながらうずくまる疾風。

梨理は近くに寄り添って、自然の治癒をかける。

「ありがと梨理．．．．．何かに例える事が出来ない恐怖を感じた．．．．．こんなの一閃以来だよ」

「そうなんだ．．．．．じゃ仲間が危ないね、合図があるまで待機だけどこれも一応合図でしょ!」

「ああそうだな、こんなのが相手の中にいるとわかっちゃ早く手を打たないと手遅れになる!」

そんな二人の前の地面から砂が持ち上がって巨大な人型を模した戦士が姿を現した。

それは大きく斧を振り上げた状態で現れて、気づいた頃にはその斧を振り下ろしている。

「梨理危ない!!!」

疾風は咄嗟に突風の防壁を発動して砂の巨兵の斧を止めようとする。

しかしそれはまるでなにもないかのように簡単に突風の防壁を突破してみせたのだ。

疾風はすばやく次の行動に映る、即ち梨理を抱き寄せて巨兵の攻撃範囲からの離脱。

反応が早かった為疾風達はギリギリのところまで回避に成功していた、おそらくはこれまでの経験があつた故だろう。

だが、それがなければ死んでいた。

「乱暴な攻撃だな、これを打倒しなければ前には進めないということか……」

「疾風ももう降ろして良いよ」というかちよつと苦しいんだけど、疾風の腕の中で梨理がうなり声をあげていた。

ハツと気づいて素早くかつ優しくおろす疾風、もちろんのことその心臓はバクバクと脈打っている。

梨理は疾風の頭を軽く小突く。

「はい集中集中！ちやつちやつと終わらせて助けに行かなきゃいけないんだから！」

小突かれた疾風はすぐに精神統一して、目の前の敵を睨み付ける。

目の前の巨兵はまるで小動物でも見るかのように二人を見下している、だが手加減などするわけもなく、大きな体で斧を構える。

その周りの砂が持ち上がって今度は二匹の大蛇の姿が現れる。

「こいつは少々厄介だな、援護頼んだぞ、梨理」

「任せといて！疾風は何も相手を倒す事だけ考えてればいいんだから！」

疾風が拳を握るとその拳を包み込むように木が生えて拳を守り、さらにはその近辺にだけ突風を纏わせて破壊力を上げる。

準備が出来た途端に消える疾風、大蛇が動いて、声が響く。

「反応出来た事は褒めてやろう、だがそれだけでは甘いと言わざるを得ない！」

疾風の放った拳は圧倒的だった、当たった瞬間にぎゅうぎゅうに凝縮された砂にひびを入れる。

そして後を追うかのように通る鎌鼬が砂の大蛇を悉く切り刻んでいく。

またしても疾風の姿が消えるが、今度は梨理の隣で現れる。

「一匹目終了？」

「そんな甘いわけないだろう？ 敢えて力をあまり使わないようにしてるんだ、だがさっきの一撃で強さが分かった、これからが本番だ」  
見ると切り刻まれた大蛇は再生して肌の色を砂色から灰色へと変えていた。

「見るからに高度が違うな………梨理、さっきの倍の装備を頼む」

「了解！」

疾風の拳を守っていたナツクルの上にさらに木がまとわりついていき、押し固められて堅さをあげる。

つと、拳の周りの突風が押し固められて、綺麗な球に変化する。

それを梨理に渡す疾風。

「持つてる、護身用だ………まあ威力としては最大級のやつだが、危なくなったら使え」

「心配してくれてありがとう、でも平気だよ………だって疾風が戦ってくれるんでしょう！」

梨理の満面の笑みは疾風には効果抜群のようで、耳まで真っ赤にした疾風は気恥ずかしそうに目を背ける。

だが次に敵に目を向ける時にはその迷いなど吹き飛ばして、真剣に敵を見据えていた。

「始めようか、俺達の戦いを………俺と戦ってくれ  
るな？」

これはあくまで確認の為の行為、答えなど一つしかない、だが聞く事で心持ちが違う。

梨理もそれは理解しているの、だからこそ出来る限りの本音を乗せて、

「はい、後ろは任せていてください完璧に守ってみせます、その代



わり、あなたに私の命運を預けます」

梨理の真っ直ぐな声に疾風は頷くだけで答える。

「行くぞ!!!!!!」

『八皇』の時の中でも最速を誇っていた疾風と最良の援護をする梨理の戦いが始まった。

## ・角理の覚醒

「『才気』にはそれぞれの力を増幅させる為の『情』というものが存在するって知ってたかしら？」

「いえ、そのようなことは知りませんでした……『情』とはどういうものなんでしょうか？」

「そうね、例えば私の場合を取ってみるとね、『肯定の意思』と『望む心』なの」

紗代は近くに置いていた黒板にその二つを書く。

「『情』には陰陽の二種類があるの、この場合陰の部分は『肯定の意思』なんだけどね、陰は統一されたものなの」

「それは一体どういう事ですか？」

角理が首を捻っている、紗代は自分の手をかざしてその上に水を収束させる。

「陰は海派生の『才気』を持っている全ての者の情にあたり、自分の行動に一変の不安も躊躇いも無くなった場合に働くのよ」

紗代は水を落として黒板に書いてある『肯定の意思』の下に、陰、と書く。

余談だが落とした水は、大きい男物の服の真上に落ちて、それにしみこんでいた。

「そしてもう一つ、陽の『才気』、これがとても厄介なものなんだよ、何しろ自分でしか感じる事が出来ないからね」

紗代は黒板の『望む心』の下に、陽、それから、厄介モノ、と書き加えた。

「私の場合は特殊な事で感じたんだけど、本来ならいろんな経験していく内にわかっていくもんなんだけど……」

黒板に書いてある二つの間に大小関係を表す記号が書き加えられる。

「陰と陽、どちらが強いかわわれればそれはもちろん修得困難な陽の方になる」

「どの程度の違いが出るんですか？」

「普通の力を1とするとね、陰ではその十倍程度、陽ではさらにその十倍！……まあ人それぞれの誤差はあるけどね」

紗代は黒板に数字を付け加える。

「私を知る限りでは、陰でおおよそ二十倍程度、陽ではそれに加えて百倍程度の力の上昇を知っているわ」

「それは個人的な見解なんでしょうか？それとも何かそういう計るものがあるのでしょうか？」

「いいえ、前のボスがね……あ、ここも一応組織なんだよ、それでね、そのボスがそういうのに詳しくてね」

「それでそのボスはもういないんですか？」

「生憎死んだ訳じゃないけどね、組織を去ったのは事実よ」

紗代は別段気にした風もなく話す。

本来なら組織を抜けた者はその組織に何らかの追っ手を付けられる事が多いのだがそんなことしているようではなかった。

「話を戻すよ、あなたにはまず『情』を知って貰う事といつでも出せるようにして貰うわよ」

「でもそんな事知らなかったから……どうすれば良いんですか？」

「一つは簡単よ、だってみんな統一されてるんですからね、まず陰の『強い束縛』を身につけて貰います」

「それはどんな感じの事なんですか？」

「胸を締め付けられるような感覚やら、何かに支配されているような感じよ」

角理はふむふむと頷いている。

出来そうかと紗代が聞くと、まったくもって不本意だと言いたげな顔で、

「出来そうです」

と返してきた。

紗代はそれをみて角理に少し才能があると理解した。

「じゃあ、始めようかしら、初めてそれを考えてすれば絶対的影響が出るからすぐわかる」

始まった瞬間、小屋を真上から白い雷が襲った。

氷、氷、砂、氷、氷、氷、氷、砂、氷、氷、砂、氷、砂  
その場所では氷と砂が激しい攻防を繰り返していた、いや激しいと言うには少し一方的でもあるのだが。

「遅れてるぞ」

大きな砂の塊が華鈴の頭上を襲う。

半瞬遅れて氷がソレを防ぎきって、すぐさま攻撃へと転じる為に先端を針のようにとがらせる。

完全に尖りきる前に砂がそれを削り取る。

「つく!!!」

華鈴は力一杯後ろに飛んで間合いをとる。

再砂は余裕を見せるかのように早い追撃などせず、ゆっくりと歩きながら間合いを詰めていく。

だがその存在感と相手に対する圧迫感は半端ないものでもあった、

『八皇』のボス華鈴が眉を寄せるほどに。

「あなたの力少し反則過ぎませんか？そんなに力を保有していながらなんて量の砂を操ってるのかしら？」

「俺が強い？戯れ言だな、一言言っておくと俺は弱い、力と言えばホワイトの1だからな、現実是最下位の分類だ、この量は当然だろう？」

再砂は奇妙な笑みを携えながら歩き続ける。

【つく・・・みんなは何やってるのかしら！？早く落として一刻も早くこんな場所離脱したいの!!!】

「ほお、仲間がどうしてるのか知りたいのか？教えてやろう、どうせ『地獄の使者』には一人も入れないだろうからな」

再砂は立ち止まり耳に手を当てる。

「・・・やはりな、全員組織の半径一メートル以上はいることが出来てない」

「まさか！彼等は一人でも世界を相手に出来るほどの力を持っているのよ！？そんな二人一組を誰が止めてるって言うのよ！！」

華鈴が狂ったように叫ぶと、再砂はとても楽しそうに笑っている。

「華鈴、そんなの一人しか居ないだろう？しかもお前の目の前にいるじゃないか」

「な！でも距離が在りすぎる！そんな距離を開けて『才気』なんて発動できるわけがない！！」

「例外は常に存在する、俺はその例外に当てはまったただけだ、理解しなくていい、ただ漠然と分かれ、お前等は俺の防御を突破できん！」

再砂は左手をかざす、その手には小さい丸薬のようなものがのっていた。

それを口にかまずに入れる。

「これから俺は本気の手前を出す、早めに逃げる事を勧めるぞ、一個は食った、これで二個目だ・・・三個目は誰も止めれなくなる」  
ゴクリと喉を丸薬が通りすぎる。

「せいぜい守る事に集中するんだな、いくら本気の手前といっても軽くお前等よりは強い」

次の動作は最早目で追えるものでは無かった、華鈴が幾たびの戦いを抜けてその鍛えぬかれた直感を持ち合わせていなければ死んでいただろう。

「ふむ、苦しみながら死ぬことを求めるのか、いいだろう、その願いかなえてやろう、容赦はしない」

華鈴が振り向く瞬間には最早間合いなど微塵もなかった、ただ突き出された正拳が自身の右腕に当たり、その反動を全身で体感する。

あまりに強く殴られた為吹き飛ばすという結果が遅れた、そこを予想していたかのようにもう一方の拳で左腕が握られた。

吹き飛ばのを止められる、もちろん左腕はにぎりつぶされたようだ。だが休む間もなく引き寄せられて今度は正拳を腹にめり込まされ、そのままの勢いで地面が割れるほど叩きつけられる。

いや、実際には割れて岩盤がめくり上がっている、そこに容赦なく両足を両足で踏みつぶされる。

ベシヤツと嫌な音が足の方から聞こえてきたが気にしている暇はない、悪鬼のような笑みが目の前に迫っている。

脳は防御を働かそうとするが体は動かない、ならば氷が目の前に強く張られる。

脳はそれで安全を確保したと思うのだろう、だが体は正直だった、回復で少し動くようになった腕を反射的に顔の前に持っていく。

目の前の氷は軽々と砕かれた、ひび割れなどしなかった、悪鬼の拳が当たると一瞬ヒビも入らないまま木っ端微塵だ。

腕に鈍痛、氷のおかげでほんの少し反応が早くなったのがよかった、当たった瞬間腕を振る事で頭への衝撃はなかった。

その代償に腕があらぬ方向に曲がって地面に食い込まれる。

「ほう……よほど痛めつけられたのかな？」

悪鬼の笑みは外見だけ見れば天使のようだった、だが中は悪魔のそれだ。

華鈴はこの瞬間は、一閃より目の前の悪鬼、再砂を恐れた、そして死を覚悟して目を固く閉じた。

だが次に来るはずの衝撃が来ない、恐る恐る目を開けると……  
……目の前には変わらず悪鬼がいた。

「こんにちは」

最後の一撃、このとき華鈴は本当に無意識に目を閉じた。

目の前には気絶してしまっている華鈴の姿があった。

最後の一撃は華鈴をしとめることなく、華鈴のもう一方の腕を地面に食い込ませていた。

再砂にとってこの程度ではこの華鈴は死なないと分かっているからこそここまでしたのだが、少々グロッキーだ。

「まあいい、さっさと次に行かないといけないな」

目を瞑る、残り時間は限られている、出来るだけ早く敵の全ての位

置を把握しておかねばならない。

「二つ目でこのキツさか、一閃がヤメロというわけだ……！」  
再砂は最後の一粒を見る。

他の丸薬とはまったく違わないのに、その存在感はまるで惑星を前にしているようだった。

秘薬『忘却』、一閃が瞬夜に託した三つで一つの丸薬。

その力は一粒で世界を滅ぼし尽くし、二粒で『三界』を滅ぼし、三粒でありとあらゆる『存在』を消し去るほどの力と言われた。

ただ、その代償はとてつもなくデカイという。

三粒目に至っては効果持続が一分程度しかないのだ。

なのに記憶が抹消される。

体が覚えている、とかではない、まったく全て抹消されるのだ。

自分の力も分からないまま敵に追われることになることもある、記憶がないからにげることは出来ない。

しばらくは砂が自動的に外的を殺す為、いわゆる子供のような心で、殺人を目に焼き付けなければならぬのだ。

もはや生まれかわりに近い、そしてほとんど発狂してしまうのだ。

この薬について調べたが、まったく情報が皆無だった。

ただ一閃は渡す際にこう言った。

「使うのはいい、だが使った後何も無いと思うな、それはお前を何もかもから孤独にする」



## ：砂利の悪魔と正義の皇

その辺りだけはまるで夏のような光が差していた。

もちろん自然の光ではないのだが、それでも強い光だった。

「『道敷大神』！？こいつら少し強くなつてないか！？」

「そうだな」

鋭美の攻撃はその全てが一撃で敵を葬る事を主とした必殺だった。だがその攻撃を直に受けてさえ、砂の巨兵と大蛇はビクともせず、もくもくと二人を殺しにかかっていた。

「鋭美、下がって溜めろ、そろそろ品切れだろ」

『道敷大神』の言葉に反応してすぐさま後退する鋭美。

それを追撃するようにせまる大蛇を、『道敷大神』の拳が襲う。

いくら攻撃力は低いといつても組織内でのこと、普通の者達よりは数倍強い。

大蛇の表皮が少しへこんみ、その大蛇が目的を変えて『道敷大神』のところに向かってきた。

それを軽々と躲し、すぐに体勢を整え、状況を把握しようとする。

【鋭美来るまでおおよそ十分くらいか、その間この強敵を相手に一対三とは、まったくもって厄介だな】

負ける気はしない、自立操縦型なので動きが単調で読みやすいからである、当たれば重傷は間違いないが。

敵同士の相打ちを狙う事も容易い。

そんな事を思っていると、何かが途切れたように、砂の巨兵と大蛇の動きはとまってしまった。

「『道敷大神』～これはどういうことか、僕に分かるように説明してくれ」

「無理だ、なぜなら俺にもわからん」

「それは、こいつらを操っていた本人がきたからこいつらの役目が終わった、ただそれだけのことにすぎない」

崩れた砂が山になっている、その上に先ほどまで華鈴と戦っていた再砂が立っていた。

その顔には愉悦のようなものが浮かんでいたが、二人はそんなこと見ている余裕がなかった。

二人の考えはただこれだけ、それを鋭美が言う。

「あなたを止める役は華鈴だったんだけど、どうしてあなたはここにいるんですか？」

「簡単だろう、華鈴が破れたただけだ、今は地面に張り付きながら生死の境を行ったり来たりしているはずだ」

当然の事のように言われる。

「あなたにそんな力があるなんて僕には到底思えませんか？」

「どう思つかは個人の勝手だ、だがその考えは捨てた方がいいぞ、分かりやすく言えば俺は一閃くらいの力があると自負している」

「そんなに強いのか、ならば華鈴が負けた事も頷けるな、それでそのお前が一体ここに何しに来たんだ？」

「愚問だな、俺がここに来た理由は一つしかないだろう？もちろんお前等を殺す為にきたんだ」

「ならこんな無意味な会話をする意味があるのか？」

「あるだろ、いくら俺でも雑魚を殺す趣味はない、お前等にとってこの時間は逃げる為のものだったんだ、もう逃がさないが」

凶悪な再砂の笑みが二人を射抜く。

鋭美は心底嫌そうに眉を寄せ、『道敷大神』は相変わらずの無表情で再砂を睨み付けている。

「話はこの辺で良いな、言い訳は作られたくないからハッキリと言うぞ、俺は今からお前達を殺す」

その言葉の迫力だけで試みても再砂の異常性がハッキリと分かった。そして不思議に思った、何故あんなやつを、初めは弱いと感じたのか……。

咄嗟に後ろに飛んだ。

何か来た訳じゃない、ただ無意識に後ろに後退をせまられたただけだ。

「鋭美、俺が足止めする、お前は華鈴を見てきてくれないか？」

「止めれる自信あるの……あれ、半端無いよ？」

「少しくらいは時間稼ぎになるだろう、華鈴が居ればもう一度立て直す事が出来る……いけ！」

鋭美は頷いて、雷となって駆けていった。

再砂は気にした様子もなく目の前の『道敷大神』を見据えていた。

「驚いたな、俺はお前が追いかけると読んでいたのだが、ククク……」

「おいおい、そんな冗談はなしにしようぜ、どうせ読んでたんだろ？」

「俺の『才気』は適用範囲がデカすぎてな、本気を出せばおそらくは味方の方が先に狂ってしまう、『七皇』だって例外じゃない」

『道敷大神』はがっかりと全身で表している。

その姿がオモシロかったのか再砂は笑っている。

「では俺に本気を見せてくれるのか？それは嬉しい限りだな」

「ああ、本気でいかせて貰うさ、気を付けるよ、長引くほどおれに有利に変わっていくからな」

「いわれなくとも本気でいくさ、気をつけるよ、俺はもう背後だ」

『道敷大神』は振り向くことなく回し蹴りを放つ。

それを再砂は受け止めて投げ飛ばそうとするが、その動作は中断された、同時に『道敷大神』の体が溶けるように消える。

「……幻影か、早いからとかではないな、ただ単に頭の認識に直接干渉しているのか」

「ああそうだ、俺にはコレしかないからな、ただこれも度が過ぎれば最強の武器になる、生きたまま死ぬ恐怖をしろがいい」

『道敷大神』の『才気』が全面に展開される。

「再砂、『砂利』だ」

「それもいいかもしれんな、『道敷大神』、『正義』だ」

二つの以上は静かな衝突を開始した。

鋭美が見たものは圧倒的なまで惨劇の後に過ぎなかった。

「これって……いったいここで何があつたっていうのよ？」

ある場所を中心に地面がめくり上がっている、しかもその外にもかなりの距離をヒビが走っていた、

その中心の場所、華鈴が目も当てられないような状態で倒れていた、どちらかという土地面に礫にされていた。

両手が地面に不自然な格好でめり込んでいて、さらに両足も軽く足跡がついて地面にめり込んでいる。

その惨劇を起こしたものは誰だか分かっている、言うまでもなく再砂だった。

「つく！やりすぎでしょ!？」

鋭美は素早く華鈴に近寄って息を確認する、まだ微かに息はあつた。

鋭美は神経を集中させて雷を落として、両手両足を傷つけないように地面から出した。

「とりあえず要塞まで戻るところ、えっと……」

鋭美は華鈴の体を探って、通信機を手にした。

《みんな聞こえると思うけど端的に伝えるよ、まず初めに作戦は失敗！すぐさま要塞に戻ってきて！》

それだけ言つて、華鈴を担いだまま疾走する鋭美。

## 第十四章：瞑の地獄の使者入場

その様子を遠くから眺めている影があった。

「……あんなことになるなんてあれが『七皇』の実力っていうことかしらね？」

その自体が『七皇』を撃退した結果ということも知らずに、考え込んでいる瞑。

そうしていると後ろから声をかけられる。

「そんなとこで何してる？この混乱に乗じて侵入するというなら容赦はしないよ」

「いえいえ、妹に会いに来たんですがちょっと大変な事になってるようなので遠慮してたんですよ」

後ろを見ずに答える。

正直な所、後ろをみた瞬間殺されると予期した為、振り向く事ができなかつたのだが。

「お前、どこの組織だ？」

「『天罰』です、そういうあなたはあの組織の人としますので、妹のところまで連れて行ってくれと助かるのですが？」

「そうだな、案内しよう、妹の名前は何ですか？」

敵じゃないと分かって少し安心したような声がしている。

「羽柴 冥っていうんですが、いつも麗香という人の隣にいるそうです」

「ああ、ボスのお姉さんですか、気づきませんでした……そういえばどこことなく似ている感じがします」

「ありがとう、それで……今は入っても平気なんですか？攻撃を受けているみたいなんですけど……」

どこかに攻められている時に会って迷惑にならないだろうかと瞑は来るまで思案していたのだが。

「ん？別にいいんじゃない？」

なんでそんなこと聞くのか分からないという雰囲気を出しながら紅葉が言う。

そう言つて紅葉が歩き出そうとした時、目の前で砂が持ち上がって大きなトンネルを形作つた。

眼が唖然としているが紅葉は別段驚いた様子もなく、

「ああ、再砂が私達の為に出してくれたのか、なら遠慮なく通して貰おうかな……いこ、ボスのお姉さん」

「え……？あ、うん、今行きます」

トンネルに入ると、暗い道が続いていて、入つたと同時に入口は閉じられた。

焦る眼に一言紅葉が、

「壁に手をつけて向かってきて、安全な分時間がかかるから出来る限りの早歩きで行くよ」

「はい、了解しました」

そうして歩こうとした時、背中部分に何かが触れるような感触がした。

「ひゃ！」

驚いて女の子らしい声をあげてしまう。

すばやく手が引かれて前のめりに倒れて、自分に触れた何かと自分との間に紅葉が割り込む。

「何者です！！」

暗闇に向けて紅葉が叫ぶ、すると予想外に返事があつた。

「仲間の気配くらいは覚えていて欲しいものですね紅葉さん、それでは折角迎えに来た私の立場が台無しだもん」

暗闇に響くのは女声だった。

「……覚えがない、どこの組織？」

「……あ、そういえば此方からの一方的な面識しかありませんでした、『改水』ですよ紅葉さん」

「という事は一ノ宮 京で間違いないか？」

「はい、砂を通じて再砂さんから少し頼まれごとされましてね、こ

こを早く通つて欲しそうでしたので」

「あの……申し訳ないんだけど、早く起こしてくれないかしら？こんな周りが見えない場所にいると怖すぎます」

足下で必死に頭をガードしている瞑を見て、京は笑っていた。

「私が呼ばれた理由はね、ちよつと暗闇の中に居すぎたので光の一切ない暗闇でも多少は見えるからですよ、立つてください」

「ああ紹介を忘れていたな、彼女は瞑、妹に会いにきたらしいです」

「まったく、それならいろいろと手続きがいるのですよ、許可証やらそれを証明するものを身に付けていないと……」

「そうなんですか？」

多分下から瞑の声が聞こえていた。

「いいや冗談だよ、ああ、ゴメンゴメンすぐいく、さて

二人とも、私に捕まってくれるかしら？」

二人の肩に手を置く京、その手を沿って京を掴む二人。

「準備万端、それじゃ行くけど、吐かないでね」

途端、足が地面から離れて、猛スピードで移動している影響か、風が襲いかかってくる。

二人がその場で目をあけることが出来ていたならば、暗闇で京を目視することが出来ていたならば、二人はこう言った事だろう。

曰く、悪魔、つと。

・紗代

「まさかここまでとわね、さすがは一閃の見立てでそれなり自信があつた故ね……」

紗代は自分の焦げ付いた手を見て、少し苦い顔をする。

目の前には、焦げて横になつている角理の姿があつた。

「まさか私の手に焦げをつける『人』が出てくるとわな……それを除いても『八皇』くらいしか傷つけられなかつたのに」

別に自分がすごいなんて思っていない、だがただの人間の『才気』が自分に届いた事に純粹に驚いた。

「こんなところに引きこもつてるからかしらね？世界にはまだまだたくさんいるかも知らない」

「手を汚したままでするなよ紗代、それでなくともお前は……」

「大丈夫よ、気にしないで、さっきのは純粹に驚いただけだから」  
そういつて心配そうに近づいてくる大我からタオルを貰い、手の汚れを綺麗にふき取る。

大我は始終不安そうに眺めているのだが、汚れが落ちたくらいに安堵の息を漏らす。

「この女はそんなに強いのか？」

「そうね、かなり強いわ、それに多分彼女はもう陽の『情』にも気が付いてる気がする、それを少しだけ無意識に使つたんでしょう」  
そう考えなければさきほどの威力は考えられない、というより考えたくない。

相手は自分よりもはるかに格下の相手なのだから。

自分が常に纏つている不可視の海、紗代の絶対防御『渦潮』は、大抵の攻撃は防御する。

たかが陰の『情』だけではどうしても攻撃があたることはないのだ、当たったということは陽も入っていたのだ。



「無意識でそれほどの力か、今の内に殺して置いた方がよくないか？」

「大丈夫だよ気にしないで、私を殺せる人間なんて数えるくらいしかないよ、それもごく一握りのね・・・」

紗代はもう一枚タオルを使って焦げて倒れている角理の焦げをふき取る。

「この子はそんな人間じゃないわ、まあそれでもかなり上位の人間で間違いないのだろうけど」

「そうだな、正直お前が負けるなんて想像もつかないからな、それにさっきの説明の時訂正しなかつたらう？」

表面上綺麗になった角理を抱っこで持ち上げ、そのままベッドに横にする大我。

「自分もブラックってことは黙ってただろ、何故なんだ？」

「さっきの言い方からして多分それを言えば私を『八皇』と勘違いして攻撃してくるかもしれないからよ」

「そうだな、そう言えばこいつには『八皇』の記憶があるからおそらくなんらかの形で生き残ったやつなんだろうな・・・」

「ええ、『八皇』に対する憎悪なら相当なものだったわよ、ちよつと怖かつたかも」

フッフ、微笑を浮かべる紗代。

「冗談はさておきだ、そろそろ移動する時期じゃないか？楚良の見聞を広げる為にな」

「もういいのよ、良い事考えたから」

「ほう、どんなことだ？」

「この子を護衛させる、そうすれば多分移動するより多くの物事を見れる気がするしね、それに二人の目的は結構近いけど正反对だ」

「なるほど、一閃を殺すと殺さないの違いだな、でも楚良可愛がってたろう、いいの？」

「いいのよ、もうそろそろ独り立ちの時期でしょう」

ガタツと小屋の外で物音が聞こえた。

紗代はヤレヤレと肩をすくめる、大我は別に気にした様子はない。

「ちよつと強引に行こうかしら、フフフ……」

「お前の教育の仕方には口出し出来ないから何も言いたくないが、これだけは言っておく」

「一応聞いておこうかしら」

「殺すなよ」

「……私を鬼か何かと勘違いしてるんじゃないかしら？そこまですないわよ、教育期間中動けなくなるくらい」

紗代はニコニコ顔なのだが、今はその笑顔が大変怖い。

ゆっくりと立ち上がって、己が『情』を解放していく。

紗代には迷いが無い、自信の行う事、行った事全てを正しいと思っている、『肯定の意思』。

そして、今は自分の子供にこうなって欲しいという望みがある、それは強い『望む心』。

陰陽二つを解放している状態のまま、さっきの物音の主へを追いかけ始める。

：無敵の力（前書き）

とうとう再砂が忘却をすべて服用します！

一閃すら適わない力です・・・。

道敷大神はどうするのか。

また来てくださった方ありがとうございます！  
はじめての方はこれからもよろしく！  
みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

## ：無敵の力

『道敷大神』と再砂が戦っている場所では砂が大波乱していた。

「どうした『正義』！！！この程度の攻撃でしまいであるまい！」  
フツと荒い息と共に、持っていた砂の大斧を横薙ぎに振るう再砂。  
それをまるで初めから予測していたかのように刺さっている再砂の  
砂の大剣で防ぐ『道敷大神』。

「嘗められたものだ、天下の『七皇』がたかがこれしきの幼子に遅  
れをとるわけあるまい……………」  
感情すら入っていない冷淡な一言なのだが、その実内心では混乱が  
生じていた。

【大胆な攻撃の割には一切の隙がない、ワザと見せる隙に食らいつ  
けばおそらくは死が待つだろう……………どうするか……………】  
そこまで考えた所でその考えを打ち切り、新たな考えを巡らせる。

【久しく『情』でも使うか、こいつに手加減は出来ないからな、こ  
れで少しは読めるのだから】

『道敷大神』の『情』はおそろしく単純なものでもあり、それ故に  
一番扱いにくいものに属する。

彼の場合、生まれてこの方全ての記憶が頭に入っている、ただの一  
片も忘れてはいない、陰の『過去の現実』の最高の状態である。

そして元々が高い予知能力を有している『正義』にとって、陽の『  
未来の想像』とは、鮮明ではつきりとしている。

「本気を出すというわけか、ならこつちもそれ相応の態度でもって  
接しようか」

「本気か、出来れば加減したままで死んで欲しいんだが」

「そんなことすると思うのか？私か……………チツ、  
少し副作用がきたか」

再砂は頭を抑えて少し力を入れて頭を抑える。

それが致命となる、そんな完璧すぎる隙を『道敷大神』が見逃すは

ずがなかった。

再砂は次の瞬間には『道敷大神』の渾身の一撃を身を以て受けるはめになる。

【がっ……！！クソっ！肋が何本か逝ったか！肺に何本か刺さってやがる！！】

再砂は痛みでくる隙を攻撃させない為に、素早く『道敷大神』に蹴りを放ち、自分を思いきり後退する。

蹴りは『道敷大神』には当たらなかったが、それでも回避の為に開けられた間合いはすぐには詰められない。

「致命傷だな、何をしていたかは知らないし知る気もないがリスクがデカいようだな、さっきの隙で勝敗は決まった」

『道敷大神』の表情に感情など一切ない、ただ的確に今の状態の述べているだけだ。

そう……今の 状態を……。

「そうね」

覚悟を決める、もはや言語の心配など思考から消し飛ばす、そしてその専心を目の前の敵を殺すことにむける。

「あゝあ……確かに勝敗は決まっちゃったわね、この状態を脱出するには一つしか方法はない」

手の中に最後の丸薬、惑星ほどの質量を持った不安定な丸薬、『存在』すべてを無に帰す秘宝の丸薬が握られている。

『道敷大神』にもその気配が掴めたのか、わずかに眉を寄せた。

「まあいいわよ、私の不注意なんだし……でもこの丸薬を食べて自制できる気はしないわよ？」

はったりか、再砂はとても楽しそうな笑みを持っている。

退く頃合いか、そんな事を思っている『道敷大神』は一瞬で視界から消え去る為に足に力を籠め、追って来れないように言い放つ。

「お前がここから離れれば、俺の仲間が攻め込むぞ！」

ガリッ！ドンッ！

二人の動作は同時だった。

『道敷大神』は一瞬にして、再砂の視界から出るほどな後退に成功した。

再砂は三つ目の丸薬を噛み砕いて、狂気の笑みを浮かべている。勝敗は決した、空間を越えてきたと言っても信じられるほどの速さで以て間合いを詰めた再砂の正拳は『道敷大神』を貫いた。

だが攻撃は止まない、一秒間の一方的な暴力の嵐は『道敷大神』から原型の形を奪い、血肉を裂き、コマ切れにした。

だが攻撃は止まない、コマ切れの肉片を今度は粉塵に帰し、大地にしみこんだ血は再砂の砂に吸引される。

だが攻撃は止まない、『道敷大神』であったものはすべて再砂の砂により押し固められていき、手持ちの瓶に詰め込まれた。

攻撃が止んだ、再砂は狂気に満ちた目でその瓶を見つめる。

「お前はもう私のコレクションだ、フッフフ……！」

そう『道敷大神』はその取り巻く自立の砂により、死ぬ事は許されず、絶えず、死ぬはずだった場面を繰り返される。

『無限地獄』、三個目の丸薬『忘却』を服用した砂の最終奥義、抗う事の出来ない無限螺旋に強制的に組み込まれる。

「あ、時間だ……」

全身から力が抜けた再砂は、重力に抗うことなく倒れた。

静粛に包まれているその場所に倒れている再砂に影が並ぶ。

・苦難の楚良

小屋から少し離れた所で楚良は紗代を待ちかまえていた。

よく見れば手を血がにじむほど強く握りしめられていて、目だけは苦痛を訴えていた。

「母上……俺はどうしてもあの女に付いて行かなくちゃいけないんですか？」

小さいがはつきりと伝える、言外には行きたくないという想いを込めて。

「あの女なんて言っちゃ駄目でしょ？ちゃんと角理ちゃんって言うのよ」

紗代は息子の言葉を律儀に注意するが、楚良はそんなこと無視する。

「あんな女と一緒に居ても意味ない！どうせ旅立つくらいなら一人がいいし……旅立つ気なんてさらさらないです！」

「そんなこと言わないの、そろそろ自立してもらわないと母心配で心配で……それに、嫌ではないでしょう？」

紗代がニヤニヤしながら、イヤラしい視線を楚良に送る。

楚良は顔を真っ赤っかにしている。

「母上！どういう意味ですか！それに、今はそんな話じゃないですよ！！」

「あら？すぎじゃなかったのかしら？私の思い違いだったかなあ……」

「そこまでして俺をどこかにやりたいのですか！母上！」

「うーん……そうでもないんだけどね、じゃあゲームしようよ楚良ちゃん」

紗代は名案を思いついたかのように手を合わせる。

「これから楚良ちゃんが諦めるまで私を本気で殴りなさい、その拳が一階でも私に辿り着ければ楚良ちゃんの勝ちよ」

「そんなの母上の不利が明白じゃないですか、そんな勝負受けるわ

けにはいきません」

「そう、なら角理ちゃんに付いていくという事でいいかしら？そもそも母は負ける勝負は基本的にしないわよ」

紗代は楽しそうに両手を広げて楚良を挑発している。

「もちろん母は攻撃なんてしないわよ、母はここに立っているから何が何でもその拳を私に届かせるか……」

悩むようなポーズをとって、最も相手に最も有利と思える条件を付け加える。

「母をこの場所から移動させるかのどちらかよ、ね、これなら悪くない条件だと思わないかしら？」

「母上が不利すぎますが……考え無しというわけじゃないと知っているので受けます」

楚良は地を集めて、拳を強化する。

「条件を確認するよ？母上をその場所から移動させればいいんだよね？」

「そうよ、それか私にその拳を当てる事かのどちらかよ」

二人の間合いはおおよそ十メートル程度、この距離で強力な地の『才気』を持つている楚良に勝てるものは少ないだろう。

条件の一、移動させるという事は地面そのものをなくせば移動させる事が出来る、こんなこと楚良に容易い。

条件の二、紗代に攻撃を与える、これはいくら楚良でもかなえる事は難しいだろう、ならばやることは一つしかない。

「割れるー!!」

楚良の怒声と共に地面にひびが入り、それは一直線に紗代の立っている場所にむかう。

「やはりそう来ましたね、でも楚良ちゃん？ちよつと甘いんじゃない？相手は母よ？」

楽しそうな声で挑発する紗代、ひび割れは紗代の半径一メートルを境に止まる。

だが楚良もそんなことで決まるとは思っていない、故に全力でもっ



て紗代の間合いをつめ、目一杯引いた拳を突き出す。紗代は変わらず、ただ立っている、しかも余裕の笑みを残したままである。

ドゴツと嫌な音がしたが紗代の体からの音ではない。

楚良の拳は紗代の半径一メートル、ひび割れが止まった位置の上で止まっていた、音は周りの地面が完全にひび割れた音だ。

「つく……！」

苦痛を漏らして足場が安定している所まで後退する楚良、紗代はその様子を愉快気に眺めているだけだ。

勝てない、それはあまりにも分かりきった事でもあった。

自分の相手は常日頃から父である大我が受け持っていた。

その大我に一度訪ねた事があったのだ。

「父上と母上はどちらが強いのでしょうか？」

そんな質問だった。

驚いた顔を見せた大我、その顔はそんなこともわからないのか、と知っているようでもあった。

「楚良、俺がそこまで強いように見えるのか？」

「うん、でも母上が戦っている所なんてみたことないからどっちかなって思ってた」

「なるほど、そういう訳か……楚良一つ言っておく、あいつが本気で怒った時は自分の身を案じてとりあえず逃げるんだ」  
小さい楚良は何故つと首を傾げていた。

「あいつの本気は洒落にならん、周りにいるだけで被害を被るからな……後もうわかっていていると思うが、俺は彼奴より数段弱い」  
「数段って、どれくらい？」

「そうだな……俺が結婚した時は俺はあいつに攻撃を当てる事が出来ないくらいに……ハハッ！」  
その意味がようやく分かった気がする。

周りが被害を被るのは地震の『才気』の煽りからであって紗代本人が何かしたわけでは決していない。

『才氣』を使えば使うほど不利になると考えた方が良さそうだ。

楚良は今更ながら奥歯を噛み締める。

戦いたくない相手だが、例えば自分が本気になった所で遊ばれるほどの相手、いったいどれだけの苦痛か。

## ：瞬夜と一閃

懐かしい場所に帰ってきた、だがそこには以前までの活気はなく、ただ静かな場所としてそこにあつた。

「俺が『悪魔の正義』なんかにいっただからだよ……あいつは、戻ってきてくれるだろうか？」

その場所で剛毅は落ち込んだ風に言った。

「あいつはもう戻ってこない、だがお前の想いは分かった、だからこいつを預けよう」

いきなりかけられた意味不明な言葉、そしてどこか懐かしい声に、剛毅は素早く後ろを向いた。

そこに当然のようにいたのは紛れもなく、元ボス一閃だった。

その両腕の中には誰かが死んだように眠っていた。

「どのつらさげて戻ってきてるんですか……戻って来ちゃいけないとわかってるんでしょ？」

「それくらいわかってるさ、でも俺でも見過ごせない事だってあるんだよ、剛毅、コイツを頼めるか？」

一閃は抱いていた人間を剛毅の前に寝かす、綺麗な寝顔をしたそいつは紛れもなく再砂だった。

剛毅は驚き一閃を睨み付ける。

一閃はそんなことなどで怯む道理もなく、ただゆったりとした様子で再砂の寝顔を眺めていた。

「こいつ、また俺の言いつけを破りやがったんだ……こうして眠っているように見えるだろう、でもこれはある作業の最中なんだ」

「最中？瞬……再砂は一体何をしたんだ？」

「俺の前では瞬夜でいいぞ、俺から見ればこいつはいつでも変わらず瞬夜なんだから」

その言葉に剛毅は正直に負けた気持ちになった。

俺は瞬夜が言っただけで自分の中の瞬夜を殺して、すべて再砂に置き換える事で関係を保とうとしていた。

だが一閃は違った、どれだけ名前や表面的なことが変わろうと、変わらずに瞬夜という中身だけを見つめ続けていた。

その姿があまりにもかっこよく、剛毅は少しだけ自分のことを恥じる、だからこれからは違うと言い聞かせるように言った。

「そうだな……じゃあ瞬夜は何をしたんだ？」

「それでいい……こいつはある薬を服用したんだ、名を『忘却』三つで一つの砂の秘宝の丸薬だ」

「そんな薬聞いた事ないぞ？どつかのでもかせじやないのか？」

「いや、本物だ、元の瞬夜が作った最高傑作だ、服用すれば……・そうだな、俺なんか一撃で葬れる以上の力を短時間行使出来る」

剛毅は一閃の何か引つかかる言い方に内心首を傾げながらとりあえず疑問に思っただ事を告げる。

「一閃を越えるほどの？瞬夜にはどの程度の力があるんだ？」

「通常の瞬夜には膨大に砂を扱えるだけでさしたる強さはない」

一閃は断言する、剛毅としては不思議で仕方ないのだが。

なんていったって剛毅の知る限り、瞬夜は薄皮一枚程度の砂の壁であらゆるものを防御していたのだから。

「一閃、それはないと思うぞ、瞬夜の力がそれだけのはずがない、俺でも適わないほどの相手なんだぞ？」

「そりゃかなわないだろうよ、だが事実は事実だ、だが瞬夜には最強の強さを持っていたんだ」

「最強の強さ？それはどんなものなんだ？瞬夜だけが持っているものなのか？」

「いや、いわゆる『情』と呼ばれる己が『才気』を強くする感情の事だ、この辺の詳しい説明は愛かそこらへんに聞いとけ」

一閃は『情』について簡単に説明してから話を続ける。

「いいか、瞬夜の『情』は陰が『孤高の想い』で陽が『砂を一心に想う心』だ」

「確か陰が同じなんだよな？なら俺も『孤高の想い』とやらで強くなるのか？」

「確かに強くはなれる、だがその過程が生半可なものでは無い事を覚えておけ、一般に一番『情』が発動しにくいのは砂なんだから」  
剛毅はすこし拗ねたように顔を歪ませる。

「『孤高の情』なんてものは人間誰しも持ち得る事が困難なものなんだよ、そうだな、無理矢理過去の記憶を消して一人で強くなれば別だが」

一閃は顔を曇らせながら瞬夜の顔を見る、剛毅も視線を追って瞬夜をみた。

その顔には苦痛の色など全く出ていなかった、例え誰を何人と殺そうとそれは同じであろう。

「『孤高の情』はこいつにとって常にあったものなんだ、そしてそうだったからこそ陰の『砂を一心に想う心』が強く芽生えているんだ」

「つまり、頼るべきものが砂しか無く砂だけを想う事しか出来なかったという事か？」

「そういう事だ……こいつをこんなになる前に見つけてやれなかった俺の落ち度だ……ゴメンな、瞬夜」

「……それで？俺に何をして欲しいんだ？」

「こいつが起きたら今までであった事全て話して欲しい、会ってからのものでいい、その後はお前に任せる、俺の事は隠匿してくれ」

一閃は最後にもう一度だけ瞬夜に顔を見つめてから立ち上がり、踵を返す。

「こいつの名前はとうすればいいんだ？瞬夜か？再砂か？」

「再砂にしとけ、そして自分の前だけでは瞬夜と呼ばせるように言えばいい……瞬夜を絶対に一人にさせるなよ」

一閃は振り返らず、剛毅の元を、『地獄の使者』を離れていった。

領域内を抜けて、しばらく行った所で一閃はある一枚の写真を握りしめていた。

「また監視の無い平和な日常を取り戻す、それまでの少しの間我慢  
していてくれよ……」  
写真の中には三人の人間が楽しそうに笑い会っていた。  
その真ん中、二人の少年に挟まれるような形で、とびきりの笑顔で  
写真に写っている少女は、花を持っていた。  
白い花びらで、写真越しですらふるふるとそよ風に吹かれているか  
のように揺られてそうな一輪の花を。

## 第十五章：皇の混乱

「まさかこんなことになるなんて誰も予想できなかったからね・・・  
・・だからこそ驚くんだけどね、出来るだけ冷静に聞いて欲しい」  
会議室の中では二つの席を三つの席を空けて残りで話し合いが行われていた。

「まず一番肝心な事なんだけどね、ボス華鈴が瀕死の状態だ、いつ立て直せるかもわからない状況なんだよ」

「なんだと！？鋭美、それは本当の事なのか？」

「私達はまだボスの状態を見ていないからわからないけど、それほどまでに酷いやられ方をしたの!？」

臼と木根が真っ先に抗議の声をあげるが、場の空気は沈んだままだった。

そこに華鈴を看でいていなかった梨理が扉を開けて入ってきて、さきほどの声が聞こえたのかまず先に華鈴の状態をいう。

「かなり危ないねー、でも辛うじて息をつなぎ止めるくらいにとどめている辺りは、多分手加減されたのかもね」

暢気な声とは裏腹に目つきは完全に真剣そのものだった、まあさきほどまで神経を集中して内部まで看でいたので仕方ないのだが。

梨理は空いた席の一つに座った、残る席は二つである。

「それでも危ない事にはかわらないの、だから当分は姿を眩ますかばらけて行動したほうが良いかな、華鈴は僕がみてるよ」

「梨理が残るといふなら俺も残っておこう、俺一人いるだけで安全度はかなり上がると思うし、梨理との共闘は俺が適任だからな」

疾風はそう言っこの要塞、『山岩』に残る事を宣言した。

「僕もちよつとだけ居るよ、まだひとつだけ用事があるからね・・・  
・・臼と木根はどうする？別に離れて行動してもいいんだけど」

「そうね、ならばばらくはあちらこちらで争いの種でも蒔いていましようかね」

「そうだな、小さい事でも多くなれば大事になるからな、確か塵も積もればゴミになるだ」

「山でしょ？」

胸を張って間違った事を言った白は、夫の失態は情けなさ過ぎると思った木根に羽交い締めになされていた。

「くる・・・し、い・・・！」

「木根ちゃん、サドツ気たっぷりだね・・・でもそろそろ止めないと彼が窒息死しちゃうよ」

ハッと気づいた木根が手を離す頃にはもう白はぐったりとしながら大きく深呼吸、いや過呼吸をしていた。

その様子を呆然とみつめる疾風は、梨理もあんなことするのかと妄想しながら恐怖を顔に表していた。

梨理は梨理で、自分はあることしないよと疾風に目で訴えていた。

その四人を端から見守る鋭美の位置はとてつもなく曖昧なものだった。

「まあいいや、いつくらいにここを出る？」

「そうだな・・・」「・・・明日にはできるわよ」

「了解、しばらくは自由に動いてくれて良いんだけど、また集まる時は僕が『道敷大神』が行くと思うから」

「二人一緒とかわないの？」

何を期待してかきさらした子供みたいな瞳を向けてくる、木根と梨理。

この二人の考えが何となく分かった鋭美は顔をほんのりと染めて、「行くわけないでしょ！だいたいなんで私があんな無愛想な奴に・・・！！」

「無愛想で悪かったな・・・まったく命を一つ削ってまでここに戻ってきたっていうのに酷い出迎えだな」

感情の全く籠もってない怒りの声が鋭美の後方下部の方から聞こえた。



振り向くと、幾分か小さくなった『道敷大神』がそこにいた、いやどう考えても小さくなっている。

周りはその姿を見て凍り付いたように動かない、それをみて嫌な気になったのかと思っただけ『道敷大神』は、

「みんな俺がきら・・・」

「・・・かわいいっ！！」「」「」

ハモツた、綺麗にみんな同じ事を考えていたようで、予想外の考えをしていた一人は呆然としていた。

その後、五人に詰問され続けた『道敷大神』が体を休める事になったのは、日が昇ってからだった。

水鏡は自室で考え事をしていた、その内容とは掠れている。『紡ぎの糸』総指揮大介との戦いだっただ。

その最後の一撃、あれだけはどう思い出そうとしても思い出せなかった。

大介の放った渾身の一撃が自分の顔を貫いた、であろうことまでは記憶に残っている。

だが、現在の自分にはそのような外的損傷は見あたらないし、中身だつてまったく変わっていないと自分では理解している。

あの時一体何があったのか、それだけがあの戦いの唯一の心残りであつた。

「結局俺は勝てたのかな？・・・だつて逃げ切れてるわけだし・・・いや、逃げてるなら負けか・・・」

そんな事を考えていると、ふとあの光景を思い出した。

何にもない世界、そしてそこにいた、少し泥をかぶっている豹。

思えばあれは心残りになつていない、まるで最初から知っているかのような存在であつたはずだ。

「豹・・・かあ・・・」

今でも思い出せる、豹のように四肢を使って縦横無尽に駆け回った事を、あの豹と一緒に走つていたと言ふ事を。

水鏡にとつては全てが曖昧になつていてその戦いにおいて、唯一鮮明で、最も意味がわからない個所でもある。

「俺はあんな豹に見覚えはないはずなんだけどなあ・・・」  
でも一緒にいて楽しくない事は無かつたし、それにどこかとても懐かしい感じがしていたのは確かだ。

でもどこか走ってきたかのように、泥が付いていたし、よくよく思い返してみると息切れしていたようだ。

その時ピリピリと肌を雷が焼く。

「寝むれっていつのか？」

雷がまるで、肯定を表すかのように一度バチツと響く。

「ああわかったよ、寝ればいいんだる寝れば！」

水鏡はすぐさま眠りに入る。

夢に入ったのだろうか、周りには見慣れた白の世界ではなく、何匹も豹がいる世界が広がっていた。

「え？こんなにいっぱいいたっけな？」

そういえば前覚める時に増殖したような気がしたが、まさかこのように数にまで増えてしまっていたとわな。

「あら？もう眠ってたのかしら、後何分かは時間かかると思っていたのにね、まあ早く来てくれて助かるわ」

一匹言葉を喋る豹が混じっていた、しかも目の前にいて妙に際だって野生の雄々しさを撒き散らしている奴がいる。

「お前がああの時の豹か、また……とてつもなくめんどくさそうな奴だな、おい……」

「なんだその物言いは、仮にも自分の『才気』ですよ？さっきの言葉は自分の『才気』をけなしているのと同義です、訂正を」

豹は拗ねたような口調だった、それによく見れば、豹の口調に周りの豹たちが賛同するように頷いている。

その可愛らしい姿を見て、ふとこの豹が走っている姿が浮かんできた、それは有り得ないほどの速さで有り得ないことだった。

その豹は目的など無かった、だからただ走り続ける事を目的とした、いつか本当の目的を得る為に。

その豹はだせるはずのない速さで走り続けた、いつか心と体が一致すると願いつけて。

その豹は存在意義がなかった、走る続ける事によって意義がないことを考えないようにした。

その豹は独りだった、仲間の存在など考えた事もなく、その世界にはその豹以外の豹は存在しなかった、する必要がなかった。

その豹は泥だらけだった、洗う必要はない、泥が付き汚れた分だけ

走ったという証明になるのだから。

その豹には敵がない、そもそもそこには敵と呼べるものすらなかった、故にその豹は自分の強さがわからなかった。

その豹は疲れた、だが止まるという事は今までの自分を否定してしまふ事だった、だから止まらず走り続けた。

その豹は走り続けた、止まる事が出来なかったから、止まりたくなかったから、目的が欲しかったから、存在してよかったと確かめたかったから。

そしてとうとうその豹は止まる事が出来たのだ、その豹の目の前には自分がいた。

その豹は不安と安心、希望と幻想、浮かれと恐れ、感情を忘れる程走っていた、故にコレは本能だ、そんな気持ちで聞いた。己が主の名前を、期待はしていないわけがない。

「大空 水鏡、この姿で会うのは初めてだが、そこまで驚いたような顔をされると傷付くな」

ただその時の主の顔が少し自分を戸惑わせた。

「訂正してくださいませんか？」

ハッと我に返ると、目の前一メートルくらいのところまで豹が近づいていた。

「いや、訂正するよ、こんなに強そうな豹は初めてだ」

「それはお世辞とはつきりわかってしまいましたが、まあけなされるよりはいいので……許します」

「ありがとうございます……えっと、名前ある？」

「名前など使う機会がありませんでした、どうしましょうか？」

「そうか……じゃあ雷羅にしよう、かっこいいだろう？」

「私は個人的には自分を女だと思っと思っていますが、水鏡がそういうならそれでいいです」

雷羅は優しい笑顔の水鏡にむける。

その姿をとて美しいと感じた時、水鏡は現実世界に引き戻された。「水鏡、寝てる場合じゃないぞ、緊急の用事だ！しかも最悪の自体

だ！」

「どうしたっていうんだよいったい？」

水鏡が寝ぼけた声で目の前にいるおこしに来ている彰をみる。

彰は見るからに焦っているようで、いつもの落ち着いた雰囲気はそこには無かった。

「どうした？」

今度は真剣に彰を確認してから言う、それに対して彰がはっきりと伝えようと区切り多く言う。

「いいか良く聞け？あの再砂が、記憶を失って帰ってきたんだ！しかも現在進行で記憶の汚染が確認されている！」

それは『地獄の使者』を根本から覆すような大事件だった。

## ・楚良の覚醒

あれからずっと攻撃し続けているが、その少しの時間がこれほど長く感じたのは恐怖に近かった。

楚良は、崩れていない地面に立って目の前の笑顔の母親をみる。

「楚良ちゃん？もしかしてもう降参するのかしら？それともまだ挑戦する？」

紗代はあれから一步たりともその場所から微動だにしていなかった、まさに不動だった。

息一つ乱すことなく、悠然とそこに立っている、圧感……紗代の普通の気迫さえ恐ろしい。

「挑戦し続けます、俺は母上とはまだ離れる気はありませんから」

「嬉しいことを言ってくれるね、楚良ちゃんは……でもね、あなたが何か目的を持って行動していかないと私は越えられないよ」

「まるで俺が目的なく母上に従っていたみたいですね……」

楚良が声を荒げるが、それを苦になく流す紗代。

「目的じゃないでしょう、あなたのそれは美しいわ、息子として尊敬出来る、それくらいの私に対する尊敬」

自分の息子に対して率直に尊敬の心を送る紗代。

「本能ね、人間には美しいやこうなりたいという理想があればそれに追い付きたいと思う本能がある、楚良ちゃんのはそれよ」

事も無げに言い捨てる。

「では俺の母上に追い付きたいという衝動全てが本能だと？」

「そうよ、だからあなたに目的を与えるの、あの子の守護、それがあなたの為でもあるからね」

「母上、見損ないました……でもあなたは俺の尊敬出来る人です、だから俺はあなたを打倒します！」

大我がもう一度拳を握り、その拳をガードするように岩が張り付いた。

だが、みるまでもなく、先ほどとは違う気配を漂わせている、そこに感じられるのは中枢に据えられた『確固たる意思』。

【何も教えていないのに、陰の『情』を発動してるのね、通常よりは上がっている・・・なかなかの素質ね】

紗代は目の前に広がる光景を楽しそうに眺める。

そこにあるのは平地だった、さきほどまで抉れ、深く穴を掘られて荒れ狂っていた大地が平定されていた。

【『大地』に最も適したフィールドだね・・・厄介だ、水分が奪われていく】

そんなことを考えていながらも決して移動や、退避は考えられない、負けるわけがないのだから。

そう思った矢先、その考えが揺らいだ、楚良が何かを得て有り得ない行動に出たからだ。

楚良が、楚良の周りの大地が楚良を包み込み始めた、それだけならまだ理解の予想の範囲内だった。

だがその包んだ岩が押し固められるようにして消失した、まるで吸い取られているかのように。

消えた  
その一瞬で何が起こったのかは驚いていた  
最中の紗代には分からない、ただひとつ理解出来たのは、

「よくやった・・・私に防御の姿勢をとらせるとわな・・・」

どのくらいの力かはわからないが、すさまじい楚良の一撃は紗代のガードした手の少し手前で止まっていて、まだ威力を残し押しつけてくる。

紗代は咄嗟に『渦潮』を最大出力で放出して、楚良をはじき飛ばす。

【これでいいのよ、楚良には目的が在ってはいけない、目的こそ排除すべき対象であり、偽りのものですら必要としない】

素早く体勢を立て直した楚良が一直線に走ってくる、避けない、避けた瞬間自分が敗北するから、これは負けられない戦いでもある。

【ただそこに向かう、それだけその意志のみが地の『才気』の『情』





## ：薬の代償

瞑は京に連れられて『近衛』の本部まできていた。

紅葉は砂のトンネルを抜けた後、どこかに言ってしまった。

まあ『近衛』の本部は『地獄の使者』の本部でもあるわけだが。

京が先に中に入っていった、瞑は外で待機している。

中に入った京はすぐさまボスの部屋にむかった。

「京だ、入りますよ」

返事を待たずに部屋に入ると、待ちかまえたかのように冥が向かってきた。

「京!!早くきて!再砂が……再砂がたいへんなのよ!!」

「知ってるよ、後は私がやるから、冥は玄関にいるお姉ちゃんの相手をお願い」

「え!?瞑お姉ちゃんが来ているの?…….…….わかった!再砂をお願い!」

冥はそう言って急いで玄関の方に向かった。

「これでよしと……後の連中は全員楽に気絶させられるでしょうから……」

京は血を一滴地面に垂らす、そこから血が膨れあがり、目の前にもう一人の京が現れる。

「頼んだよ、ここから誰も入れないでね」

「わかったよ私、私に任せときなさい!まさか私が私を信じられないとでも?」

「いいえ信じているわ、なんたって私だもん」

楽しそうな会話をして奥に進んでいく、そこには何人かの看護員になにか賢明な手当をしてもらっている再砂の姿があった。

「京様!ようやくきてくださいましたか!お願いします、この患者を助ける方法を!」

「まず、君たちは消えてくれ」

京は瞬間で全員の意識を奪う、同時にずっと続けられていた看護の力が止まる。

それと同時に、砂がどこからともなく現れて、再砂の体を取り巻いていく、まるで自分で治しているかのように。

しばらくしてから、砂の中から掠れた声が聞こえてくる。

「け……い……か……」

「そうよ、まったく無茶しちゃったね……お前が無茶して一体誰がこれから此処を守るのかしら？」

砂の中から顔だけ出す再砂、その顔は酷くやつれている。

「たの……めるか……？」

「駄目よ、私が日の光の下は駄目だって知ってるでしょ？それに出る分に力を回しちゃえば逆に『七皇』なんか止められない」

「フ……フフフ……安心、しろ……俺、様の、自立の砂、が……お前が出る時は、空を覆う……」

砂がどんどん再砂から離れていく。再砂の気配は確かに良くなっていくようだが、顔からは生気が無くなっていく。

「ああ……そ、ろ……ゾロ……ゲンカ……イだ……」

「仕方ないな、安心しろ、私が責任を持って守ろう！だからお前は少し休んでいろ」

「たの……ン……ッ」

再砂は最後に何かを思い浮かべてとても、女の京でも惚れてしまいそうな笑顔を残してその意識を閉じた。

一瞬急激に冷たい顔になった後、すぐさま生気が戻ったようで、呼吸も安定した。

「っふ、まったく女言葉で話していたらいまごろこの組織のアイドルになっていただろうに……惜しい女だ」

可愛い寝息をたてながら再砂はとても静かに寝ていた、ふとその首元に目がいった。

とても血色がよくて、美味しそうで、ついその首元に自分の顔を埋めようとしてしまう。

「いつまでそんな隅の方でコソコソやっている……おおよそ生き残るめどがたっただ……さっさと出てこい」

「これからお前が何をするのか興味があったんだ、まあ一閃から安全は聞いているから止めはしなかったが……」

「何回かとも止めたかったんだぞ……そうじゃない？」

「当たり前だ、ま、さっきのも止めようとは思わなかったけど、何しようとしてたんだ？」

端に気配を消して眺めている剛毅が出てきて、再砂の隣につき、おもむろにそれを抱きかかえる。

「連れて帰るのか？まるでナイトだな……いつか私もして貰おうか、フッフ」

「やめてくれ、俺は瞬夜だけのものなんだよ」

「そうか、少しカッコいいから残念だ……ところで質問の答えだが、私はただの『吸血鬼』だよ」

「……もう驚き飽きたよ、」

悪魔』に『吸血鬼』に『七皇』を一人で凌駕する女だもんな」

「いいことだ……これ以上驚かれて私の仕事を増やさないでくれよ」

そう言うと京は血に代わり管を伝ってどこかに行ってしまった。

剛毅は剛毅で、再砂を抱えたまま窓から砂の『才気』を使い砂の路を造る、目的地は『秩序』の組織だろう。

：二人のメイと絶体絶命の彰（前書き）

ようやくここまで・・・

そろそろストックが本当にソコ切れしてしまいそうです。

なので更新速度がガクツと、それはもう目に見えるほどにガクツと落ちてしまいます。

なので、それからの更新はなま暖かい目で見ていただけると嬉しいです。

では

また来てくださった方ありがとうございます！

はじめての方はこれからよろしく！

みんな、楽しんでくれれば幸いです^^

：二人のメイと絶体絶命の彰

「お姉ちゃん!!」

「冥ちゃん! 元気にしてた? お姉ちゃんと離れてるからって昼間で寝てるなんてないでしょうねえ!」

「はう! . . . . . どうだっていいでしょ! それよりお姉ちゃんは何しに来たの?」

一刻も早く再砂の様子を見に行きたいのだが、たとえ姉妹でもこのことはばれたくなかったので速やかに用件を聞く。

「いえ、特に理由はないのだけれど . . . . . 暇が出来たから遊びに来ただけよ? そのほかに用件があるとすれば . . . . . アレね」  
「目が思い出したかのように手を打つ。」

「えつと . . . . . 確か彰と言ったかしら? その男がどんな男か見てみようかね . . . . . フッフ」

「お姉ちゃん!」

「冗談よ . . . . . まあ無いとも言切れないけどね」

「 . . . . . 彼氏の為? 絶対そうね、お姉ちゃん彼氏のこと大好きだもんね」

ジト目で瞑の事を睨む冥。

瞑は顔を真っ赤にしながらぶんぶんと首を振る。

「そんなんじゃないんだから! 私はただ可愛い可愛い妹を見ようとここまで走ってきたのに!」

「 . . . . . とここで来る途中何かなかったかしら?」

冥がなんでもないように、と本人は思っている、聞きかける。

「 . . . . . ええ、何も無かったわよ、とここでどこか寝る場所をまだ決めてないんだけど . . . . .」

「何もなかったのね . . . . . それはよかった、とまるとこ? 私の家があるじゃない、来ていいよ」

「お邪魔させてもらうわね! とここで何か慌ただしそうな様子だけ

ど……あなたはいかなくていいのかしら？」

瞑は冥に気付かれ無い程度に『近衛』内部の様子を観察していた。そして気付くのが、兵の動きに偏りがある事、一つの部屋で動かない兵と、走り回っている兵がいるのだ。

ずっと前に冥から聞いた、役に立つ以外の兵を全て一所に待機させておくことで効率よく出来る……らしいのだ。

「ん……お姉ちゃんを一人にするのがちょっと気が引ける」

「大丈夫よ、冥ちゃんの家まで送ってくればそこでおとなしくしているから、はやく行きましょう！冥ちゃんの家楽しみ！」

冥はあきれ顔で、でもどこか楽しそうに立ち上がり、瞑の手を取る。その時、連れ出そうとした冥がずっこけ、その冥を起こそうとした瞑が扉に立つ人物を確認、男を確認した。

「ありや？ドジッ子の癖に転けた事のない冥が転けてる？……そして何やら冥にとてもよく似た人が……」

「冥ちゃんに謝れ彰、それはさすがに失礼だろう……まあ似た人の部分が気になるが、冥ちゃん説明お願い」

冥は差し出された水鏡の手をとって、恥ずかしそうに起きあがる。

「冥ちゃん、お姉ちゃんにもどういいう事が説明してもらおうよ」

「うう……すいき……」

「そうだ、ここには彰を残しておくから、俺はすぐさま再砂の様子を確認する必要があるからな、じゃあな！」

いつの間にか階段まで移動した水鏡が元気良く告げる、一瞬だがその足が光を放っているように見えた。

彰もその姿を呆然と見つめていて、ハツと思いついたように、

「副隊長だから！俺副隊長だから隊長に付いていかないと！じゃあな、め……！」

逃げようとする、彰の両肩を二人の手が縫い止める。

「彰……逃げたりしないよね？」「どうやらあなたが本命そうなので事情を聞かせてくれるかしら？」

ウルウルと泣きそうな目を向けてくる眞と、がっしりと肩を持ち、私の妹に手を出すなんて良い度胸だ、と無言で告げている。二人からの何とも言えないような圧迫に、久しぶりに冷や汗を流す彰であった。

## 第十六章：迫り来るグングニルの大槍、絶対先攻の一撃

上についた水鏡はちよつとめんどくさげに溜息をつく。

「それで？京がお前達を気絶させて、気絶している間に再砂と京がいなくなっていたと？」

救護隊の面々が同時に頷く。

もう一度深く溜息をつく水鏡、その仕草からはやる気のなさがみなぎっているようだった。

「わかった、詰問は俺がしておくから、お前等は帰ってろ」

納得していないようだったが、水鏡にここまでいわれたため全員持ち場に帰っていった。

水鏡は部屋のソファに落ち着きながら座り、ゆっくりと背もたれに体重をあずける。

その席からの窓から空がよく見えた。

そして、遠くに不吉な気配を感じさせる、漆黒の雲がかかっていることすらも見えた。

その瞬間水鏡は走り出した、全速力で。

世界が

光に包まれた。

『八皇』の要塞基地のすぐ近くの場合で一人瞑想している。

そこにもうひとり、少年のようだが無表情の人が近づいていく。

「どこかにでも攻撃するつもりなのか？」

「『道敷大神』・・・君なら僕の狙う所がどこくらいわかってるだろう？」

「ああ、『地獄の使者』だろ、俺は反対はしないがな・・・やめといたほうがいいと思うぞ、今のあそこには何が在るか分からない」  
『道敷大神』が無表情のままそう告げる。

しかし、いっこうに鋭美が『才気』を溜める事をやめたりはしない。  
「それでも攻撃してみたいよ・・・今の自分でどれほどダメ





鋭美の方向が聞こえたような気がした。

動くのが早くて良かった、水鏡はそう思った。

同時に自分にこの攻撃を最後まで耐えきれるかどうかが不安になってきた。

自分では決して出せないような雷の『才気』、雷で有りながら、あまりに圧縮されている為それは質量が在るように触る事が出来る。

それが幸いした

だからこうやってここで

押しとどめる事が出来るのだから。

「うぐう……！！！」

だが、この馬鹿みたいな力で押し固められた『才気』を止める事など今の水鏡には不可能なことだった。

その水鏡の弱さを補うように、雷が体と同化していき、一瞬体が自分の物じゃないかのように軽くなった。

だが、それでも対峙する雷の『才気』はその圧倒的な存在を誇示しつつづけてくる、これでようやくとどめる事が出来た。

こんな攻撃防げなくて当たり前だ、此方はなんの準備も無いが、相手は相当な準備をしていると感じられた。

防がなくて良い、ここで逃げればおそらく自分は助かる。

「うぐう！！ううおおおおお！！！」

そんなこと出来るわけがない、何故なら水鏡には譲れぬ義務とそれをどこまでも持ち続ける性格があるから。

『覇光』、外敵の一切から『地獄の使者』内の人間を守り抜く事を使命にした組織、そのボスで在る限り水鏡は絶対に引かない。

それが義務であるから、その理由のみで水鏡は常にそれを守り抜く妥協など考えない、考えた時が負けた時だ、故にひたすら打破することを模索し続ける。

両の手足は既に雷と完全に同化仕切っている。

その浸食は最早その付け根にまで及び、まだまだ同化していく。

## ：二人の雷の勝敗

残るのは顔だけになっていた。

だがそれでもまだ押されている、一体どれほどの力の持ち主なのか、水鏡は愕然とする。

これだけの時間がたつても尚この威力を保ち続けているこの攻撃は尋常ではなかった。

諦めたい気持ちか滲み出るが、それだけは出来ないと必死で支えるのは、水鏡の想い。

軋んでいる筋肉にカツを入れて、再び現実の目の前の莫大な力の塊を凝視する。

これは、決して『地獄の使者』には入れてはいけないものだ、それを排除する。

水鏡はただその一心にのみ意識をむけて、賢明に立ち向かい続ける。

鋭美はその異常な景色を顔を歪めながら見つめていた。

「『ゲングニルの大槍』が止まつてる……そんな……有り得ない」

そう、自身最強の技が、『地獄の使者』を通る手前で止まっているのだ。

「有り得ない……アレを完全に止める事の出来る『才気』なんてそうそうあるもんじゃないのに……」

雷の『才気』には大きくわかる時に二つにわけられる。

一つはマイスス、大多数の雷がこれに当たる、威力は個人差があるが、強い物は強い、しかし蓄積が不可能。

もう一つはプラス、世界に数人のみしか存在しない、一般に威力はマイナスに劣るのだが、蓄積が可能。

ただ、鋭美のそれはマイナス以上の威力があり、蓄積も可能という反則的な強さを持っている。

故に世界の誰にも、『グングニル』の物質部分は防げたとしても電流部分は止めれないはずである。

だがしかい、現在その有り得ないことが起こっている、『グングニル』の全てがなにものかによって止められているのだ。

だが押している、このままいけばいつかその誰かが自滅して、先攻出来るだろう、そのいつかがなかなかこないのだが。

「っち……やっぱ予想外の人材が混じっているようね……」

正直この防がれる事を予測できなかったわけではない、一閃が前に居た以上ここにはある程度のプラス雷の『才気』がいるとは思っていた。

しかしまさかここまで耐えきれぬプラスがいるとは思わなかった。

「はぁ……一閃つたら、どれだけ蓄積させてるんだか、こんなに蓄えてよく壊れなかつたわね」

蓄積にも一応限度というものがある、その限度を超える貯蔵は本人の意思を無視して放出されて周りに物質的被害を撒き散らす。

前に『道敷大神』が言っていた。

「一般的な雷の『才気』の力を1とおくならお前の力は50だ、一秒毎の蓄積量は100くらいまあ一時間もすれば誰も適わないんだとするなら今の鋭美の力はおおよそ四億、一日分の蓄積値であるそれに耐えているということは、それ相応の蓄積量があると言う事になる、一体どのくらい溜めているのか、少し興味が湧いた。

「もし耐え抜く事ができたなら僕自らの手で殺してあげよつと」

一つ楽しみが出来た、鋭美はすぐさま、今残っている全ての雷を放たれている『グングニルの大槍』に上乘せしたのち、蓄積を開始する。

もちろん、防がれる事など微塵も考えてはいないわけだが。

わかる、明らかにこの攻撃の強さが増した、多分残る力の全てを投入したのだろう。

「誰だか知らない、が！よくやり．．．やがる、こんな攻撃．．．  
．．．！！！」  
ブチブチと筋肉が引きちぎれてきた、その部分をすぐさま雷がつかぎ止め、より雷に近くなり力が膨れあがる。

だが、そろそろ自分でも『才気』が出せなくなる限界、というものが近づいてきたのが分かる。

【逃げたい．．．．．】

そんな感情が水鏡の中を満たしていき、最終的にはそれが力を弱めていく。

保たない、潰れる、今抜けるだけに力を使えばおそらく自分は助かるだろう、この質量だ、当たれば死ぬではない、消える。

弱い心がどんどん自分を埋め尽くしていくのがわかった、どんどん自分が弱っていく事がわかった。

だが、いままでの自分がそれを否定する。

「く……………！！！」

ここで逃げるといふならば確かに自分は助かるであろう．．．．しかし、自分の後ろにいる今守っているみんなの命が消え去るだろう。

なら逃げる事は出来ない、逃げる事など許されない、『霸光』の名を傷つける事はボスである自分としてはいけないのだと言い聞かせる。

逃げる道理などない、ここで守り抜いたとするならば、いつか『霸光』はその役目を全うした事になるだろう。

包んでいる雷が膨れあがり、目の前の雷を押し返そうと膨張する、そのたびに筋肉はブチブチと千切れ、それを補うようにまた膨張。そしてついにその時がきた、筋肉、内臓すらも雷と同化してしまっただ、感じがある。

もう後戻りは出来ない、そのことがよく実感された、後戻りなどする気もないのだが。

【いいじゃねえか．．．．．やってやろうじゃねえか！】

だがもう水鏡の心身はともに限界にへと近づいていた。

絶対にこうしたいという、もはや動かない強い束縛の想い、されどその想いに先に心が悲鳴をあげる。

奥底、そこで常に弱音が飛び交っている、その一端を触れてしまえばきつと立ち直れないだろう、水鏡はそこを想いでふさぐ。

全身雷、筋肉すら雷になっっているの、しかしそれがとければきつと自分で歩く事すら出来ないくらいに弱っているだろう。

もう自分で自分の力が分からない、どのくらい保つのだろうか、もう保たないのだろうか。

「また、一人で戦おうとしていませんか？マスター水鏡」  
後ろから有り得ない声が聞こえた。

この世界には居ないはずの声、でも確かに後ろから聞こえてきたのだ、自分を戒めるように。

「これが俺の義務であり、『覇光』というここを守る使命を与えられた組織のボスとしての、絶対しないとイケない責任だ」

「ならお供しないとイケませんか、私はあなた、あなたは私、私達は一心同体なのだから」

「でも実体はない雷だろう？そんなんじゃないにも出来ないだろう？」  
「確かにそう………私には実体がない、だから自分で何かしようとすることはできないのよ」

でもねつと雷羅は続ける。

「私には心からあなたを支える事が出来る、あなたの様な強い想いもないし、実体のある体なんてない」

「ならばやく俺の心に戻ってくれよ、ちよつと力が弱っている感じがするんだ」

「そんなことはないはずよ、絶対に  
つて、話し折  
らないでもらえるかしら？」

可愛く怒ったような声が聞こえてくるが、水鏡としてはそんなコトしてる余裕はない。

「ふう………でもね、私には鍛えぬかれた何者にも砕けな

い心がある、まあいままで独りだったからだけだね」

とても自虐的に言っているようだが、慰めに撫でてやる事も出来ない。

「そして、どんな力にも対応出来る鍛えぬかれた体がある、生まれた時から走り続けてるんだもん」

水鏡はそれをひたすら聞き続ける、そうすることで苦しい現実から意識を背ける事が出来るから。

「私はそれをあなたにあげる、私にいつぱいいろんな大切な物をくれたあなたに私の全てをあげる」

後ろにあつた『才気』の感覚がなくなり、その後、体に劇的な変化が起こった。

雷の足に力が籠もった、まるでどこまでも走っていけるかのような目標なく走り続けられるような。

強すぎる想いに負けそうになっていた弱い心は溢れてくる強い心に包まれて、強い自信に変わった。

同時にくる孤独感、恐怖感が襲いかかってくるが、それは強い想いのもと一刀両断される。

その状態でどんどん己のポテンシャルがあがっていくとともに、目の前の物を片手で耐えきれなくなるまでになった時、後ろに人の気配がした。

その気配には心当たりがあった、分かっている、こいつは何時だった己の側に居てくれたのだから。

「おめでとう、やっと悲願が叶ったようだな 雷羅」

「ハイ、ありがとうございます、マスター水鏡」

横に見た事もない人間が立っていた それを見ると もう負ける理由が見あたらなくなった。

雷羅はおもむろに足を振りかぶり、鋭美の最強不敗だった『グングニル』を真上に蹴り上げたのだった。

鋭美にとっては初めての事だった、そしてこの時、水鏡は鋭美から『グングニル』と『絶対先攻』の名を奪い取ったのだった。

## ：水鏡への信頼

「……………ん？」

彰は嬉しいような悲しいような気分がして、窓の外を見つめた。

「余所見？いい度胸ね、彰くん」

がすぐさま今の現実を引き戻される、目の前には目だけ笑っていない瞑がいる。

もちろん自分の隣にはおどおどした感じの冥がいるのだが、ずっと心配そうに見つめられている。

「いえ……………ちよつと胸騒ぎがただけですよ、瞑さん」

ジトツとした目で彰を見つめる瞑、先ほどから冷や汗を出しまくりな彰だった。

ちなみに場所は『霸光』の総本部になっている、冥が自分の部屋を勧めたのだが、瞑が絶対に許さなかったから。

それに加えて、『近衛』は大変なはずと瞑が予想したので、結果彰の場所ということになった。

彰が女二人を連れ込んだ時点で『霸光』の構成員達は大騒ぎをしているのだが、瞑はそれには気にしない。

「ふう〜ん……………他の女？」

「違います！」

いままで彰にその手の噂が流れた事はない、そもそも任務以外では大抵部屋に引きこもっている彰のプライベートはあまり知られていない。

冥もそれはわかっている、彰の事が気になり始めてから調べていて分かった事だ。

「お姉ちゃ〜ん、彰はそんなことする人じゃないよ〜」

「本当にそうみたいね、それに……………」

瞑はまたジツと彰を見る。

先ほど彰が、隊長と呼んだ人物より明らかに彰の方が強いと、瞑は



知っている、それもちよつとの差ではなかった。

それなのに何故彰が二番手になどなっているのかと思った、冥の彼氏ということは隊長がいいと、瞑は思っている。

「何故彰くんは副隊長なのかしら？このボスは見る目がないのかしらね？」

「一閃ことを悪く言う事は許さないぞ」「お姉ちゃん！一閃様のことを悪く言わないで！！」

同時に言われては困るのは瞑だ。

「でもお・・・普通強い人が上になるものでしょう？だったら彰くんが隊長じゃないとって普通思っじゃない・・・」

少し声が低くなっている、まさか妹にまで言われるなんて思いもしなかったのだろう。

「前にも言ったでしょ！一閃様は隊長を強さで選ばないって！まさかお姉ちゃん、忘れてたの！？」

「忘れてないわよ・・・冥ちゃんの言った事をそう簡単に忘れるわけじゃないの・・・でもね・・・」

「瞑さんはどうしてそれも隊長に拘るんですか？」

「それは・・・たった一人の可愛い妹の幸せを誰よりも望んでいるからに決まってるじゃない」

彰の質問に、ハッキリと答える瞑、それを聞いて少し照れるのは冥だ。

「それは隊長でなくともいいと思いますが？」

「そうね、でもやっぱり可愛い妹に副隊長なんかって思っじゃない・・・」

「大丈夫ですよ、瞑さん、俺は絶対にあなたの妹の事を幸せに出来る自信があります」

ハッキリ言われては言い返す事の度出来ない、瞑は視線を彰の横で幸せそうに寄り添っている冥をみて、ムツとした顔を作る。

「お姉ちゃんの前でそうやってイチャイチャするのは止めなさい・・・見てるこっちが恥ずかしいんだから」

バツと離れる冥、それを少し残念そうに彰が見ていた。

そしてフト思い出したように瞑の方を見る。

「そうだ、一つ訂正しておくべき事がありましたよ、瞑さん」

「なにかしら？」

「隊長、水鏡のことです、言ったでしよう彼が俺より弱いつて

大間違いです、彼は俺何かより遥かに強い」

それに驚いたのは瞑だけではない、冥も驚いているようだった。

「ただ、その力に気が付いてないだけなんだ、もしその力を見つければなら、誰も適わないな、って一閃が言っていた」

その時、外で光の柱が天に伸びたのだが、この三人を含む『覇光』のみはそれに気付く事はなかった。

## ：地獄の雷

「そんな馬鹿な……」

鋭美はその場にものすごく不愉快な顔をして立っていた。

見つめる先には、全身から眩い光を放っている男と、その横で当然のように佇んでいる女。

【不愉快だね……僕の『グングニル』を止めるばかりか、その後に余裕そうな格好を見せられるのは】

その二人に向かって攻撃を放つ、いくら溜がないといっても、もともと普通の数倍は強い攻撃、簡単に弾けるやつはいない。

その攻撃を女の方がいとも容易く片手で軌道を上に反らせた。

男の目が此方を捕らえた。

間合いは一瞬で詰められて、鋭美の前に男、水鏡が立っていた、やはり体は光っている。

「この力……『八皇』で間違いないな？」

「そうだよ、僕は『八皇』、『絶対必中』、『グングニル』、『雷神』

の鋭美だよ」

「名乗りか……『地獄の使者』、『霸光』、『雷人』の水鏡だ」

「『雷人』か、なら僕には勝てない事がわかるかな？こっちはさらに上の『雷神』だよ？」

「勝てる勝てないはそんなことでは決まらない、それに、俺はこんなところで負けるわけにはいかないからな」

またしても鋭美が不愉快そうな顔をする。

そして、普通なら必殺ともいえるそれを、水鏡の横にいる女がいとも容易く片手ではじき飛ばした。

そして、にこりと笑顔を鋭美に向けてくる。

それが、鋭美には腹が立って仕方なかった。

もう後の事は考えずに本当に今自分に溜まっている全ての『才気』

を解放して予備も何もかもを詰め込んで水鏡に放った。

だがしかし、それを以てしてまでも女はなんなく片手で握りつぶしてしまった。

「これは一体どういうことかな？なにか特殊な薬でも使っていないと納得できないね」

「さあ、俺にもわからん、説明してくれ雷羅」

水鏡はそう言つて隣に立っている女を見た。

「そうね、普通の雷の『才気』を1としましよ、あなたの一回に放てる力は10です」

その事実少し驚く、水鏡。

当然だ、自分ではそれほど強いとは思っていないからだから。

「ちなみにこの方はおおよそ50といった感じかしらね、二人に共通するのはそれを溜める事が出来ると言う事」

「そうなのか？俺はそんな事気付いてなかったが……」

「無意識に使わない部分を回していたのよ、一秒平均75くらいほどかしら、ちなみにそっちは確実に100前後くらい」

「そこでも勝つてはいないのか……」

水鏡は少し落ち込んでいるようだが肝心な事に気が付いていない。

鋭美が心底不愉快そうな声で雷羅に聞く。

「そんな力の差が有りながらなんで君たちのほうが勝っているのかな？」

「あなたの力、結構あるわよね、一日で大抵の奴が適わなくらいにも、でもね、予備を残して毎回使い切っている、それが敗因よ」

「それでも十日分は残しているんだよ？」

「たった十日でしょう？あなた、マスターが一体いつから自分の『才気』を溜始めたか知っていますか？」

「俺が溜始めた時期？……俺はそんなことすら知らなかったから始めた記憶もないぞ？」

何気ない水鏡の一言で、鋭美の顔が有り得ないほどに歪んだ。

それをみて、口の端を吊り上げるようにして笑う雷羅。

「あなたの予想通りですよ、マスターは生まれた瞬間からその力を蓄え始めたの」

水鏡の溜められている力の総量は五億くらい、対する鋭美は四億くらい。

一億といつても、その差は雷からすれば大きいとは言えないほどのものだ。

だがそれがもし……。

「常に『情』を発動しているからこそ、その力が発揮できたのでしよう？あなたは、でもマスターは違う、マスターは五億にさらに百倍」

「ということは俺のいまの力は五百億か？」

「いいえマスター、私は一回の防御で十億消費しています、だから正確には四百五十億です」

無駄使いもいいたころ、鋭美の一回の攻撃はせいぜい強くとも一億程度、それを毎回十億で粉碎しているというのだ。

鋭美はこの時初めて恐怖というものを感じた。

「いや……」

それはあなりに強すぎるもののため、それに満たされた心が逃げ場を求めてはき出される。

「っというわけだ、すまないな鋭美とやら、丸腰の相手にトドメを刺すのは気が引けるが、『八皇』ならば仕方ないだろ」

ガタガタと震えている鋭美を余所に、雷羅が飛び上がる。周りから雷雲が集まってきた。

「雷の『八皇』、負けは初めてか？」

「あ……あ……」

「そうか」

躊躇い無く、水鏡が手を下ろしたように見えた。

雷雲がひとかたまりに集まり、空から、のこる内の百億もの力を注ぎ込まれた雷がおちる。

「『地獄の雷』」

世界をまた、今度は違う者が発した光によって埋め尽くされた。

・地獄の使者へ、いざ！

突如起こった光に一瞬視界が奪われた。

その光から自分を守るように一人の男が光を阻む。

「角理！大丈夫か？」

「ありがとう、楚良さん……でもとても強い光だったね」

「ああ、どこの誰だか分からないがな……後楚良さんはやめてくれ、普通に楚良でいい」

「そ！……っそうね、そ、楚良……くん」

角理はなるべく平静に言っているようなのだが、嚙んでいてはバレバレだ。

【呼べるわけないでしょー！！！！！まだ合ってちょっとしかたつてないのよ！】

こういった具合にパニックっているわけで、そうそう普通に話す事のできる心情ではなかった。

「む……くん、もいらないよ？ちゃんと呼んで？」

何も知らない楚良は覗き込むようにして顔を近づける、息がかかるくらいの距離にまで。

途端、角理は顔を真っ赤にして身を飛ぶように引いた。

「そ……楚良……」

「それでいい、これからどこに向かうんだ？結局一閃さんはいなかったんだらう？」

紗代さん達に見送られて森を出てから、一閃がまっついているであろう場所に戻ったが、一閃はいなかった。

これは紗代が予測していたことであらうとおどろかなかったが、実は……、

「……あの野郎！！私の下着諸々が入った鞆を！あんな場所にポイツとしゃがって！！」

「ちよっと地が出てるよ……それに盗られな

かったからいいじゃねえか」

「…………ごめん、取り乱してた」

「気にするな、それよりもまずはどこに向かうかを決めよう、宛もな  
く彷徨うわけにはいかなからな、そんなことしたら俺が母上に・  
・！」

「そうね…………あ、あそこにいかないと、一閃のいた  
組織、『地獄の使者』に」

角理は一閃についておおまかなことを紗代から聞いている、その中  
にその組織が出て、行こうと思っていた。

その前に驚いた事が紗代のもつ情報量の多さだ、なんでも今はボス  
一人が抜けた『迷い子』のボスを務めているらしい。

そしてその『迷い子』の情報のすべてを頭の中に持つ前ボス、柿崎  
彰がその『地獄の使者』にいるらしいのだ。

正直、紗代は自分の記憶以上、いや現在進行形で増え続けるこの  
情報よりも彰の情報量のほうが多いと言っていることが恐怖だ。

「まあ、正確はすこし捻くれてるみたいだけど、はなしてくれない  
わけじゃなさそうだし、行くだけ行ってみよう」

「行くところは決まったし、早く行くこうか！」

「うん…………とりあえず今日は泊まる所確保しないと・  
…………」

紗代は、何故か、二人を夜に出発させたのだった。

角理にはその意図がなんとなくわかり、紗代を笑っている顔が目に  
浮かぶのだった。

「そうだな…………なら近くの宿屋に行こうか、そういえば確か  
温泉が気持ちいいところだったはずだ」

「う、うん…………」

なんか平気そうな楚良に対してイラつきを感じる角理は、すかさず  
後ろから軽く頭を殴る。

楚良は頭をさすりながら角理を睨む。

「何するんだよ!！」



その反応に対して角理は何か物足りなさを感じていた。

「え？・・・あ、うん、ゴメン・・・」

それがなにか分からないでいる角理だった。

## ：水鏡、死期迫る

雷羅は目の前に横たえている大傷を受けながらに生きている鋭美を見ている。

その姿は悲惨なものだ、両足は完全に消されていて、片手は最低永久麻痺だろう。

さらには強制的に蓄積可能領域を無理矢理こじ開けて、蓄積を不可能にしている、さらには『才気』を妨害出来るようにしている。

おそらく鋭美の『才気』は最高でもレツドラインの1くらいまで落ちるだろう、一回打ち砕いた事により『情』は発動出来なくなっている。

目を覚まさなければ気付きはしないが、おそらく長期に渡る精神障害ないし記憶障害に陥るだろう。

「やはり優しいのですね、マスター水鏡……でも、確かにあなたに殺しは似合わないです」

だが死んではないのだ、生かされている、鋭美は水鏡によって生かされているのだ。

「その呼び方はもう止めてくれ、マスターは付けないでいてくれると助かる、その言い方はあまり好きじゃない」

「……水鏡様、自分の体について分かっているかしら？」

「そうだな、とりあえず分かる範囲で聞いておこう、どのくらい毎でどれくらいだ？」

水鏡は自分の状態を理解して簡潔にそう言い、雷羅はその意味をこれまた簡潔に答える。

「一時間毎に10億、人間を構成するんだからこれで当然なんだけど、いくら溜めても此方の蓄積が間に合わないんだよ」

「そうか、保つて一日半くらいか？なあに、それだけあれば十分さ、俺の未練なんてただの一つしかないんだからな」

「未練？水鏡様は『地獄の使者』を『八皇』守り抜いた、これで未

来で『地獄の使者』の名は轟く、これで満足ではありませんか？」

雷羅は驚いたような声で聞く。

水鏡は少し照れたように頭を掻いてから、その胸の内を明かした。

「好きな奴がいるんだ、どうせ死ぬんだったら思いだけは残しておきたい」

「うう、私の前で他の女の事はあんまり言わないで欲しいんですが・・・嫉妬しちゃいます」

雷羅はツンケンした態度になっているが、水鏡はそんな雷羅の髪に手を入れて優しく梳く。

擦ったそうに身をくねらせる。

「ごめんごめん、でもハツキリさせとかなないといけないし・・・大丈夫、俺は絶対に戻ってくる、だからここで待っていてくれ」

「・・・命令であるなら従うまでです、水鏡様」

「ありがとう雷羅、安心しろ、俺の最後を見届けるのは雷羅、君だけの特権だから」

「今だけはこう呼ばせてください、マスター水鏡、ありがとう」

そんな雷羅を一度だけ見つめてから、一際強く一回撫でると水鏡は消えた、おそらく愛する人の元に行ったのだろう。

雷羅は一度だけ撫でられた髪を触れて、遠い空を眺めた。

## 第十七章：彰がここにいる理由

「ただ、その力に気が付いてないだけなんだ、もしその力を見つげられたなら、誰も適わないな、つて一閃が言っていた」

その言葉に冥と瞑は黙り込んでしまい、しばらくは沈黙が続く、その沈黙を破ったのは、

「そんなに評価されてたんだな、俺は……彰あゝそういうことは俺にも言え、そのほうが力が出るんだぞ？」

いきなり話に割り込んできたのは、全身が輝いている水鏡だった。瞑はとてつもなく不機嫌な顔をして水鏡のことを睨み付けていた。

【力が上がっている！？しかもこの跳ね上がり具合は可笑しい！しかもステータスが全て異常値だと！？】

すると、彰の後ろいた水鏡が瞬きの間に瞑の後ろからコーヒーを差し出した。

「冥さんのお姉さんですよ、ならもてなさない訳にはいきませんから、どうぞ」

「え、あ、ありがとう……」

【一瞬！？それも大きな『才気』の発動は感じなかった！……一体何なんだよこいつは！？】

次に声が聞こえたのは階段付近の扉の前だった。

「じゃあ、俺は行くところあるから、用事が済み次第、すぐにいくけど、ゆっくりしていいよ」

そう言つて、またも一瞬で消えてしまった。

三人はしばらくその階段を見ていた。

パリッと、ほんの一瞬瞑の肌を静電気らしきものが奔ったが誰もそれには気付かなかった。

「ああ……そうだ彰」

また、今度は服を着替えた状態で瞑の横に堂々と座る水鏡に、三人共さきほどから驚きっぱなしだ。

「一つ頼まれてくれないか？」

「ものによる、俺は自分の信念の元に動いているからな、嫌な事はしない主義なんだ」

「そうか、でもボスの命令は聞いてくれ……新しい隊長を決めてほしい、俺は退くからな」

「俺が水鏡以外の下につくなんて考えられない、お前がやめるなら俺も止めるがいいか？」

「俺は構わないが……」

「だめ!!!」

暁と冥の声が重なり、水鏡は一瞬で部屋の端に完備してあるはずの長椅子に移動し、彰は仰け反るように驚く。

「私……彰がいらないいやだよ……お願い彰、やめないで？」

「そんなことで辞めるなんて馬鹿なこと妹の彼氏にさせると思うかしら？」

「う……しかしだな、俺がこの内部組織にいるのは水鏡が俺よりつよいと一閃が太鼓判を押したからだ、それがいないとなると……」

「む……そんな理由だったのか、まあいいが、俺はもう行くぞ、残されている時間は限りなく少ないんでな」

そういつて水鏡はまた消える。

「彰……ホントにそんな理由だったの？」

「ああ……最初はな、でもあいつと一緒にいる内にドンドン彼奴の事が分かって、今は自分の意志で付いていつてたんだ」

彰はさつきまでの水鏡に姿を脳裏に描いた。

自分が保有している全ての『才気』の情報と照らし合わせるが、水鏡のように体中輝くような事例はない。

「でもあいつがいなくなるんだったらそのどちらでも居残る意味がなくなる、俺は隊長はもうしないと決めたんだ」

「前にどこかで隊長をしていたことがあるのかしら？」

「ああ、これは秘密の話だが、俺は世界一の情報組織『迷い子』のボスをとめてたんだ」

「『迷い子』の！？」

暎が驚いて身を乗り出してくる。

「じゃあ今の『迷い子』を彰くんはどつちが情報量ある！？」

「多分俺、でも引退して個人の情報屋なので、情報料は法外ですよ？」

「それでもいい！……冥ちゃん、少し外に行つてくれな  
いかしら？ちよつと聞かれたくない用事だから」

「うん……彰、お姉ちゃんに変な事したら駄目だよ？お姉ちゃんの彼氏強いんだから……」

「しないよ！俺がお前以外に手をだすなんて考えてるのか！？」

彰が真剣な顔で冥をみつめると、冥は安心したかのように笑顔で部屋を立ち去った。

「それで、ここまでして手に入れたい情報はなんだ？」

「現『七皇』……いや前『八皇』のことについて教えて欲しいの」

空気が凍り付いたように静まる。

「それは第一級特秘事項に当てはまっている……情報料は最高ランクだ、いいか？」

「……どれくらい？」

「世界の金の半分以上、もしくはそれと同等の価値があるものを用意すること、どちらでも構わないが、期限は一週間だ」

「……いいわ、それほどしてでも手に入れたいものだから」

彰はしずかに喋り始めた。

## ：水鏡と京

水鏡は商店街までできていた、ここに目的の人がいるはずだからである。

その中心くらいの位置に立ち、しずかに瞑想を始める水鏡。

「質が違う空気、そこに進む静電気量の多い、通路があいつへの道だ……」

水鏡はすぐそれを発見して、消えるように奔る。

着いたのは見た事もないような文字がびっしりと敷き詰められた、巨大な岩の扉だった。

それにさわりわずかに電気を通す。

「岩の質は宝石類に極地したものが……強度は何倍にもなるが、表面のしたには鉱物の反応があるな、壊せるかな？」

大きく振りかぶり、目の前の障害を壊そうとする水鏡の腕を華奢な手が止めた。

「家の門を壊さないでくれるかしら？それに水鏡、あなた……」

「やはりお前は気が付くんだな京、すこし中で話さないか？大切な用事があるんだ、しかも早急に」

「そう……大切な用なら奥に行きましょう、ついでに一杯飲んできなさい、一人で飲むのは寂しいから」

そう言つて中に進んで行く京、その後をわずかに楽しそうに水鏡がついていった。

『改水』の最深部、最も暗い地下の最終地点、京の部屋に二人は到着した。

そこで京は椅子を水鏡に勧める、しかし水鏡は座らずに用件を言った。

「俺はお前が大好きだ、俺と一緒になろう、京……一ノ宮京」

「……………何言ってるのかさっぱりだよ、ジュース飲む？今入れるから」

京は冷蔵庫から血のように紅いジュースを注ぐ。

「どうせ俺には時間がないなんでもする、例え嫌がられようともなガシャンと硝子の割れる音がして、京をベッドの上に抑えつける水鏡。

京は抵抗はしないものの、威圧的な気を水鏡にぶつけて睨み付けている。

それを笑って返している。

「私を襲おうとでもいうのかしら？」

「最終的にはな、でも俺はお前の意見も尊重する、お前の気持ちを聞きたい、どうなんだ？」

「嫌なら例え今のあなたでも殺してます……………大丈夫です、でも少しだけ待って、そろそろあれを飲まないと力が出ないの」

京は冷蔵庫を指差して言う。

「わかった、それに……………嬉しいよ」

水鏡は手だけ伸ばしてその冷蔵庫を開けて、中の血のように紅いジュースを口に含む。

そしてそれをそのまま京の口に移した。

「ん……………ん……………ぷはっ、意外と大胆なんだね」

「……………ずっと我慢してたからな、それに……………俺にはもう後がないから、このチャンスが最後のチャンスなんだ」

「光ってるのはそういうわけなの？……………深い所は聞かないであげる、今はあなたとの時間を……………ね」

「ありがとう……………」

二人はそのまま抱き合い、ひどく愛し合いながら、しばらくして夜が明ける。



・水鏡と京（後書き）

ストックが完全になりました（汗

つまり更新速度が遅くなります（汗

・正義と知識（前書き）

急いで完成させました。

まだストックはつくれていないので、更新はわかりません（汗

では楽しんでいただければ嬉しいです^^

## ・正義と知識

「今日はよく世界が光るな．．．．それにこの光はとても優しい．．．．」

常連となつていているカフェテラスで、暢気に紅茶を啜りながら優がな一時を過ごしているのは紛れもなく、大介だった。

さきほどから当たり全体を二回ほど光が覆い尽くした．．．．いつとばつちりくるか、そんな心配はしなくていいので気が楽だ。

一つの、二回目の強力でも優しい強さを持った光には覚えがあった。

「あの光は水鏡のものだ．．．．あいつ、どこまで強くなりやがった、欲しかったな、あの力」

大介は紅茶を飲みながらゆったりとする。

その力がどうにも力強くはあつたのだが、同時にとても弱々しく大介は感じた。

きつとその力は、最後の力なのだとも感じた。

「水鏡がいなくなるのは残念だが、まあ一閃の頼み事が出来ただけで良しとするか」

大介が一閃に約束したことは一つだけ。

手段は問わずに、水鏡の力を覚醒させること。

もちろんいつ覚醒したかはわからないが、一閃は大介に、

「お前が勝てなかつたらそれが覚醒した時だ」

と言った、故に大介が水鏡に負けた時点で水鏡の覚醒は完成したと言つてもいいのだ。

大介は紅茶をゆっくりとすすりながら今後の事を考える。

その大介のいるカフェテラスに小さな少年が入ってきた。

しかしその存在感は、大介が瞬間的に防御の姿勢をとってしまうほどに圧倒的なものがあつた。

大介は冷や汗を拭いながら久々の、それもかなり本気の殺気を受け

ていたような感じがあった。

その少年は大介の方に向かってきて、あろう事が大介の目の前に着席した。

それには大介も驚いたが、それ以上にいつも待機している精鋭の新鋭部隊が反応して、飛び出してきた。

「貴様！何者だ！」

新鋭部隊の隊長がその少年に向かって、心情を表す声で聞く、というより怒鳴る。

少年はその隊長に目を向けて、カフェテラスに入ってきてから一度も崩していない無表情をその隊長に向けた。

「何者か？その質問への答えは、そうだな……『七皇』だ、とでも名乗っておこうか、別に気を付ける事でもないしな」

少年は『七皇』を名乗った、それがどういうことか理解できたのは大介だけだった。

「そうか、お前が一闪の言っていた『七皇』の一人か……俺に何のようだ？」

「一閃に話を聞いていたのなら俺が次に言う事もわかるだろう？ならその質問の意味はなんだ？」

その通り、大介には次にこの男がいうであろう事は分かっていた、しかし敢えて聞いたのはその真意をしろうとしたからである。

それに少年は気づいたのか何を考えているかまったくわからない表情で頷いて、少しだけ、ほんの少しだけ口を歪めて、

「どうだ？俺の心は読めたか？」

と、そう言った。

大介はその事に対して、驚きの表情を浮かべる。

今まで自分の能力を知っている人間はいた、しかし覗かれている察知された事は一度も無かった。

それほど大介の『知識』の能力はステルス性能が高かった。

にもかかわらず、だ。

少年はさも当然のようにそんな事を言って、なおかつさらに大介を

焦らす事を言う。

「この少年は何者だ？か、いいだろうお前にだけは一応教えといてやる」

少年はやはり当然のように大介の考えを読みとった、それも大介にはいつ見られていたのかわからないほどの性能で。

「俺は『道敷大神』、『七皇』の一角にして最高の頭脳『正義』を宿した者だ」

『道敷大神』の表情は読みとれなかったが、その顔は大介から見て愉悦に浸っているようだった。

## ：京の想い

朝早く水鏡は起きた、まだ京は寝ているようで可愛い寝顔を見せていた。

その顔を見ながら和むと同時に寂しい気持ちになった。

もう明日からはこの笑顔とは会えなくなると思うと、寂しくて寂しくて仕方がなかった。

服を着て、まだ光り続けている体に感謝して、一度京の額にキスをしてから立ち上がる。

分かっていた事だ、関係を深くしてしまえば傷も深くなってしまふ。だが、それがわかっていても水鏡は京と関係を持ちたかった、自分がいたという証拠を何よりも大切な人に残しておきたかった。

水鏡はその想いを残したまま、この場を立ち去ろうとするが、それは自分の服を握る京によって止められる。

「もう行っちゃうの？まだ残れるでしょう？」

「もう行かないといけない、いまでも俺の事を待っている人がいるから、俺はもうこれ以上あいつを待たしたくない」

「私以外の女？」

「お前以外の唯一人の女だ、生まれた時から俺の為に生き続けてくれていたな……俺は何人もあいつを待たしてしまつたから」  
水鏡の顔が悔しそうに歪み、京は微妙な表情になる。

「なら私は我慢するわ、この体に残るあなたの想いで我慢する事にしましょう」

「……ごめんな、京、本当はもつと一緒にいたかったんだけど、どうやら俺の運命はそれを許してくれそうにない」

悲しそうな声につられて、京の目に涙が浮かぶ。

「いいのよ、気にしてないわ……あなたとつながれて良かった、あなたはやっぱり最高ね」

「ありがとう、京……じゃあ俺はもう行くから、また来世が

あればね」

「 うん、また来世」

京が服から手を離れた瞬間水鏡の体はどこかへ消え去った。拳動の一つ一つすべてが雷速に位置するようになってしまったので当然といえば当然なのだが、見方に寄れば、惜しむ事なし、ともとれる。

京は水鏡の服を掴んでいた手を握ったり撫でたりする。

「久しぶりだよ、私に涙を流させた男は……何時以来かな」  
遙か昔に自分を愛で、自分を抱き、自分を吸血鬼にした男が思い浮かんだ。

今思えばこの時からかもしれない、自分が一閃についてきて初めて一閃以外に目をとめた存在。

「そうか、深く考えればすぐに気が付いてたんだろうな……彼が私のところに帰って来てくれてたんだって事に」

彼の最終目的は死ぬ事だった、ならどんな手段であれ死のうとしたのだろう。

彼ほどの強大な吸血鬼はそうはいなかった、強大で最高であったがゆえに死ねなかつた彼は死んだのだ。

それでも義理堅い彼の事だ、私の事を愛する為にもう一度戻って来てくれたんだろう。

「あれから何年も月日が経っているから、一体どれだけ輪廻転生を繰り返したかは知らないけど、きつとまた会えると信じて」

そう考えるとこれが輪廻転生の最後の世界になるのだろうか。

彼の最終目標を伸ばしてまで生きてきた意味ももうない、ならば後は達するだけなのだろう。

だが京は追う事はしなかった、彼にはいまは待ち人がいるのだろうか、自分が行ってそれを邪魔する訳にはいかない。

「コレで最後でしょうね水鏡……いや、オルタ……」  
京はまたベッドに横になった、そんな気分では無かったのだが、寝る以外に何も考ええなかった。

「私はいつまでも生き続ける、彼との想いを胸に秘めて……」



## ：水鏡の最後

「おかえりなさい、水鏡」

雷羅は水鏡が行ってしまった時と変わらず、一步も動かずにそこに立っていた、座る事も休む事すら考えずに。

そんな雷羅を見て水鏡はいとおしいと思ってしまった、相手が自分の『才気』の顕現でなければ襲いかかっていたのかもしれない。

「ただいま、雷羅、何かあったか？」

「いえ、ただ思い返していただけです、私が走り初めてからの記憶を零から順に」

雷羅の始まりの記憶は走ることだ、目的もなく、ただ走ることだった。

「そこから私は何の為に走っているのかもわからないくらいに走っていました」

次第に速さが上がり、筋肉が悲鳴を上げた、しかし立ち止まるわけにはいかず、痛みを無視して走り続けていた。

「自分が何故そこにいるのかも分からなかった、でも分かってしまえば立ち止まってしまいそうだった」

自分が何故走っているのか何の為なのか、それさえもわからなかった。

だから走ると言う事に自分の存在をかけて生きてきた。

「一緒に走ってくれる友も、競い合えるライバルも居なかった、だから自分を認める術なんて在るわけもなかった」

居て欲しいの願わないなんてことは無い。

だが願った所で適わないものは適わない、それを必死の思いで我慢した、時には走る事で気を紛らわした。

「自分にかぶった泥は嬉しかった、何もなかった私に初めて出来たものだったから」

だから汚れた体を誇った、何よりもそれが自分の生きてきた証とな

るのだから。

「何回疲れ止まろうと思った事か、それでも走り続けなければ思  
った、走り続けていればきつと報われると思って」

生まれてからずっと全力疾走だ、疲れないわけがない、限界を迎え  
ていないわけがない、止まってはいけない訳がない。

でも止まらなかった、止まる訳にはいかない、ただその一心にのみ  
突き動かされてきた。

「そして私は

あなたと出会った」

雷羅の目が水鏡と会う、優しい視線だった。

「走っていた訳が分かった、力を溜めて、あなたの為にそれを使う  
事だったんだと思う事が出来た」

「ありがとう、だからこそ俺は外敵の侵入を妨げる事が出来た」

「あなたと会う為にそこにいた、あなたに力を与える為にそこに居  
た、あなたと出会う為にそこにいた」

「ありがとう、お前がいてくれたからこそ俺の義務は果たされたか  
ら」

「大切な仲間が出来た、一緒に走ってくれる友が出来た、一緒に競  
つてくれるライバルも出来た、それでもみんなが笑顔でくれた」

「ありがとう、お前の笑顔も俺の望みの一つだ」

「被っていた泥を拭い落としても自分の存在を確立する事が出来た、  
だから綺麗な自分を見せる事が出来た」

「ありがとう、俺の代わりに泥を被っていてくれたんだな」

「止まらなくて良かった、止まらずにいてよかった、止まる前にあ  
なたと会えてよかった」

「ありがとう、お前がそこまで頑張ってくれたからこそ俺は今ここ  
に立つ事が出来てるんだ」

雷羅の目は水鏡から離れない、離したくないという想いもあるだろ  
う。

だからこそ水鏡も雷羅の視線から自分の視線を外さない。

「こちらこそありがとう」

それだけいうと雷羅は倒れるように水鏡に飛びついた。

「ごめんなさい、もう動けない、足が死んでるの、とっくの昔に、ここまで持ってよかった」

「そうか、よくやった雷羅、お前こそ俺の最高の相棒だ」

雷羅を抱き留め、顔に自分を近づけ優しくキスをする。

そして、抱きかかえたまま雷羅を運んで近場の木にもたれさせる。

「約束だからな、俺の最後、お前と一緒にだ」

「ありがとう……!!」

水鏡は残る力をすべて解放して、空に黒雲をつくりだした。からだから光が失われていく。

「ずっと一緒だ、これからはどこまでも、どこにいても」

「はいっ!!」

黒雲から自然現象で発生するには到底ありえないほどの雷が落ちた、それは迷う事も広がる事もなく水鏡達のいる木に落ちる。

光がきえる頃にはもうそこに二人の姿は無かった。

・殺人衝動（前書き）

遅くなりましたが更新しました

では

初めての方は此処まで呼んでいただきありがとうございます  
更新を待っていてくれた方はこれからもよろしくお願ひします  
皆さんに楽しんでいただければ嬉しいです

## ：殺人衝動

荒れ果てた大地を歩く影があった。

その影が手に持っているのは、蒼い火の大剣。

それはかつて『蒼炎の破壊神』と讃え恐れられていた人間に酷く似ていた。

いや、それは本人だった、何と云ってもそれが来ている服は紅いマントの様なもの、かつての『蒼炎の破壊神』と同じ服装だったのだ。

「……殺したい、誰かを……誰かを殺したい」

影の主、『蒼炎の破壊神』の名は幸崎 未亜。

出来はじめの『悪魔の正義』の戦闘面での基盤を固めたような人物であるが、今ではその事も薄まっている。

理由として一番大きい事はやはり『殺人衝動』だ。

少なくとも古参の戦闘要因の中では有名な三人が『殺人衝動』を発現している。

『蒼炎の破壊神』『冷徹の氷死射』『怒濤の暴風』の三人だ。

最近では皆その衝動を抑えられている筈だが……。

「殺したい……提督の為に……皆殺しにしたい……」

その中で一番狂っていた未亜は、しかし理由を持っていた。

そうだ、出来はじめの組織にとって戦いは仕方の無い事。

だからこそ殺すという事を何よりも肌で感じ、そして溺れてしまったのだ。

だからこそ愛は未亜を見捨てたりはしなかった、自分や自分の組織の為にその様になってしまった未亜を見捨てる訳にはいかなかったのだ。

「誰でも……」

目が止まる、目の前に立っているのは愛が用意した自分の『殺人衝動』を抑えつける人。

自分と同じくらいに狂った『殺人衝動』を身に宿した人。

西城 三津、『悪魔の槍』としても働き、『悪の種』のボスにも収まる人。

そして……かつての『冷徹の氷死射』。

「未亜、そろそろ止めとけ、提督が黙っていないぞ?」

「私は提督の為に行動している、提督が怒る訳がないでしょう?」

「限度つてもんがある、お前はここまでの道のりで何人の敵を殺してきた?」

「……そんなもの、いちいち数えてないわよ、それよりどうして、今は働きたい気分なの」

未亜が三津の横を通ろうとすると、三津はその行き道を阻むように立つ。

少しだけふらついているが、そんなことを今の未亜が気付く訳がない。

「殺すよ?」

「殺してみろ」

未亜は諦めて三津から離れる、恐れたのではなく戦う為に。

「そろそろ三津も『殺人衝動』が抑えきれなくなってきたんでしよう? よかったね、それを晴らす事が出来て」

「一瞬で終わらせる、俺も時間がないのでな」

「なら私も全力でいくよ!!」

未亜の手にある蒼炎の大剣が炎の強さを増していく。

三津は全力で後ろに後退し、手に氷の弓を作り出す。

そして、次々に矢を番えて放っていく。

それを圧倒的な迫力で叩きつぶしながら、未亜は三津に迫っていく。この二人の勝敗は単純だ、間合いが詰まれば未亜の勝利、間合いが詰まらず途中で未亜がダウンすれば三津の価値だ。

「こんなものなのか! こんな力で私の前に立つなんていい度胸だ!」  
「つく!」

しかし先ほどから三津の様子が可笑しい、なにやら何かを我慢する

かのように戦っている。

そんなことにも気付かずドンドンと距離を詰めていく未亜。

二人の戦いは早々に決着を迎えようとしていた。

・殺人衝動（後書き）

遅れがちになるとは思いますがこれからもよろしくおねがいします！

感想やご指摘を待っています

気軽に書いてくださいね

ではまた次回で会いましょう



・彰（前書き）

久しぶりに更新。

たまには、少し。

なので、まだそんなに溜まってません。

「まず一番大切な事は『八皇』についてだが、これは本当にいろいろな学者がいろいろな意見を言っている。

だがそのほとんどがデマであり嘘だ。

いいか？良く聞けよ？

『八皇』とは神に使わされて人間の数を調整にきた使者の事だ。

そう人間の数の調整、つまり増えすぎた場合は殺す事だ。

その時はな？人間は『才気』何てものを持っていなかったから楽だった。

『八皇』とはその名の通り八人で構成されていた。

だがな、最後に確認された『八皇』の数は、十人。

そして『七皇』としての再出。

これらより、『八皇』からは三人の人間が抜けた事になるんだ。

だがそれなら『五皇』になるだろう？

何故か？

それはな、一人が三人だったんだ。

分かるか？一人の役を三人がたらい回しで扱っていたんだ。

わからないよな？こんらんするよな？

当然なんだよ、それがな。

だからこそその『八皇』は強かった。

一人ではなく三人、三人にして一人のそいつは他の『八皇』、現在

『七皇』として活躍しているどの『七皇』よりも強かった。

わかるか？そいつが抜けただけで、『八皇』の戦力は三分の一は削れてしまったんだぜ？

けど、それでも残った『八皇』に勝てる奴なんて早々はいない。

当然だ、やつらは神から使わされたのと同義の『才気』を使う。

……今、『七皇』がやるうとしてしていることは、全人類の人口を減らす事だ。

それだけの為に動いている。

あの七人が本気をだせばそれは簡単な事だったはず。しかしなかなか成されない。

何故だかわかりますか？

それは、彼等が人並みの感情を持っているからですよ。

それが理由です」

・彰（後書き）

次の更新はいつになることやら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0833i/>

---

不明瞭な世界

2011年10月9日21時49分発行